

主要地方道成田松尾線II

小池新林遺跡
小池地蔵遺跡

昭和60年3月

千葉県土木部

財團法人千葉県文化財センター

主要地方道成田松尾線II

小池新林遺跡

小池地蔵遺跡

昭和60年3月

千葉県土木部

監修 千葉県文化財センター

序 文

下総台地の南部、木戸川に開析された台地は、古くから自然条件に恵まれており、先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が知られています。

このたび千葉県土木部は、道路整備の一環として主要地方道成田松尾線建設事業を計画しました。

そこで千葉県教育委員会は、路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部と慎重に協議を重ねた結果、止むを得ず、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整いました。

発掘調査は、当(財)千葉県文化財センターが当たることになり、千葉県教育委員会の指導のもとに千葉県土木部及び地元関係者と詳細な打合せを行い、昭和53年から実施してまいりました。その成果の一部は、既に「主要地方道成田松尾線Ⅰ」として昭和57年度に刊行しております。このたび、昭和54年度に発掘調査した小池新林遺跡、小池地蔵遺跡の成果を報告書として刊行する運びとなりました。両遺跡からは、特に古墳時代及び奈良・平安時代の集落跡が検出され、当該地域の古代の歴史を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が学術資料としてはもとより、郷土を知る教育資料として、文化財保護普及のために広く活用されることを望んでやみません。

終わりに、発掘調査から整理に至るまで多大な御協力、御支援をいただきました千葉県土木部、千葉県成田土木事務所、千葉県教育庁文化課、芝山町教育委員会をはじめ、関係諸機関にお礼を申し上げるとともに、酷寒、酷暑の中で調査に協力された調査補助員の皆様には心から謝意を表します。

昭和 60 年 3 月

財団法人 千葉県文化財センター

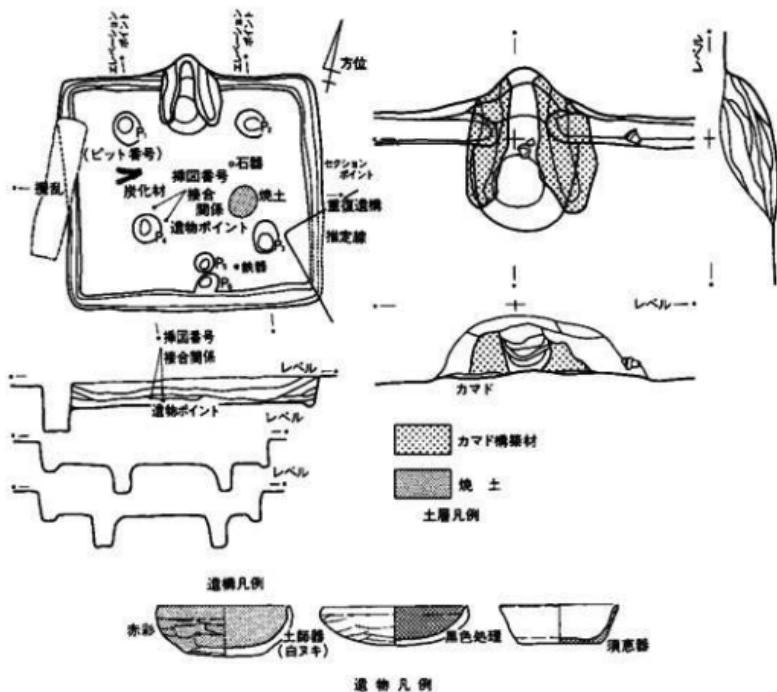
理事長 今 井 正

例　　言

1. 本書は、主要地方道成田松尾線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。遺跡コード番号は、小池新林遺跡を409-003、小池地蔵遺跡を409-005とした。
2. 小池新林遺跡は、山武郡芝山町小池字新林937番地他に所在する。小池地蔵遺跡は、山武郡芝山町小池地蔵876の1番地他に所在する遺跡である。
3. 発掘調査は、昭和54年6月10日から9月30日まで実施し、整理作業は、昭和58年度に行なった。作業は、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部道路建設課との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
4. 作業の分担は、発掘作業を調査部長　白石竹雄、班長　杉山晋作、調査研究員　折原　繁、萬崎博昭が担当した。整理作業は調査部長　白石竹雄、部長補佐　根本　弘、岡川宏道、班長　高橋賢一の指導のもとに奥田正彦が中心となり伊藤智樹が共同であったものを、班長高橋賢一が加筆、補正し、編集した。
5. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記諸機関・諸氏の御指導、御協力を賜わり、深く謝意を表わす次第であります。
千葉県教育庁文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県山武土木事務所、同成田土木事務所、芝山町教育委員会、地元諸氏。
6. 現地発掘調査にあたり、酷暑の中、調査に従事して頂いた調査補助員の方々及び整理作業にあたって頂いた調査補助員の方々には終始調査に対する御協力を頂き感謝致します。

凡例

1. 本書中における各遺跡の遺構・遺物番号は、現場作業において使用したものをそのまま使用している。
2. 遺構の方位は磁北を示す。
3. 本書で使用した地形図は国土地理院著作発行の5万分の1地形図(N1-54-19-10・昭和53年6月)、及び芝山町発行2,500分の1地形図(芝山町管内図23、27昭和44年)
4. 遺構と遺物の実測図は、下記の縮尺で統一している。
住居跡 $\frac{1}{10}$ 、カマド $\frac{1}{10}$ 、柱穴群 $\frac{1}{10}$ 、土器 $\frac{1}{10}$ 、(1部 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{10}$ を使用) 拓影図 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{10}$ 石器 $\frac{1}{2}$ 、鐵器 $\frac{1}{2}$ 、鐵器 $\frac{1}{2}$ 、土製品 $\frac{1}{2}$ 。



目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
第 1 章 遺跡の位置と環境	1
第 1 項 遺跡の地理的・歴史的環境	1
第 2 章 小池新林遺跡	6
第 1 項 調査の方法と概要	6
(1) 調査の方法	6
(2) 土 層	6
(3) 調査の経過	7
(4) 調査の概要	7
第 2 項 遺 構	9
第 3 項 遺 物	27
(1) 住居跡出土の遺物	27
(2) グリッド出土の遺物	48
第 3 章 小池地蔵遺跡	54
第 1 項 調査の方法と概要	54
(1) 調査の方法	54
(2) 土 層	54
(3) 調査の経過	55
(4) 調査の概要	55
第 2 項 遺 構	57
第 3 項 遺 物	95
(1) 住居跡出土の遺物	95
(2) グリッド出土の遺物	123
第 4 章 小 結	137

挿図目次

第1図	周辺地形図(×5000)	4
第2図	調査区周辺地形図(×600)	5
第3図	グリッド分割図・土層図	7
第4図	小池新林遺跡遺構分布図(×100)	8
第5図	001号住居跡実測図(%)	10
第6図	002号住居跡実測図(%)	11
第7図	003号住居跡実測図(%)	13
第8図	004号住居跡実測図(%)	14
第9図	004号住居跡遺物出土状況図及びカマド実測図(%, %)	15
第10図	005号住居跡実測図(%)	17
第11図	006号住居跡実測図(%)	19
第12図	007-A・B号住居跡実測図(%)	20
第13図	008号住居跡実測図(%)	22
第14図	009号住居跡実測図(%)	23
第15図	010号住居跡実測図(%)	24
第16図	010号住居跡カマド実測図(%)	25
第17図	011号住居跡実測図(%)	26
第18図	001号住居跡出土遺物実測図(%)	28
第19図	002号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	30
第20図	002号住居跡出土遺物実測図(2)(%)	31
第21図	002号住居跡出土遺物実測図(3)(%)	32
第22図	003号住居跡出土遺物実測図(%, %)	33
第23図	004号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	35
第24図	004号住居跡出土遺物実測図(2)(%)	36
第25図	005号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	37
第26図	005号住居跡出土遺物実測図(2)(%, %)	38
第27図	006号住居跡出土遺物実測図(%)	39
第28図	007号住居跡出土遺物実測図(%)	40
第29図	008号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	42
第30図	008号住居跡出土遺物実測図(2)(%, %)	43
第31図	009号住居跡出土遺物実測図(%)	44
第32図	010号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	45
第33図	010号住居跡出土遺物実測図(2)(%, %)	46
第34図	011号住居跡出土遺物実測図(%)	47
第35図	グリッド出土遺物実測図(%)	48
第36図	土器拓影図(1)(%)	50
第37図	土器実測・拓影図(2)(%)	51
第38図	石器実測図(%)	52
第39図	石器実測図(%)	53

第40図	グリッド分割図・土層図	55
第41図	小池地蔵遺跡遺構分布図(×1000)	56
第42図	001号住居跡実測図(%)	58
第43図	001号住居跡カマド実測図(%)	59
第44図	002号住居跡実測図(%)	59
第45図	003号住居跡実測図(%)	61
第46図	003号住居跡カマド実測図(%)	61
第47図	004号住居跡実測図(%)	62
第48図	004号住居跡カマド実測図(%)	63
第49図	005号住居跡実測図(%)	65
第50図	005号住居跡カマド実測図(%)	65
第51図	006号住居跡実測図(%)	66
第52図	006号住居跡カマド実測図(%)	66
第53図	007号住居跡実測図(%)	68
第54図	007号住居跡カマド実測図(%)	69
第55図	008号住居跡実測図(%)	70
第56図	008号住居跡カマド実測図(%)	71
第57図	009号住居跡実測図(%)	72
第58図	009号住居跡カマド実測図(%)	72
第59図	012号住居跡実測図(%)	74
第60図	012号住居跡カマド実測図(%)	75
第61図	013号住居跡実測図(%)	76
第62図	014号住居跡実測図(%)	77
第63図	014号住居跡カマド実測図(%)	78
第64図	014号住居跡貯藏穴実測図(%)	78
第65図	015号住居跡実測図(%)	79
第66図	016号住居跡実測図(%)	79
第67図	017号住居跡実測図(%)	81
第68図	017号住居跡カマド実測図(%)	82
第69図	018号住居跡実測図(%)	84
第70図	018号住居跡カマド実測図(%)	85
第71図	019号住居跡実測図(%)	86
第72図	019号住居跡カマド実測図(%)	87
第73図	020号住居跡実測図(%)	88
第74図	020号住居跡カマド実測図(%)	89
第75図	021号住居跡実測図(%)	90
第76図	021号住居跡カマド実測図(%)	91
第77図	022号住居跡実測図(%)	92
第78図	022号住居跡カマド実測図(%)	93
第79図	023号住居跡実測図(%)	93
第80図	023号住居跡カマド実測図(%)	94
第81図	001号住居跡出土遺物実測図(%)	95

第 82 図	002号住居跡出土遺物実測図(%)	96
第 83 図	003号住居跡出土遺物実測図(%, %)	97
第 84 図	004号住居跡出土遺物実測図(%)	98
第 85 図	005号住居跡出土遺物実測図(%)	99
第 86 図	007号住居跡出土遺物実測図(%)	101
第 87 図	008号住居跡出土遺物実測図(%)	102
第 88 図	009号住居跡出土遺物実測図(%)	103
第 89 図	012号住居跡出土遺物実測図(%)	103
第 90 図	013号住居跡出土遺物実測図(%)	104
第 91 図	014号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	105
第 92 図	014号住居跡出土遺物実測図(2)(%)	106
第 93 図	014号住居跡出土遺物実測図(3)(%)	107
第 94 図	017号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	108
第 95 図	017号住居跡出土遺物実測図(2)(%)	109
第 96 図	017号住居跡出土遺物実測図(3)(%)	110
第 97 図	017号住居跡出土遺物拓影図(%)	110
第 98 図	018号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	112
第 99 図	018号住居跡出土遺物実測図(2)(%, %)	113
第100図	018号住居跡出土遺物拓影図(%)	114
第101図	019号住居跡出土遺物実測図(%)	115
第102図	020号住居跡出土遺物実測図(%, %)	116
第103図	021号住居跡出土遺物実測図(1)(%)	118
第104図	021号住居跡出土遺物実測図(2)(%, %)	119
第105図	022号住居跡出土遺物実測図(%)	119
第106図	023号住居跡出土遺物実測図(%)	120
第107図	鉄器実測図(%)	122
第108図	グリッド出土遺物実測図(%, %)	123
第109図	土器拓影図(1)(%)	129
第110図	土器拓影図(2)(%)	130
第111図	土器拓影図(3)(%)	131
第112図	土器・土製品実測図(%)	132
第113図	石器実測図(1)(%)	133
第114図	石器実測図(2)(%, %)	134
第115図	石器実測図(3)(%)	135
第116図	石器実測図(4)(%)	136
第117図	グリッド出土遺物実測、拓影図(%)	136
第118図	出土土器集成図(1)	139
第119図	出土土器集成図(2)	140
第120図	出土土器集成図(3)	141
第121図	土師器環赤彩模式図	142

表 目 次

表 1	遺跡一覧表	3
表 2	小池新林遺跡	
	001号住居跡出土土器表	143、144
表 3	002号住居跡出土土器表	144~146
表 4	003号住居跡出土土器表	146、147
表 5	004号住居跡出土土器表	147、148
表 6	005号住居跡出土土器表	148~150
表 7	006号住居跡出土土器表	150
表 8	007-A・B号住居跡出土土器表	151
表 9	008号住居跡出土土器表	151、152
表10	009号住居跡出土土器表	152、153
表11	010号住居跡出土土器表	153、154
表12	011号住居跡出土土器表	154
表13	小池新林遺跡石器一覧表	155
表14	小池新林遺跡遺構一覧表	155
表15	小池地藏遺跡	
	001号住居跡出土土器表	156
表16	002号住居跡出土土器表	156
表17	003号住居跡出土土器表	156、157
表18	004号住居跡出土土器表	157
表19	005号住居跡出土土器表	158
表20	007号住居跡出土土器表	158、159
表21	008号住居跡出土土器表	159、160
表22	009号住居跡出土土器表	160
表23	012号住居跡出土土器表	160
表24	013号住居跡出土土器表	161
表25	014号住居跡出土土器表	161、162
表26	017号住居跡出土土器表	162~164
表27	018号住居跡出土土器表	164、165
表28	019号住居跡出土土器表	166
表29	020号住居跡出土土器表	166、167
表30	021号住居跡出土土器表	168
表31	022号住居跡出土土器表	169
表32	023号住居跡出土土器表	169
表33	グリット出土土器表	170
表34	小池地藏遺跡石器一覧表	170
表35	小池地藏遺跡遺構一覧表	171

図版目次

- 図版 1 小池新林遺跡(航空撮影)、同遺跡近景
図版 2 001号住居跡全景、同遺物出土状況
図版 3 002、003号住居跡全景
図版 4 004号住居跡全景、同遺物出土状況
図版 5 004号住居跡遺物出土状況
図版 6 005、006号住居跡全景
図版 7 006号住居跡遺物出土状況
図版 8 007-A・B、008号住居跡全景
図版 9 008号住居跡遺物出土状況
図版10 009、010号住居跡全景
図版11 010号遺物出土状況
図版12 011号住居跡全景、同遺物出土状況
図版13 001号住居跡出土遺物
図版14 001、002号住居跡出土遺物
図版15 002、003、004号住居跡出土遺物
図版16 004号住居跡出土遺物
図版17 004、005号住居跡出土遺物
図版18 005、006、008号住居跡出土遺物
図版19 008号住居跡出土遺物
図版20 008、009、010号住居跡出土遺物
図版21 010号住居跡出土遺物
図版22 010、011号住居跡、グリッド出土遺物
図版23 グリッド出土縄文式土器(1)
図版24 グリッド出土縄文式土器(2)
図版25 石 器
図版26 小池地蔵遺跡全景(航空撮影)、同遺跡近景
図版27 001、002号住居跡全景
図版28 003号住居跡全景、同遺物出土状況
図版29 004、006号住居跡全景、004号住居跡遺物出土状況
図版30 005、006、007号住居跡全景
図版31 007号住居跡カマド、同遺物出土状況
図版32 008、015号住居跡全景、008号住居跡遺物出土状況
図版33 009、012、013、014号住居跡全景
図版34 012号住居跡遺物出土状況、014号住居跡遺物出土状況
図版35 017、018号住居跡全景
図版36 017号住居跡カマド、018号住居跡炭化材遺物出土状況、同嫌出土状況
図版37 019号住居跡全景、同鉄器出土状況
図版38 020号住居跡全景、同カマド掘込状況
図版39 021号住居跡全景、遺物出土状況
図版40 022、023号住居跡全景
図版41 001、003、004号住居跡出土遺物
図版42 004、005、007号住居跡出土遺物
図版43 007、008、009号住居跡出土遺物
図版44 012、013、014号住居跡出土遺物
図版45 014号住居跡出土遺物
図版46 014、017号住居跡出土遺物
図版47 017、018号住居跡出土遺物
図版48 018、019、020号住居跡出土遺物
図版49 020、021号住居跡出土遺物
図版50 021、022号住居跡出土遺物
図版51 グリッド出土遺物・石器(1)
図版52 石 器(2)
図版53 鉄 器
図版54 グリッド出土縄文式土器(1)
図版55 グリッド出土縄文式土器(2)
図版56 グリッド出土縄文式土器(3)

第1章 遺跡の位置と環境

第1項 遺跡の地理的・歴史的環境

千葉県北部は、下総台地と沖積地からなる。台地は、東で標高50mと西に傾くが、全体的に起伏が少なく平坦な台地面をもつ、洪積台地によって形成される。この台地を太平洋・東京湾に注ぐ中小河川と利根川が侵蝕して複雑な地形の様相を呈している。

本遺跡は、この中央やや東寄りに位置する。標高45mから30mの台地で、北側を多古町一鉢田・成田市東峰付近に分水界をもつ、大須賀川・尾羽根川・根本名川に、南側を太平洋へ流入する多古橋川・高谷川・木戸川に侵蝕される。これらの河川は、さらに支谷を刻み樹枝状の舌状台地を連繋と形成してゆく。特に栗山川に面する斜面は顕著で、台地奥まで開析し、40mの等高線が島状に点々と残る。半島状の地形を作りだす。一方、木戸川に面する斜面は、台地と河川の比高差が少なく、栗山川に比べ開析が進んでいない。そのため谷の出入もなく単調な地形を呈する。

また、木戸川・高谷川に面する台地と低地の様子をみると、栗山川は緩かに蛇行し、多古町付近で標高5m、谷幅1,000mの水田となる。支流の高谷川も標高5m、谷幅500mと肥沃な水田が広がる。一方、木戸川の水田面は、標高20m、谷幅200mと狭く、水量も少ない。

台地の様子は、木戸川右岸の富里村で標高45mの広大な台地が続くが、木戸川と高谷川の間は、標高40m、前述のように東で30mの低い、幅2.5km程の狭い尾根状台地となる。

木戸川と高谷川に挟まれる台地は、芝山町大台と横芝町中台付近で、3区分することができる。大台と中台間は、高谷川から開析が進み、木戸川に沿って尾根状の幅の狭い台地が残る。これに比べ他の上、下流域台地は、幅が広く、形状も異なる（以下北よりA・B・C区）とする）今回調査した小池新林遺跡・小池地蔵遺跡は、B地区の中間地点に位置する。

芝山町小池は、芝山町の中心部で、木戸川と高谷川の支谷に開析される、幅1kmの尾根状の台地に位置する。台地の現況は、大半が市街地と畠地である。小池新林遺跡は、市街地から西へ延びる幅100mの狭い舌状台地中央部を、北西から南東へ調査した。谷との比高差は、5mで斜面は急である。小池地蔵遺跡は、市街地から南東へ延びる幅200mの舌状台地基部を北西から南東方向へ調査した。すでに報告した小池麻生遺跡との間に浅い小支谷がある。両遺跡は、木戸川に面する舌状台地基部に位置し、標高40m、小支谷との比高差5m、木戸川との比高差20mを測る幅の狭い尾根状の平坦面に立地する遺跡である。

木戸川流域の台地は、縄文時代から歴史時代に至る遺跡の多いことで知られている。特に、⁽¹⁾巣塚・姫塚を擁する国指定史跡の芝山古墳群を代表とする古墳群は相当数にのぼり、注目されている。台地の大半を占める芝山町の遺跡分布図によると縄文時代早期・34遺跡、同前期・17

遺跡、同中期・13遺跡、同後・晚期 23遺跡、古墳時代土器散布地、27遺跡、古墳、古墳群、22遺跡、歴史時代、46遺跡を教える。このように流域に面する台地に連続と遺跡が形成されることは、古代の生活と河川がいかに関連深いか推察することができる。

周辺遺跡をみると、縄文時代は、木戸川対岸に早期の遺跡が多く、本遺跡側は、中期以降の遺跡が存在する。小池麻生遺跡⁽³⁾・小池台遺跡⁽⁵⁾・小池元高田遺跡⁽⁶⁾・小池新林遺跡⁽⁶⁾・小池地蔵遺跡⁽⁶⁾、官門遺跡等の発掘調査において確認されている。

古墳時代は、土器散布地27遺跡中18遺跡がB地区に集中し、A・C地区は散在するのみになる。調査歴は、小池麻生遺跡⁽³⁾・小池向台遺跡⁽³⁾・猪ノ堤遺跡⁽³⁾・小池地蔵遺跡⁽³⁾・小池新林遺跡⁽³⁾・小池元高田遺跡⁽³⁾・官門遺跡⁽³⁾・清水台遺跡⁽³⁾・新起遺跡⁽³⁾・山田出口遺跡⁽³⁾がある。

古墳は、B地区で木戸川に面する台地上に、A区は、南の山田宝馬古墳群を代表とするグループが、木戸川と高谷川の中間地点に、大里田辺台古墳を中心とするグループが、高谷川に面して位置する。調査歴は、經ヶ窪遺跡⁽⁴⁾・山田宝馬古墳群⁽⁴⁾・小池大塚古墳⁽⁴⁾・芝山古墳群⁽⁴⁾・殿部田古墳群⁽⁴⁾がある。

歴史時代は、B地区に散在し、A地区南部と北部に密となる、調査歴は、小池麻生遺跡、小池地蔵遺跡、小池向台遺跡、小池新林遺跡、小池元高田遺跡、清水台遺跡がある。

このように、木戸川流域は、縄文時代早期から歴史時代に至るまで多くの遺跡が複合しているその一部の性格が発掘調査によって解明されつつある。

(注)

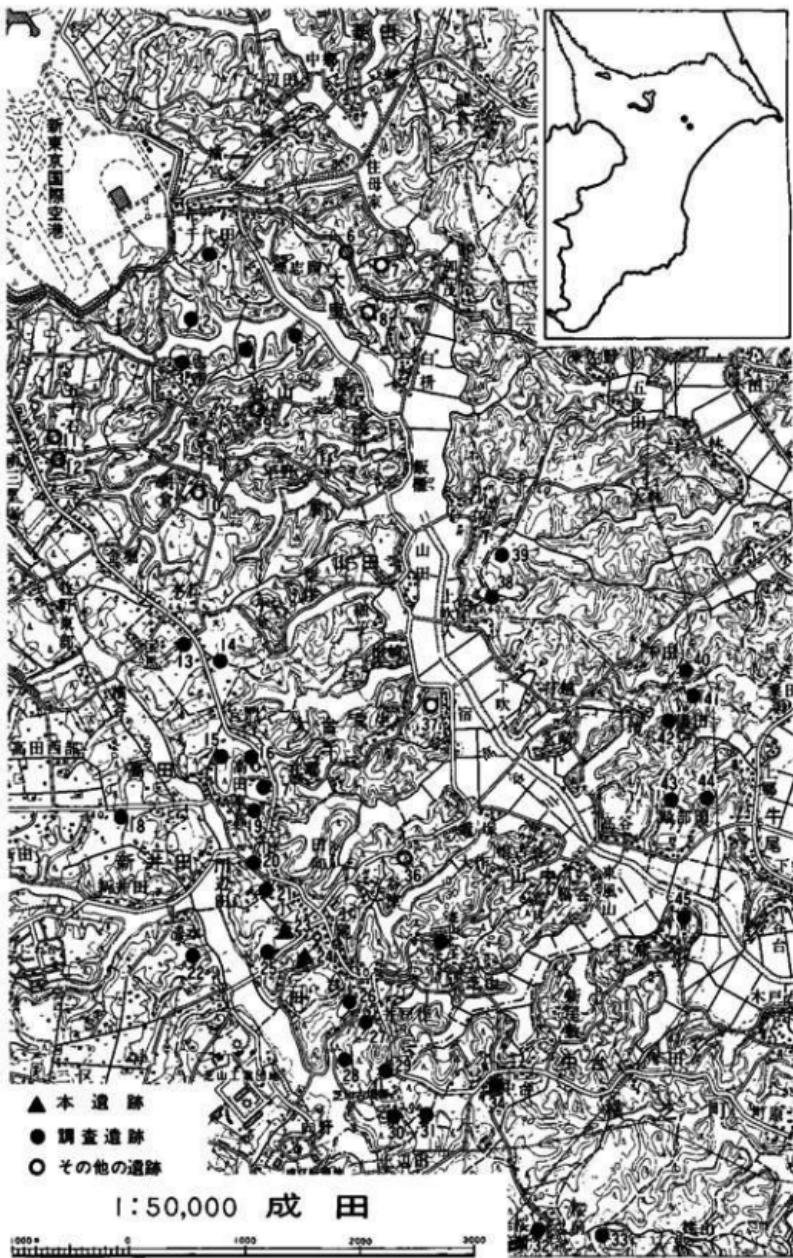
- (1) 「千葉県芝山古墳群調査速報」
「古代」第19・20号 早稲田大学考古学会 1956
- (2) 「芝山町の遺跡」 芝山町教育委員会 1982
- (3) 「主要地方道成田松尾線I」(財)千葉県文化財センター 1983
- (4) 「千葉県山武郡芝山町小池台遺跡調査第一次概報」 芝山町教育委員会 1970
- (5) 勘千葉県文化センター 1981年調査
- (6) 本 書
- (7) 「宮門」 山武考古学研究会 1974
- (8) 勘千葉県文化センター 1984年調査
- (9) 「山武猪ノ堤遺跡」 猪ノ堤遺跡発掘調査団 1978
- (10) 「清水台No 1 遺跡発掘調査報告」 清水台No 1 遺跡発掘調査会 1980
- (11) 「東京電力送電鉄塔建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 山武考古学研究所 1981
- (12) 「芝山町山田古墳群・山田出口遺跡」(財)千葉県文化財センター 1982
- (13) 「金鉢」 17 早稲田大学考古学研究会 1963
「上総殿部田古墳・宝馬古墳」 芝山はにわ博物館 1980

「山田・宝馬古墳群」山田古墳群遺跡調査会1982

04 勝千葉県文化財センター 1979年調査

第1表 遺跡一覧表

No	遺跡名	備考(調査成果等)	No	遺跡名	備考(調査成果等)
1	柳 谷	包藏地。馬土手。土塁。	23	小 池 地 嵩	本書。
2	井 森 戸	縄文、古墳時代。住居跡5軒。	24	小 池 新 林	本書。
3	上 商	先土器、縄文、古墳時代。住居跡1軒。土塁。	25	小 地 台	縄文時代、包藏地。
4	後 田 古	先土器、縄文、古墳、奈良、平安時代。中近世。石器集中地1か所。住居跡5軒。土塁4基。溝2条。	26	小 地 元 高 田	縄文、古墳、奈良、平安時代。住居跡11軒。獨立柱建物跡1棟。
			27	小 池 向 古	古墳、奈良時代。住居跡7軒。
			28	小 池 大 墓	前方後円墳。
5	大 里	古墳、奈良、平安時代。溝2条。土塁2基。	29	鶴 ケ 墓	縄文、古墳時代。古墳3基。
6	大里田辺台古墳群	円墳6基現存、円墳5基消滅。	30	芝 山 古 墳 群	戦場。姫塚。形象埴輪。
7	田 辺 野 東 古 墳 群	円墳1基現存、円墳3基消滅。	31	中 古 植 谷	古墳時代。
8	内 塚	縄文土器散布地。(阿玉台、加曾利B)	32	遠 山 天 ノ 作	先土器、縄文時代。
9	岩 山 城 址	中近世城址。	33	姥 山 貝 塚	縄文時代(晚期)。
10	朝 會 城 坂	中近世城址。	34	中 台 貝 塚	先土器、縄文時代。土塁150基。住居跡1軒。
11	金 塚 た たら 坂	中近世。	35	新 起	古墳時代。住居跡1軒。
12	五 十 石 古 墳 群	円墳4基、前方後円墳1基現存。	36	小 池 寿 生 古 墳 群	前方後円墳1基。円墳4基現存。円墳1基消滅。
13	宝 馬 古 墓 群	前方後円墳、円墳、形象埴輪。	37	大 台 城 坂	中世。
14	山 田 古 墓 群	前方後円墳、円墳、形象埴輪。	38	上 吹 入	古墳時代。住居跡5軒。
15	権 現	古墳、奈良、平安時代。冢。	39	林	先土器、縄文、古墳、平安時代。住居跡8軒。土塁。工房址。
16	大 古 西	古墳時代。住居跡14軒。製鐵遺構。	40	船 越 桜 横 地	古墳、奈良、平安時代。住居跡33軒。土塁。
17	大 台 西 藤 ケ 作	古墳、平安時代。円墳1基現存。	41	傳 田 古	縄文、古墳、奈良、平安時代。住居跡13軒。土塁。
18	高 田 古 墓 群	前方後円墳。円墳。形象、円錐埴輪。	42	境	縄文、古墳時代。住居跡1軒。土塁。
19	宵 門	縄文、古墳、奈良、平安時代。住居跡35軒。土塁。炉穴。	43	殿 部 田	縄文、古墳時代。住居跡23軒。
20	猪 ノ 墓	古墳時代。住居跡3軒。	44	殿 部 田 古 墓 群	前方後円墳。円錐、形象埴輪。
21	小 池 寿 生	縄文、古墳、奈良、平安時代。住居跡32軒。	45	牛 雄 貝 塚	縄文時代(中期~後期)。
22	清 水 古	縄文、古墳、奈良、平安時代。住居跡17軒。			



第1図 周辺地形図



第2図 調査区周辺地形図 (1/5,000)

0 200

第2章 小池新林遺跡

第1項 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

小池新林遺跡は昭和54年6月10日に着手し、8月1日に終了した。調査対象地は、道路敷地内に限られたため、20m毎の道路中心杭を基準にグリッドを設定した。グリッドは、道路中心杭の両側10mと中心杭間の20×20mを大グリッドとし道路北側からA1～A5までを付した。大グリッドの中を第3図の如く2×2mの小グリッドに設定し、北西から東へ00～09、北西から南西へ00～90と付し、99までのグリッドを使用した。

発掘調査は、道路中心線、道路両側面にグリッドに並行する3本の2m幅のトレンチを設定して遺構、遺物を検出した。遺跡の性格を把握した後、確認調査に基づき、全面の表土を剥ぎ遺構の精査を行った。実測は平板測量を基本とし、一部遺り方測量を採用した。上層遺構の調査後、先土器時代の確認を2×2mのグリッドで武藏野ローム層上面まで掘り下げ確認した。遺構の番号は、精査の着手順に付し整理作業においても踏襲した。写真は4×5、6×7、35mmの黑白と35mmのカラースライドを撮影した。遺物は、遺構検出面より上のものをグリッド名で取上げ、整理時に遺構出土の遺物と接合した。また、この大グリッドは、道路建設予定中心杭No319、公共座標X=-34,278,473、Y=52,681,197とA2-05が、中心杭322、公共座標X=-34,330,573、Y=52,710,957とA5-05が対応する。

(2) 土層(第3図)

芝山町市街地より西へ延びる幅100mの舌状台地中央部で、A3-05グリッド地点の土層である。標高は40mを測る。

I層……耕作土 暗褐色土

II層……黒色土

III層……立川ローム層、いわゆるソフトローム層で黄褐色を呈する。

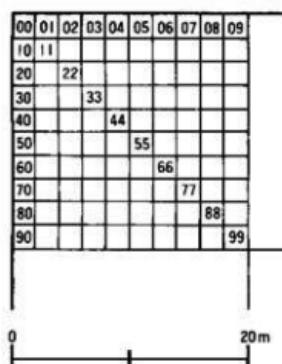
IV～VI層…立川ローム層、橙褐色を呈し、クラックが発達する。分層が困難である。

VII層……立川ローム層、暗褐色を呈する。第二黒色帯に比定できる。

VIII層……立川ローム層、硬質茶褐色で立川最下層である。

IX層……武藏野ローム層、暗茶褐色土で硬質粘性あり。

X層……武藏野ローム層、暗茶褐色で粘質。



XI層……武藏野ローム層 砂質土で硬質。
XII層……下末吉ローム層 灰褐色で粘性が強い。

(3) 調査の経過

発掘調査は昭和54年6月10日から8月1日まで実施した。

6月10日～15日 現場設営、現場器材の搬入、グリッド設定

6月15日～25日 A1からA5へトレーナー発掘、耕作土35cm、褐色土12cm、ソフトローム24cm、ハードロームの層序

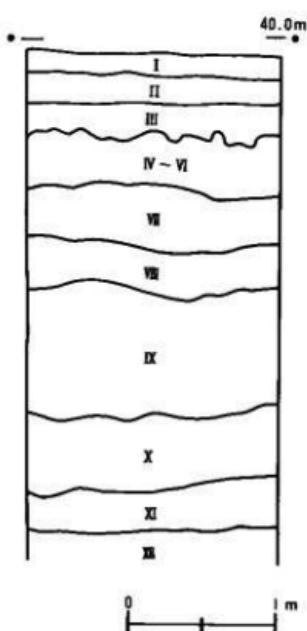
6月23日～7月5日 耕土と遺構確認、三角点よりレベル移動日

7月5日～8月1日 遺構の精査

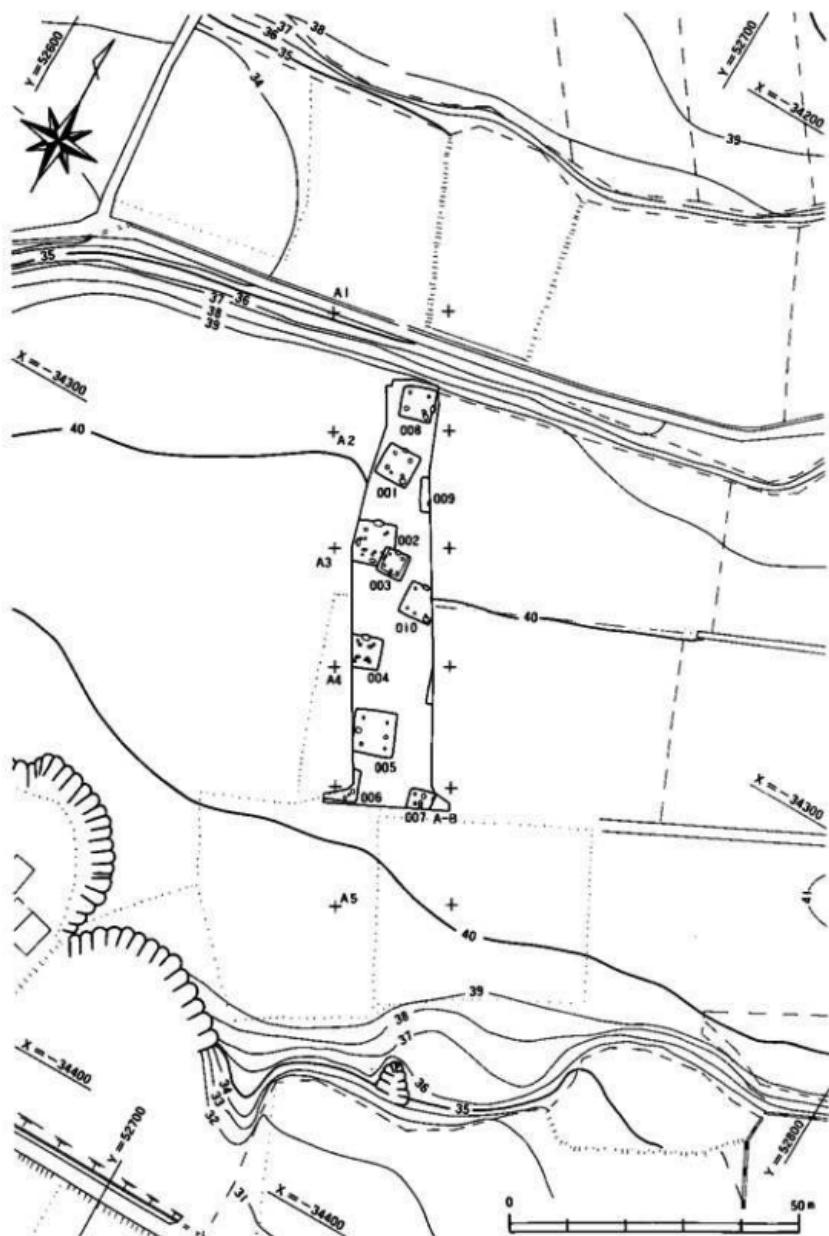
7月26日～8月1日 先土器の確認

(4) 調査の概要

本遺跡において検出された遺構は、すべて住居跡である。総数は、重複している住居跡を含めて12軒である。西側から入り込む谷津によって狭まれた幅のせまい台地上に集落が展開している。北側の斜面部から台地平坦面の方が遺構の密度は濃くなっている。今回の調査区は、台地全体を横断するものではなく、平坦面のほぼ中央までの限られた範囲であるため、集落全体がどのような展開をみせるか、その把握は困難であった。



第3図 グリッド分割図・土層図



第4図 小池新林遺跡遺構分布図（1/1,000）

第2項 遺構

001号住居跡（第5図・図版2）

本住居跡は、調査区北側で、台地の平坦部からわずかに傾斜をみせる部分に位置している。

002号住居跡とは、約6.7mの距離にある。

平面形は、方形を呈するが、西側でわずかに外方に張り出している。規模は、 $5.70 \times 5.90\text{m}$ を測る。主軸方位は、N-1.5°-Eとなる。壁はやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは21~14cmを測る。周溝はない。床面は全体に起伏が少なく、平坦である。カマドを中心として住居中央部が他に比べて堅緻であった。ピットは、6ヶ所より検出されている。 $P_1 \sim P_6$ は配置からみて主柱穴およびそれに次ぐものであろう。径 $0.45 \times 0.64\text{m}$ 、深さ $0.88 \sim 1\text{m}$ を測り規範的にもしっかりとをしている。東南隅に位置する P_6 は、平面形は、ほぼ方形を呈しており長軸 1.06m 、深さ 0.45m を測る。ピット内および周囲より遺物がまとまって出土していることから、貯蔵穴と考えられる。

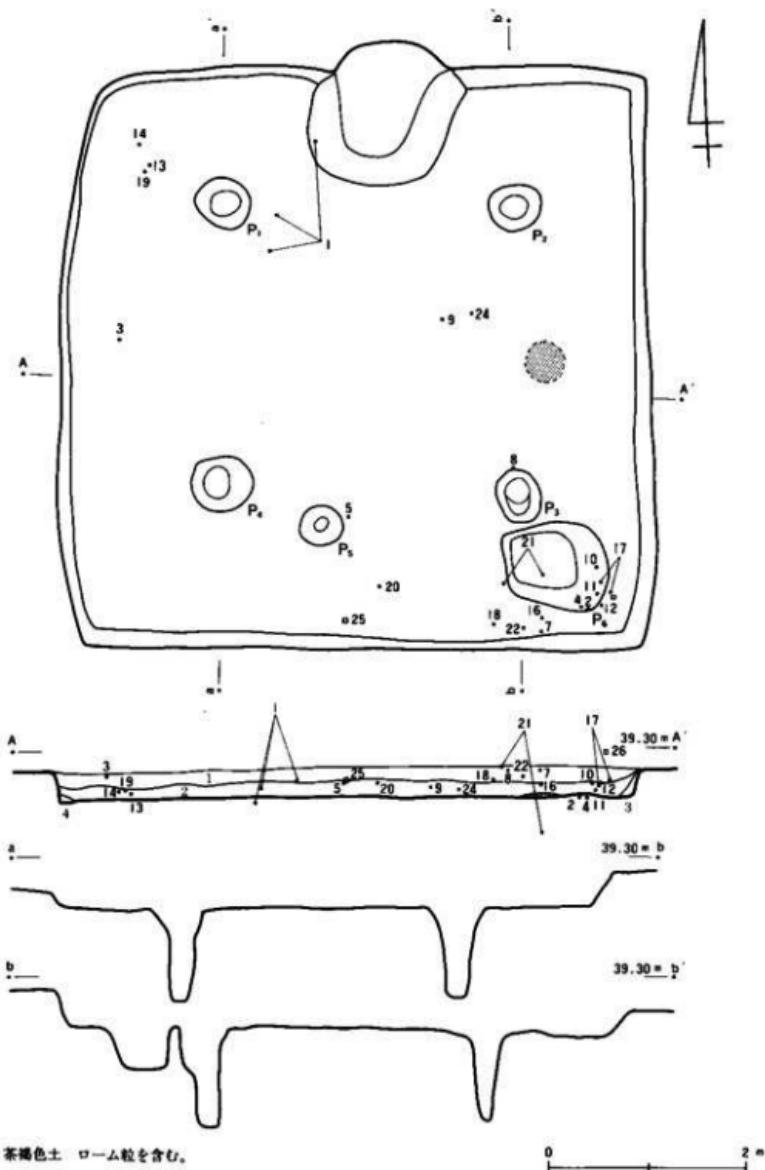
遺物は、この P_6 周辺と、北西側にまとまって出土している。床面上およびやや上方から出土した遺物が多く、良好な遺存状況であった。

カマドは、北壁の中央に位置している。上面での粘土の散布範囲は、広範であったが、遺存状態が悪く、袖の規模等細部の把握は、困難であった。壁を30cm程半円形に掘り込み、灰白色の粘土を主材として構築している。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめたもので、掘り方は不明確である。

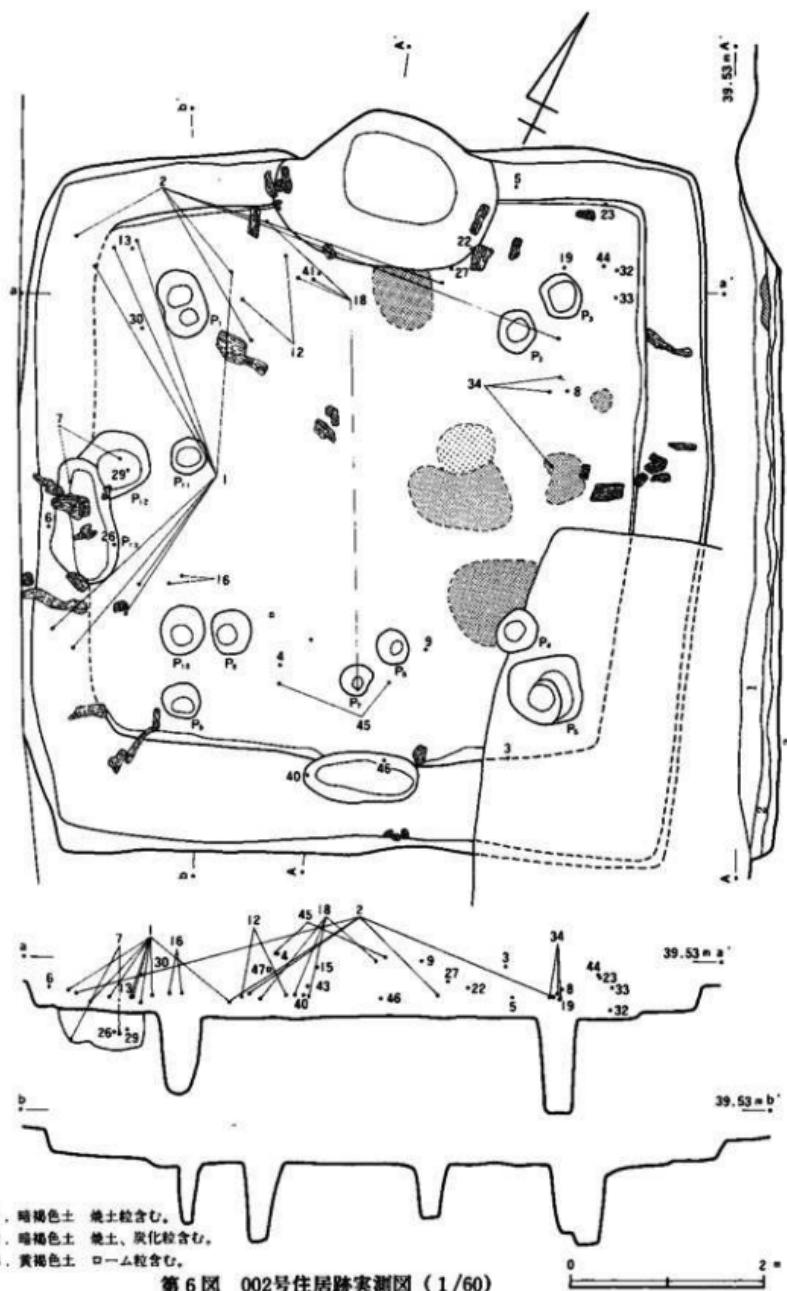
002号住居跡（第6図・図版3）

本住居跡は、調査区の中央よりやや北側で、001号住居跡の南約6.7mの距離に位置する。東壁側で003号住居跡と重複関係にある。新旧関係は、住居跡確認時の状況、土層断面の観察から、(古)002号→(新)003号となる。また、西壁側の一部は、調査区外にのびる為、全体を検出することができなかった。

平面形は、方形を呈する。規模は、 $6.90 \times 6.60\text{m}$ を測る。主軸方位は、N-24°-Wとなる。床面は、カマドから住居の中央部で特に堅くしまりがあり、全体に起伏は少ない。また住居の内側 $4.30 \times 4.10\text{m}$ の方形を呈する範囲は、貼床面となっている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、住居確認面より33~22cmを測る。周溝は存在しない。ピットは、貼床面を除去した後、14ヶ所で検出された。 P_1 が2つの掘り込みを有する他は、住居の対角線上に位置するピット、南壁中央寄りのピット、西壁中央寄りのピットのそれぞれが2対ないし3対のピットと隣接して存在している。これは、貼床の存在を考慮すると、本住居跡において、内側から外側への建



第5図 001号住居跡実測図 (1/60)



て替えによる拡張がおこなわれた結果であるものと推定される。P₁～P₁₂は、円形ないし梢円形を呈し、径70～32cm、深さ93.1～25.5cmを測る。P₁₃、P₁₄は長梢円形を呈し、長軸114～88cm、深さ42～33cmを測る。P₁～P₁₂は柱穴であることが推定できるが、P₁₃、P₁₄の用途は不明である。

遺物は、約250点程で比較的多く出土している。位置的には、住居中央より各壁寄りに散在している。出土層位は、床面よりやや上から覆土上層に多い。覆土第1層から2層では、焼土、炭化材が広範に散布しており、遺物はこれに伴って出土している。

覆土は、暗褐色土が主体を占め、上層では焼土、炭化材を多く伴っている。

カマドは、住居跡北壁の中央に位置しており、灰白色粘土を主材に用いて構築されている。遺構検出時には、良好な遺存状態であろうと推定されたが、調査の結果、袖、天井部とともに崩落が著しく、ほとんど旧状をとどめていなかった。煙出し管の壁への掘り込みは、45cm程三角形状に掘り込んでいる。

003号住居跡（第7図・図版3）

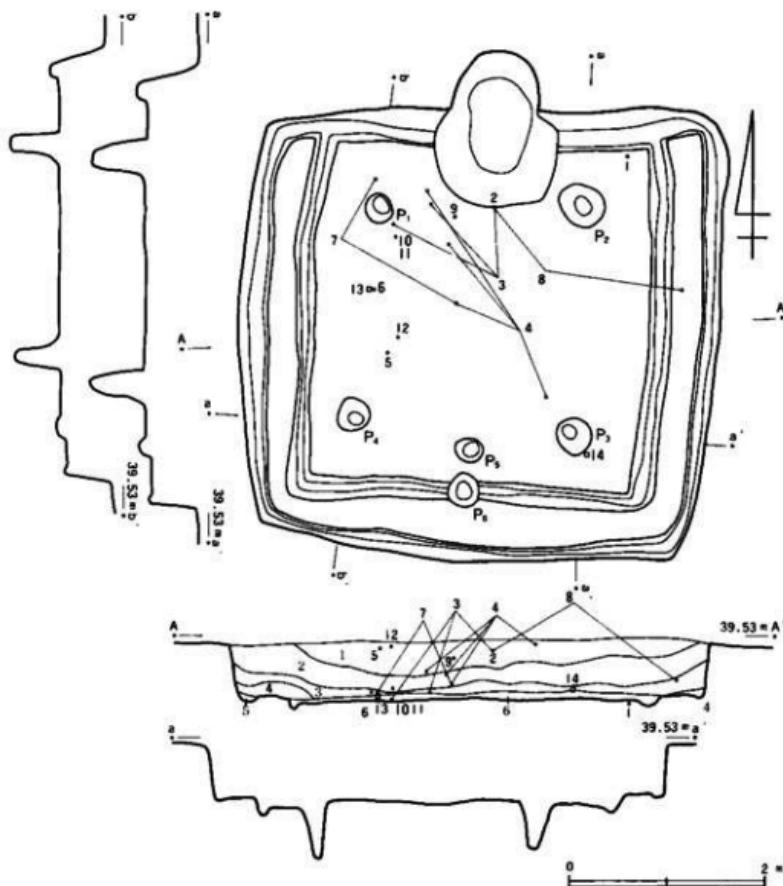
本住居跡は、調査区中央よりやや北側に位置しており、002号住居跡を北西側で切って構築されている。002号住居跡より新しいことは明らかである。

平面形は、方形を呈する。規模は、4.54×4.46mを測る。主軸方位は、N-1°-Eとなる。床面は、全体に起伏が少なく、均一的な堅さである。住居跡の内側3.90×3.84mの方形を呈する範囲は、貼床がされている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、しっかりと掘り込まれている。確認面からの深さは55～36cmを測る。周溝は、全周している。幅22～10cm、深さ10cm前後を測る。床面精査の後、貼床部分の除去をおこなった結果、北側を除いた部分の下層に、もう一つの周溝の存在が明らかとなった。幅26～12cm、深さ15～8cmを測る。北側は、北壁周溝に続いている。ピットは、6ヶ所より検出されている。この内、P₁～P₄およびP₆は、貼床面上で、検出され、P₅は、貼床除去後に検出されたものである。すべて、ほぼ円形を呈する平面形で、径46～28cm、深さ51～24cmを測る。貼床部とその下を巡る周溝、およびP₆の存在から、本住居跡においても002号住居跡と同様、建て替えによる拡張がおこなわれたことが推定される。

カマドは、北壁の中央に位置している。壁からの張り出しは、大きく、58cmを測る。天井部および袖部の遺存は悪く、構築材の灰白色粘土が散在していた。

遺物は、全体として少ない出土量である。住居中央より西側に、偏って出土している傾向が認められる。出土層位は、覆土下層より上層に多く、整理の結果、広範な接合状況も認められることから、投棄された遺物の可能性が強いと思われる。

覆土は、暗褐色土、褐色土が主体を占め、全体に流れ込みによる堆積状況を示している。



1. 暗褐色土

2. 明褐色土 ロームブロック及びローム粒を多く含む。

3. 黒色土 ロームブロック及び炭化材を含む。

4. 明褐色土 しまりあり。

5. 黒色土 炭化粒わずかに含む。

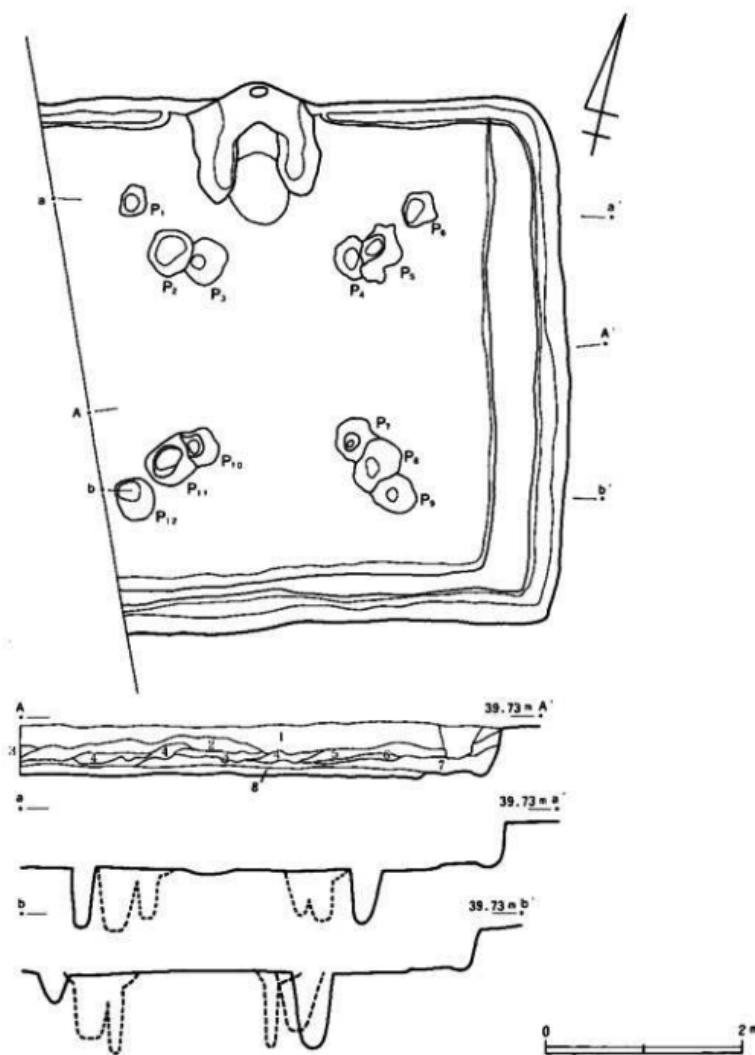
6. 暗褐色土 焙土粒及び炭化粒を多く含む。

第7図 003号住居跡実測図 (1/60)

004号住居跡 (第8、9図・図版4、5)

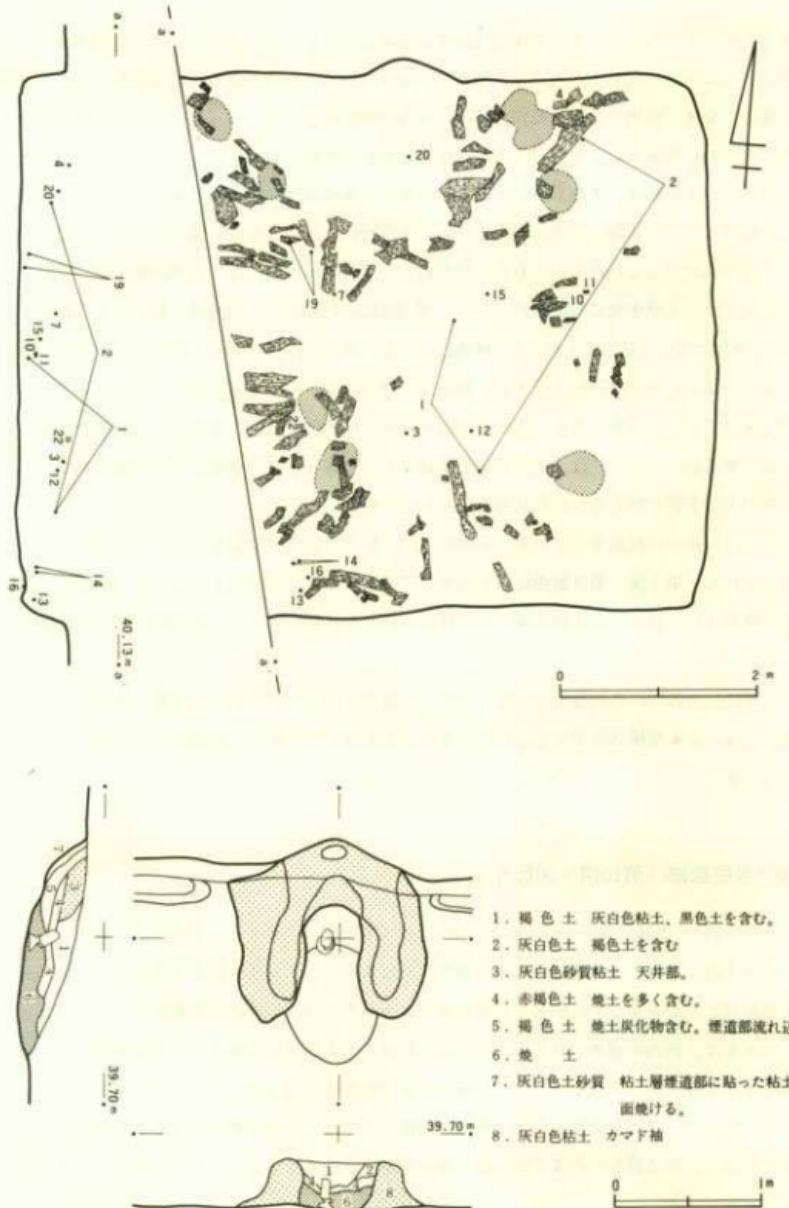
本住居跡は、調査区のほぼ中央に位置しており、003号住居跡の南約12mの距離にある。西壁側は、調査区外にのびるため、全体を検出することはできなかった。

平面形は、方形を呈するものと推定される。規模は、東壁側で5.20mを測る。主軸方位はN-14°Wとなる。床面は、堅緻で、全体に起伏が少ない。東側と南側の壁寄りを除く床面のほ



- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1. 茶褐色土 ロームブロック含む。 | 5. 雰褐色土 炭化粒、ロームブロック含む。 |
| 2. 褐色土 ロームブロック少量含む。 | 6. 炭化材ブロック 白色粘土粒含む。 |
| 3. 褐色土 焼土粒多く含む。 | 7. 黒色土 炭化粒、焼土粒含む。 |
| 4. 炭化物層 | 8. 黄褐色土 ロームブロックを含む。 |

第8図 004号住居跡実測図 (1/60)



第9図 004号住居跡遺物出土状況図及びカマド実測図 (1/60・1/40)

とんどが貼床となっている。貼床部は厚さ10cm前後を測り、ロームブロックが充填されていた。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは48.5~32cmを測る。周溝はカマド付近を除く他は、全体で検出できた。幅25~13cm、深さ10cm前後を測る。ピットは、12ヶ所で検出された。住居の対角線上に、それぞれ3対が住居内側から外側に並列している。重複しているピットが多く、平面形は、不整形を呈するものが多い。規模は径52~24cm、深さ77~47.5cmを測る。これらのピットの状況、貼床部の存在から、本住居跡においても、2回ないし3回の建て替えによる拡張がおこなわれていたものと思われる。なお貼床内側には、周溝は検出されていない。

カマドは、北壁中央に設置されている。遺存状況は良好で、天井部、袖部ともに遺存しており、全体に灰白色粘土を主材として構築している。天井部は長さ42cm、厚さ25cmを測る。煙出しは、径18×10cmの楕円形を呈する。袖部は、壁より100~95cm張り出し、床面からの高さは30cm前後である。火床部掘り込みは、径76×43cmの楕円形を呈し、床面を5cm前後掘り込んでいる。煙道部立ち上がりは、比較的急な傾斜である。掘り込みの中央よりやや煙道側で、高壇の脚の上に支脚が据え置かれた状態で出土している。

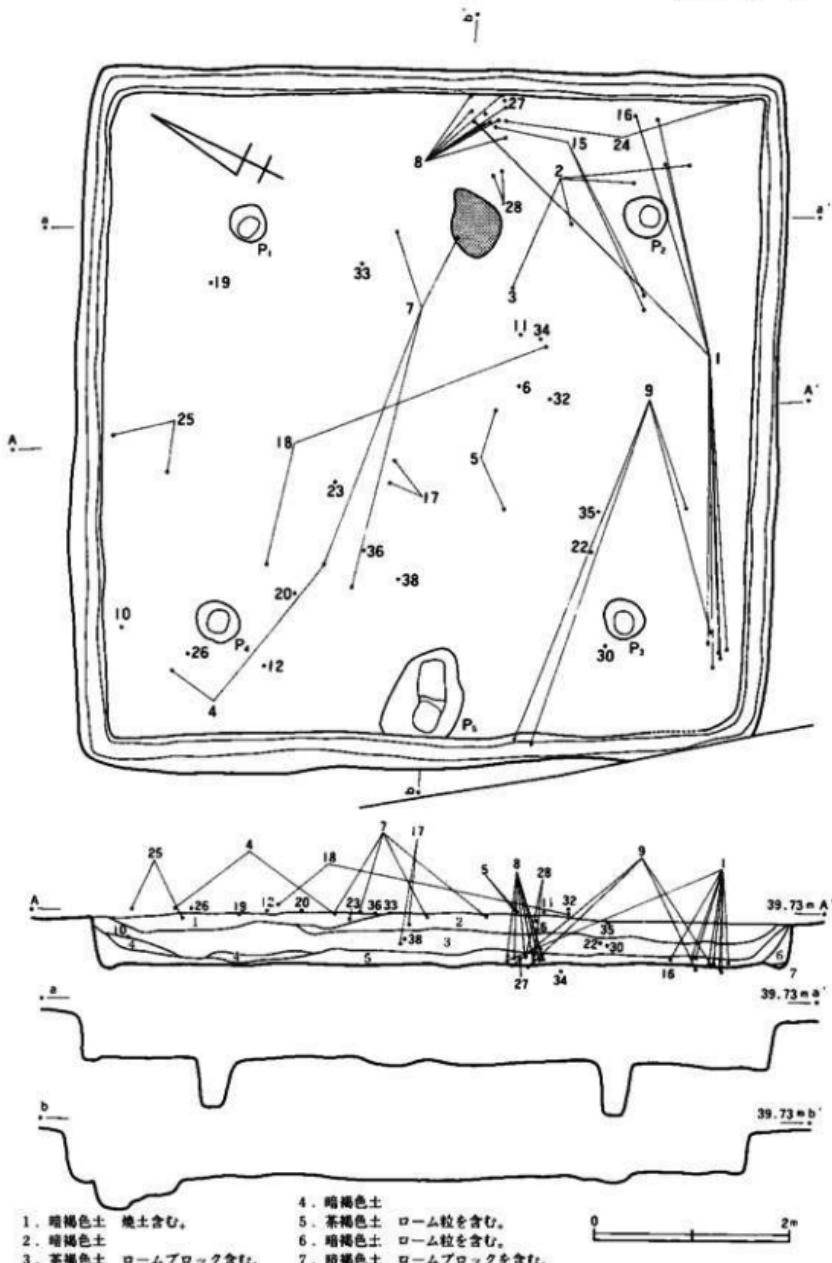
遺物は、約60点程出土している。平面的には、かなり散在した状況である。出土層位は、床面近くよりも、第2層、第3層中に多く出土している。なお、貼床面上では、多量の焼土、炭化材が検出されており、炭化材の多くは、住居中央から外側に向って、放射状に倒れた状態であった。

土層は、全体的に茶褐色土が主体を占め、上層では、ロームブロックが多く含まれており、流れ込みによる堆積状況を呈している。また、床面近くでは焼土、炭化物が均一な厚さで堆積している。

005号住居跡（第10図・図版6）

本住居跡は、004号住居跡の南約6.5mの台地平坦部に位置する。遺構確認面は、ソフトローム層上面である。南東側の隅が一部調査区外にあるため、全体を検出するには至っていない。平面形は正方形を呈し、7.00×7.10mを測る。主軸方位は、炉を通る主軸線でN-69°Eとなる。床面は、凹凸の認められるものの、均一な堅さである。住居中央から北東壁側に寄った位置に炉が存在する。平面形は、73×51cmのやや不整な楕円形を呈している。床面への掘り込みはごく僅かで、5cmを測る。全体に焼土が堆積していた。壁は全体的に床面より垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは、42~38cmを測る。周溝は全周しており、幅20cm前後、深さ10~2cmである。

ピットは5ヶ所で検出されている。住居跡の対角線上に配されたP₁~P₄が主柱穴である。径40cm前後、深さ55~39cmを測る。炉の対面、西壁周溝に接して掘り込まれたP₅は、入口部



第10図 005号住居跡実測図 (1/60)

に付設されたものであろう。床面より2段に掘り込まれており、径90×27cm、深さ27cmを測る。

遺物は、総数320点が出土している。このうち、住居跡確認面及び覆土上層で約5%が検出されており、実際に本住居跡に伴うと考えられる遺物は残り約5%にすぎない。本住居跡に伴う遺物は、住居中央から南側に多く、レベル的には、床面、若しくはそれよりやや上で出土している。ただ平面的な広がりでは、床面上に分散した出土状況である。

覆土は、7層に区分できた。暗褐色土および茶褐色土が主体であり、自然の流れ込みによる堆積状況である。

005号住居跡（第11図・図版6）

本住居跡は、調査区の南端に位置しており、005号住居跡と約3mの距離にある。住居跡の北～西側の約5%が調査区外に存在するため、調査は北東側～南側の部分に留まった。

平面形は、方形を呈するものと考えられる。規模は、東壁側で5.50mを測る。床面は、ほぼ平坦で堅硬である。壁はやや傾斜して立ち上がる。確認面からの深さは、43～40cmを測る。周溝は南側の一部で床面との境が不明確となるが、他の部分では明瞭に検出されている。幅20cm前後、深さ2～5cmを測る。ピットは4ヶ所より検出されている。規模は、P₂、P₄とP₁、P₃で違いをみせている。前者は径46～41cm、深さ80～78.9cmを測り、後者は径64～62cm、深さ24～26cmを測る。P₂、P₄は、深くしっかりしている点で柱穴と思われる。P₁、P₃は、覆土内から彫形土器、坏形土器が出土している点から、貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物は、南東側、特にP₃周辺にまとまって出土しているが、総量は、少ない。ピット内より出土した遺物を除くと、他は床面より5～10cmより上で出土している。

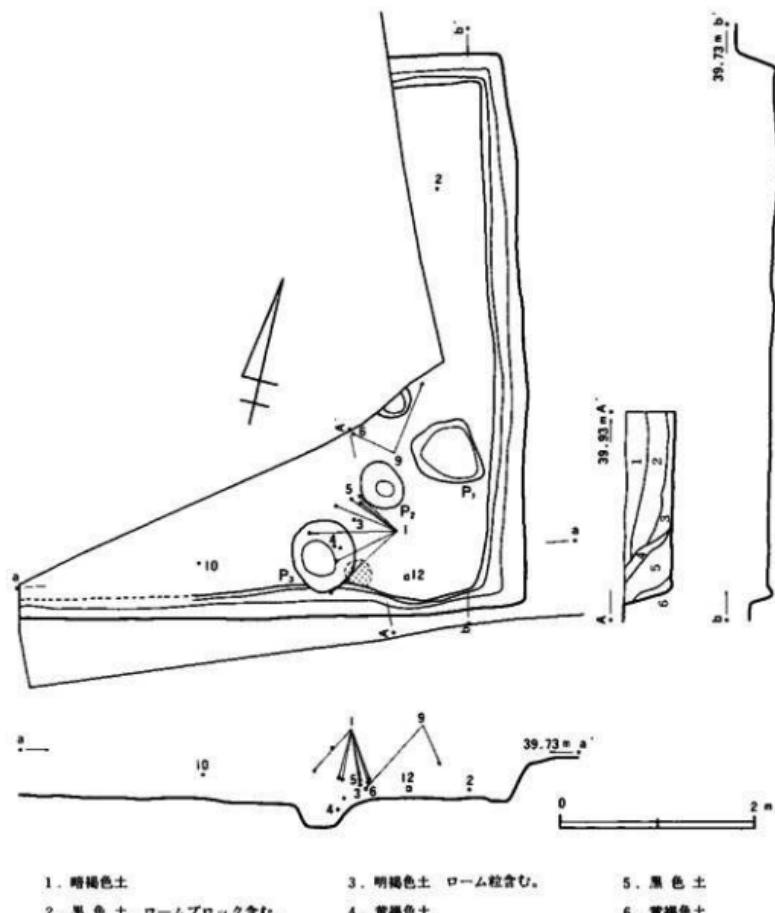
土層は、6層に区分された。壁際では、急な傾斜度で黒色土の厚い流入が認められる。

007-A・B号住居跡（第12図・図版8）

本住居跡は、006号住居跡の東約8.5mで調査区の南端に位置している。006号住居跡と同様、遺構の大部分が調査区外に存在しており、全容を把握することは困難であった。また、当初一遺構として調査が行なわれたが、調査後の検討の結果、2軒の住居跡の存在が明らかとなつた為、ここでは、007-A号跡、007-B号跡として説明を加えることにする。

007-A号跡

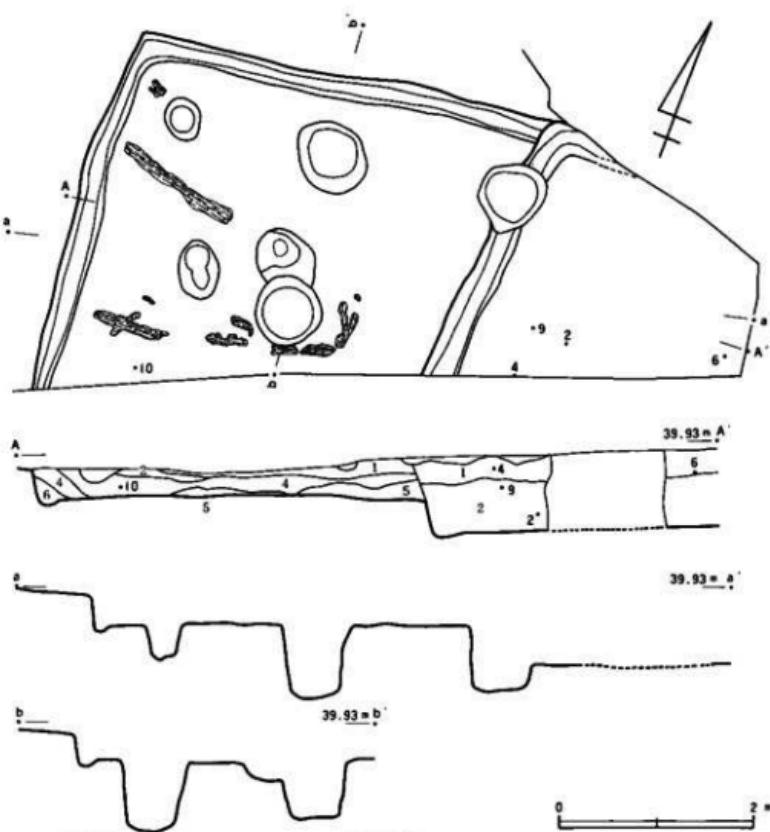
東側をB号跡によって切られており、新旧関係は、(古)A号跡→(新)B号跡となる。平面形は、方形を呈すると思われる。北壁で4.36m、西壁で3.83m検出できた。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは24～10cmを測る。周溝は、幅20cm前後、深さ10cm前後を測る。床面は、ほぼ平坦で堅硬である。ピットは、6ヶ所で検出されたが、位置的にやや偏在してい



第11図 006号住居跡実測図 (1/60)

る。P₃がB号跡をも切っていること、P₄もP₅を掘り込んでいることから、これらの同規模のP₂も本住居跡に伴うものではないと判断した。P₁は径36cm、深さ31、P₅は径64cm、深さ68cm、P₆は径59cm、深さ26cmを測る。いずれも、規模は異なるがピット内の土質の相似から本住居跡に伴う柱穴と考えられる。

遺物は、ほとんどが小破片で出土量は少ない。西側に偏って出土している。また、P₅・P₆の周辺の床面上には焼土、炭化材が散在している。



007-A号住居跡

1. 暗褐色土 灰化粒を含む。
2. 明褐色土 灰化粒を含む。
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土 ローム粒を含む。
5. 暗褐色土 灰化粒、燒土を多く含む。

007-B号住居跡

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 1よりしまりあり。

第12図 007-A・B号住居跡実測図 (1/60)

007-B号跡

西側壁の一部2.94mとそれに続く床面が確認されただけである。A号跡床面からの深さは21cm、遺構確認面からの深さは46cmを測る。住居跡の平面は、方形を呈するであろう。床面は、堅緻であるが、検出部分のはば中央、北から南にかけて、耕作による搅乱を受けている。周溝は、幅40~35cm、深さ20cm前後でしっかりとした掘り方である。ピットは検出されていない。

遺物は、A号跡同様、破片が多く、量的にも少ない。図示できた4点のうち、床面近くで出土したものは1点のみである。他は2層および3層の上部で出土しており、本住居跡に直接結びつく遺物とは言い難い。

008号住居跡（第13図・図版8・9）

本住居跡は、調査区の北端の台地傾斜面に位置している。南側に約5mの距離をおいて001号住居跡が位置している。遺構確認面は、ソフトローム層上面であるが、傾斜面のため、北壁側は、わずかしか検出できなかった。

平面形は、方形を呈する。規模は、 $5.64 \times 5.36\text{m}$ を測る。主軸方位は、N-76°Eとなる。床面は、全体に堅緻であるが、場所によっては、5cm前後の起伏が認められ、特に北側でその差が著しい。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。確認面からの深さは、46~7cmで、北側は特に浅い。周溝は、南壁下から西壁下で、床面よりわずかに落ち込んだ箇所が認められたが、明瞭には検出されていない。ピットは、5ヶ所で検出されている。主柱穴はP₁~P₄で、ほぼ等間隔で、住居の対角線上に配されている。円形を呈し、径60~34cm、深さ90~55cmを測る。P₅は、住居跡南東隅に位置している。大きな円形を呈し、径80cm、深さ52cmを測る。貯蔵穴であろう。

カマドは、東壁中央に位置する。灰白色粘土を主材として構築されているが、遺存状況は悪く、袖、天井部とも崩落して、形状をとどめていない。壁外への張り出しあは、20cm程で、三角形状に掘り込んでいる。

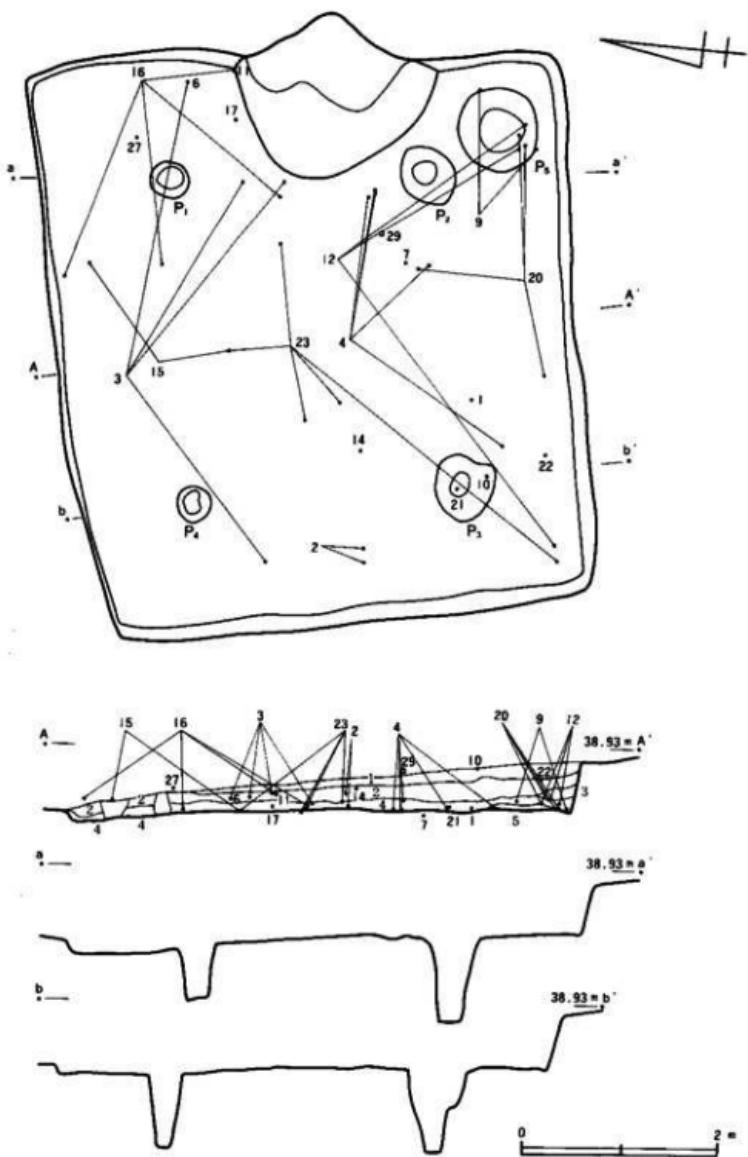
遺物は、170点程である。破片が多く、特にカマド周辺からP₅、東壁側に多く出土している。接合資料は、かなり散在した状況にあるが、層位的には、床面直上もしくは、やや上面で出土している遺物が多い。

土層は、暗褐色土、褐色土を主体としており、いわゆるレンズ状堆積を呈している。

009号住居跡（第14図・図版10）

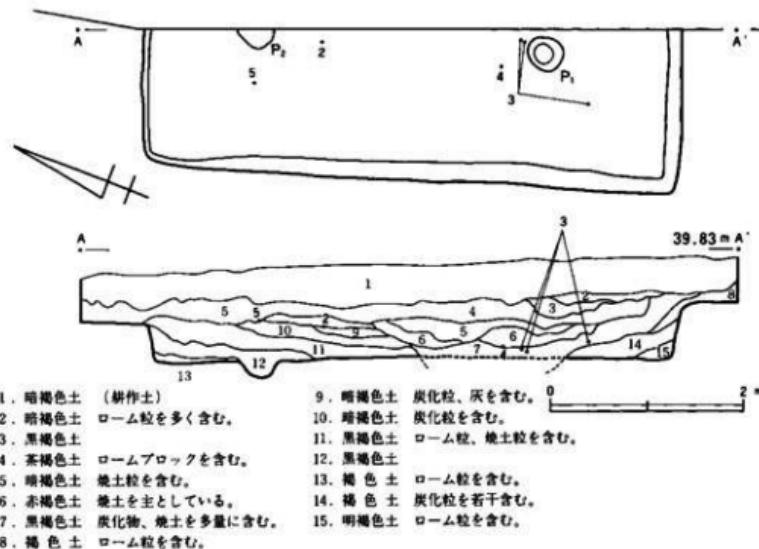
本住居跡は、調査区の北、001号住居跡の東約3mに位置している。遺構の東側約 $\frac{1}{3}$ は調査区外にのびるため、西側の一部分の検出にとどまった。

平面形は、方形を呈するものと推定される。規模は、西壁側で 5.48m を測る。床面はP₁のやや南側から中央よりにかけて、攪乱のため、起伏が著しいが、他の箇所は、平坦で、堅緻である。壁は、若干傾斜して立ち上がる。確認面からの深さは、38~34cmを測る。周溝は、ない。ピットは、2ヶ所で検出されている。P₂は、全体を検出するには至らなかった。P₁は、径36cm、深さ84.5cmを測る。いずれも、主柱穴であろう。



- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1. 暗褐色土 | 4. 黄色土 |
| 2. 明褐色土 ローム粒を多く含む。 | 5. 明褐色土 ロームブロックを多く含む。 |
| 3. 暗赤色土 かたい粘土。 | |

第13図 008号住居跡実測図 (1/60)



第14図 009号住居跡実測図 (1/60)

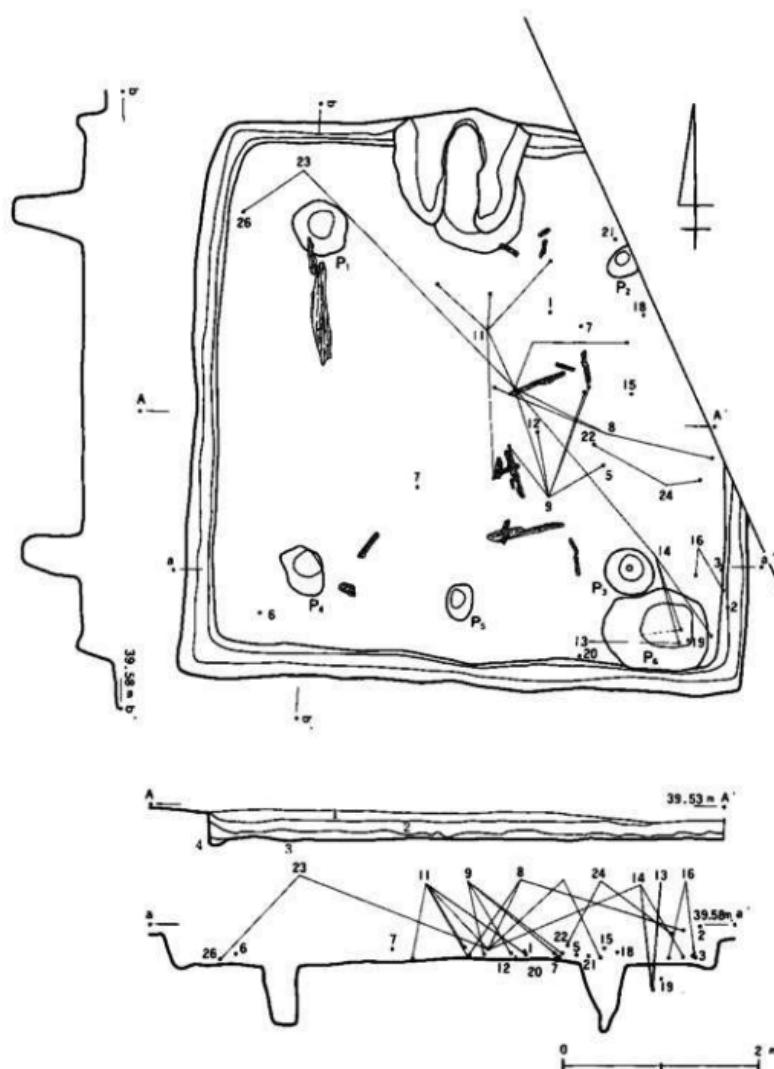
遺物は、少ない。北側と南側に分散して出土している。北側では、覆土上層に、また南側では、床面近くではあるが、焼土、炭化材を伴う掘り込みで出土しているため、本住居跡に伴うかどうか確証に欠けるところがある。なお土層断面の観察では、この掘り込みは、第4層の下より入り込んでおり、本住居跡とは、時期的にかなり隔りがあるようと思われる。性格は判然としない。

土層は、前述した掘り込みを含めて、15層に区分される。住居跡覆土は暗褐色土、黒褐色土が主体である。

010号住居跡 (第15. 16・図版10. 11)

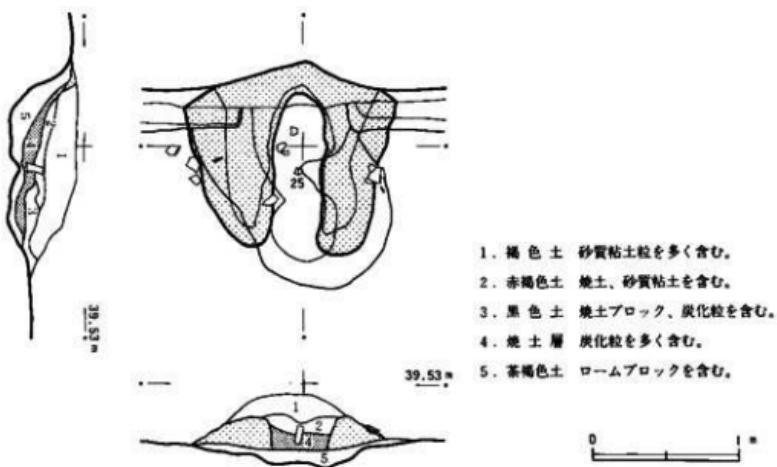
本住居跡は、調査区のほぼ中央、003号住居跡の東約2mに位置する。北東側の一部は、調査区域外にのびるため、全体を検出することはできなかった。

平面形は、方形を呈する。規模は、 $5.82 \times 5.54\text{m}$ を測る。主軸方位は、N-5°-Eとなる。床面は、やや起伏があるものの、全体に堅緻である。壁は、ほぼ直立に立ち上がる。確認面からの深さは、 $32.5 \times 22\text{cm}$ を測る。周溝は、カマド内部で途切れるが、他は全周する。幅25~14cm、深さ10cm前後を測る。ピットは、6ヶ所より検出されている。 $P_1 \sim P_4$ は、住居の対角線上に配されており、主柱穴であろう。 P_5 は、他のピットより規模が小さく南壁中央寄りに



- 1. 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 2. 暗褐色土
- 3. 黒色土 鉄化粒を含む。
- 4. 褐色土

第15図 010号住居跡実測図 (1/60)



第16図 010号住居跡カマド実測図 (1/40)

位置している。 $P_1 \sim P_5$ は、円形を呈し、径56~30cm、深さ69~24cmを測る。 P_6 は、南東隅に位置している。長径106cmの楕円形を呈し、深さは、46cmを測る。ピット内および周辺に遺物が多く出土していることから、貯蔵穴となろう。

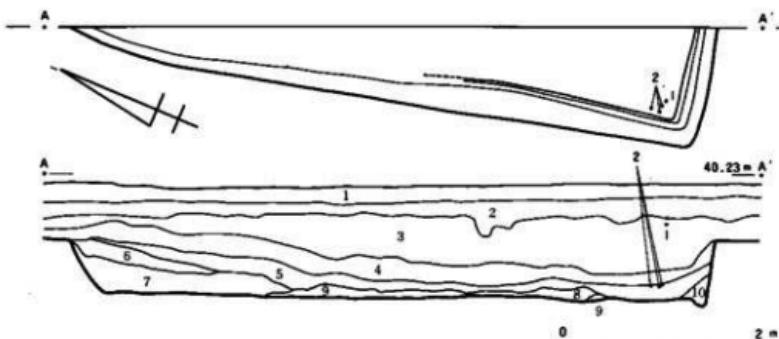
カマドは、北壁のほぼ中央に位置する。灰白色粘土を主材として構築している。遺存状態は、天井部の大部分を欠いているが、良好な方である。袖部は、壁側より1.10m程張り出し、幅62~30cmを測る。焚口幅は32cmを測る。煙道側の壁への掘り込みは、あまり大きくなない。天井部は、この掘り込み部のやや内側で、わずかに残存している。火床部掘り込みは、床面を15cm程掘り込んでいる。ほぼ中央より支脚が出土している。

遺物は、60点程出土している。住居跡中央から東側に多いが、接合資料は、分散的である。出土層位は、床面上およびやや上のレベルに多くみられる。また、床面より厚さ10cm前後では、焼土、炭化材が部分的に検出されている。

土層は、全体に暗褐色土が主体を占め、下層では、焼土、炭化材の混入が多く認められる。

011号住居跡 (第17図・図版12)

本住居跡は、調査区中央からやや南側で、010号跡の南約8mに位置している。住居跡の大部分は、東側の調査区域外にあるため西側~南側のごく一部を調査したにすぎない。



- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 1. 黒色土 (耕作土) | 6. 黄褐色土 |
| 2. 黒色土 (耕作土) | 7. 暗褐色土 ローム粒を含む。 |
| 3. 暗茶褐色土 焼土粒を含む。 | 8. 赤褐色土 焼土主体。 |
| 4. 明茶褐色土 ロームブロックを含む。 | 9. 實褐色土 ロームブロックを含む。 |
| 5. 暗褐色土 ロームブロック、炭化物、焼土粒含む。 | 10. 暗褐色土 |

第17図 011号住居跡実測図 (1/60)

住居跡の平面形は、方形を呈するものと思われる。全体の規模は、不明であるが、西壁側6.3mまでは、確認されている。床面は、起伏が少なく、堅緻である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは、48~43cmを測る。周溝は、南壁側から、西壁側の一部で検出されている。幅10cm前後、深さ5cm前後である。ピットおよびカマドは、検出されていない。

遺物は、南隅にわずかに出土している。床面よりやや上のレベルであるが、本跡に伴うものであろう。

覆土は、暗褐色土、褐色土が主体を占めている。調査区域との境では、自然堆積の状態が明確に確認されている。

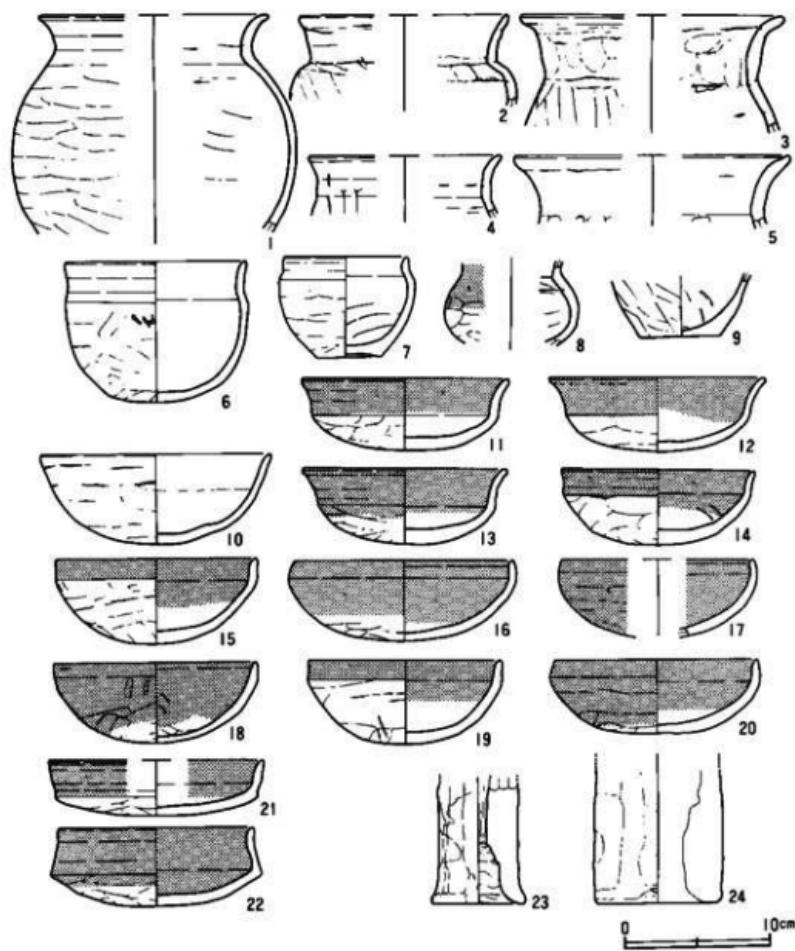
第3項 遺 物

(I) 住居跡出土の遺物

001号住居跡 (第18図・表2・図版13、14)

住居跡の遺存は良いが、遺物の出土量は、少ない。

1～5は、土師器の甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は口縁部が強く外反し、口唇は尖り氣味である。胴部は球形に近い。2は、口縁部が直線的に広がって立ち上がり、口唇が肥厚して丸くなる。胴部上部が強く張る。内面の口縁部と胴部との接合部に、指押えの成形痕がみられる。3は、胴部の張りはなく、口縁部はやや開いて立ち上がり、上部で強く外反する。口唇は丸い。口縁部の内外面に指頭による調整痕がみられる。4は、口縁部の外反は、ゆるやかで、口唇は丸い。5は、口縁部が大きく外反し、口唇がわずかに立ち上がり、受け口状になる。6、7は、土師器の小型の鉢である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。ヘラケズリは、ナデにより不明瞭である。6は、やや丸底の鉢である。半球形の胴部から口縁部がわずかに内傾して立ち上がり、口唇はやや開く。胴部と口縁部との境に稜をもつ。7は、平底の底部から胴部がゆるやかに内彎して立ち上がる。胴部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は、内傾して短く立ち上がり、口唇は、ほぼ真上に向く。8は、赤彩の壺である。やや扁平な胴部から、口縁部が外傾して立ち上がる。胴部には、ヘラケズリが施される。9は、甕の底部である。中央部が薄い。内面にヘラによる調整痕がみられる。10～22は、土師器の壺である。丸底で底部と体部との区別はなく、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。11～22には、赤彩が施される。10は、ゆるやかに内彎した体部から、口縁部が直線的に広がり、口唇はわずかに外反する。11～13は、体部の立ち上がりは低く、体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は大きく外反し、口唇は丸い。12は、ナデのためヘラケズリが不明瞭である。11、13は、底部が厚い。14、15、19は、ゆるやかに内彎した体部から口縁部がほぼ直立し、口唇は、わずかに外反する。口縁部と体部との境に稜をもち、14、15は、底部がやや厚くなる。15、19は、ナデのためヘラケズリがやや不明瞭である。16、17は、ゆるやかに内彎した体部から、口縁部が内彎して立ち上がる。口縁部と体部との境の稜は、やや不明瞭である。18、19は、ゆるやかに内彎した体部から口縁部が短く直立し、口唇は尖り氣味である。底部が体部よりも薄い。20は、口縁がやや内彎する。21は、体部の立ち上がりが低く、明瞭な受部をもつ。口縁部は外傾して立ち上がり口唇がつまみ出されたように外反する。22は、体部と口縁部との境の稜が明瞭である。体部の立ち上がりは低く、口縁部は内傾して立ち上がり、口唇はほぼ直立する。23、24は土製支脚である。中空で、表面にナデが施され、焼土が付着している。



第18図 001号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

002号住居跡 (第19~21図・表3・図版14, 15)

住居跡は、拡張住居である。遺存は良く、遺物の出土量が多い。また、赤彩された壊片が多く出土している。

1~17は、土師器の甕である。口縁部にヨコナデ、胴部から底部にかけてヘラケズリが施される。ケズリの方向は、縱、横の両方がある。1は、底部がやや小さく、胴部はやや扁平な玉

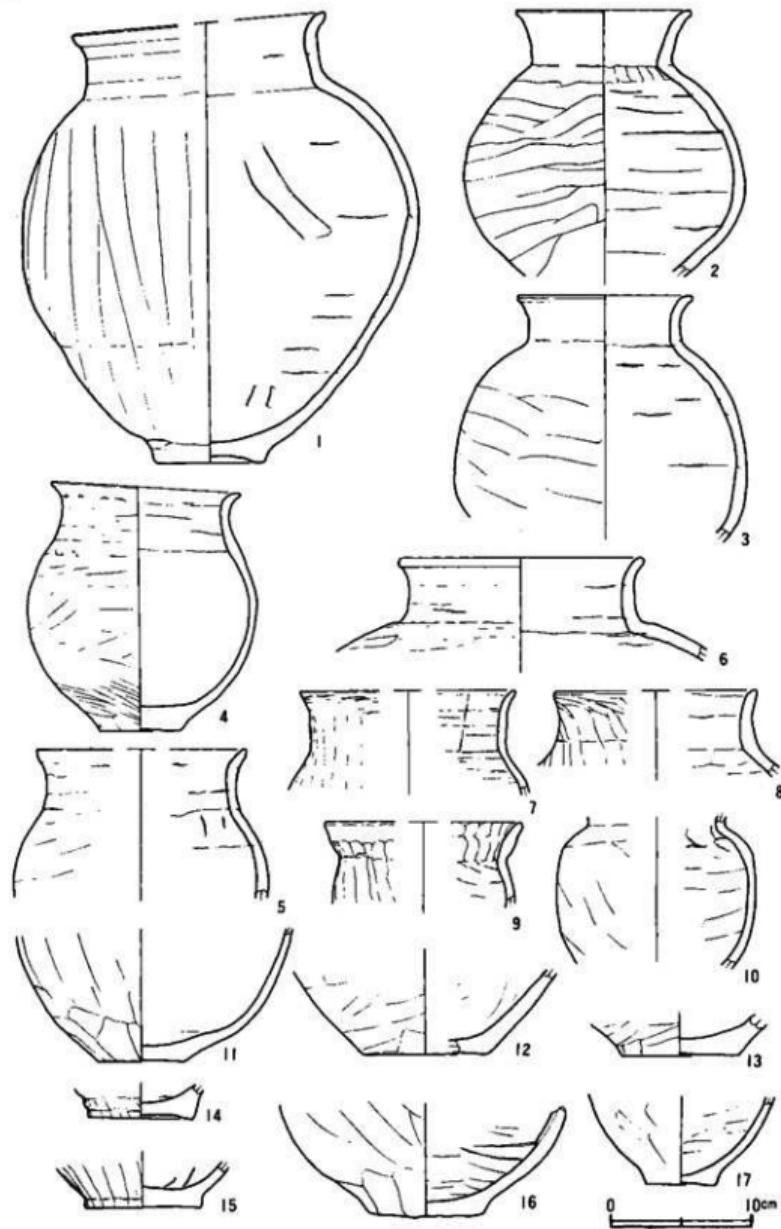
子形で、最大径は胴部上位である。口縁部は直立し、上半部で外反する。口唇は、尖り気味である。2は、扁平球形のやや下脇の胴部から、口縁部がラッパ状に外反する。内面に粘土紐の接合痕が明瞭にのこり、口縁部と胴部との接合部に、指頭による調整がみられる。3は、丸味のある下脇の胴部から口縁部が直立し、上半で外反する。口唇は丸く、つまみ出された様になる。4は、広口の甕である。底部が厚く、胴部は球形である。口縁部はゆるやかに外反して立ち上がり、上半で強く外反する。5は、4とはほぼ同形と思われるが口縁部上半の外反が小さく、やや受け口状になる。6は、大形甕である。胴部の張りはかなり強く、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立し、上部で外反する。口唇は丸い。7、8は、口縁部にも、ヘラケズリが施される。口縁部はほぼ直立し、上部で外反する。7は、器壁がかなり薄い。9は、広口の甕である。胴部の張りはなく、口縁部がラッパ状に短く開く。口縁部内面に、指頭による調整痕がみられる。10は、肩の張った甕の胴部である。11~17は底部である。11、16は、球形の胴部をもつと思われる。口は胴部が直線的に立ち上がる。16は、接合部で割れ、断面に、粘土紐の接合を容易にするためと思われるきざみがみられる。

18は、長胴の甕と思われるが、器形から甕の可能性もある。胴部の張りはなく、口縁部と胴部との境は不明瞭で、口縁部上部が短く外反する。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。

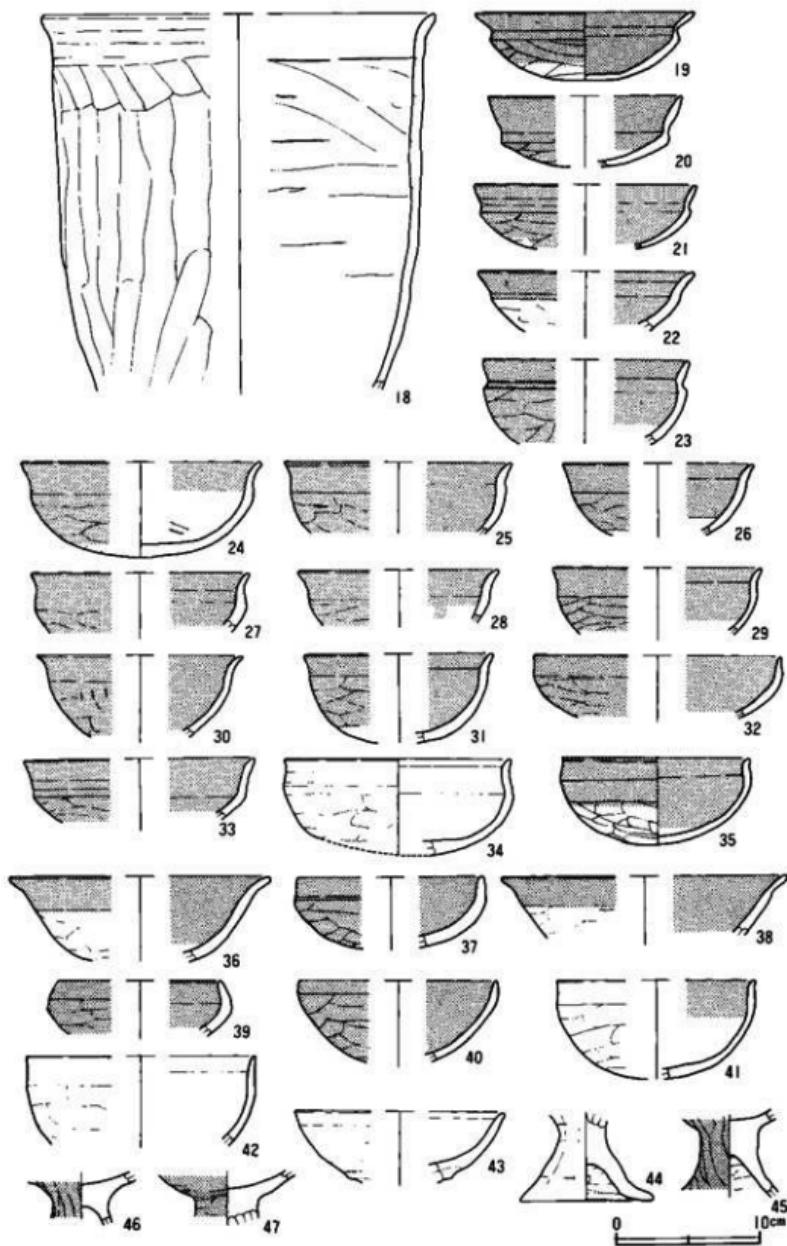
19~41は、土師器の坏である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。19~23は、受部をもち、口縁部が外反する。19は口縁部の開きが大きい。20は口縁部の立ち上がりが高く、口唇がつまみ出されたようになる。22は、器壁がやや厚く、受部のしめが弱い。23は、やや深手の坏である。24~31、33は、体部と口縁部との境に棱をもち、口縁部が外反して立ち上がる。24は口唇が丸く、他は尖り気味である。29~31は、やや深手の坏である。32、34、35、37は、体部と口縁部との境に棱をもち、口縁部はやや内傾して立ち上がる。32、34、35は口唇が外反して、尖り気味である。37は器壁がやや厚く、口唇は丸い。36、38は、体部と口縁部との境がやや不明瞭で、口縁部が大きく開く。38は、口縁部中位にしめをもつ。39は、口縁部が内彎する。40~42は、深手の坏で、半球形の体部から口縁部がほぼ直立する。体部と口縁部との境に棱をもち、口唇はわずかに外反する。

43~47は、高坏である。43は坏部である。ゆるやかに内彎した体部から、口縁部が小さく外反する。44は脚部である。接続部がやや長く、裾部がラッパ状に開く。45~47は接続部である。外面に赤彩が施される。

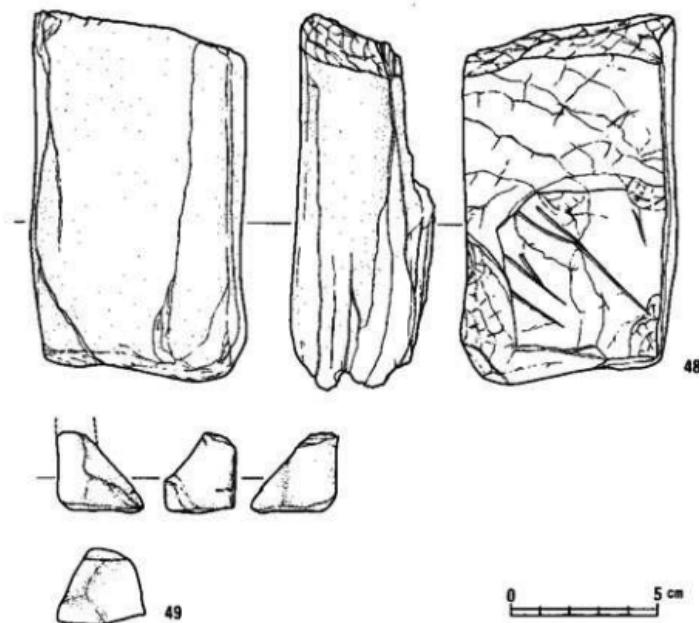
48、49は、砥石である。48は火をうけたためか板状に割れ易くなっている。また、きざみ状の擦痕がみられる。



第19図 002号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第20図 002号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4)



第21図 002号住居跡出土遺物実測図(3) (1/2)

003号住居跡（第22図・表4・図版15）

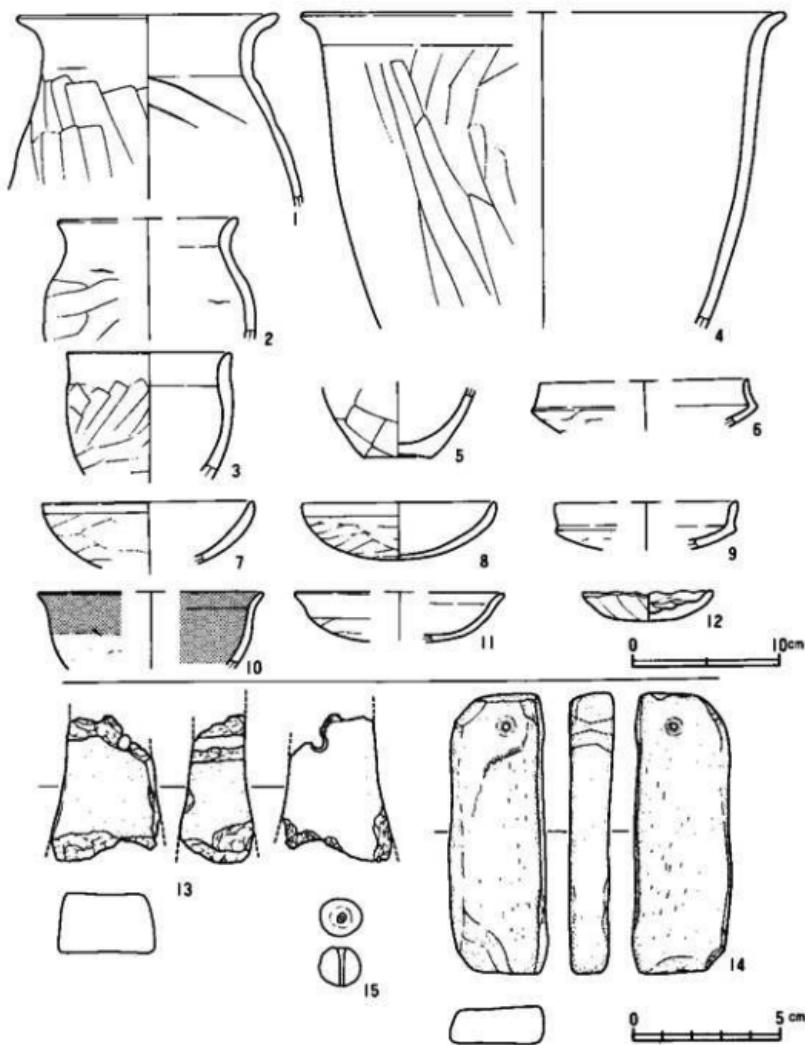
重複住居跡で、遺構の遺存は良い。遺物の出土量は少ないが、环片は赤彩されたものが多い。1～5は、土師器の縁である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1はやや長胴と思われる胴部から口縁部が強く外反する。口唇は尖り気味である。2は丸味のある胴部から口縁部が短く外反する。口唇は丸い。3は広口の縁である。やや小型で胴部の丸味は小さく、口縁部は直立し、口唇が小さく外反する。胴部と口縁部との境が緩くなる。4は広口の縁である。長胴でやや丸味のない胴部から口縁部が短く外反する。器形から、瓶とも考えられる。5は、小型縁の底部である。

6～11は、土師器の环である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。6は、受部をもつ。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇は真上を向く。7、8は、体部がゆるやかに内凹しながら口縁部に至る。体部と口縁部との境はやや不明瞭で、口縁部が厚くなる。9は、明瞭な受部をもつ。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇がわずかに内凹する。10は、やや深手の环である。半球形の体部から口縁部が短く外反する。内外両面に赤彩が施される。11は、体部と口縁部との境がやや不明瞭で、口縁部は大きく開いて外反する。

12は、壺形の手捏土器である。指頭による成形痕が明瞭である。

13,14は、砥石である。小型で、13はバチ形、14は短骨形である。端部に孔がある。14は両側から穿孔されている。

15は、土玉である。ほぼ球形で、穿孔されている。



第22図 003号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

004号住居跡（第23・24図・表5・図版15・16・17）

住居跡には拡張の跡がある。遺物の出土量は少ないが、坏片は赤彩されたものが多い。

1～7は、土師器の甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は、底部がやや小さくて厚く、胴部はほぼ球形でふっくらとした丸味をもつ、口縁部は強く短く外反し、口唇は丸い。2は、二次的に火をうけたため、形がかなりゆがんでいる。胴部はほぼ球形で、口縁部がラッパ状に大きく開く。3は、胴部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部はゆるやかに外反して立ち上がる。4、5は、口縁部が直立し、上部が外反する。5は口唇が尖り気味である。6は広口の甕である。口縁部が短く外反する。7は、球形の胴部をもつ甕の底部である。

8～18は、土師器の坏である。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。8、9は、球形に近い体部をもつと思われる坏である。体部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立し、口唇は尖り気味で、わずかに外反する。10～12は、やや深手の坏である。丸底で、ゆるやかな丸味をもった体部から口縁部が直立し、口唇がわずかに外反する。12は器壁がやや厚く底部にヘラ記号「+」が施されている。13～14は、丸底で、体部の立ち上がりは低い。体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部がやや外傾して立ち上がり、口唇が小さく外反する。口縁部の立ち上がりは高い。16は、丸底で、ゆるやかな丸味のある体部から口縁部がわずかに内傾して立ち上がり、口唇が小さく外反する。底部、口縁部が厚くなっている。17は、口縁部が内彎する。18は、体部と口縁部との境がやや不明瞭で、口縁部が開いて短く立ち上がり、口唇が小さく外反する。19は、平底の鉢である。底部は胴部から突出して厚く、ゆるやかに丸味のある胴部から口縁部が直立する。口唇が小さく外反し、尖り気味である。二次的に火をうけたため、ゆがみが激しい。

20は、高坏である。坏はゆるやかに内彎し、口縁部は短く直立し、口唇は丸い。脚部は、円筒形の接続部から、裾部が短くラッパ状に開く。

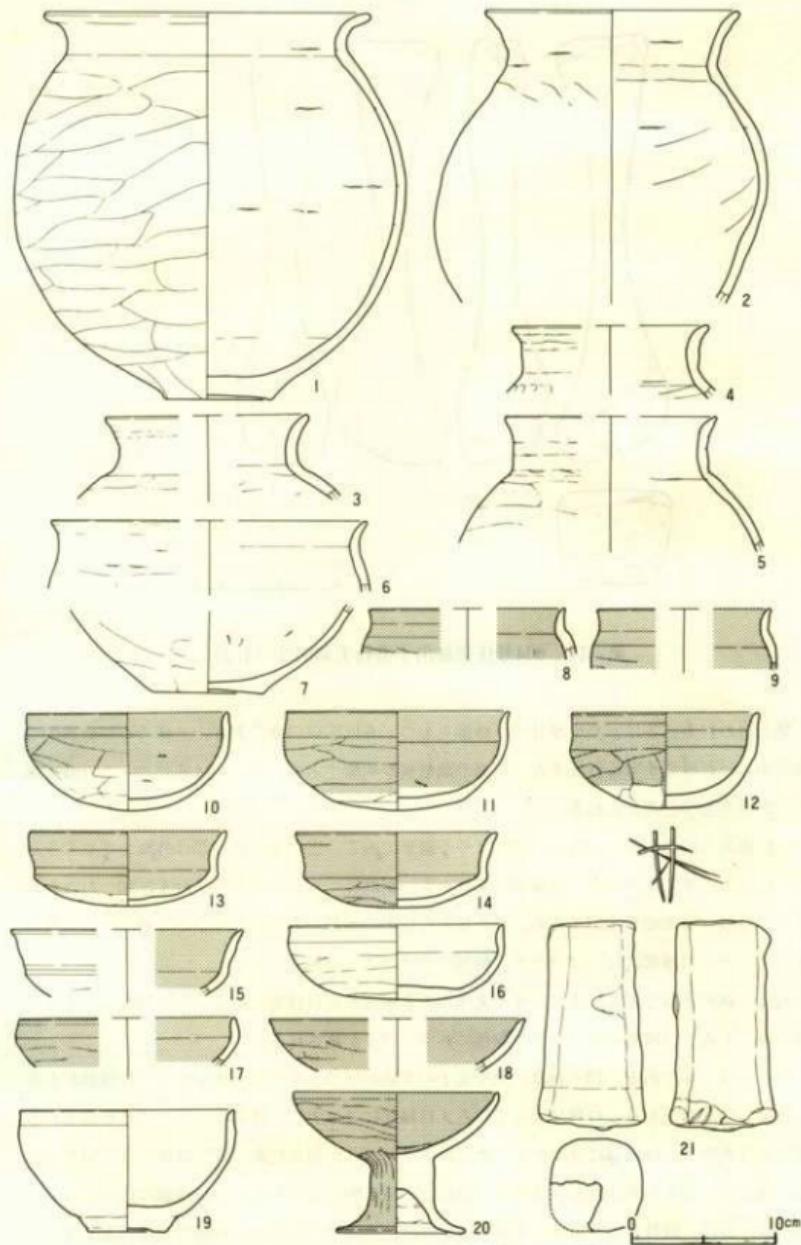
21は、土製支脚である。ほぼ円筒形でナテ調整が施される。

22は、砥石である。方柱形であるが、中央部の使用が著しく、バチ状になる。

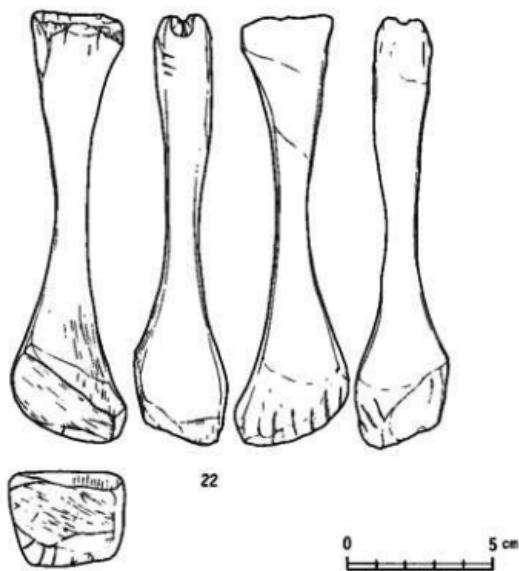
005号住居跡（第25・26図・表6・図版17・18）

住居跡の遺存は良く、遺物の出土量も多い。坏片は、赤彩されたものが多い。

1～8は甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は、やや厚目の底部に、丸味のある玉子形の胴部をもつ。口縁部はほぼ直立し、上部で外反する。口唇はやや薄くなる。2は、ほぼ球形の胴部から、口縁部が外反して、ラッパ状に開く。口縁部と胴部との接合部の内外面に、指頭によると思われる調整痕がみられる。3は、丸味のある胴部から、口縁部がゆるやかに外反して立ち上がる。口唇は丸い。4、5は口縁部である。4は、1と同形



第23図 004号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



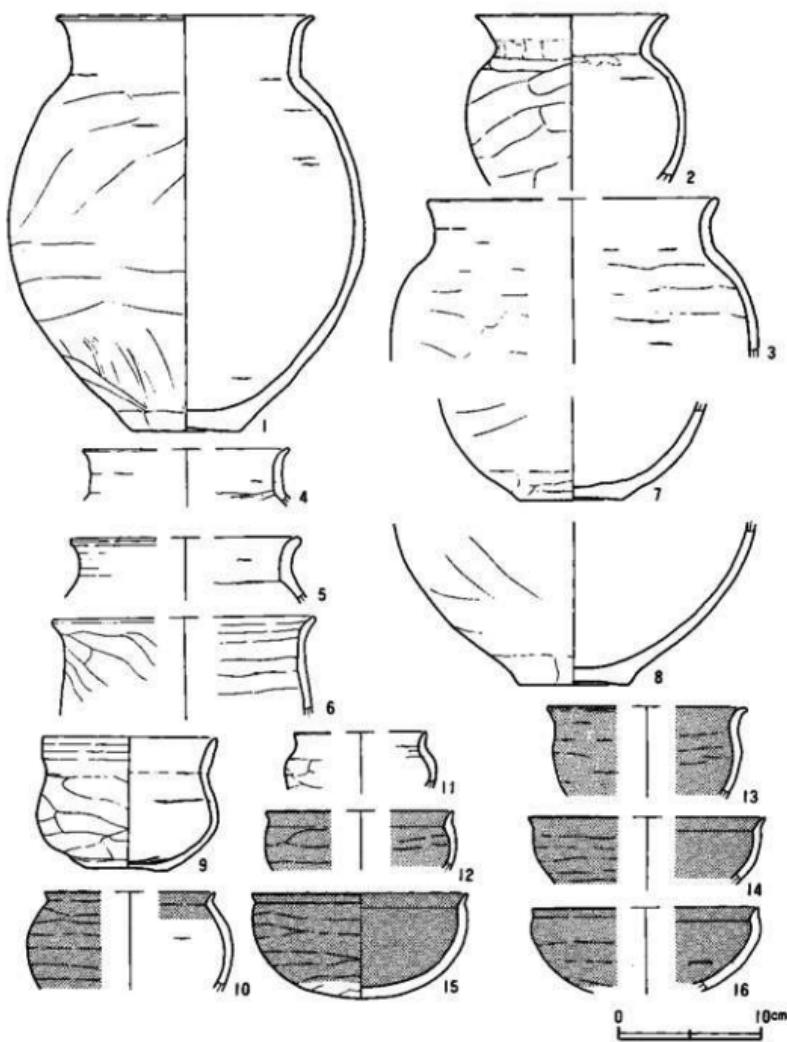
第24図 004号住居跡出土遺物実測図(2) (1/2)

の表と思われる。5は、やや厚目の口縁部をもつ。6は広口の表である。丸味のない直線的な胴部から、口縁部が短く外反する。内面の調整痕が明瞭である。7、8は底部である。ほぼ球形の胴部をもつと考えられる。

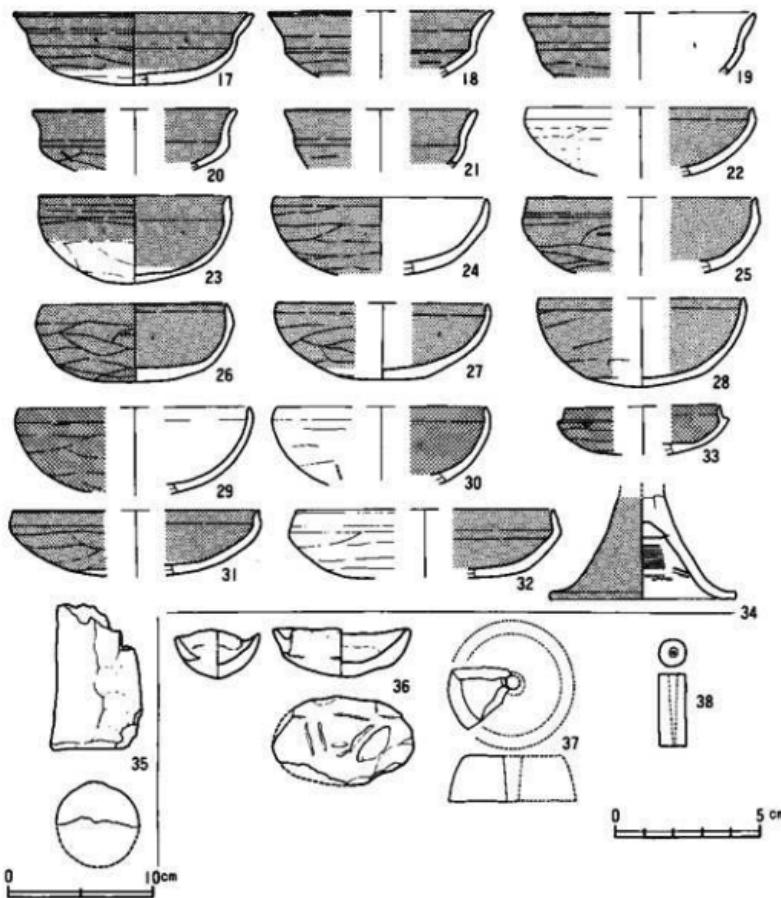
9は、壺形土器である。平底で、胴部はやや扁平である。広口で、口縁部は外傾して立ち上がり、口唇は尖り気味である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。10、11は短頸壺、12は、短頸壺形土器である。やや扁平な球形の胴部から口縁部が小さく外反し、口唇は尖っている。口縁部には、ヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。

12は、体形土器である。広口でやや丸味のある胴部から口縁部がゆるやかに外反し、上部で強く外反する。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。

13~33は、壺である。13~16は、やや深手の丸底の壺で、半球形の体部から、口縁部が小さく外反して立ち上がり、口唇は尖っている。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。17~32は丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。17~21は、ほぼ同形である。体部の立ち上がりは低く、体部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は広がって立ち上がる。17は、口唇が尖り気味である。22~28は、半球形の体部から口縁部がほぼ直立するが、やや内側して立ち上がる。23、25は、上部で小さく外反する。22、24、26~28は、口縁部の立



第25図 005号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第26図 005号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4・1/2)

ち上がりは、内縁気味である。22、24、26は、口唇が尖り気味である。29、30は、やや深手で、口縁部がやや内側して小さく立ち上がる。31、32は扁平な环である。体部と口縁部との境の棱が明瞭で、口縁は内傾して立ち上がる。31は、口唇がわずかに外反し、尖り気味である。33は、受部をもった环である。口縁部は内傾して立ち上がり、口縁は真上を向く。

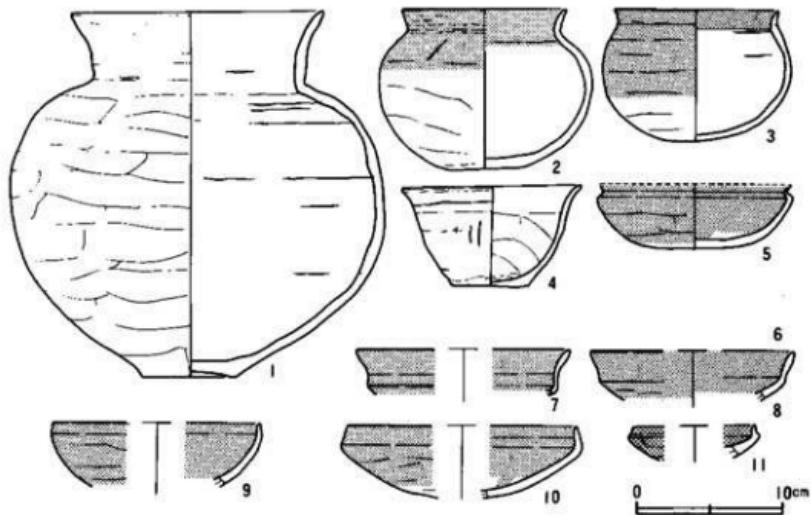
34は、高环の脚部である。裾部がラッパ状に大きく開く。内面に横状の調整痕がみられる。

35は、土製支脚である。ほぼ円筒形で、ナデ調整が施される。36は、手捏土器である。平面形が橢円形で船形を示す。37は、石製紡錘車である。扁平な截頭円錐形で、片側穿孔である。38は碧玉製管玉である。片面穿孔である。

006号住居跡（第27図・表7・図版18）

1は壺である。底部は小さく、胴部はやや扁平な球形である。口縁部は直立し、上部で外反する。口唇は尖り気味である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。2、3は、短頸壺形土器である。2は、平底に近い丸底で、胴部は扁平な球形である。口縁部は短く外反する。3は、丸底で、胴部は扁平な球形である。口縁部は短く、小さく外反する。口唇は尖り気味である。2に比べて口縁部のしまりがない。2、3とも口縁部にヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ナデが施される。4は、小型鉢形土器である。平底で、ゆるやかな丸味のある胴部からそのまま口縁部に至る。口縁部はやや大きく外反する。口縁部にヨコナデ、胴部はヘラケズリの後にナデが施される。

5～11は、壺である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。5は、受部をもち、扁平な半球形の体部から、口縁部が小さく、短く外反する。6は、受部をもち、口縁部は内傾して立ち上がり、上部で外反する。口縁部上部がやや厚くなる。7、8は、体部と口縁部との境に棱をもち、口縁部は外反して立ち上がる。口縁部中部が厚くなり、口唇は尖り気味である。9は、半球形の体部から口縁部が短く直立し、口唇がわずかに外反する。体部と口縁部との境の棱はやや不明瞭である。10は、やや直線的な体部から口縁部が内傾して立ち上がり、口唇は、わずかに外反して、尖り気味である。11は、小型で受部をもつ。口縁部が短く直立し、口唇は尖り気味である。



第27図 006号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

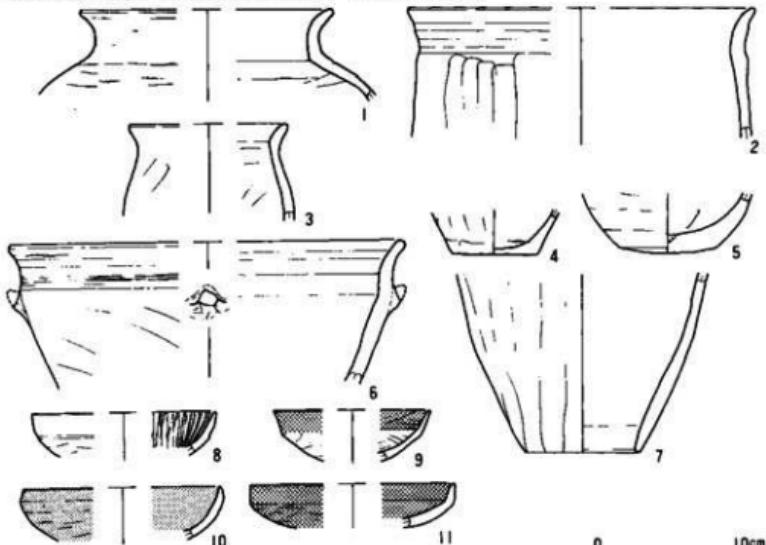
007-A・B号住居跡（第28図・表8）

住居跡は重複しており、攪乱をうけている。遺物量は少ないが、細片が多い。环は赤彩されたものが多い。

1～5は、甕である。1は球形の胴部をもつと思われる。口縁部はやや短く外反し、口唇は丸い。2、3は広口の甕である。2は、胴部の丸味はなく、口縁部は短く外反する。口縁部がやや厚くなり、口唇は尖り気味である。3は小型で、胴部はやや丸味をもち、口縁部がわずかにしまり、短く外反する。口唇は丸い。4、5は底部である。4はやや小型で、器壁が薄い。5は器壁が厚く、丸底である。

6、7は鉢である。6は、鉢型を示し、広口で、胴部と口縁部との境に棱をもつ。口縁部は短く外反し、口唇は丸い。口縁部と胴部との境に把手をもつ。7は、底部である。鉢形の底を取りた形である。

8～11は、環である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。8は、体部と口縁部との境に小さな段をもつ。口縁部は外傾して立ち上がり、内脣しながら口唇に至る。口唇は小さく外反し、尖り気味である。内面に放射状のヘラ磨きが施される。9は、体部と口縁部との境に棱をもち、口縁部は外傾して立ち上がり、口唇が小さく外反する。10は、やや扁平な半球形の体部から口縁部がほぼ直立し、口唇は尖り気味である。11は、扁平な環である。口縁部は直立し、口唇はわずかに外反し、尖り気味である。



第28図 007号住居跡出土遺物実測図（1/4）

008号住居跡（第29・30図・表9・図版18～20）

住居跡の遺存は良くない。遺物の出土量は多く、环は赤彩されたものが多い。

1～9は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は、底部が短く突出し、厚い。胴部はやや縱長の球形で、口縁部は外傾して立ち上がり、上部で短く外反し、口唇は丸い。2は、底部が短く突出し、胴部は、下部がやすぼまった球形である。口縁部はほぼ直立し、上部が短く外反する。口唇は丸い。3は、底部が短く突出してやや厚く、胴部はやや下張れの球形である。口縁部はゆるやかに外反して立ち上がり、口唇に至る。口唇は丸い。4は、ほぼ球形と思われる胴部から口縁部が大きく外反する。口唇は丸い。胴部と口縁部との境に明瞭な段をもつ。5も、4と同様に口縁部が大きく外反する。胴部と口縁部との境はやや不明瞭である。6は、やや広口の甕である。胴部の丸味はあまりなく、口縁部は短く直立し、上部で小さく外反する。口唇は尖り気味である。7は、ほぼ球形と思われる胴部から、口縁部が外傾して、直線的に立ち上がる。口縁部の立ち上がりはやや高く、口唇が小さく外反する。8、9は、底部である。9は、小さな底部から胴部がほぼ球形に立ち上がる。

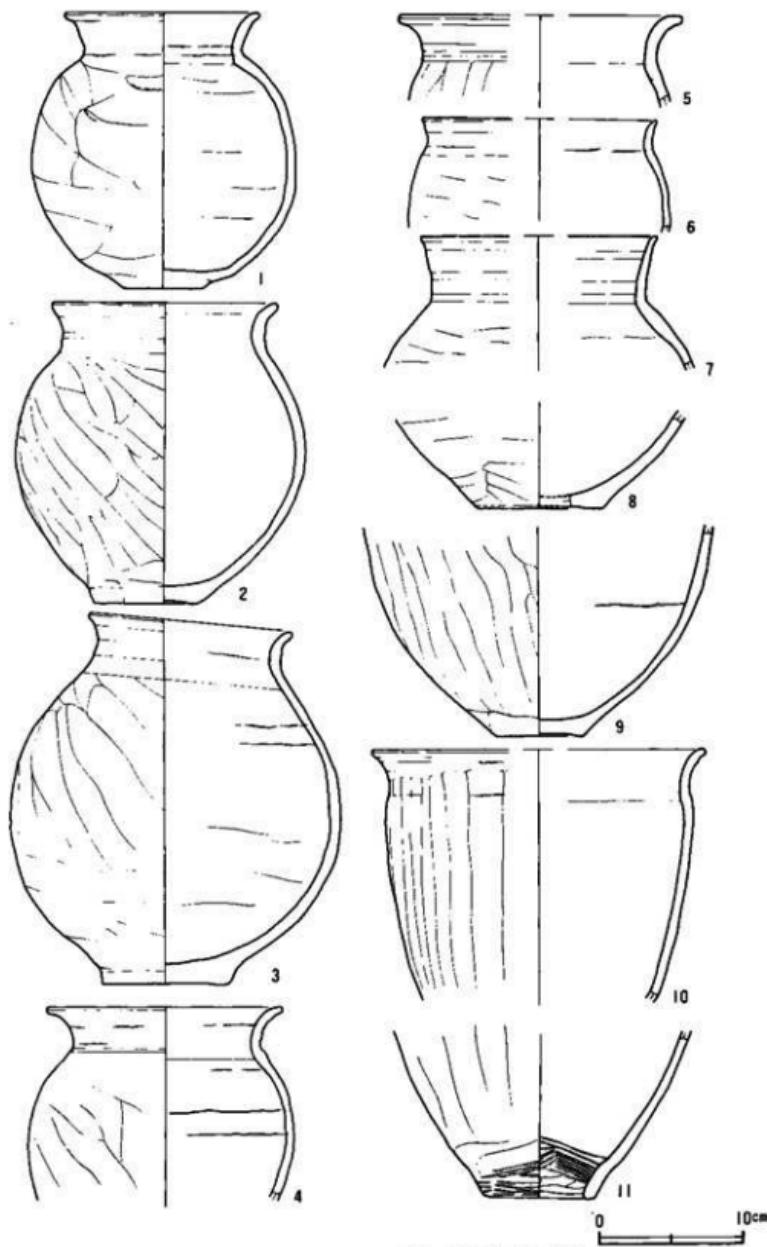
10、11は、瓶である。10は、底部を欠くため、鉢の可能性もある。広口の鉢型で、胴部と口縁部との境がわずかにくびれる。胴部の丸味はあまりなく、底部に向ってすぼまる。口縁部はやや短く外反し、口唇は丸い。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。11は、底部である。下部がやや段状になり、内外面に彫刻状の調整痕がある。

12、13は、壺形土器である。12は、平底で、球形の胴部をもつ。胴部と口縁部との境がわずかにくびれている。口縁部が外傾して立ち上がり、口唇は小さくつまみ出された様になる。胴、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。13は、胴部である。丸底で、やや扁平な球形である。

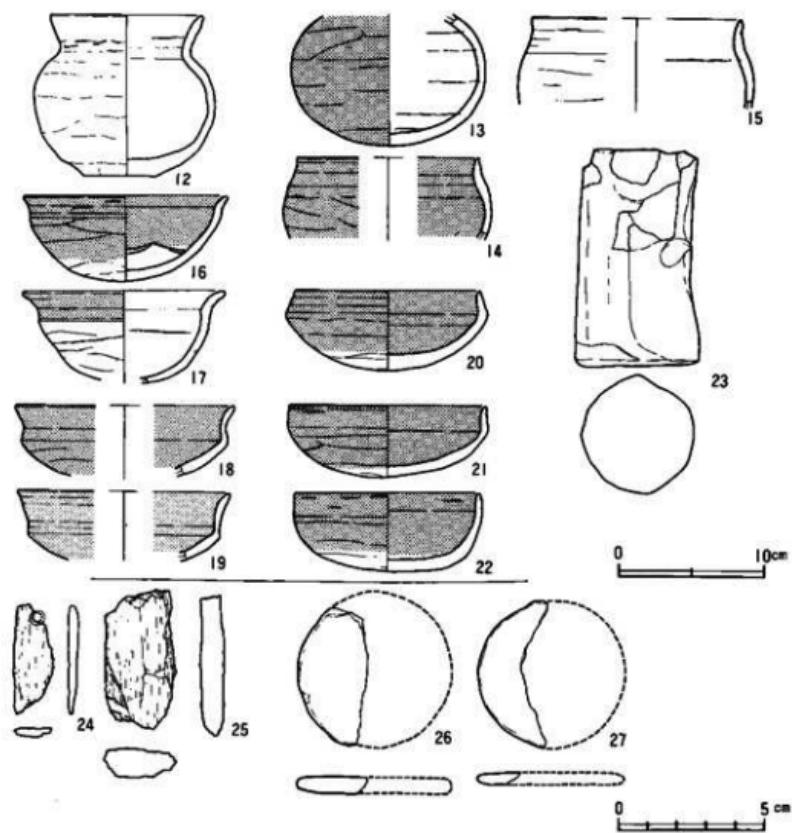
14、15は、短頸壺形土器である。半球形と思われる胴部から、口縁部が外傾して短く立ち上がる。口唇はほぼ真上を向き、広口である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。

16～22は、环である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。16、17は、やや扁平な半球形の体部から口縁部が大きく開いて外反する。体部と口縁部との境に稜をもつ。18、19は、扁平な体部から、口縁部が外反する。口唇は尖り気味である。胴部と口縁部との境に稜をもち、口縁部の立ち上がりが小さくくびれている。20は、扁平な半球形の体部から口縁部が内傾して立ち上がる。口唇は尖り気味である。体部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ。21、22は、扁平な半球形の体部から、口縁部がほぼ直立する。口唇は尖り気味である。21は口唇が小さく外反する。体部と口縁部との境に稜をもつ。

23は、土製支脚である。ほぼ円筒形で、表面にナデ調整が施される。24、25は、滑石片である。24は穿孔されている。石製品の未製品、原料と考えられるが、住居跡内からは、製品は出土し



第29図 008号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第30図 008号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4・1/2)

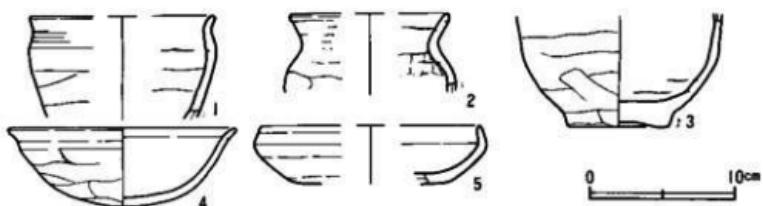
ていない。26,27は、土製円板である。紡錘車とも考えられるが、中央部を欠くため孔があるかどうかは不明である。

009号住居跡（第31図・表10・図版20）

住居跡の遺存は良い。遺物は少量で、壺は赤彩されたものが多い。

1～3は、甕である。1、2は、やや小型である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は、広口で、胴部と口縁部との境に棱をもつ。口縁部は短く外反する。口唇は丸い。2は、ほぼ球形と思われる。胴部から口縁部が外傾して立ち上がり、口唇に至る。口唇は丸い。3は、底部である。やや縦長と思われる胴部から底部が短く突出する。底部は厚い。

4、5は、環である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。4は、やや扁平な半球形の体部から口縁部が外反する。体部と口縁部との境の棱はやや不明瞭である。5は扁平の環で、体部と口縁部との境に棱をもつ。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇は尖り気味である。



第31図 009号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

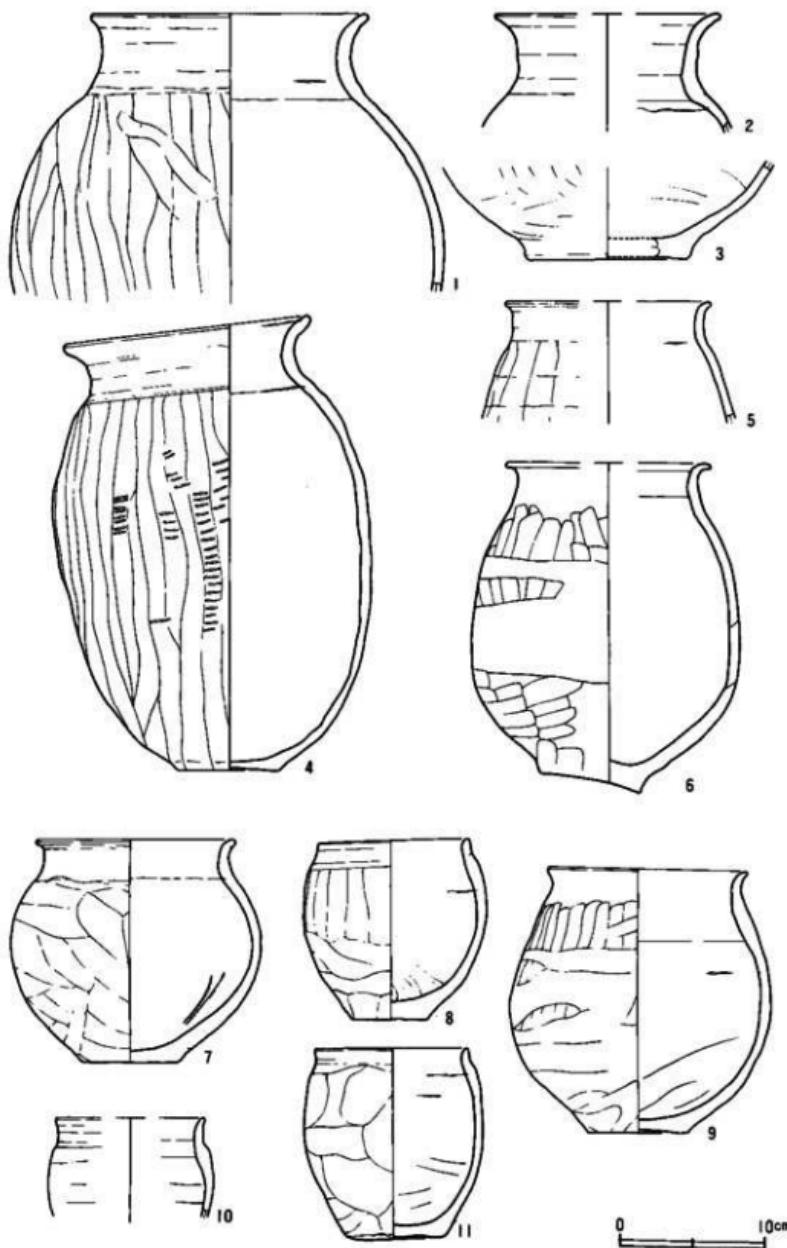
010号住居跡 (第32、33図・表11・図版20~22)

住居跡の遺存は良いが、遺物は少量である。環は赤彩されたものが多い。

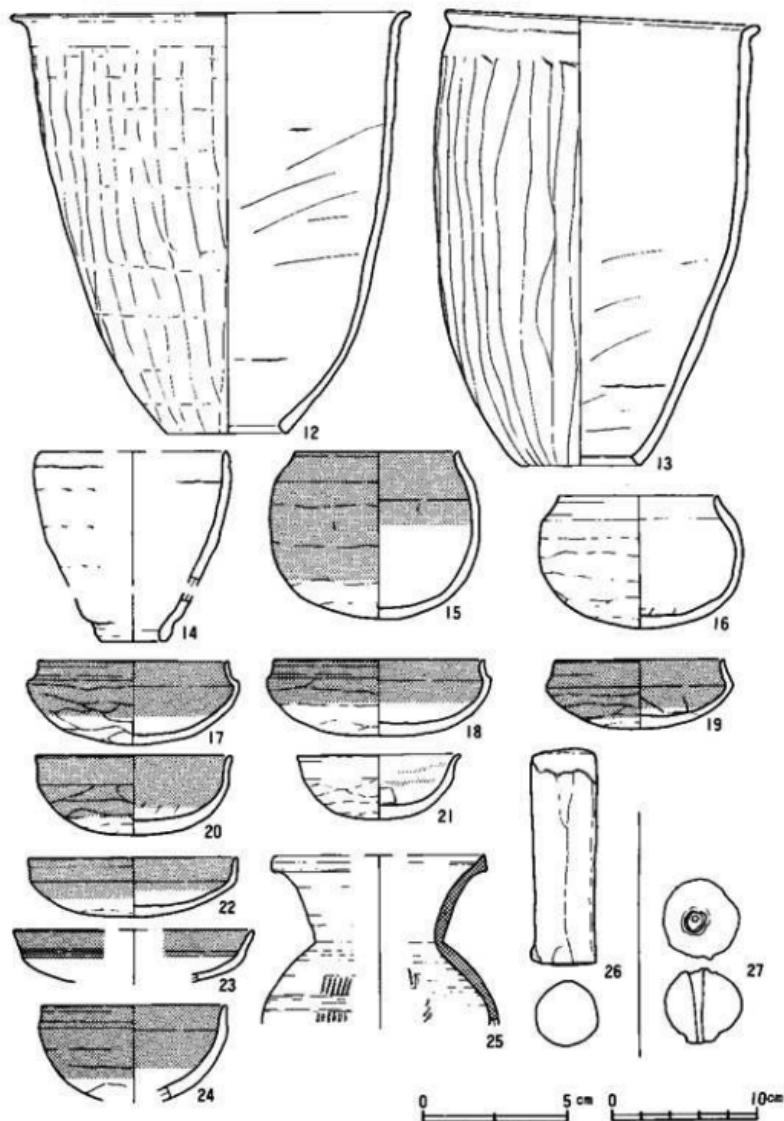
1~11は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は、ほぼ球形の胴部から口縁部が大きく外反して、立ち上がりが高い。3は、球形の胴部をもつ甕の底部と考えられる。やや厚目の底部が短く突出する。4、5は、長胴の甕である。5は、胴部下半を欠くが、4と同形と思われる。底部がやや薄く丸味のある縦長の胴部をもち、胴部と口縁部との境に棱をもつ。口縁部は強く外反し、口唇は丸い。胴部外面にヘラケズリの工具がはねた様な刻み目が残る。5は、胴部と口縁部との境が段状になる。口縁部は直立し、上部で小さく外反する。口唇は丸い。6は、下脹れの縦長の胴部から口縁部が外反する。8、11は、小型である。胴部はやや縦長の球形で胴部と口縁部との境に棱をもつ。口縁部は内傾して立ち上がり、外反しながらほぼ真上を向く。口唇は丸い。7、9は、やや小型である。7は、やや扁平な球形の胴部から口縁部が短く直立し、上部で小さく外反する。口唇は丸い。9は、球形でやや下脹れの胴部から口縁部が小さく外反する。口縫はやや薄くなる。10は、小型である。ほぼ球形と思われる胴部から口縁部が直立する。口唇は小さく外反し、丸い。胴部と口縁部との境に段をもつ。

12~14は、瓶である。12~13は、やや長胴の深鉢形である。口縁は短く外反し、口唇は丸い。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。14は、やや小型の深鉢形である。胴部下位に段をもつ。口縁部は直立し、口唇はわずかに内側に尖り気味である。口縁部にヨコナデが施される。胴部にもナデによる調整が施されているが、接合部が明瞭に観察できる。

15~24は、土師器の环である。15、16は、丸底である。やや扁平な球形の体部から口縁部が内傾して立ち上がり、口唇は小さく外反する。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施されるが、ナデにより不明瞭である。15は、内外両面に赤彩が施される。17~24は、丸底で、体部



第32図 010号住居址出土遺物実測図(1) (1/4)



第33図 010号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4・1/2)

はゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。17、18は、体部から口縁部が内傾して立ち上がり、口唇は小さく外反する。体部と口縁部との境に明瞭な受部をもつ。19は、体部から口縁部が内傾して立ち上がり、口唇は小さく外反する。体部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ。20は、体部から口縁部が直立し、口唇は小さく外反する。21は、体部から口縁部が外傾して立ち上がり口唇は小さく外反する。22、23は、体部がやや扁平である。22は口縁部が直立し、口唇は小さく外反する。22は、口縁部が外傾して立ち上がり、直線的に口唇に至る。24は、ほぼ半球形の体部から口縁部が直立し、口唇は小さく外反する。17～20、22～24は、内外両面に赤彩が施される。21は、内面に部分的に赤彩が施される。25は、須恵器の甌である。口縁部がラッパ状に大きく外反し、口唇は断面が三角形で、縁帯状になる。口縁部にヨコナデ、胴部にタタキ目とヨコナデが施される。26は、土製支脚である円柱形でナデが施される。27は、土玉である。ほぼ球形で、成形時に片側から穿孔されている。

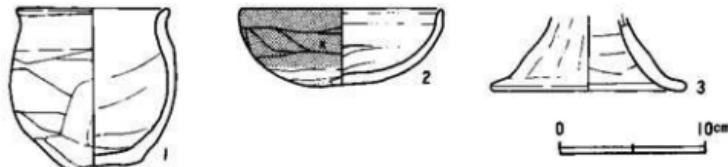
011号住居跡（第34図・表12・図版22）

住居跡のほとんどが区域外であるが、遺存は良い。遺物は少量である。

1は、小型の甌である。ほぼ球形の胴部から口縁部がゆるやかに外反して立ち上がる。口唇は強く外反し、丸い。胴部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。

2は、环である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。やや扁平で半球形の体部から口縁部が直立し、口唇が小さく外反する。口唇は尖り気味である。

3は、高环の脚部である。裾部がラッパ状に大きく開く。外面は、ヘラケズリの後にナデが施される。



第34図 011号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

(2) グリッド出土の遺物

石製模造品（第35図・図版22）

A 4-52グリッドより出土した石製模造品である。

ほぼ円形で最大径3.9cm、最小径3.56cm、

厚さ0.6cmを測る。片面には縦横に刷毛状の

整形痕を残す。穿孔は両面から丁寧に施され



第35図 グリッド出土遺物実測図（1/2）

ている。石質は滑石質である。

縄文式土器

本遺跡出土の縄文式土器は、住居跡覆土中および調査区全体の表土層から出土しているが、該当する時代の遺構、遺物包含層の確認はできなかった。

時代的には、縄文時代中期から後期の土器片であるが、後期のものが主体を占めている。

以下、特徴となる文様によって、分類をおこなうこととする。

第I群土器（第36図・1～6・図版23）

中期の阿玉台式土器を一括した。

1は、吸盤状突起を有し、突起の両裾に角押文が付される。胎土に雲母片が多く含まれる。

2、4、5は、断面が三角形を呈する隆帯をX字状に区画するものである。

3、6は、輪積み成形痕を器面上に残すものである。3は、山形状の突起を有し、各輪積帶下端に刻みを施している。6は、輪積みの間隔がせまく不整形な波状を呈する。

以上は、阿玉台式土器の中でも古式の部類に属するものである。

第II群土器（第36・37図・7～9・35・図版23・24）

中期後葉の加曾利E式に比定される土器を一括した。

7は、やや屈折する胴部破片である。縄文を地文として、屈折部以下に末広がりの沈線が施される。胎土に雲母片・石英粒が多く含まれる。

8は、口縁直下を無文帯として、微隆起線を有し、以下に縄文を施す。縄文はL.R.

9は、やや内寄する平縁の口縁部で、縄文を地文として、磨消懸垂文が施される。

繩文は、口縁直下で施文方向を変化させている。繩文はR.L.

35は、鉢形土器である。口縁部が欠失している。胴部中央で強く屈折し、その上方に隆線によって連続する渦巻文を施文している。器面は、ていねいに研磨されているが、遺存状態は良くない。

第Ⅲ群土器（第36図・17、18・図版23）

後期の壠之内式に比定される土器を一括した。

17は、縄文を施文として、竹管による平行沈線を横方向に施文している。沈線より上はていねいに研磨されている。原体はR L。

18は、横走する隆帯上に、縄文原体を押し付けている。原体はR L。隆帯の上下はヘラ状工具による整形痕がのこる。

第Ⅳ群土器（第36図・10～16・19・21～24・26・29・図版23）

後期の加曾利B式に比定される土器を一括した。

14、22、26は、磨消縄文と、沈線によって文様が構成される精製土器である。沈線は、平行、弧状、入組状となる。いずれも、無文部は良く研磨されている。

10は、胴部が強く屈曲する土器で、沈線の交差部には、円形の刺突文が付される。磨消縄文が施され、無文部はよく研磨され光沢がある。屈曲部下位は斜めに条線が加えられる。

13は、沈線によって区画された口縁部に格子状の条線が施される精製土器である。

21は、頸部が「く」字状に屈曲する土器で、屈曲部以下全体に縄文が施される。原体はL Rである。

11、12、15、16、19は、押捺のある紐線文で特徴づけられる土器である。11、12は、同一個体である。口縁部と胴部上位に紐線文を配し、縄文を地文として、地文上に条線が施される。15、16は、条線が太く粗めに施される。19は、紐線直下から条線のみが施文される。紐線上の押捺の間隔がつまる。

29は、胴部下半～底部破片である。縄文を地文として、条線が施されている。11、12、15、16、29の縄文原体はL Rである。

23、24は、条線が主文様となる。23は、横方向の沈線の下位に、縦方向の浅い条線を施す。24は、太い条線を粗く施している。

以上のうち14、22、26は、加曾利B I式、他は、加曾利B II式に相当するものである。

第Ⅴ群土器（第36・37図・25・27・28・30～34・36・図版23・24）

本群では、後期後葉の安行I式から晩期に比定される土器を一括した。

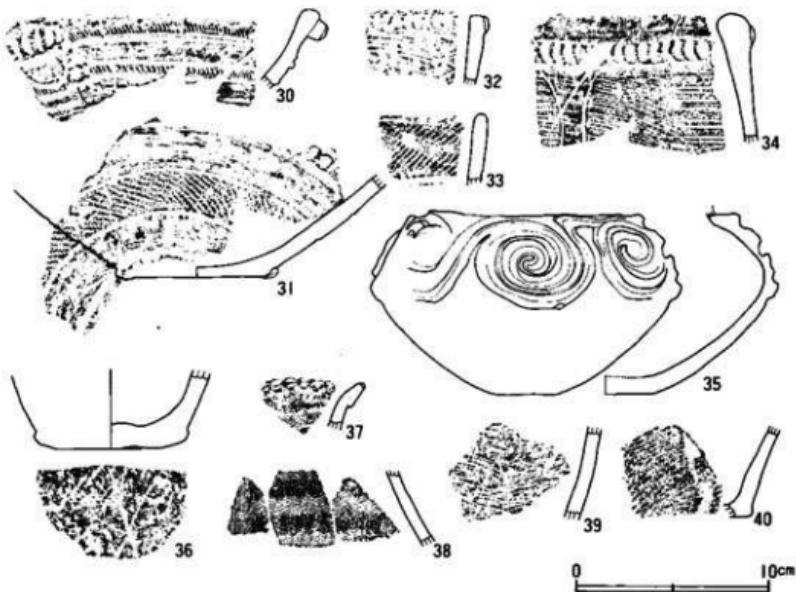
25、28、32、34は、条線文を主として押捺のある紐線が付されたものである。25は、条線の間隔があき、紐線も、わずかに盛り上げてあるのみである。32は、口縁部、34は、肥厚した口唇部に紐線が付される。条線間に弧状の沈線が加えられる。

27は、磨消縄文を弧状の沈線で区画し、下端に豚鼻状に刺突を加えている。

30、31は、浅鉢形土器である。口縁部と胴部下半に分断されているが、同一個体となるもの



第36図 土器拓影図(1) (1/3)



第37図 土器実測・拓影図(2) (1/3)

である。口縁部は、刻目のある小突起と沈線で区画された隆帯、豚鼻状突起を付される。隆帯上は、連続刻目文が施される。胴下半部は、沈線で縄文帯を区画し、連続刻目を施した隆帯上に豚鼻状小突起が付される。全体に沈線間はよく研磨され、光沢をおびる。

33は、直立ぎみの平縁の口縁部。口唇直下より縄文が施され、下端を太い沈線が横走する。

V群に含めた土器は、以上であるが、25、28、32は安行I式、27、30、31、34は安行II式、33は姥山II式にそれぞれ相当するであろう。

なお、36は、木葉痕のある土器底部である。胴部下端との境で、くびれて立ち上がる。時期不詳である。

弥生式土器（第37図・37～40・図版24）

遺構覆土中、表土中より、わずかであるが弥生式土器が出土している。いずれも弥生時代後期に含まれるものである。

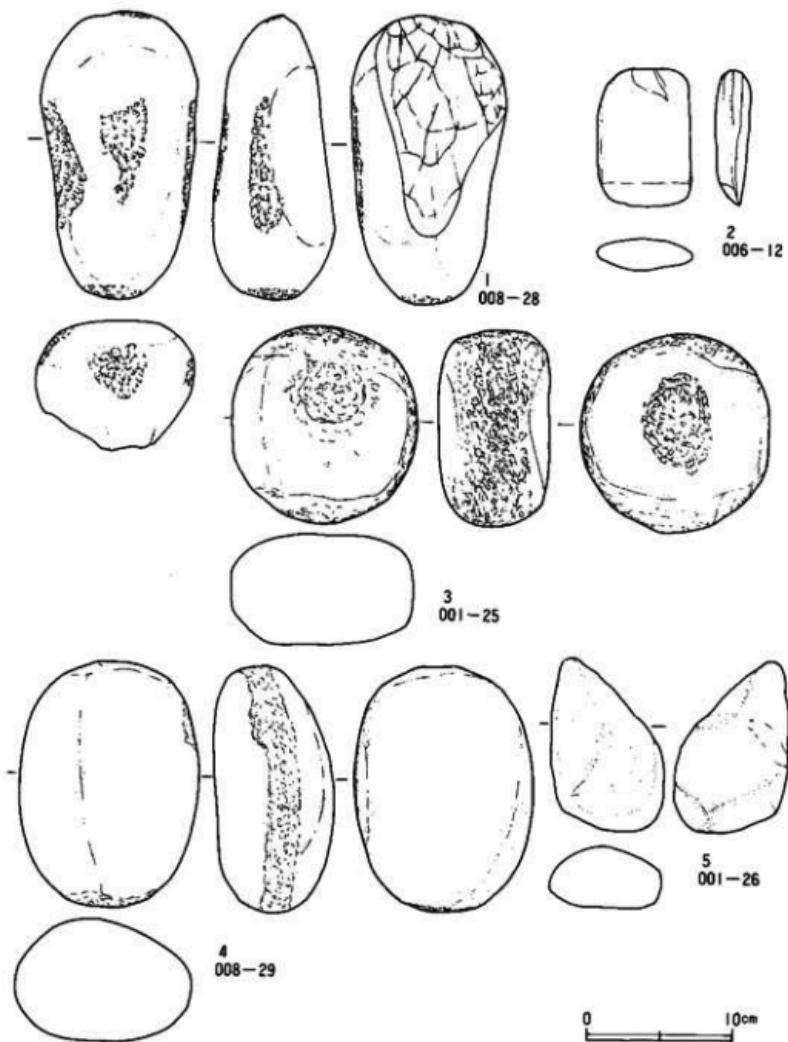
37、38は、櫛描文の施された土器片である。37は、複合口縁部で口唇部に横方向二列の刻目、口縁下に櫛描文が施される。38は、頸部にあたるものか、37と同一個体である。

39は、付加条縄文をまばらに施した胴部破片。

40は、底部～胴部下端に相当する。底部端まで縄文が施される。

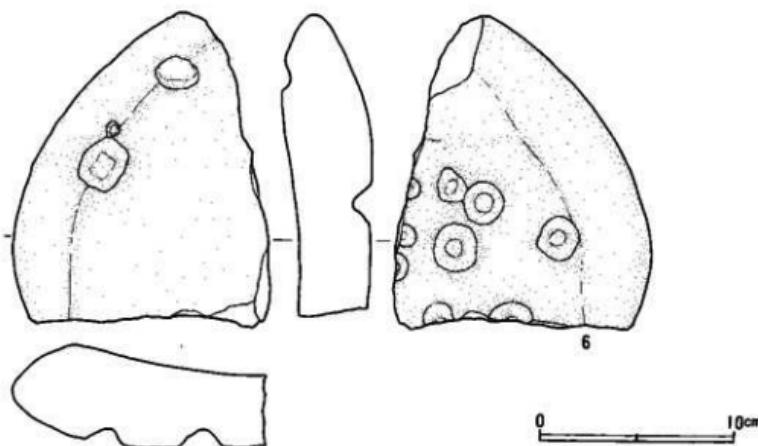
石 器 (第38・39図 表13・図版25)

ここに述べる石器は、すべて縄文時代の石器と思われる。住居跡からの出土が多いが、住居との帰属関係がないと考えられるので、一括して説明する。



第38図 石器実測図 (1/2)

1、3、4は、叩石である。1は、ややゆがんだ玉子形の河原石を使用し、凸面に叩き跡が4ヶ所みられる。1はほど欠損しているが、叩きのために欠損したとも考えられる。3は、厚手の円板形で、側面および上下両面に叩き跡がある。また形状から、意識的に円板状に磨耗した可能性もある。4は、やや扁平な玉子形で、側面全体に叩き跡がある。3、4は、磨石としても使用されている。5は磨石である。全面がかなり磨耗している。2は、磨製石斧である。扁平な河原石を磨いて成形したと考えられる。長方形のノミ形で、片刃である。6は、石皿片である。円形に磨耗した跡が上面に2ヶ所、下面に9ヶ所みられる。



第39図 石器実測図 (1/3)

第3章 小池地蔵遺跡

第1項 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

小池地蔵遺跡は、昭和54年8月1日に着手し9月30日に終了した。調査対象地は、道路敷地内に限られたため20m毎の道路中心杭を基準にグリッドを設定した。グリッドは、道路中心杭の両側10mと中心杭間の20×20mを大グリッドとし、道路北側からA3～A10までを付した。大グリッドの中を第40図の如く2×2mの小グリッドに設定し、西北から東へ00～09、北西から南西へ00～90と付し、99までのグリッドを使用した。

発掘調査は、道路中心線、道路両側面にグリッドに並行する3本の2m幅のトレンチを設定して、遺構、遺物を検出した。遺跡の性格を把握した後、確認調査に基づき全面の表土を剥ぎ遺構の精査を行った。上層遺構の調査後、先土器時代の確認を2×2mのグリッドで武藏野ローム上層まで掘り下げ確認して、航空写真を撮影した。

実測は平板測量を基本とし、一部遺り方測量を採用した。遺構の番号は精査の着手順に付し整理作業においても踏襲した。写真は4×5、6×7、35mmの白黒と35mmのカラースライドを撮影した。遺物は遺構検出面より上をグリッド名で取上げ、整理時に遺構出土の遺物と接合した。また、この大グリッドは道路建設予定地中心杭 No306 公共座標X=-34,051,880、Y=52,551,767とA3-05が、中心杭 No310 公共座標X=34,121,346、Y=52,591,447とA7-05が、中心杭 No314 公共座標X=-34,190,812、Y=52,531,126とA11-05が対応する。

(2) 土 層 (第40図)

芝山町市街地より南西に延びる幅200mの広い台地基部中央で、A8-28グリッド地点の土層である。標高は40mを測る。

I層……耕作土 漆黒色を呈する。

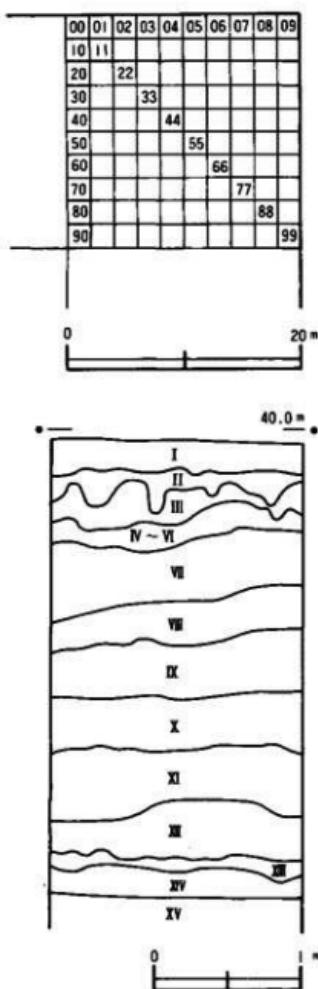
II層……暗褐色土

III層……立川ローム層 いわゆるソフトローム層で黄褐色を呈する。

IV～VI層……立川ローム層 橙褐色を呈し、クラック帯が発達する。火山ガラスを含む。

VII層……立川ローム層 暗褐色を呈する。第二次黑色帯に比定できる。黒色粒がごく少量散在する。

VIII層……立川ローム層 硬質茶褐色ロームで立川最下層である。スコリアを多く含む。白色



第40図 グリッド分割図・上層図

(4) 調査の概要

本遺跡において検出された住居跡は、総数23軒を数える。時期的には古墳時代後期から奈良平安時代にわたっている。遺構の分布状況は、調査区の南端を東西に走る県道わきから、中央部で密度の濃い状況を呈しており、北側では散在的となる。標高40mを測る等高線の平坦部にまとまる傾向を示している。

粒黒色粒を少量含む。

IX層………武藏野ローム層 暗茶褐色で硬質、粘性
あり。

X層………武藏野ローム層 暗茶褐色粒子状で粘質
土、黒色の小石を含む。

XI層………武藏野ローム層 暗茶褐色で硬質、粘性
がある。

XII層………武藏野ローム層 暗茶褐色で粘質がある。

XIII層………武藏野ローム層 硬質明茶色土、よくし
まり粘性なし

XIV層………武藏野ローム層 黄色砂層、スコリアを
含む。

XV層………下末吉ローム層 茶褐色、粘性が強い。

(3) 調査の経過

発掘調査は、昭和54年8月1日から10月30日まで実施した。

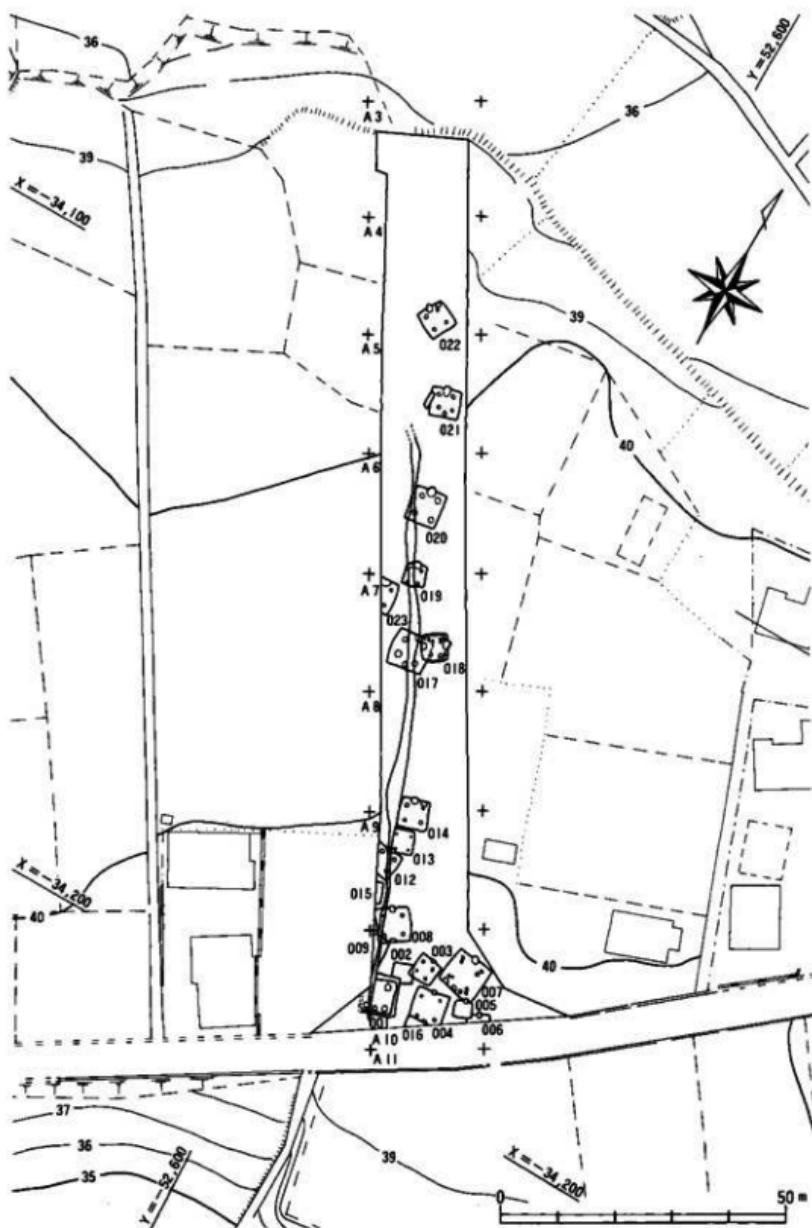
8月1日～ 現場設営、環境整備、グリッド設定、
トレンチ掘り、A1・2区の草刈り。

8月8日～8月27日 A10区からA1区へトレンチ
掘り。

8月23日～8月27日 表土剥ぎ、遺構の確認。

8月29日～9月30日 遺構の精査、住居跡の精査

9月14日～9月30日 先土器時代の確認、航空写真
撮影、器材、器具の撤収。



第41図 小池地蔵遺跡造構分布図 (1/1,000)

第2項 遺構

001号住居跡（第42・43図・図版27）

本住居跡は、調査区南側A10区の県道との交差点付近に位置する。002号住居跡と北隅で重複関係にあり、本跡の方が新しいことが確認されている。カマド西側から南壁中央付近にかけて、後世の溝状遺構によって搅乱を受け、さらに、西壁側は、調査区域外にのびている。遺構確認面は、ローム層上面であるが、耕作等による削平を受けているため、壁もわずかに検出されたにすぎない。

平面形は方形を呈する。規模は、東壁で6.70mを測る。主軸方位は、N-12.5°-Wとなる。床面は、全体に軟質で、起伏が認められる。壁の立ち上がりは、わずかで、高さ10cm前後を測る。壁溝は、カマド内をのぞく他は、全体で検出されている。幅20~15cm、深さ10~5cmを測る。また、床面精査の段階で住居跡のやや内側にもう一つの周溝がめぐることが確認されている。範囲は東側で5.75mを測り、幅20cm前後、深さ10~5cmを測る。ピットは、6ヶ所より検出されている。主柱穴は住居の対角線上に配される。P₃、P₄、P₅である。それぞれ二段の掘り込みを持ち、径114~108cm、深さ82~55cmを測る。概して住居の内側に向く方が浅い掘り方となっている。P₁、P₂はカマド両脇に接しており、その性格は判然としない。梢円形を呈し、径68~62cm、深さ35cmを測る。P₆は南壁側中央寄りに位置する。入口部に付設されたものであろうか。径84cm、深さ38cmを測る。

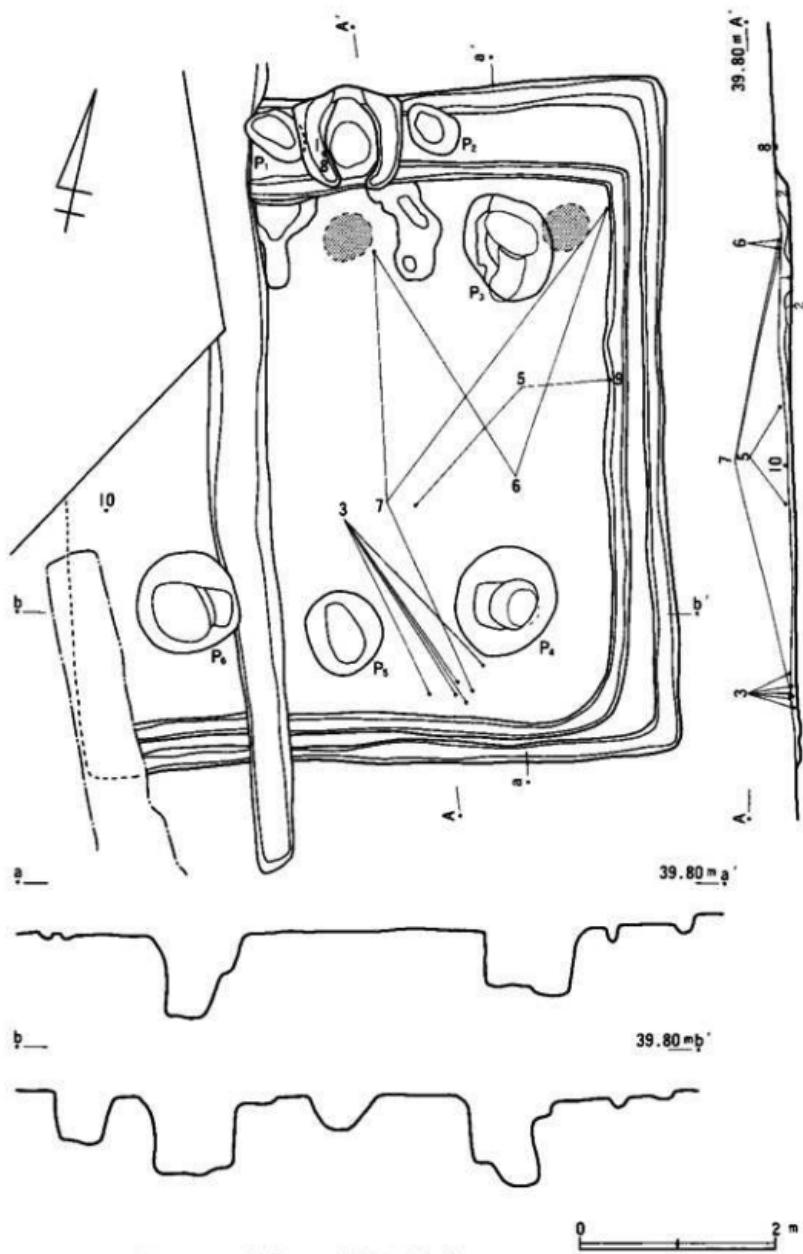
カマドは、北壁側で新旧2基が確認されている。新カマドは北壁に接し、灰白色粘土を主材として構築されている。上面を削平されているため遺存は悪い。袖は茶褐色土を基礎として弓状に弯曲して造り出されており、長さ102cm~94、幅40~20cmを測る。掘り方の壁外への張り出しあは大きくない。旧カマドは、住居内側めぐる周溝に接しており、火床部掘り込みと袖状に掘り込まれた浅い掘り方が確認されただけである。この旧カマドの存在と二重にめぐる周溝、主柱穴の掘り方の状況から、本住居跡において建て替えによる拡張がおこなわれたものと考えられる。

遺物は、P₄側にやまとまつてはいるが分散した出土状態で、量的にも少ない。床面に接した状態で出土した遺物はない。

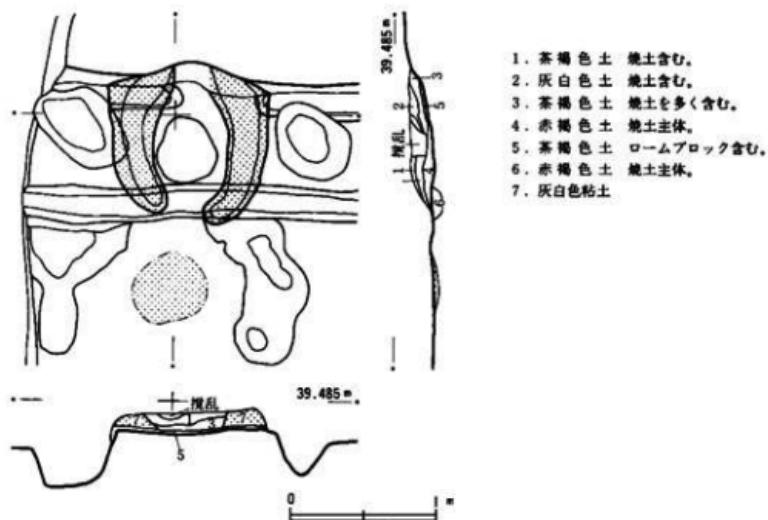
覆土は、2層に区分された。暗褐色土が主体である。

002号住居跡（第44図・図版27）

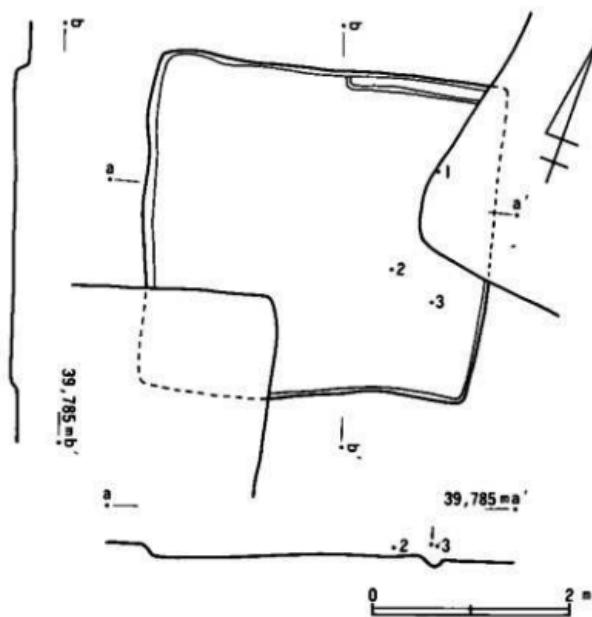
本住居跡は、調査区南側A10区の県道寄りに位置する。南隅を001号住居跡に、北東側を003号住居跡にそれぞれ切られている。また、001号住居跡と同様に、上面を耕作により削平されているため、壁の遺存状態は良くない。



第42図 001号住居跡実測図 (1/60)



第43図 001号住居跡カマド実測図 (1/40)



第44図 002号住居跡実測図 (1/60)

平面形は、ほぼ方形を呈するが、東西方向に、わずかに長くなっている。規模は、住居の中央で直交するラインで、南北3.30m、東西3.52mを測る。カマドはない。床面は、全体に軟質であり、起伏は少ない。壁高は10~4cmを測る。周溝は、北壁側で一部検出されている。幅12~10cm、深さ5cm前後を測る。ピットは、検出されていない。

遺物は、東側001号住居跡寄りで出土しているが、量的には少ない。001号住居跡との関係で、一部本住居跡に伴わない遺物も含まれるようである。

覆土は、暗褐色土主体の単層である。

003号住居跡（第45、46図・図版28）

本住居跡は、調査区南側A10区の県道付近に位置している。南西側で002号住居跡と重複している。また、東側では、004号住居跡、007号住居跡に近接している。

平面形は、南隅で外側に張るが、ほぼ方形を呈する。規模は、4.20×4.12mを測る。主軸方位は、N-15°-Eとなる。床面は、全体に平坦で、堅緻である。壁はわずかに傾斜して立ち上がる。上面を耕作により削平されてしまっているが、遺存状態は良い方である。南隅は、イモ穴によって切られている。確認面からの深さは、20~10cmを測る。周溝は、カマド下を除いて全体に巡らされてたと考えられるが、南側で不明確になっている。幅20~10前後、深さ5cm前後を測る。ピットは4ヶ所で検出されている。住居跡のはば対角線上に配されており、主柱穴となる。径50~41cm、深さ63~42cmを測る。

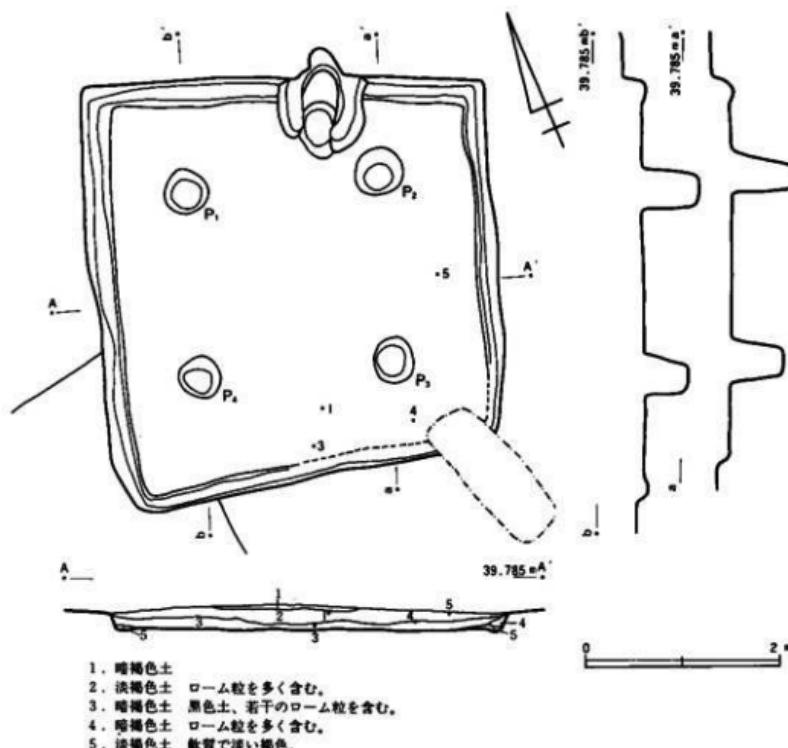
カマドは、北壁中央よりやや東側に付設されている。天井部は崩落しているが、煙出しがから袖部の遺存状態は、良好である。火床部掘り込みは、橢円形を呈し、径55×42cmを測る。煙道から煙出しが口の壁外堀り込みは、有段となり、灰白色粘土が充填されている。壁外への張り出し部は一坦くびれて、煙出しが部を丸く造り出すような工夫が認められる。

遺物の出土量は全体に少ない。カマドの右脇より壺と支脚が出土した他は、住居の南側に散在している。

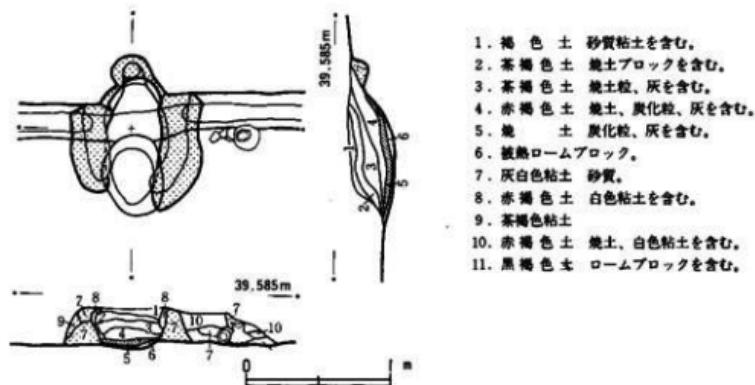
覆土は、6層に区分できたが、主体は暗褐色土である。いわゆるレンズ状堆積を呈している。

004号住居跡（第47、48図・図版29）

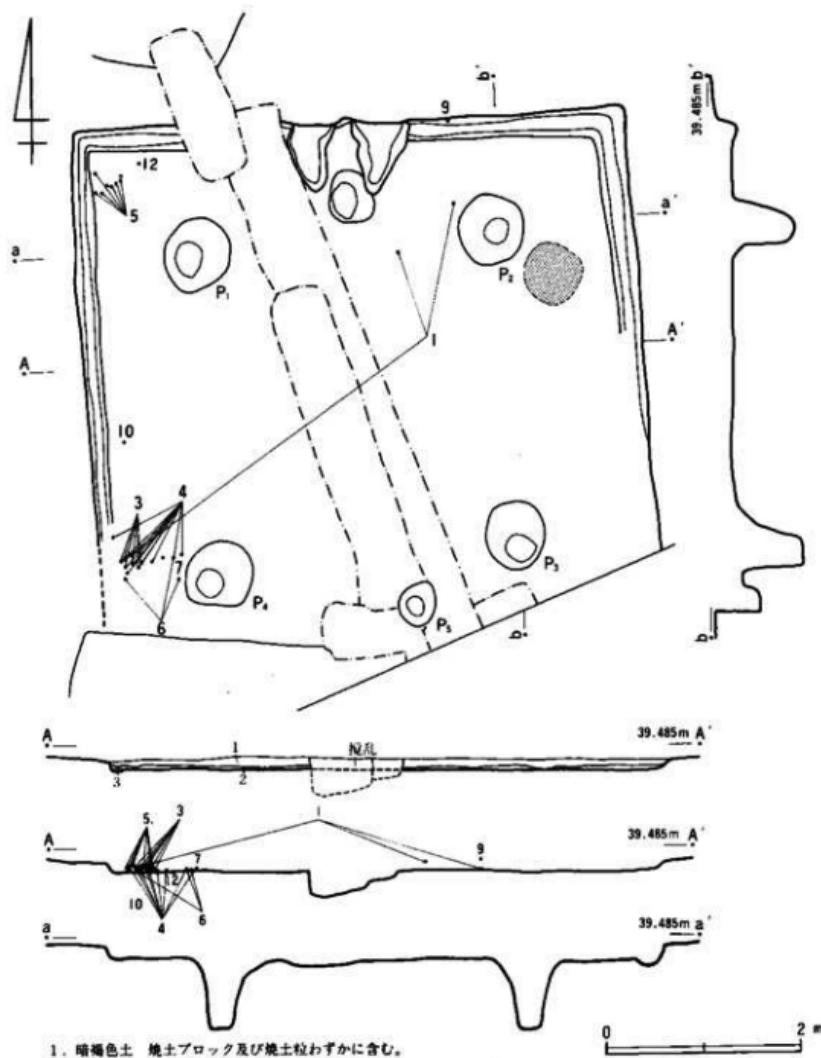
本住居跡は、調査区南側A10区の県道付近に位置する。南側は、016号住居跡と重複関係にあり、また、南側の一部は調査区外の県道下にのび、さらに、住居跡を北西から南東方向に斜めに継続して耕作時の擾乱穴が入り込んでいるため、住居跡全体の遺存状態はあまりよくない。016号住居跡との新旧関係は、上面を耕作により削平されているため、不明である。



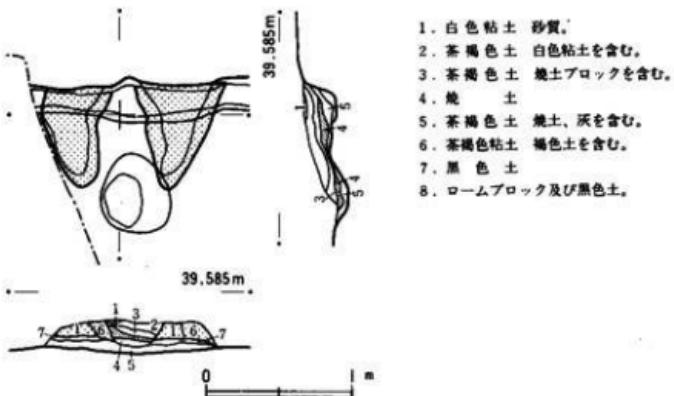
第45図 003号住居跡実測図 (1/60)



第46図 003号住居跡カマド実測図 (1/40)



第47図 004号住居跡実測図 (1/60)



第48図 004号住居跡カマド実測図 (1/40)

平面形は、方形を呈する。規模は、北壁側で5.68mを測る。主軸方位は、N-5.5°-Wとなる。床面は、前述したように擾乱を受けて遺存状態は悪いが、検出された部分については、起伏も少なく、全体に堅緻である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、明瞭ではない。確認面からの深さは、北壁側で13cm前後を測るが、南側ではごくわずかに立ち上がりが検出されたにすぎない。周溝も住居跡中央から南側では、確認が困難であった。北側ではカマド下まで巡っているのが、確認されている。最も良く遺存している北側で、幅20cm前後、深さ10~5cmを測る。ピットは、5ヶ所で検出されている。住居跡の四隅にはば等間隔で配されているP₁~P₄が主柱穴となろう。径80~69cm、深さ74~58cmを測り、しっかりととした掘り方である。P₅は、搅乱穴の底面にわずかに掘り込みが確認されたピットであるが、本住居跡に伴うものであろう。

カマドは、北壁のほぼ中央に白色粘土を構築材として付設されている。上部が削平を受けており、遺存状態は悪い。火床部掘り込みはやや不整の円形を呈し、径42×35cmを測る。床面を皿状に掘り込んであり、深さ10cmを測る。カマド下に壁溝が巡るが、煙道底面と、袖の基部は、ロームブロックと黒色土を充填している。壁外への煙道張り出しは、ごくわずかである。

遺物は、北西隅と、P₁の西側にまとまって出土している。総量は多くない。すべて破片である。遺構の上面を削平されてはいるが、床面上にまとまって出土していることと、接合関係から、本住居跡に伴うものとして把えたい。なお、P₂の東側で焼土の堆積が認められている。

覆土は、暗褐色土が主体である。

005号住居跡（第49、50図・図版30）

本住居跡は、調査区の南端A10区の県道交差点付近に位置する。南東隅で006号住居跡、北側で007号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は、007号住居跡より本跡の方が新しく、006号住居跡よりは古いことが確認されている。本遺跡で検出されたカマドを付設する住居跡群の中で、最も規模の小さい住居跡である。

住居跡の平面形は、ほぼ方形を呈するが、各コーナーで若干丸みをもっている。規模は、3.00×2.70mを測る。主軸方位は、N-11°-Wとなる。床面は、起伏が少なく、全体に堅緻である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、南東側では耕作による削平と、006号住居跡との重複で、遺存が悪くなっている。確認面からの深さは、23~12cmを測る。周溝は、カマド火床部と、南東隅を除く箇所で検出されている。他の住居跡と比較すると、やや幅広で、深く掘り込まれている。幅は30~20cm、深さ20~10cmを測る。ピットは、検出されていない。

カマドは、北壁中央に灰白色砂質粘土を主体として構築している。袖部から天井部にかけての遺存状態は、良好であり、煙出し口部も確認されている。壁外への掘り込みは、大きく三角形状に張り出し、先端部で68cmを測る。火床部掘り込みは、ごく浅く、平面形は、ほぼ円形を呈する。煙道の立ち上がりは、ゆるやかである。カマドのほぼ中央の天井部よりわずかに下と右袖内より坏が出土している。

出土遺物は、カマド内を含めて60点程である。ほとんどが破片で、住居跡全体に散在している。出土層位は、第5層中の床面や上位で多く、上層では少ない。図示できた遺物のうち接合資料が1点あるが、これは上層での出土遺物である。

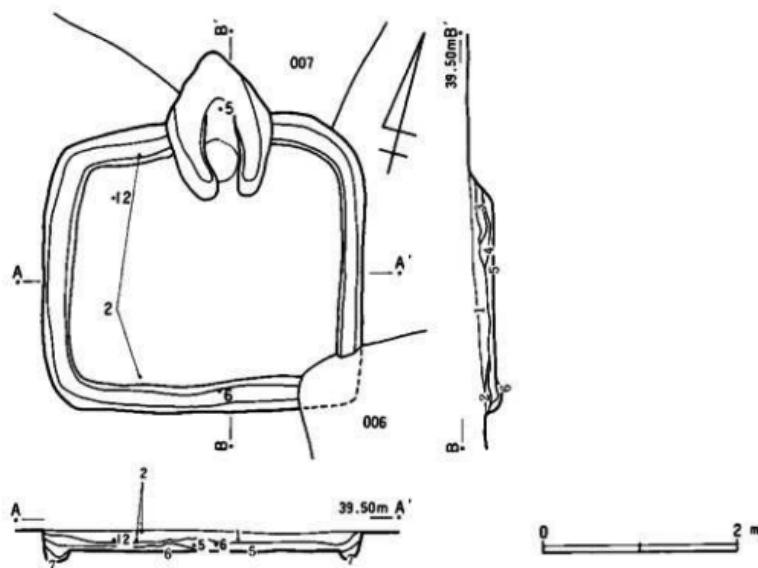
覆土は、7層に区分できたが、黒色土、暗褐色土が主体である。

006号住居跡（第51、52図・図版30）

本住居跡は調査区A10区の南端に位置し、北西隅で005号住居跡と重複している。新旧関係は、本跡の方が新しいことが、確認されている。住居跡の大部分は、県道下にのびるため全体を検出するには至らなかった。

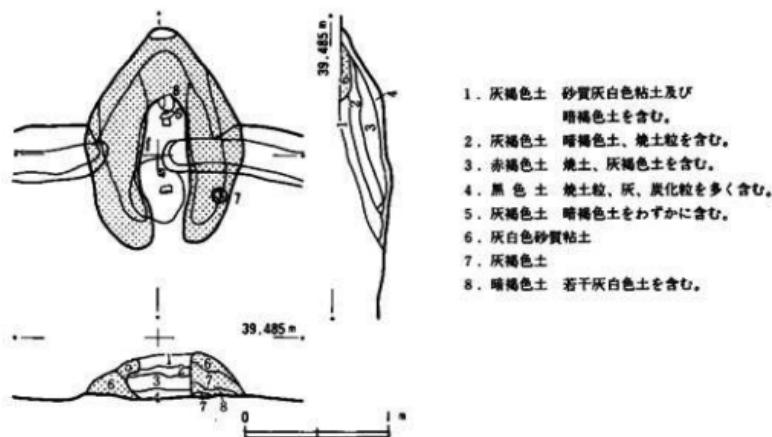
平面形は、残存部から推定し、方形を呈するものと考えられる。規模は北壁側で2.5mを測る。主軸方位はN-30°Wとなる。床面は、若干起伏があるが、堅緻である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは、40~30cmを測る。周溝は、カマド下を除く箇所で検出されている。幅20~15cm、深さ5cm前後を測る。ピットは、検出されていない。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに、灰白色砂質粘土を主材として付設されている。全体に遺存状態は良く、天井部から袖部まで旧時の状況を推定するに足るものである。全体の規模は、最大幅1.02、最大長0.98mを測る。カマド中央より若干外に寄った箇所で、天井部の一



- | | |
|---------|-------------|
| 1. 黒色土 | 4. 灰白色砂質土 |
| 2. 單褐色土 | 褐色土を含む。 |
| 3. 橙色土 | 燒土、炭化粒を含む。 |
| | 5. 黒色土 |
| | 燒土粒、炭化粒を含む。 |
| | 6. 單褐色土 |
| | ローム粒を含む。 |
| | 7. 明褐色土 |
| | ローム粒を含む。 |

第49図 005号住居跡実測図 (1/60)

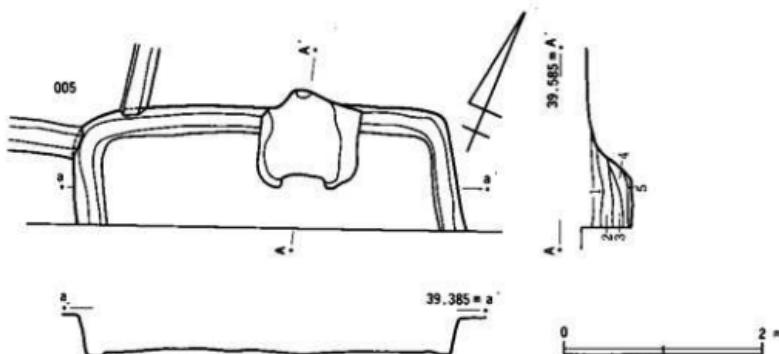


第50図 005号住居跡カマド実測図 (1/40)

部に梢円形を呈する落ち込みを確認しているが、器掛部の可能性も考えられる。壁への掘り込みは、20cm程で、三角形状を呈する。先端に円形の突出部が確認されている。煙道の立ち上がりは、緩やかである。火床部は、ごく浅い掘り方である。

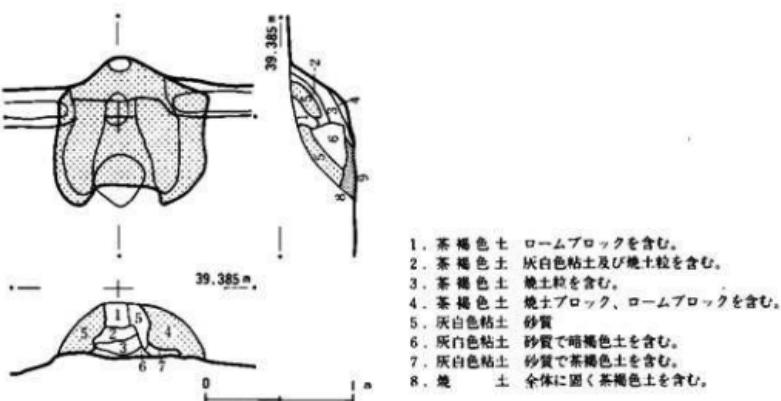
出土遺物は、すべて土師器片で、量的にも少ない。図示し得る遺物はない。

覆土は、暗褐色土が主体であるが、5層に区分できた。



1. 暗褐色土 砂質白色土、ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
3. 暗褐色土 砂質白色土を含むが、全体に黒っぽい。
4. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
5. 暗褐色土 燐土粒、灰を含む。

第51図 006号住居跡実測図 (1/60)



第52図 006号住居跡カマド実測図 (1/40)

007号住居跡（第53、54図・図版30、31）

本住居跡は、調査区南側A10区の県道寄りに位置する。南東隅を005住居跡によって切られている。西側では、003号住居跡に近接している。

平面形は、方形を呈する。規模は、 $6.80 \times 6.50\text{m}$ を測る。主軸方位はN-16.5°-Eとなる。床面は、全体に堅緻で、平坦となる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。上面を削平されてはいるが、しっかりととした掘り方である。確認面からの深さは、20cm前後を測る。周溝は、005号住居跡に切られている南東隅を除いて検出されている。東壁側の一部は、壁直下より若干内側に掘り込まれている。幅25~20cm、深さ10cm前後を測る。ピットは、11ヶ所で検出されている。このうち、P₁~P₆は、住居跡のほぼ対角線上に2ヶ所づつ並列している。配置状況から改築に伴う結果による可能性が考えられる。P₁、P₃、P₅、P₇は、径59~48cm、深さ71.7~59cm、P₂、P₄、P₆は、径60~40cm、深さ91~65.5cmを測る。概して、後者の方（並列する外側のピット）が、規模が大きいことが指摘できる。P₉~P₁₁は、南壁側寄りに位置する。P₁₀は長軸110cmの長方形を呈し、周溝の一部を掘り込んでいる。深さ67cmを測る。住居入口部に付設されたものであろうか。P₁₁は、楕円形で長径92cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。深さ85cmを測る。P₈と共に、その性格は判然としない。

カマドは、北壁のほぼ中央に、灰白色砂質粘土を主材として付設される。天井部は、崩落しているが、袖部の遺存状態は、良好である。壁外への掘り込みは、台形状を呈し、25cm程の長さとなる。火床部の掘り方は、楕円形を呈し、深さは10cmを測る。煙道は、煙出し口に向って傾斜が急となる。袖部底面の周溝にあたる部分と、火床部掘り方から、煙道にかけては、ロームブロックが充填されている。ほぼ中央で、壺形土器が口縁を逆さまにした状態で出土している。

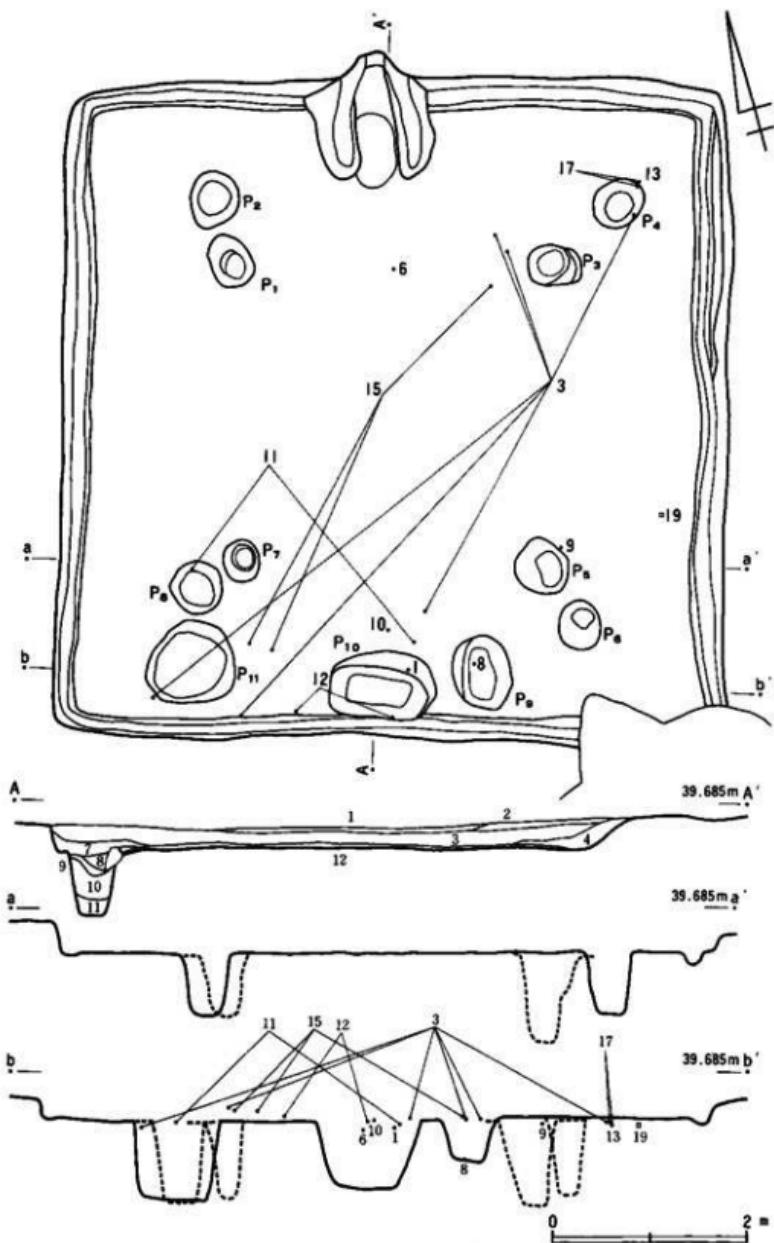
遺物は、住居跡の中央から北壁側と南壁側寄りに分散して出土している。破片が多く、接合の結果でも、散在している状況が確認されている。出土層位は、床面上の遺物が多いため、住居跡廃絶時に投棄された結果によるものと理解したい。

覆土は、暗褐色土を主体としており、自然堆積による堆積状態を示している。

008号住居跡（第55、56図・図版32）

本住居跡は、調査区南側A9区で、003号住居跡の西約3mに位置する。南隅では、009号住居跡と重複しており、(古)008→(新)009となる。また、遺跡内を縦断する溝状遺構によって擾乱を受け、さらに西隅の一部は調査区外にのびるため、全体を検出するには至らなかった。

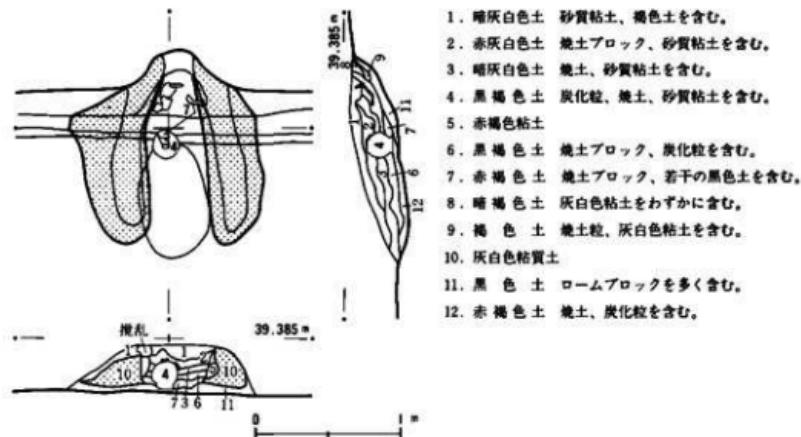
平面形は、方形を呈する。規模は、 $5.85 \times 5.60\text{m}$ を測る。主軸方位は、N-25.5°-Wとなる。床面は、やや起伏があるが、全体に堅緻である。壁は、部分的に欠失しているものの、遺存状態は良く、ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは、31~28cmを測る。周溝は、幅20



第53図 007号住居跡実測図 (1/60)

007号住居跡覆土土層

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 砂質灰白色土を含む。
3. 暗褐色土 ローム粒を含む。
4. 暗褐色土 砂質灰白色土、燒土粒を含む。
7. 淡褐色土
8. 暗褐色土 黒色土を含む。
9. 黑褐色土
10. 淡褐色土 ややしまりあり。
11. 淡褐色土
12. 黄褐色土 ロームブロック黒褐色土を含む。



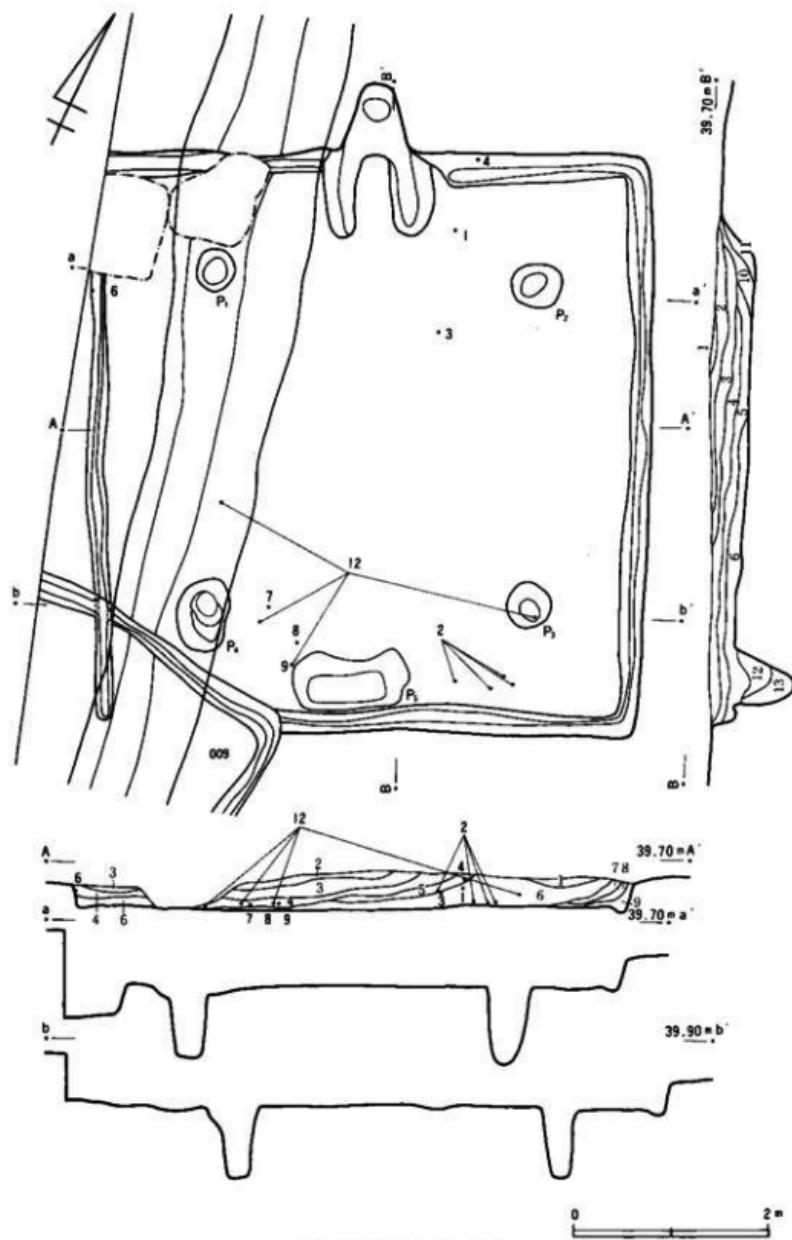
第54図 007号住居跡カマド実測図 (1/40)

~10cm、深さ10cm前後を測る。カマド下でとぎれている。ビットは、5ヶ所で検出されている。主柱穴は、住居跡の四隅に配されるP₁~P₄である。径72~40cm、深さ72~62.5cmを測る。P₅は、南壁中央に接している。007号住居跡と同様に長方形に掘り込まれている。長軸120cm、深さ62cmを測る。底面は丸底状となる。

カマドは、北壁の中央に灰白色砂質粘土を主材として構築される。袖から天井にかけての遺存状態は良好である。壁外への掘り方には大きく張り出し、長さ70cmを測る。火床下から袖下、煙道部下は、ロームブロックと茶褐色土、灰白色砂質粘土が充填され、カマドの基礎としている。煙道部は緩やかな傾斜で立ち上がり、天井部や外側には、円形の煙出し部が確認されている。遺物は、壺が右袖粘土材に埋まり横立した状態で出土し、また、その前方部外側に胴部を欠失した甕が出土している。

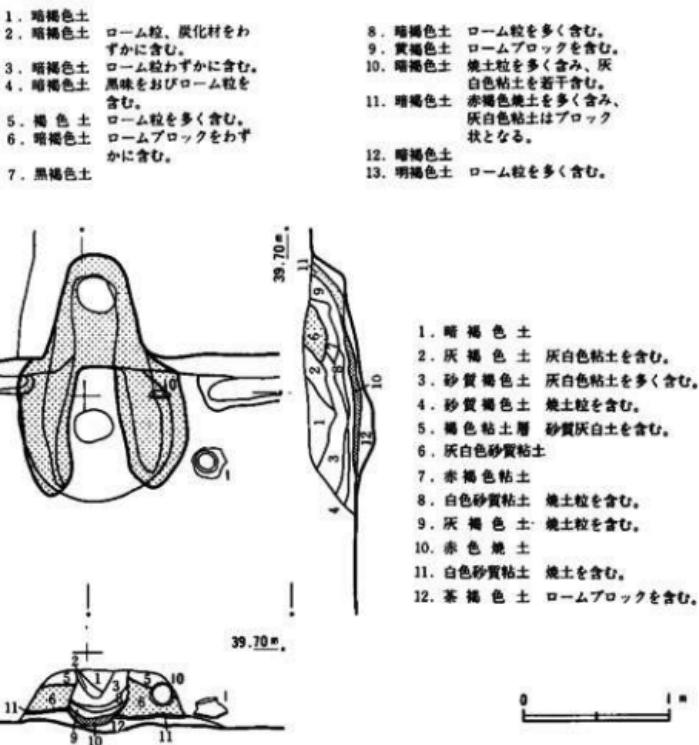
遺物は全体に散在した状態で出土しており、その量も40点程である。出土層位は、床面より若干上で出土している遺物が多い。

覆土は、13層に区分できたが、褐色土、暗褐色土が主体であり、流れ込みによる堆積状態を示している。



第55図 008号住居跡実測図 (1/60)

008号住居跡覆土土層

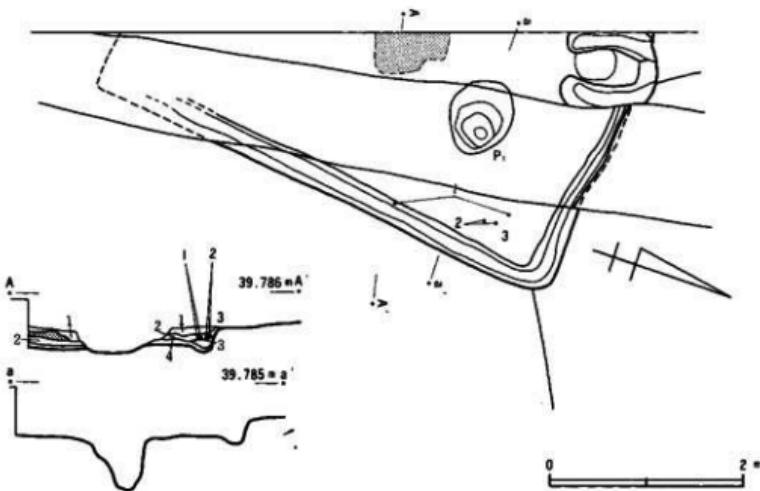


第56図 008号住居跡カマド実測図 (1/40)

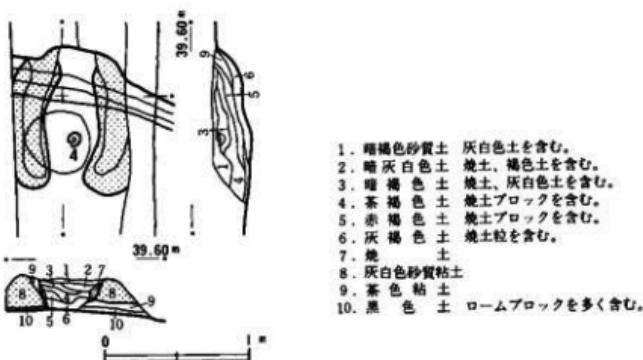
009号住居跡 (第57、58図・図版33)

本住居跡は、調査区南側A10区に位置している。住居跡の大部分は、西側調査区外にのび、また、後世の溝状遺構が縦断しているため、全体を検出するには至らなかった。なお008号住居跡と北側で重複関係にあり、本跡の方が新しいことが確認されている。

平面形は、方形を呈するのであろう。規模は、一辺5m前後になると思われる。主軸方位はN-7°-Eとなる。床面は、前述の溝状遺構による搅乱を受け遺存が悪いが、残存部では、堅緻な状態である。壁は、垂直に立ち上がる。最も遺存の良いところでの深さは、20cmを測る。周溝は、カマドから東壁中央付近で検出されている。幅20cm前後、深さ10cm前後を測る。ピットは、カマド南東側で1ヶ所検出した。上面に搅乱を受けるが、掘り方はしっかりとしている。径80cm、深さ56cmを測る。



第57図 009号住居跡実測図 (1/60)



第58図 009号住居跡カマド実測図 (1/40)

カマドは、北壁側に灰白色砂質粘土を主材として構築される。右袖端は、溝状造構によって切られており、また、左袖端は、調査区外にのびるため、全体を検出できなかった。天井部は、全部崩落して旧状をとどめていない。袖は、やや弓状に張り出し、ロームブロックを含んだ黒色土を基礎としている。火床部の掘り込みは、わずかで、煙道から煙出し口へと緩やかに立ち上がる。壁外への掘り込みは、14cm程度で、半円状を呈している。火床部上面で、壊形

土器が出土している。

遺物は、北東隅でまとまって出土しているが、量的には少ない。すべて床面より10cm程上の第3層中からの出土である。

覆土は、暗褐色土を主体とする。第3層上面には、焼土の堆積が認められている。

012号住居跡（第59、60図・図版33、34）

本住居跡は、調査区南側A9区、008住居跡の北約5mに位置する。北壁側で013号跡と重複するが、両者の新旧関係は不明である。また、北壁中央から南東隅にかけて、溝状遺構によって搅乱を受けている。さらに西側部分は、調査区外にのびるため、全体を検出していない。

平面形は、方形を呈する。規模は、東壁側で、4.82mを測る。主軸方位は、N-9.5°-Eとなる。床面は、やや起伏が認められるが、全体に堅緻である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは、30.4~24.8cmを測る。周溝は、カマド下を除いて全周するものと思われる。幅30~20cm、深さ10cm前後を測る。ピットは、3ヶ所で検出されている。ほぼ等間隔に配される主柱穴である。径62~60cm、深さ90.7~77cmを測る。

カマドは、北壁中央に位置しているが、溝状遺構によってその大半を破壊されておりわずかに左袖が確認されたにすぎない。カマド下の掘り方は、袖下から大きく掘り込まれており、幅1.22m、深さ0.23mを測る。

遺物は、北東隅でまとまって出土しているが、全体的な量は少ない。出土レベルは、床面のやや上であるが、接合状況から、本跡に伴うものであろう。

覆土は、5層に区分されている。暗褐色土が主体となり、流れ込みによる堆積状態を示している。

013号住居跡（第61図・図版33）

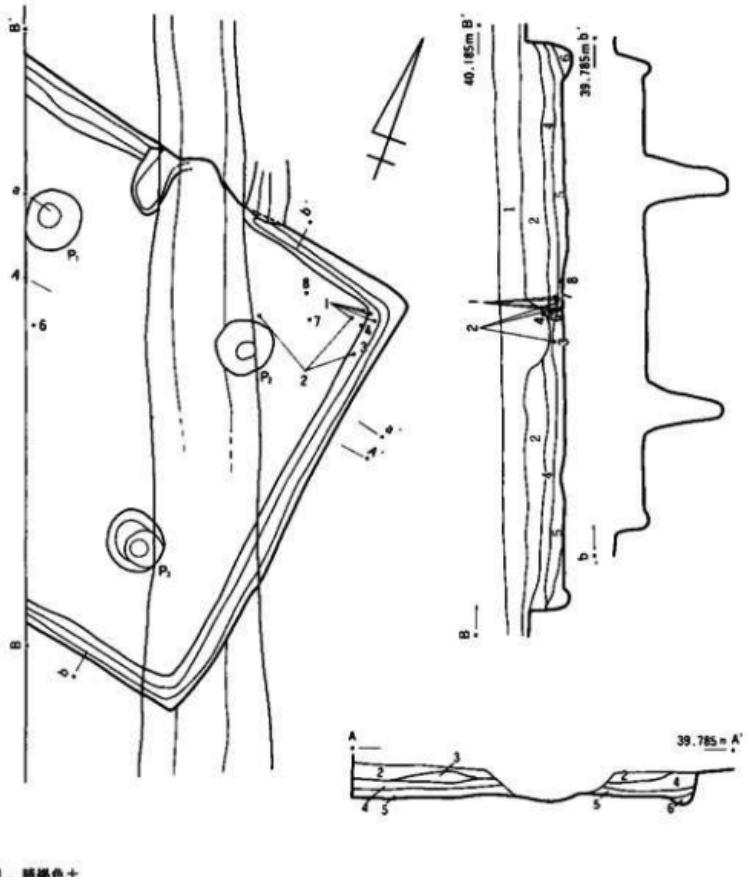
本住居跡は、調査区南側A9区に位置し、012号住居跡と南側で重複している。北側には014号住居跡が隣接している。住居跡西壁側は溝状遺構によって切られており、全体を検出できなかった。なお、012号住居跡との新旧関係は明らかではない。

平面形は、方形を呈する。規模は、東壁側で3.90mを測る。床面は、ほぼ平坦で堅緻な状態である。壁は、垂直に立ち上がり確認面からの深さは、20~15cmを測る。周溝は、搅乱を受ける西壁側を除いて検出されている。幅は20~10cm、深さ10~5cmを測る。ピットは、4ヶ所で検出されている。ほぼ等間隔で住居跡の四隅に配される主柱穴である。径34~30cm、深さ82~62cmを測る。 P_4 の南から壁に向かって、幅20cm、深さ30cmの溝が存在するが、性格は不明である。

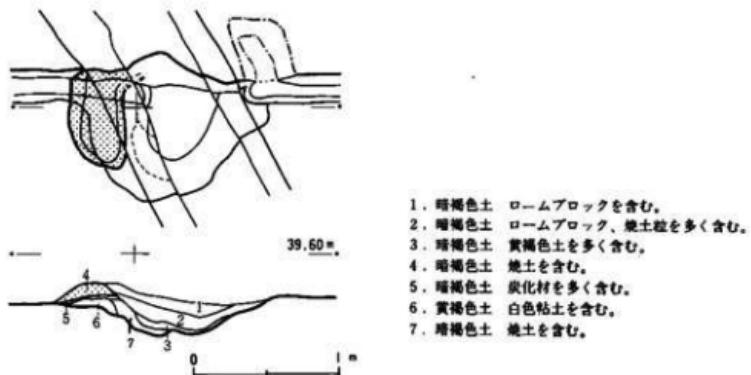
カマドは存在しない。

遺物は、少ない。住居跡の中央よりに散在している。出土レベルは、覆土上層に偏る傾向が認められ、本跡に伴う遺物は少ないようである。

覆土は、褐色土、暗褐色土が主体である。耕作による擾乱を受けている箇所が多く認められる。



第59図 012号住居跡実測図 (1/60)



第60図 012号住居跡カマド実測図(1/40)

014号住居跡 (第62~64図・図版33、34)

本住居跡は、調査区南側A 8区とA 9区にまたがって位置している。013号住居跡が南側に隣接している。

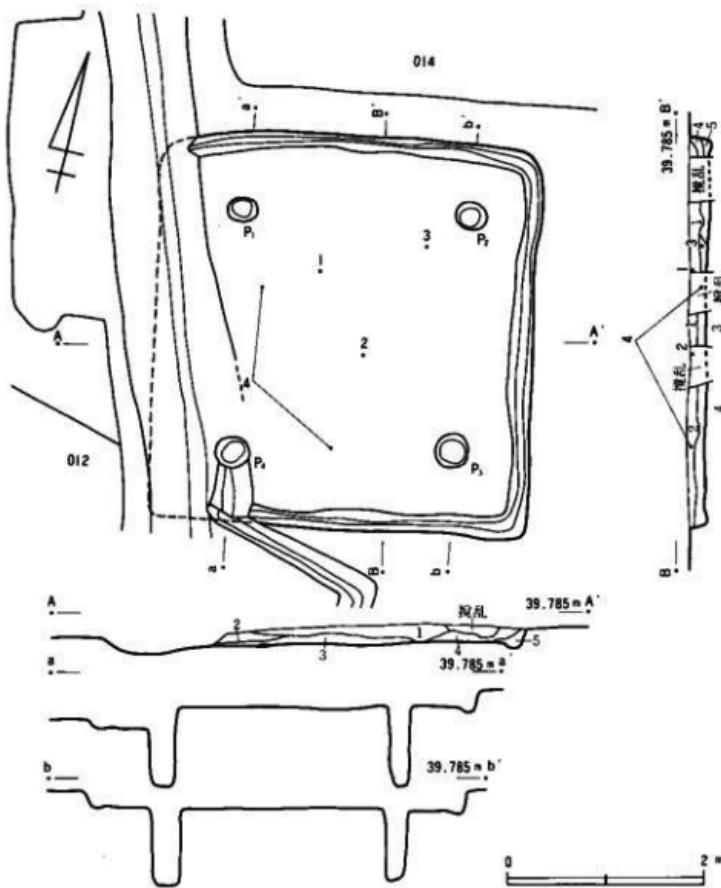
平面形は、方形を呈する。規模は、 $5.12 \times 4.80\text{m}$ を測る。主軸方位は、N-7.5°-Wとなる。床面は、やや起伏があるが全体に堅緻な状態である。壁は、わずかに傾斜をもって立ち上がる。確認面からの深さは、24~17cmを測る。

ピットは、5ヶ所で検出されている。主柱穴は、P₁~P₄である。住居跡の対角線上にはば等間隔で配される。径54~42cm、深さ77~65.5cmを測る。北東壁に接して掘り込まれるP₅は、径85cm、深さ46.5cmを測る。覆土内より坏、甕がまとまって出土している。貯蔵穴であろう。

カマドは、北壁中央に灰白色砂質粘土を主材として構築している。左袖は住居の壁付近で搅乱を受けている。天井部は、崩落して遺存していない。壁外への掘り込みは、三角形状を呈するが、さほど大きくはない。袖は、両方とも住居跡内に向って直線状に造り出されており、火床下の掘り込みは浅く、煙出口では、垂直に近い立ち上がりである。

遺物は、住居跡中央から東側に偏在して出土している。大部分が、住居跡確認面から第2層までの間の覆土上部に集まっている。接合状況からも、かなり分散した傾向が認められる。このため、前述したP₅出土遺物と他の遺物との間には、いくらかの時間差が存在している可能性が考えられる。すなわち、本跡の時期に伴う遺物としては、P₅出土遺物を考えておきたい。

覆土は、6層に区分されている。暗褐色土、明褐色土が主体を占めており、自然堆積の状況を呈している。



1. 黒褐色土 炭化粒を若干含む。
 2. 褐色土 ローム粒を多く含む。
 3. 黑褐色土 炭化粒、燒土粒を含む。
 4. 黑褐色土 炭化粒、燒土粒を含みやや黒っぽい。
 5. 黄褐色土

第61図 013号住居跡実測図 (1/60)

015号住居跡 (第65図・図版32)

本住居跡は、調査区南側A 9区に位置し、北側に012号住居跡、南側に008号住居跡が近接している。住居跡の西側約半分は調査区外に存在するため、全体を検出するには至っていない。平面形は、方形を呈するものと思われる。規模は、東壁側で3.16mを測る。床面は、わずかに起伏があるが堅緻な状態である。壁は、わずかに傾斜をもって立ち上がる。上面を削平さ

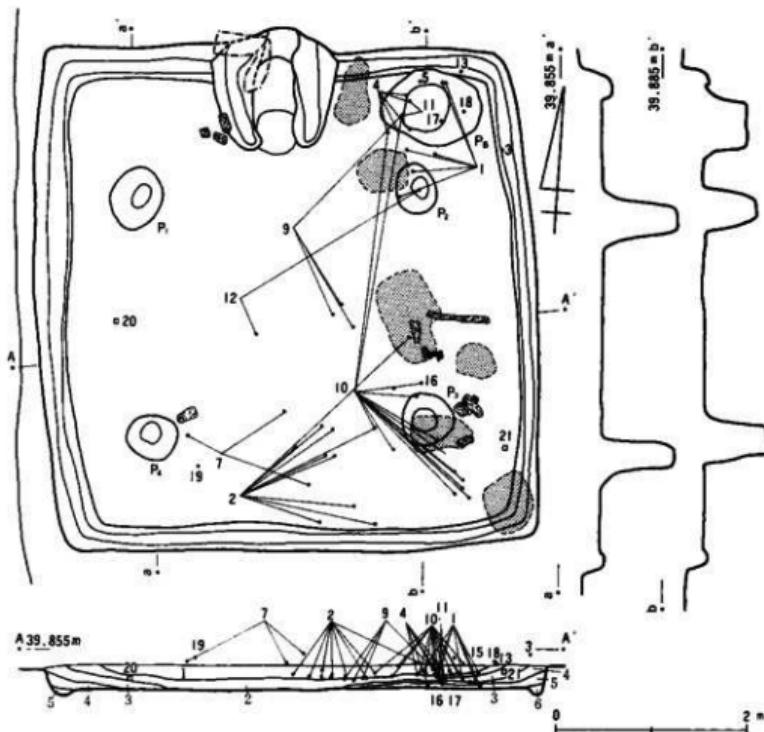
れているため、遺存している部分は15~10cmを測るにすぎない。周溝は、幅20cm、深さ10cm前後を測る。ピットは検出されていない。

遺物は、土師器小片が数点出土しているにすぎない。いずれも図示できない。

覆土は、5層に区分された。上層にローム粒を多量に含んだ黄褐色土が流れ込んでいる。また、床面上には北側を中心として焼土の堆積が認められている。

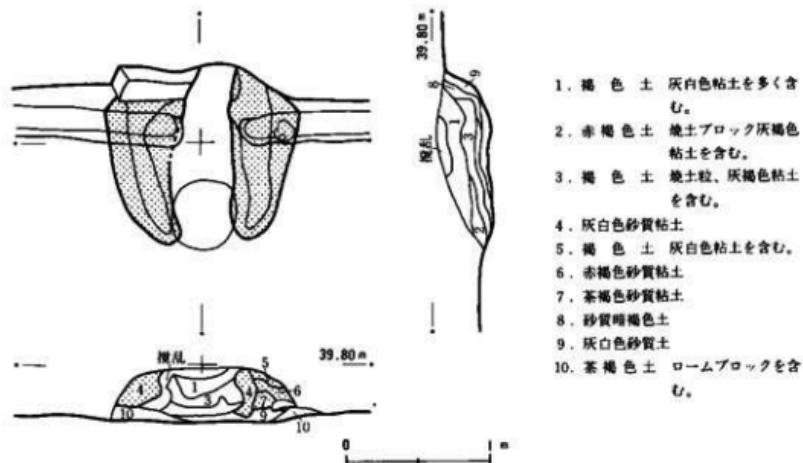
016号住居跡（第66図・図版27）

本住居跡は、調査区南端 A10区の県道との交差部に位置する。北壁側で004号住居跡と重複関係にあるが、両者の新旧関係は明らかではない。住居跡の大部分は、県道下にのびるため、北壁から西壁の一部分の検出にとどまっている。

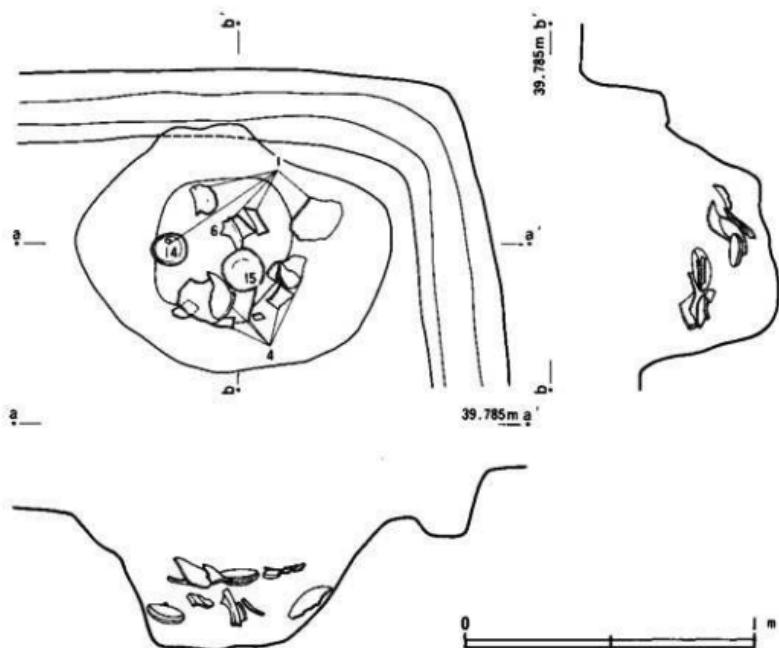


1. 單褐色土 ローム粒を多く含み、若干の炭化粒を含む。
2. 單褐色土 炭化粒多く、ローム粒わずかに含む。
3. 黄褐色土 炭化粒、ローム粒多く含む。
4. 明褐色土 炭化粒、焼土粒を含む。
5. 明褐色土 ロームブロックを含む。
6. 黄褐色土 ロームブロックを含む。

第62図 014号住居跡実測図 (1/60)



第63図 014号住居跡カマド実測図 (1/40)

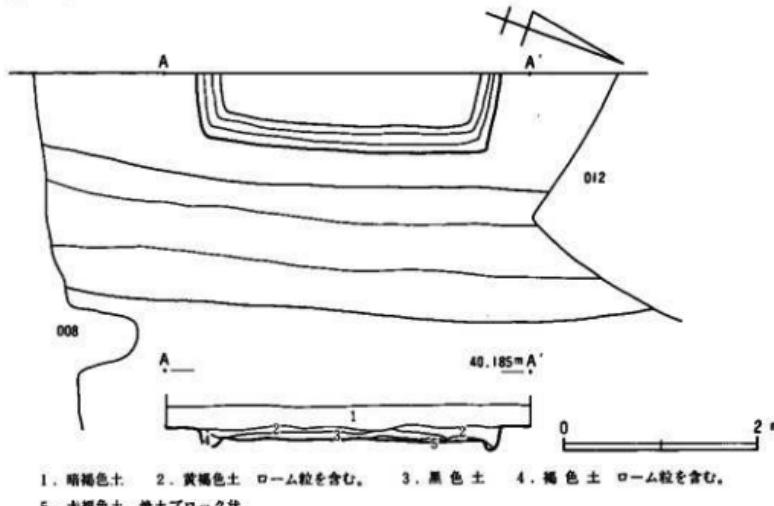


第64図 014号住居跡貯蔵穴実測図 (1/20)

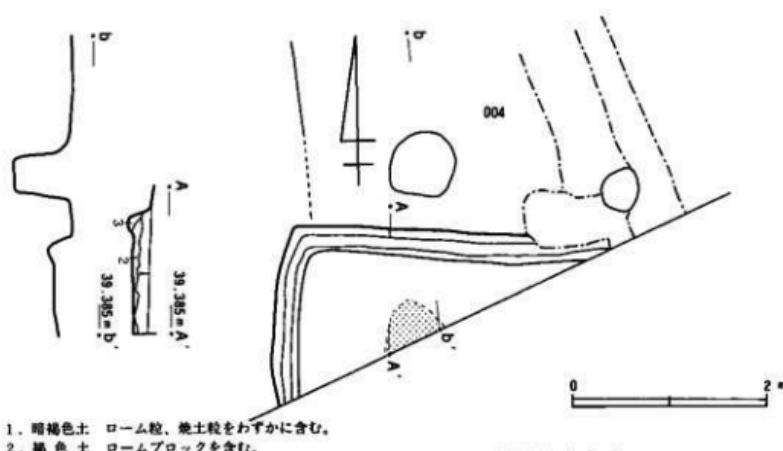
平面形は、方形を呈するものと思われる。全体の規模は、計測できない。北壁側3.1m、西壁側1.8mを検出したにすぎない。床面は、平坦で堅緻な状態である。壁は、傾斜して立ち上がり、深さ20cmを測る。周溝は、幅20m前後、深さ10~5cmを測る。ピット、カマドは、検出していない。

遺物は、土師器細片が数点出土したにすぎず、いずれも図示できない。

覆土は、暗褐色土、褐色土を主体としており、3層に区分された。



第65図 015号住居跡実測図 (1/60)



第66図 016号住居跡実測図 (1/60)

017号住居跡（第67、68図・図版35、36）

本住居跡は、調査区の中央A7区に位置する。北東側で018号住居跡と重複しており新旧関係は、（古）017→（新）018となる。また、住居跡のはば中央を北から南に溝状遺構が継続している。このため、北壁カマド付近から北東壁の遺存状態は良くない。

平面形は、方形を呈する。規模は、 $6.20 \times 6.12\text{m}$ を測り、主軸方位は、N-4.5°-Eとなる。床面の状態は、平坦で堅緻である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、重複している箇所を除いては、しっかりとした掘り方が遺存している。確認面からの深さは、75~48cmを測る。周溝は、カマド左袖下を除いて全周する。幅26~20cm、深さ10cm前後を測る。ピットは、6ヶ所で検出されている。主柱穴は、P₁~P₄で住居跡の対角線上に配される。それぞれ、不整形で、二段に掘り込まれている。径104~76cm、深さ73~43cmを測る。P₅は不整の楕円形状を呈し、径60cm、深さ48.5cmを測る。カマドに対置するもので、入口部に付設されるピットであろう。東壁際の小ピットは、018号住に伴うものであろう。

カマドは、北壁中央に灰白色砂質粘土を主材として構築される。住居跡を継続する溝状遺構によって上部を壊されており、遺存状況は不良である。壁外への掘り込みは、三角形状を呈し、調査時の段階で、奥行き30cmを測る。右袖部の遺存は良く、壁から1m程度の長さで、造り出されている。カマド下の掘り方は、楕円形を呈し、さほど深くはない。煙道の立ち上がりは、緩やかである。

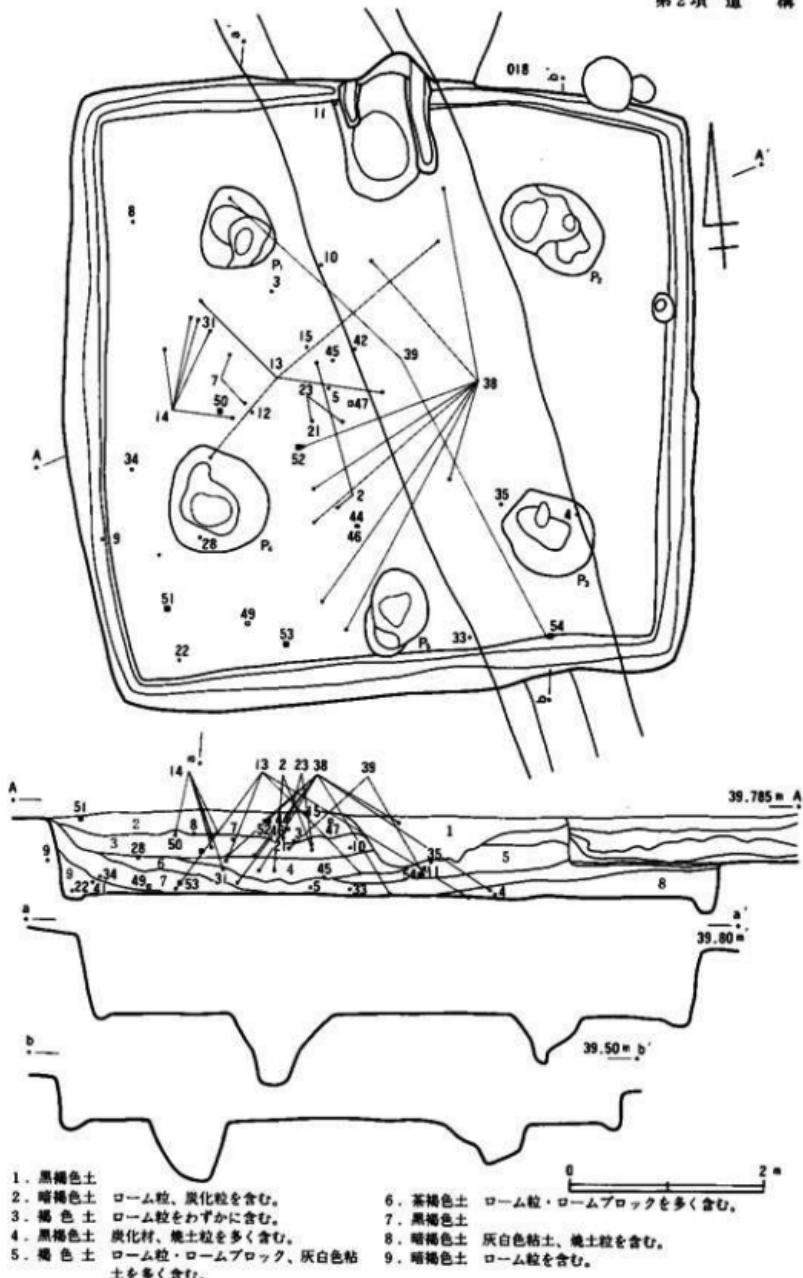
遺物は、住居跡の西側に多く出土しているが、広範囲に散在している状況である。出土層位は第1層~3層に多く、それ以下、床面上までは少ない。床面上の遺物は、カマド右袖脇からまとまって出土している。

土層は、8層に区分されている。暗褐色土、褐色土が主体であり、流れ込みによる堆積状態を示している。

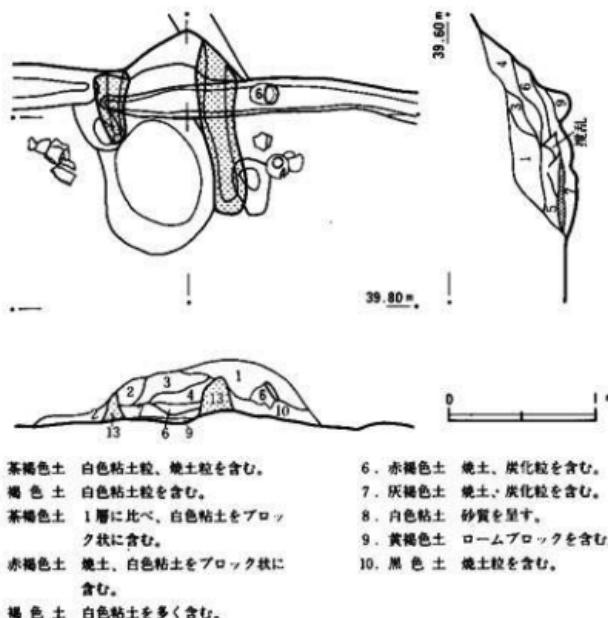
018号住居跡（第69、70図・図版36）

本住居跡は、調査区の中央A7区に位置している。西側で017号住居跡と重複しており、新旧関係は、（古）017号跡→（新）本跡となることが確認されている。また、後で詳述するが本跡においては、数次にわたって建替えがされていることが、調査の過程で明らかになっている。従って、住居跡の規模等は、最も新しい時期と考えられる遺構について記述することにする。

平面形は、やや崩の張る隅丸方形を呈している。規模は、 $5.80 \times 5.50\text{m}$ を測る。主軸方位はN-64.5°-Eとなる。床面は、ロームブロックと褐色土を混合した貼床面となっており、堅緻な状態である。ただ、壁寄りの部分では、旧住居跡に伴う掘り方が存在しているため、起伏



第67図 017号住居路実測図 (1/60)



第68図 017号住居跡カマド実測図 (1/40)

がはげしくなっている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、上端近くで外側に開いている。北西壁と南東壁には、この外側に聞く部分から、8ヶ所の柱穴が掘り込まれている。周溝は、旧住居跡の周溝と重複しているため、不明確な箇所が多い。カマド付近では、幅20cm前後、深さ10cm前後となる。ピットは、旧住居跡に伴うものを含めて23ヶ所より検出されている。このうち最も新しい時期に伴うピットは、壁から掘り込まれるP₁、P₃、P₄、P₆～P₁₀、P₁₃、P₁₄と床面上の最も外側に掘り込まれているP₂、P₈、P₁₂および017号跡内に位置するP₁であろう。P₂、P₈、P₁₁、P₁₂は、カマドの位置と住居跡の規模、柱穴間の位置関係から推定した。径64～30cm、深さ68～10cmを測る。深さは、床面からの計測値である。他P₁₅～P₂₃は、径64～32cm、深さ85～25cmを測る。

カマドは、東壁中央に、灰白色砂質粘土を主材として構築されている。確認時の状態では、広範囲に灰白色砂質粘土が分布しており良好な遺存かと思われたが、調査の結果、右袖の一部分が遺存していただけで、他は崩落して旧状をとどめていないことが明らかとなった。壁外への掘り込みは、不整形で、最奥部より40cmを測る。袖下は、ロームの地山を袖状に整形して造り出して基礎としている。火床部掘り込みは、長径65cmを測る楕円形を呈し、深さは、5～8cmを測る。煙道の立ち上がりは、緩やかな傾斜である。

旧カマドは、貼床面の下で、北西壁側と東壁側の2ヶ所で焼土を伴う掘り方を検出しておりこの掘り方が、旧住居跡に伴うカマド跡かと考えられる。仮に東壁側を旧Aカマド、北西壁側を旧Bカマドとして本住居跡の建替え状況を復元してみると以下のような変遷の過程が推察される。まず、第1次住居跡は、貼床面下、北西壁側の旧カマドー旧Bカマドを中心としたP₂₀～P₂₁の柱穴を伴う住居跡。第2次住居跡は、旧Aカマドを中心としてP₁₅～P₁₉の柱穴を伴う住居跡。第3次は、本カマドと壁柱穴を伴う住居跡の3期の変遷が考えられる。なお、旧Aと、旧Bカマドの時期差は、本遺跡の住居跡の多くが北カマドを有することから、本跡も最初は北側にカマドを構築していたものと推定したことによるためである。

本住居跡に伴う遺物は、住居の中央付近と壁寄りに分散して出土している。床面よりやや上面で出土している遺物が多い。また床面上、特に北西壁側では、横倒しとなった炭化材と焼土が多量に堆積しており、本住居跡が火災を受けた可能性が考えられる。

覆土は、褐色土、暗褐色土が主体であるが、床面付近では均一的な厚さで炭化材、焼土の混土層が堆積している。

019号住居跡（第71、72図・図版37）

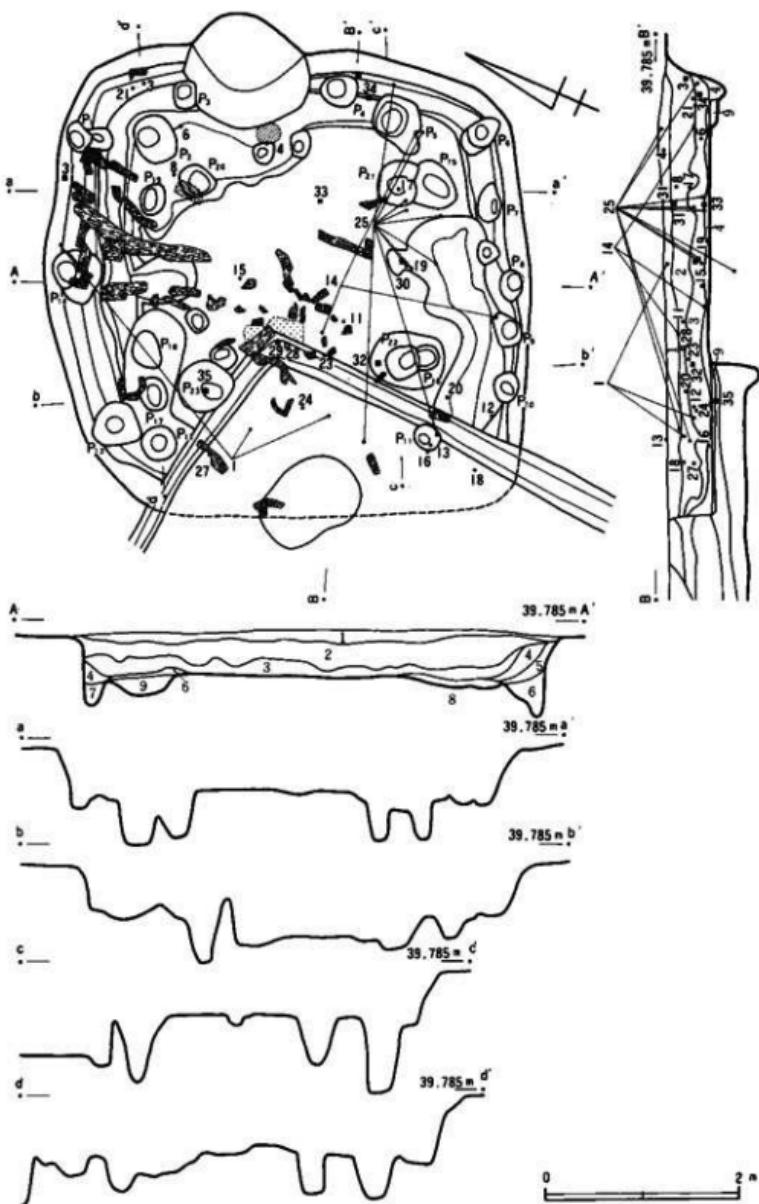
本住居跡は、調査区の中央A 6～7区にまたがって位置している。西側に023号住居跡が隣接している。住居跡の中央より西側では溝状遺構が継続している為、北壁カマド付近から南壁の一部にかけて、欠失している。

平面形は、方形を呈する。規模は、3.56×3.82mを測る。主軸方位は、N-11°-Wとなる。床面は、溝状遺構の部分を除くと、平坦で、堅緻な状態である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり確認面からの深さは、30～14cmを測る。周溝は、存在しない。ピットは、4ヶ所で検出されている。住居跡の対角線上に配されている主柱穴である。径46～31cm、深さ29～19cmを測る。Rは上部を削平されている。

カマドは、北壁中央に灰白色砂質粘土を主材として構築される。左側を遺構によって削平されているが、天井部の一部と右袖は遺存している。壁外への掘り込みは、三角形を呈し、壁より60cmを測る。天井部は火床部や奥の上部から、煙出口まで右袖部と一体となっている。残存部の最大厚は、10cmを測る。右袖は、直線状に造り出している。火床部は、床面を10cm程掘り込んでいる。掘り方内は、良く焼けた焼土の堆積が認められる。煙道から煙出口の傾斜は、緩やかである。

遺物は、各柱穴付近に分散して出土している。総数30点程度と少ない。床面上より出土している遺物は少なく、覆土上層に散在している。

覆土は、暗褐色土を主体とする。自然堆積の状態を示している。

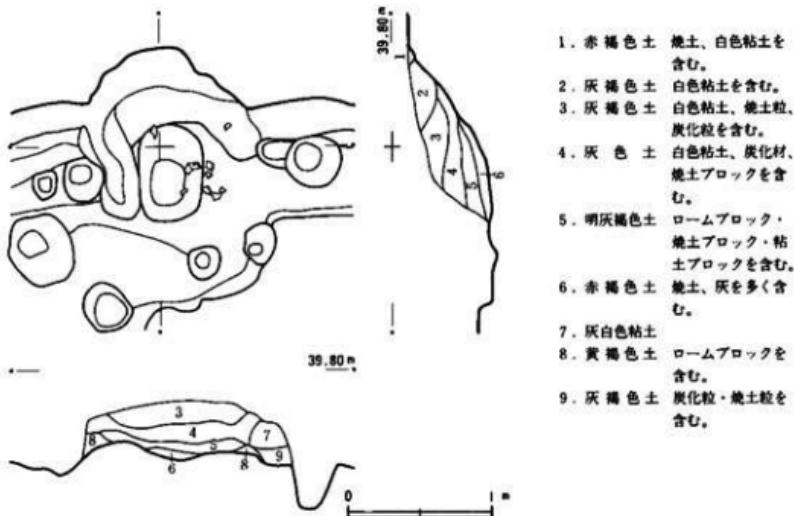


第69図 018号住居跡実測図

018号住居跡覆土層

1. 明褐色土 ローム粒、粘土粒を含む。
2. 喀褐色土 ローム粒、焼土粒を含む。
3. 黒褐色土 炭化材を多くロームブロックを若干含む。
4. 黄褐色土 粘土粒を含む。
5. 喀褐色土 粘土粒、ローム粒を含む。

6. 黄褐色土 ローム粒を含む。
7. 茶褐色土 砂質で焼土粒を含む。
8. 灰白色土 ローム粒を含み
9. 黄褐色土 しまりあり。



第70図 018号住居跡カマド実測図 (1/40)

020号住居跡 (第73、74図・図版38)

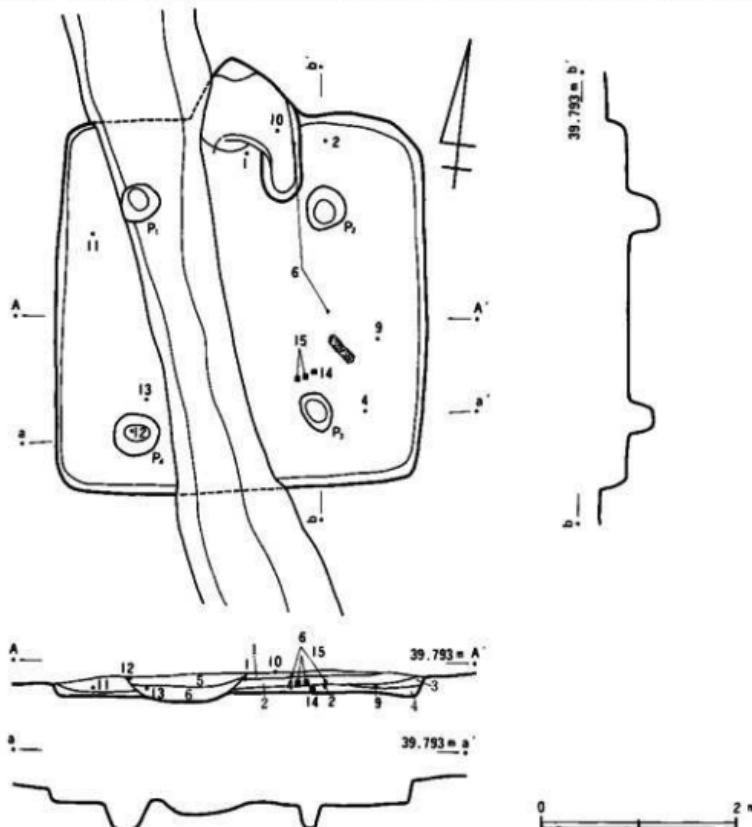
本住居跡は、調査区の中央、A 6区に位置している。南側約6mの距離に019号住居跡が存在する。西側で溝状遺構が縦断しているが、上面をわずかに削平されただけで、住居への影響は少ない。

平面形は、方形を呈する。規模は、 $5.64 \times 5.30\text{m}$ を測る。主軸方位は、N-1°-Wとなる。床面は、わずかに起伏が認められるが、全体に堅硬な状態である。壁は、垂直に立ち上がり、しっかりとした掘り方である。確認面からの深さは、 $65.5\sim 53\text{cm}$ を測る。周溝は、カマド下を除く箇所で検出されている。幅 $30\sim 20\text{cm}$ 、深さ 10cm 前後を測る。ピットは、6ヶ所で検出されている。住居跡の対角線上に配される $P_1\sim P_4$ が主柱穴である。径 $94\sim 78\text{cm}$ 、深さ $58\sim 49\text{cm}$ を測る。カマドの両脇、壁に接して掘り込まれる P_5 、 P_6 は、径 $50\sim 35\text{cm}$ 、深さ $30\sim 20\text{cm}$ を測る。袖下から検出されているが、性格は不明である。

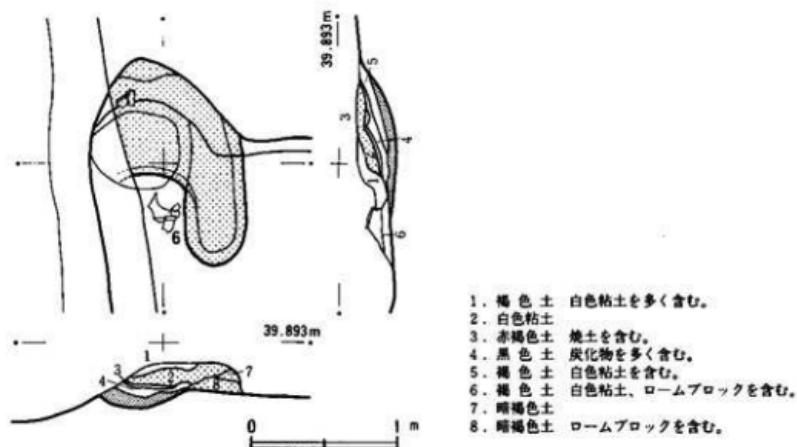
カマドは、北壁中央に灰白色砂質粘土を主材として構築される。天井から袖部の遺存は良好で、煙道上部から袖部まで一体化している。天井部は最大厚15cmを測る。火床底部下から煙道部下および袖下の掘り方内には、ローム粒を含む茶褐色土が充填され、袖下はさらにロームブロックを主体とした黄褐色土を基礎としている。煙道から煙出口の立ち上がりは緩やかである。煙出口は、 28×8 cmを測る。天井部下より环形土器が出土している。

遺物は、分散した出土状態を示す。接合資料は、覆土の中から上層に散在しており、床面上では、単独出土の遺物が多い。

覆土は、7層に区分されている。黒褐色土、暗褐色土が主体を占め、自然堆積の状態を示す。



第71図 019号住居跡実測図 (1/60)



第72図 019号住居跡カマド実測図 (1/40)

021号住居跡 (第75、76図・図版39)

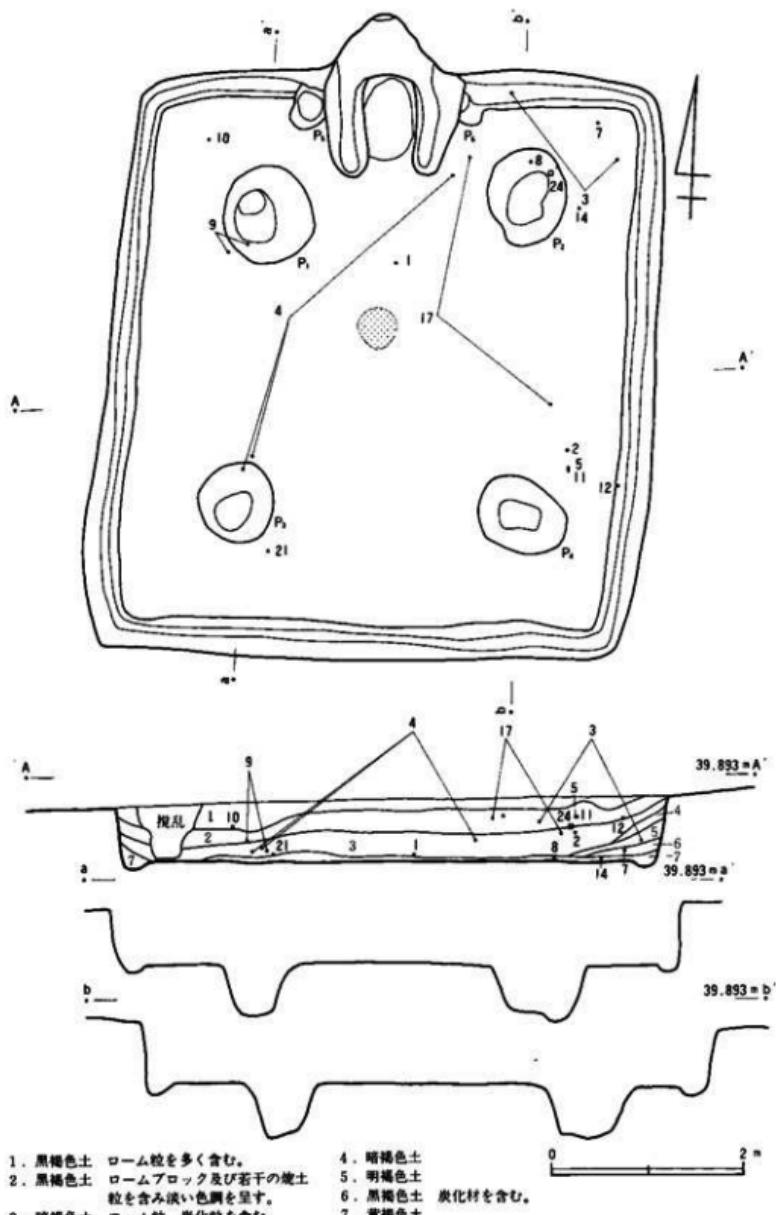
本住居跡は、調査区北側のA 5区に位置しており、南側の020号住居跡とは約12mの距離にある。住居跡の西壁側は、耕作時のイモ穴によって一部擾乱を受けている。

平面形は、方形を呈する。規模は、 $5.06 \times 4.42\text{m}$ を測る。主軸方位は、N-17.5°-Wとなる。床面は、わずかに起伏が認められるが、全体に堅緻な状態である。壁は、垂直に立ち上がる。確認面からの深さは、 $52.5\sim43.5\text{cm}$ を測る。周溝は、西壁側の一部とカマド下を除く箇所で検出されている。幅 $30\sim20\text{cm}$ 、深さ $15\sim5\text{cm}$ を測る。ピットは、6ヶ所で検出されている。住居跡の対角線上に配される $P_1\sim P_4$ が主柱穴である。径 $60\sim56\text{cm}$ 、深さ $60\sim54\text{cm}$ を測る。 P_1 、 P_4 は、南壁中央寄りに近接して、掘り込まれている。径 $44\sim38\text{cm}$ 、深さ $37\sim38\text{cm}$ を測る。入口部に付設されるピットであろう。

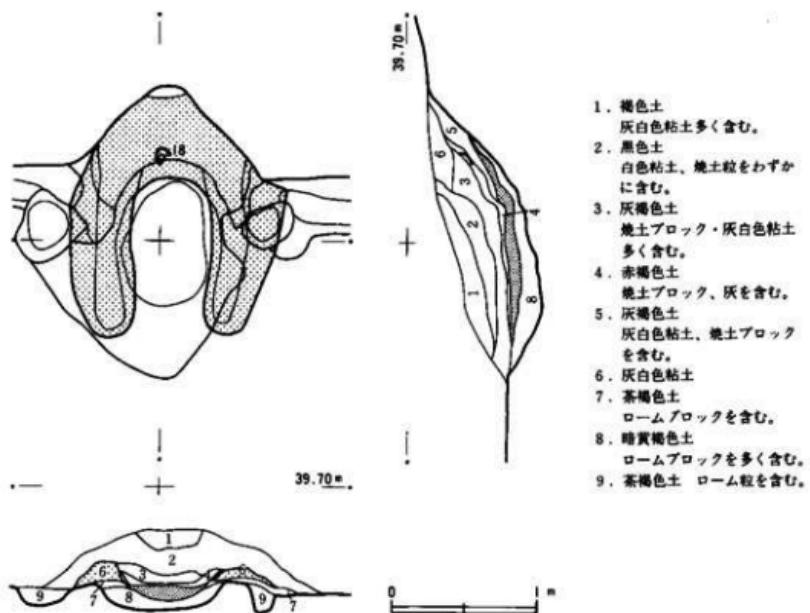
カマドは、北壁中央に灰白色砂質粘土を主材として構築されている。天井部は欠失しているが、袖部は良く遺存しており、壁から長さ 1.10m 程造り出されている。火床部の掘り方は浅く煙道の立ち上がりは、煙出口向かって急傾斜となる。火床部やや奥で壊が出土している。また、右袖脇より土製支脚が床面よりわずかに上で、倒置された状態で出土している。

遺物は、住居跡全体に散在した状態で出土している。層位的には、第2層～3層に多く出土しており、接合状況から考えると、住居跡廃絶後にやや間をおいて投棄された遺物が多いものと思われる。

覆土は、8層に区分されている。暗褐色土、褐色土が主体を占め、自然堆積の状態を示している。



第73図 020号住居跡実測図 (1/60)



第74図 020号住居跡カマド実測図 (1/40)

022号住居跡 (第77、78図・図版40)

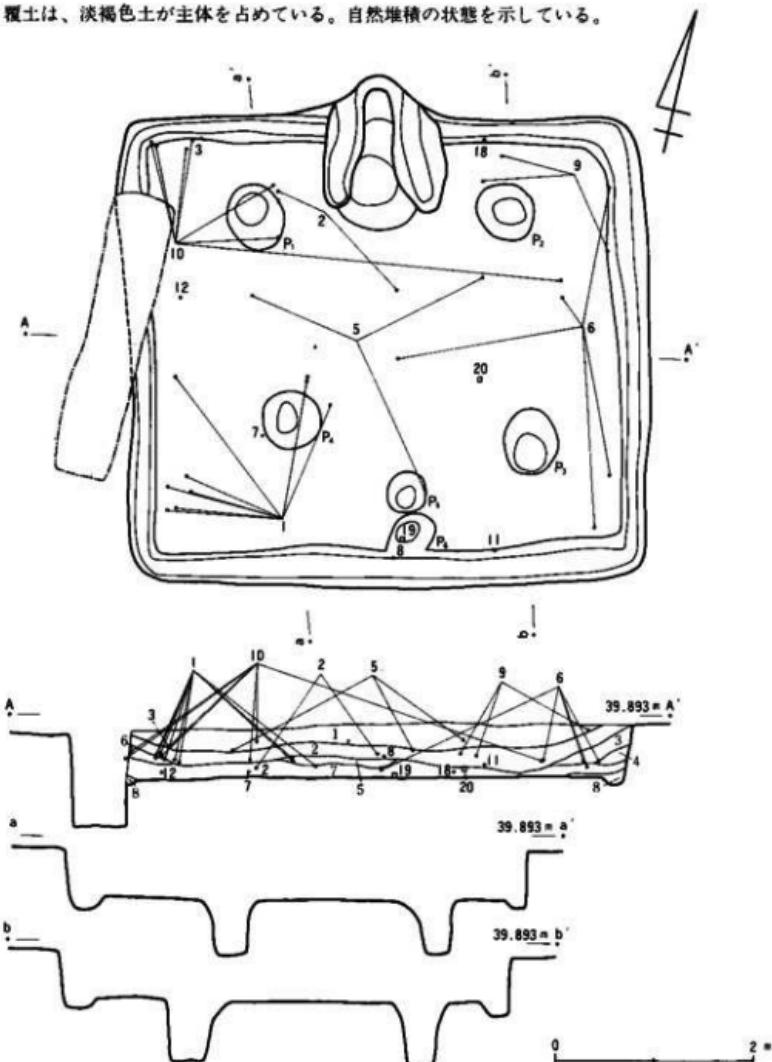
本住居跡は、調査区の北側A4区に位置しており、021号住居跡が南へ約8mの距離にある。北壁側は、上面を削平されて遺存が悪い。

平面形は、方形を呈する。規模は、 $5.0 \times 4.9\text{m}$ を測り、主軸方位は、N-55°-Wとなる。床面は、若干起伏が認められるが、全体に堅緻な状態である。壁の遺存は全体に悪く、東から南側で高さ18.5~6mを測る。周溝は、カマド下で途切れている。北隅では不明確である。幅20cm前後、深さ8~3cmを測る。ピットは、5ヶ所で検出されている。住居の対角線上に配されるP₁~P₄が主柱穴である。径70~56cm、深さ63~55cmを測る。北隅に掘り込まれたP₅は、貯蔵穴であろう。長径98cm、深さ32cmを測る。

カマドは、北西壁の中央に灰褐色砂質粘土を主材として構築される。上面を削平されている。天井部は崩落している。袖は、壁側から直線状に造り出されており、内側でやや弓なりになっている。火床部は、床面を円形に掘り込む。煙道から煙出口の立ち上がりは、緩やかである。遺物は、分散した出土状態である。すべて床面より上位で出土しているが、本跡に伴うもの

であろう。

覆土は、淡褐色土が主体を占めている。自然堆積の状態を示している。

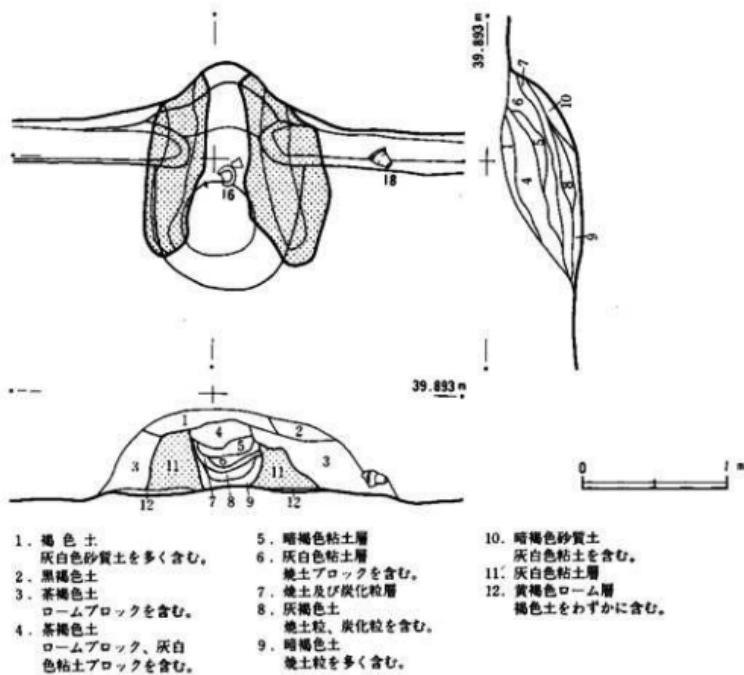


1. 暗褐色土 やや黒味を帯び
ローム粒を多く含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック
焼土粒を含む。
3. 淡褐色土

4. 暗褐色土 灰化材・焼土粒
をわずかに含む。
5. 暗褐色土 灰白色砂質土、
灰化材を含む。

6. 暗褐色土 灰白色砂質土を
多く含む。
7. 淡褐色土 烧土粒を含む。
8. 淡褐色土

第75図 021号住居跡実測図 (1/60)



第76図 021号住居跡カマド実測図 (1/40)

023号住居跡 (第79、80図・図版40)

本住居跡は、調査区の中央A7区に位置しており、北東側に019号住居跡が隣接している。住居跡の約半分は西側の調査区外にのびるため、全体を検出するには至っていない。

平面形は、方形を呈するものと思われる。規模は、東壁側で5.30mを測る。主軸方位は、N-2.5°-E程度となる。

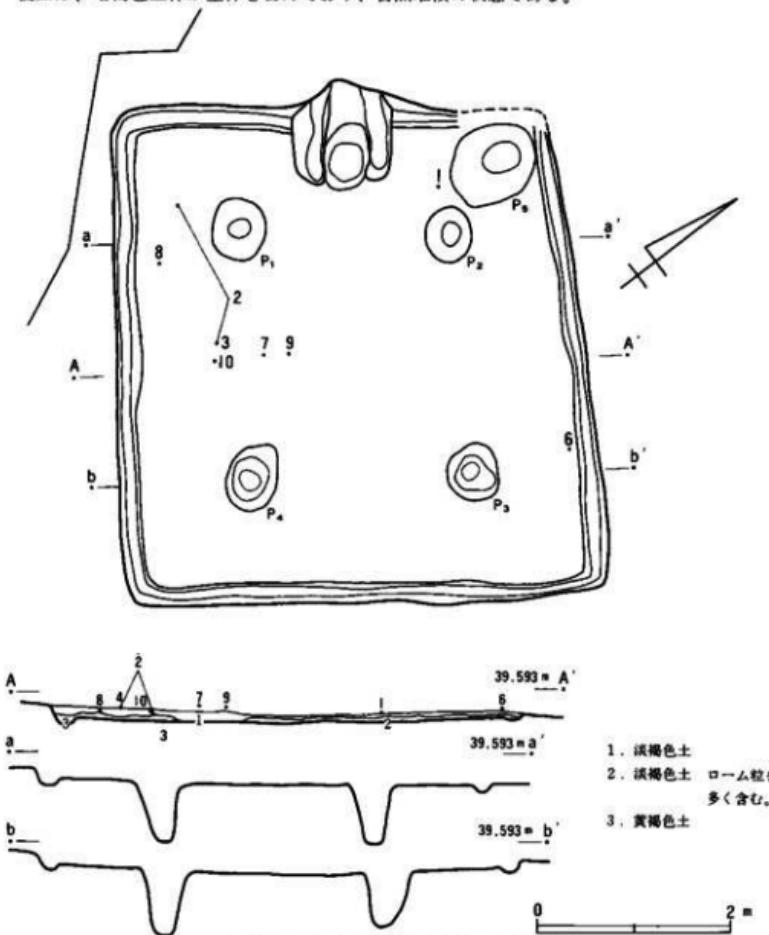
床面は、全体に平坦で、堅緻な状態である。壁は、垂直に立ち上がっている。しっかりとしめた遺存状態である。確認面からの深さは、75.5~68cmを測る。周溝は、カマド下で途切れる。幅20cm前後、深さ10cm前後である。ピットは、2ヶ所より検出されている。相方とも、住居跡の中央部に向かって、やや斜めに二段に掘り込まれている。径78~62cm、深さ58~52cmを測る主柱穴である。

カマドは、北壁のほぼ中央に灰白色砂質粘土を主材として構築されている。左袖の一部が調査区にのびるため、全体を検出していない。天井部は、崩落している。壁外への掘り込みは、

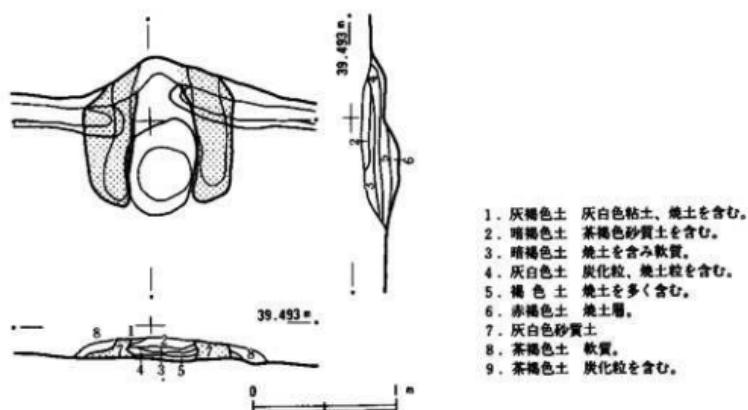
三角形状を呈する。掘り込みは浅く、最奥部で壁より20cm程である。袖は直線上に造り出されるが、焚口部で幅がせまくなっている。袖の底面は、壁寄りの部分で地山を高く掘り残しており、住居跡構築時にカマドの位置を決定している状況が指摘されるところである。火床は、床面をほぼ円形に掘り込んでいる。煙道から煙出口にかけての立ち上がりは、傾斜が強く、階段状の掘り方となっている。

遺物は、主体穴間から東壁寄りにかけて出土している。量的には少ない。出土層位が、住居跡の上面に近い位置であるため、本跡との直接的な関連は、少ないようである。

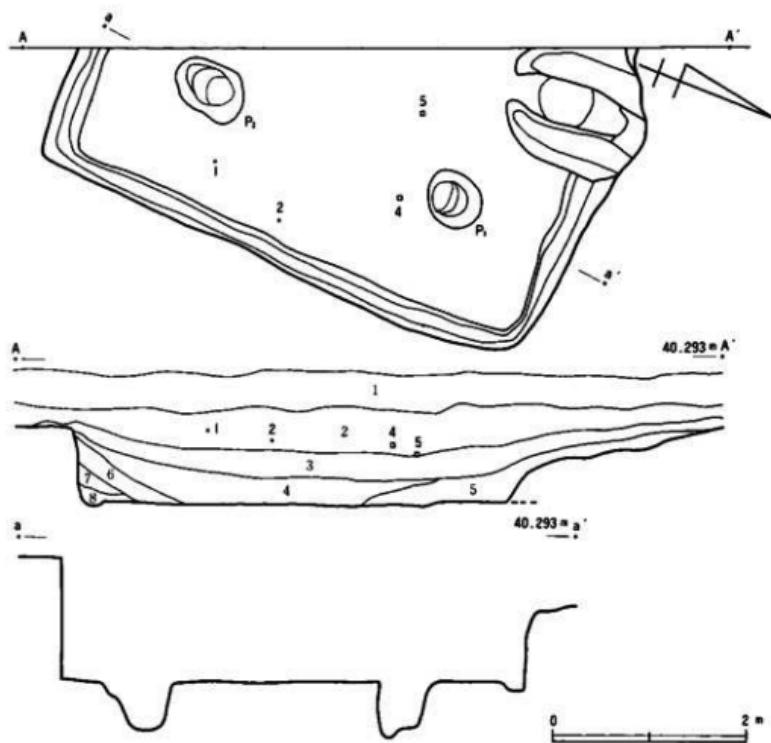
覆土は、暗褐色土体が主体を占めており、自然堆積の状態である。



第77図 022号住居跡実測図 (1/60)



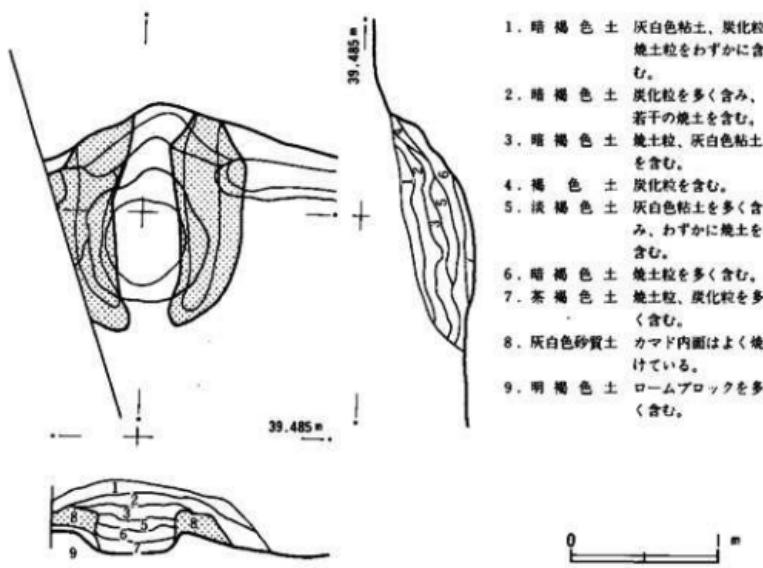
第78図 022号住居跡カマド実測図 (1/40)



第79図 023号住居跡実測図 (1/60)

023号住居跡復土層

- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 1. 黒 色 土 (耕作土) | 6. 暗 褐 色 土 焼土粒を多く含む。 |
| 2. 暗 褐 色 土 ローム粒を多く含む。 | 7. 褐 色 土 ローム粒を多く含む。 |
| 3. 暗 褐 色 土 ローム粒を多く含む。わずかに焼土粒を含む。 | 8. 暗 褐 色 土 わずかにロームブロックを含む。 |
| 4. 暗 褐 色 土 灰白色粘土を多く含む。 | |
| 5. 暗茶褐色土 灰白色粘土、炭化材、焼土粒を多く含む。 | |



第80図 023号住居跡カマド実測図 (1/40)

第3項 遺物

(I) 住居跡出土の遺物

001号住居跡 (第81図・表15・図版41)

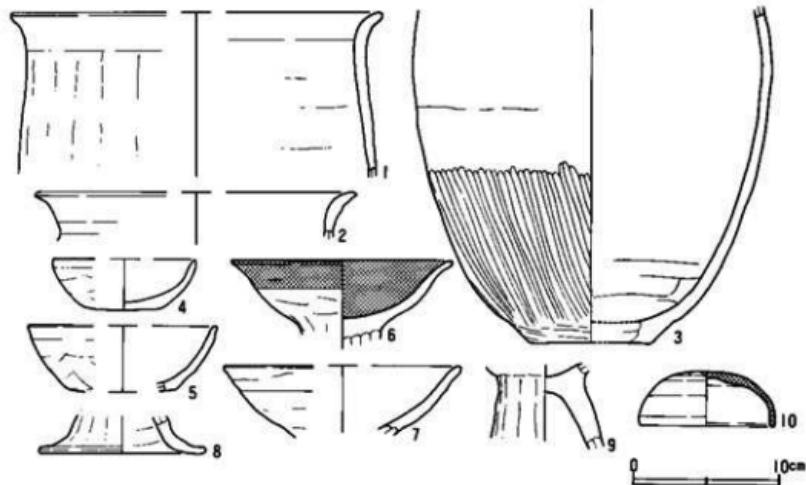
遺物の出土量は少ない。

1～3は、甕である。1、2は広口の甕で、鉢形に近い。丸味のない胴部から、口縁部が短く外反する。1は口唇が丸く、2は尖り気味である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。3は長胴の甕である。上半部と底部中央部を欠く。底部は短く突出して、やや厚い。胴部はゆるやかな丸味をもつ。胴部はヘラケズリが施されるがナデのため不明瞭である。下部にやや細かいヘラナデが縱方向に施される。

4、5は、壺である。丸底に近い平底で、体部がゆるやかに内聳して立ち上がり、口縁部に至る。4は口縁部が小さく直立し、口唇は尖り気味である。5は口縁部が短く、小さく外反する。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。4は内面にヘラミガキが施される。

6～9は、高壺である。6、7は壺部である。大きく開いた体部から口縁部が外反する。口唇は丸い。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。内面にナデが施されるが、ミガキ状にやや光沢がある。8はラッパ状に開いた壺部である。9は接続部で、厚さは薄い。

10は、須恵器の壺蓋である。ほぼ半球形で、端部は丸い。

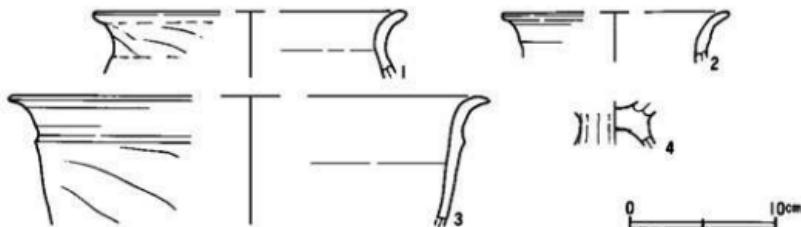


第81図 001号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

002号住居跡（第82図・表16）

住居跡の遺存は悪く、遺物は細片で、出土量は少ない。

1、2は、甕の口縁部である。強く短く外反した口縁部で、口唇は丸い。ヨコナデが施される。3は、甕と思われる。鉢形を示し、胴部との口縁部との境に段をもつ。口縁部は強く短く外反し、口唇は尖り気味である。4は、高坏の接続部である。裾部はかなり開くと思われる。



第82図 002号住居跡出土遺物実測図（1/4）

003号住居跡（第83図・表17・図版41）

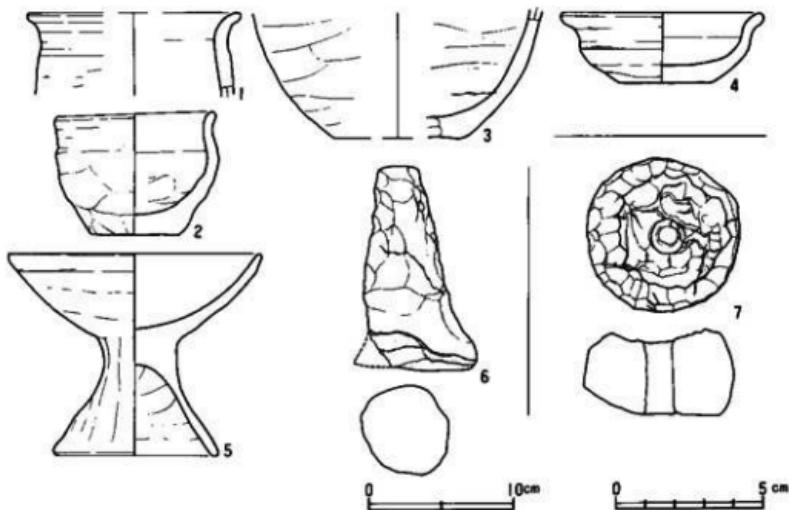
住居跡の遺存は悪く、遺物は細片で、出土量は少ない。

1～3は、甕である。1は広口で、胴部と口縁部との境に段をもつ。口縁部は短く外反し口唇は丸い。2は小型の甕である。底部は厚く、胴部はほぼ半球形である。胴部と口縁部との境が段状になる。口縁部は直立し、上部が小さく外反する。口唇は丸い。器壁は全体に厚い。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。3は底部である。厚手で、ほぼ半球形の胴部になるとされる。ヘラケズリが施される。

4は、坏である。平底で厚手の底部から体部がゆるやかに内脣して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はほぼ直立し、上部で強く短く外反する。口唇は丸い。器壁は全体に厚い。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。3、4は二次的に火をうけたらしく、器面がかなり荒れて、もろくなっている。

5は、高坏である。坏部は、体部が内脣しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇は丸い。脚部は、接続部がやや厚く、裾部がラッパ状に開くが、端部の反りはなく丸い。口縁部にヨコナデ、体部から脚部にかけてヘラケズリの後にナデが施される。坏部内面はヘラミガキが施される。器面が全体に磨耗して、荒れている。

6は、土製支脚である。縦長の截頭円錐形を示す。7は、土製紡錘車である。器面全体に細かいケズリが施されている。



第83図 003号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

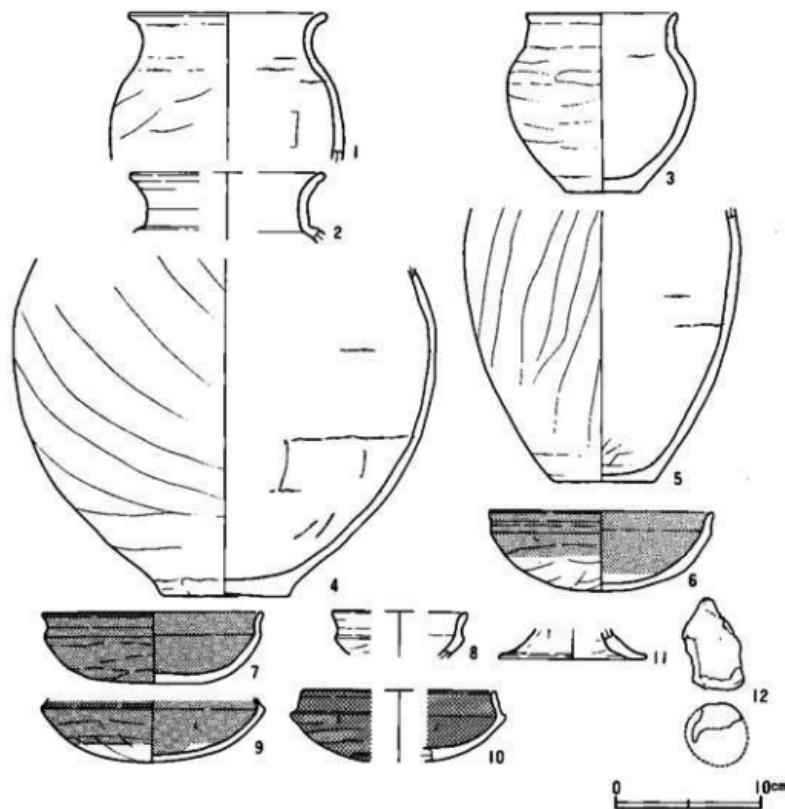
004号住居跡 (第84図・表18・図版41、42)

住居跡の遺存は悪い。遺物は細片で、出土量は少ない。

1～5は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1、2はほぼ同形と思われる。丸味のある胴部から口縁部がゆるやかに外反して立ち上がり、上部でやや強く外反する。口唇は丸い。2は胴部との口縁部との境に段をもつ。3は小型の甕である。平底で、胴部はやや扁平な玉子形である。口縁部は直立し、上部が小さく外反し、口唇は尖り気味である。器面がかなり磨耗している。4は胴部である。ほぼ球形で、底部が短く突出する。5はやや丸味のある縦長の胴部である。底部中央部が薄くなっている。

6～10は、壺である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。6は底部がやや薄く、体部はやや扁平な半球形を示す。体部と口縁部との境に棱をもつ。口縁部はほぼ直立し、口唇が小さく外反する。7も6とはほぼ同形であるが、底部はやや平底に近く、口縁部の外反が大きい。8はやや小型である。9は口縁部が内傾して立ち上がる。10は受部をもち、口縁部は内傾して立ち上がり、口唇が小さく外反する。

11は、高壺の胴部である。裾部がラッパ状に大きく開く。12は、土製支脚片である。円筒形を示すと思われる。



第84図 004号住居跡出土遺物実測図（1/4）

005住居跡（第85図・表19・図版42）

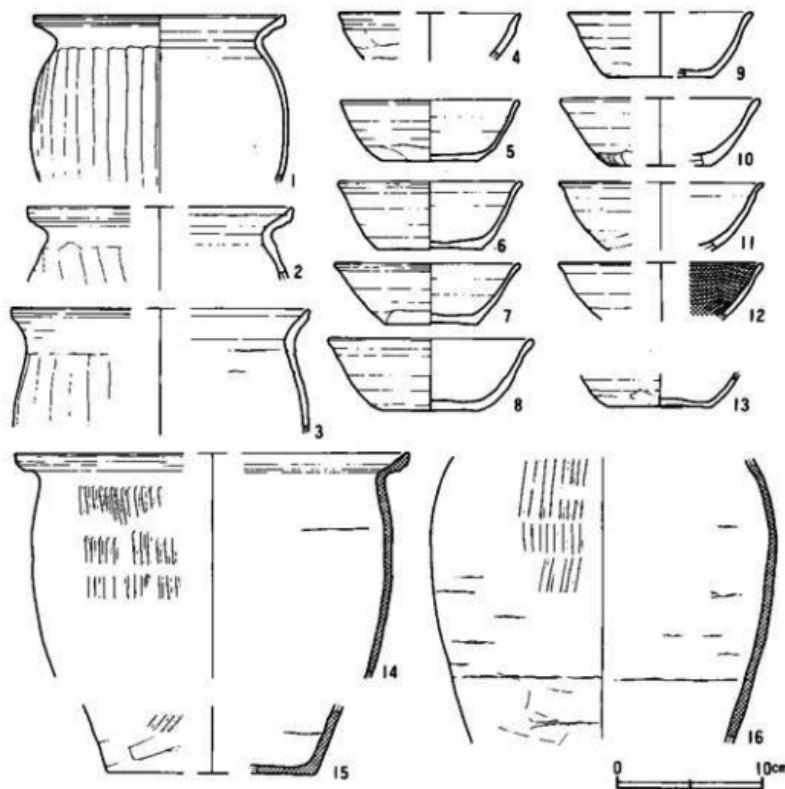
住居跡の遺存は悪く、遺物は少量である。

1～3は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。丸味のある胴部に、「く」字状の口縁部をもつ。口唇が小さく、つまみ出された様に外反し、受け口状になる。

4～13は、壺である。4は口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反して短く立ち上がり、口唇は尖り気味である。ロクロ未使用である。5～13はロクロを使用している。平底の底部から体部がゆるやかに内彎して立ち上がり、口縁部が小さく外反する。口唇は丸い。7は体部がやや直線的である。11は口縁部の外

反がやや大きく口唇は尖り気味である。6、8、9～11は口縁部にしめがみられる。5、7～11、13は体部下部にヘラケズリが施される。5、7～10は底部にヘラケズリが施される。7は回転系切り痕が残る。6、13は回転ヘラケズリが施される。

14～16は、須恵器の甕である。14は丸味の少ない胴部から、口縁部が強く、短く外反する。口縁部は折返されて厚くなっている。口唇は受け口状で尖り気味である。胴部に縱位の叩きが施される。15は底部である。叩き、ヘラケズリが施される。16は胴部である。やや長胴で、縱位の叩き、ヘラケズリが施される。



第85図 005号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

007号住居跡（第86図・表20・図版42、43）

住居跡には拡張の跡がある。遺物は細片で、出土量は少ない。壺には、赤彩されたものが多い。

1～7は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は広口の甕である。底部は中央部が薄くなる。やや丸味のない玉子形の胴部から口縁部が外反して大きく開く。口唇は丸い。内面に調整痕がのこる。2はやや長胴と思われる。胴部と口縁部との境が段状になる。口縁部は外反して立ち上がり、口唇は丸い。ヘラケズリが口縁部にまでおよんでいる。3は広口の甕である。丸味のある胴部から口縁部が短く外反する。口唇は丸い。外面に刻み目状に調整痕がのこる。4はやや広口の甕である。厚手の底部が短く突出し、胴部はやや下脛れて球形で、胴部と口縁部との境が段状になる。口縁部は小さく短く外反する。口唇は丸い。5、6は口縁部である。5は胴部から直立し、上部で強く外反して大きく開く。6はゆるやかに外反する。口唇は丸い。7は底部である。3のような形の甕のものと考えられる。

8～17は、壺である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。18はやや扁平な半球形の体部から口縁部が外反する。体部と口縁部との境に稜をもつ。9～13はほぼ同形である。体部と口縁部との境に稜をもつ。半球形の体部から口縁部が直立し、口唇が小さく外反する。口唇は、11が尖り気味で他は丸い。13は体部下部がかなり薄い。14、15はほぼ同形である。扁平な体部から口縁部がほぼ直立し、上部が外反する。口唇は丸い。16は受部をもつ。口縁部は内傾して立ち上がり、上部で外反する。口唇は尖り気味である。17も受部をもつ。底部が厚く、体部は薄い。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇は上を向く。口縁部下部にしめがある。

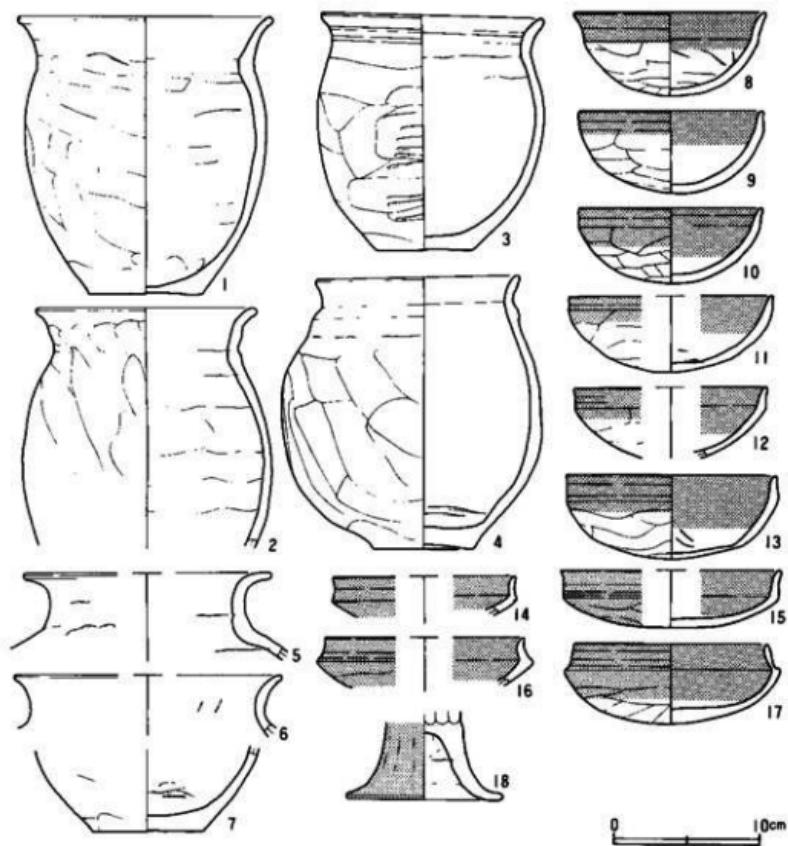
18は、高壺の脚部である。裾部が強く外反し、端部は丸い。

008号住居跡（第87図・表21・図版43）

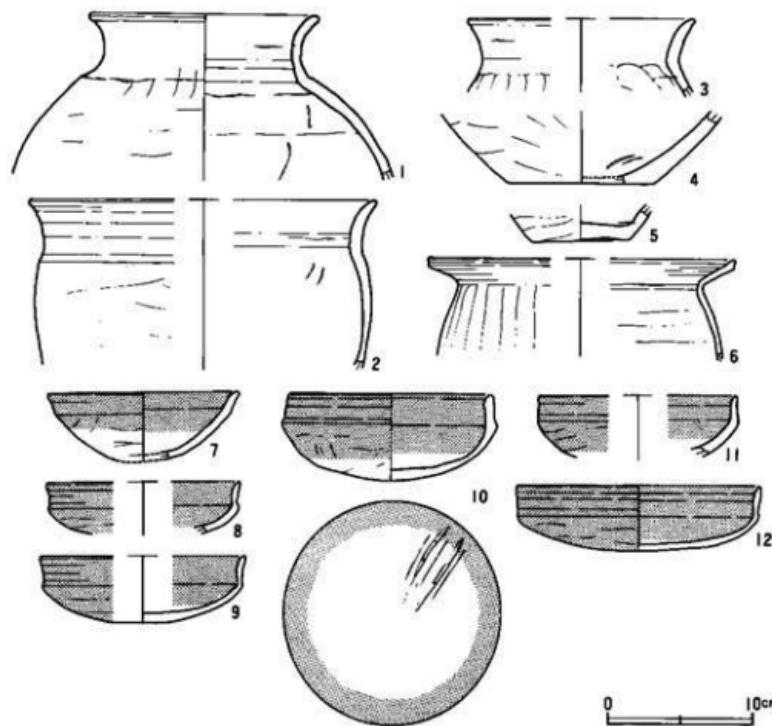
住居跡の遺存は良く、一部重複がある。遺物は少量で、細片である。壺には赤彩されたものが多い。

1～6は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1はほぼ球形と思われる胴部から口縁部が外反して立ち上がり、口唇がやや強く外反する。胴部と口縁部との境が段状になる。2は広口の甕である。やや丸味のない胴部から口縁部が直立し、上部で外反する口唇は尖り気味である。胴部と口縁部との境に稜をもつ。3は口縁部が外傾して立ち上がり、口唇がつまみ出された様に外反する。口縁部がやや厚くなる。4、5は底部である。4はかなり薄い。6は「く」字状の口縁部をもつ。口縁部は大きく開き、口唇がつまみ出された様に立ち上がり、受け口状になる。他の遺物と時期的に差があるので、外からの混入と考えられる。

7～12は、壺である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。7は半球形の体部から口縁部が外傾して開き、口唇が小さく外反し丸い。体部と口縁部との境の稜をもつ。8、9はほぼ同形である。やや扁平な体部から口縁部が直立し、口唇が小さく外反する。体部と口縁部との境に受部状の稜をもつ。10はやや扁平な体部から口縁部がわずかに内彎して立ち上がり、口唇は小さく外反する。明瞭な受部をもつ。体部に5条の擦痕があり、その内2条は、内面にまで達している。口縁部はやや厚く、体部中位が薄い。11は体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部がほぼ直立する。口唇が小さく外反する。12は扁平な体部から口縁部がほぼ直立し、上部でわずかに外反する。口唇は尖り気味である。口縁部下部にしめがあり、受部状になる。



第86図 007号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第87図 008号住居跡出土遺物実測図（1/4）

009号住居跡（第88図・表22・図版43）

後世の溝による搅乱があり、住居跡の遺存は悪い。

1～4は、壺である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。1～3は体部が扁平な半球形で、受部をもち、内面にヘラミガキが施される。1は口縁部が内彎して小さく立ち上がる。口縁は丸い。2は口縁部が内傾して立ち上がり、口縁は丸い。3は口縁部が外傾して立ち上がり、口唇がわずかに外反する。4は体部が薄く、半球形を示す。口縁部はほぼ直立し、口唇は丸い。

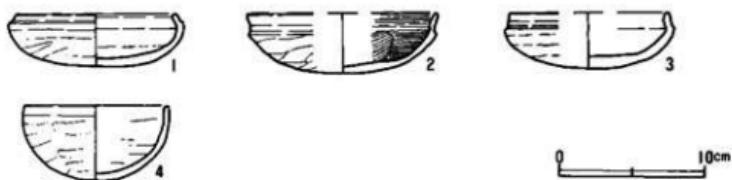
012号住居跡（第89図・表23・図版44）

カマド部分が後世の溝により搅乱をうけているが、他の部分の遺存は良い。遺物の出土量は

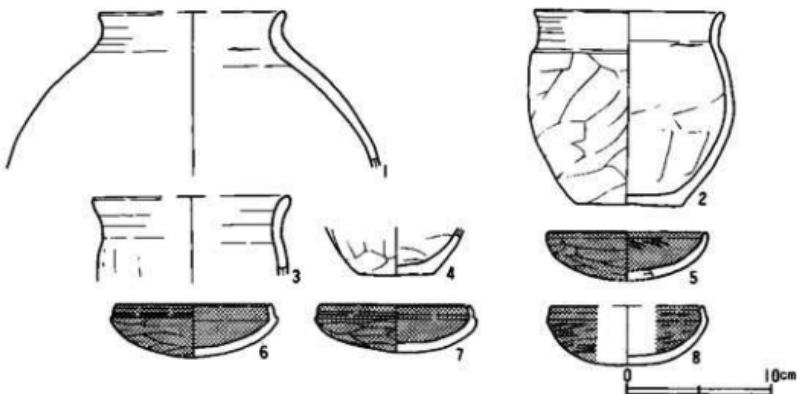
全体に少ない。

1～4は、甕である。1は胴部が球状に大きく張る。胴部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は小さく、短く外反し、口唇は丸い。二次的に火をうけたため器面の荒れが激しい。2は小型の甕である。底部がやや大きく、胴部は玉子形で、胴部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部はゆるやかに外反して立ち上がり、口唇は丸い。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。3は広口の甕である。口縁部はほぼ直立し、上部で外反する。口唇は丸い。二次的に火をうけたためもうくなっている。4は小型の甕の底部である。

5～8は、壺である。丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。5は扁平な半球形の体部から口縁部が短く直立し、口唇は丸い。内面にヘラミガキが施される。6、7は受部をもつ。扁平な半球形の体部から口縁部がやや内凹して立ち上がり、口唇は丸い。内面はナデ調整である。8は体部の外面に部分的にヘラミガキが施される。やや扁平な半球形の体部から口縁部が内傾して立ち上がり、口唇が外反して上を向く。体部と口縁部との境に稜をもち、内面にヘラミガキが施される。



第88図 009号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



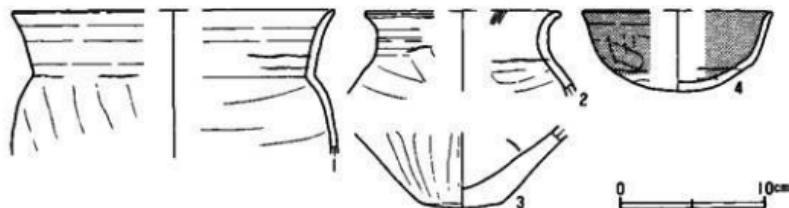
第89図 012号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

013号住居跡（第90図・表24・図版44）

住居跡の遺存は悪い。遺物は少量である。

1～3は、甕である。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。1は広口の甕である。口縁部が外傾して立ち上がり、上半分でゆるやかに外反する。口唇は尖り気味である。口縁部の立ち上がりは高い。2は口縁部がほぼ直立し、上部で外反する。口唇は、ややつまみ出された様になり丸い。3は底部である。小さな底部から胴部が大きく広がると思われる。

4は、壺である。丸底で、半球形の体部から口縁部短く外反する。口唇は尖り気味である。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。



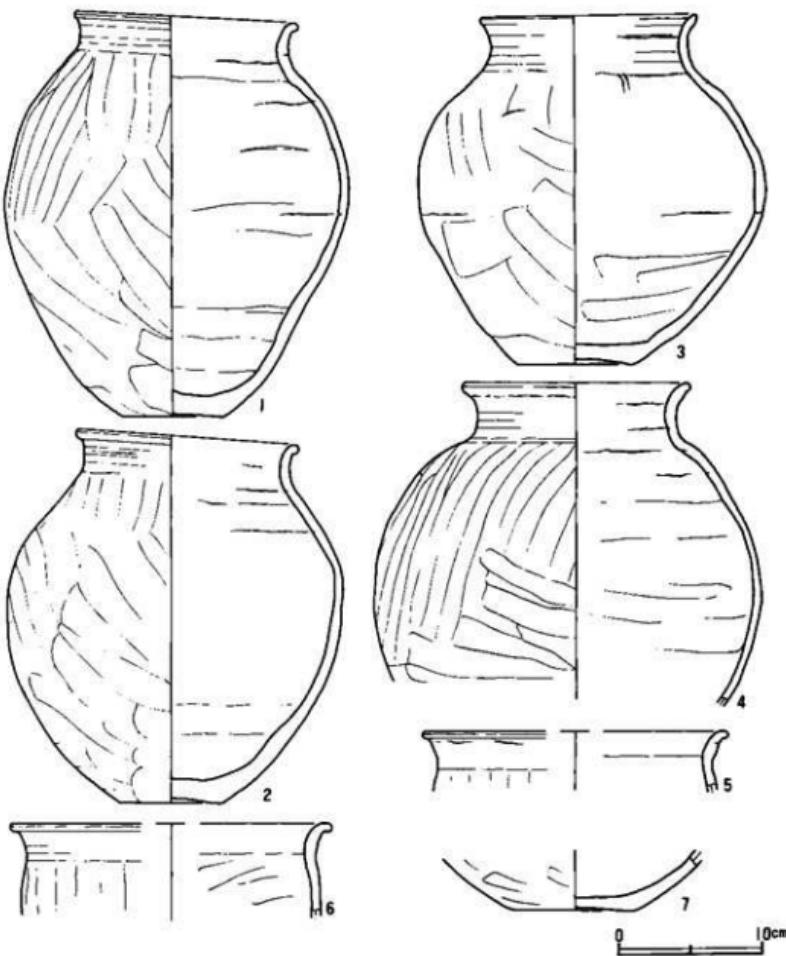
第90図 013号住居跡出土遺物実測図（1/4）

014号住居跡（第91～93図・表25・図版44～46）

住居跡の遺存は良いが、遺物の出土量は少なく、細片が多い。

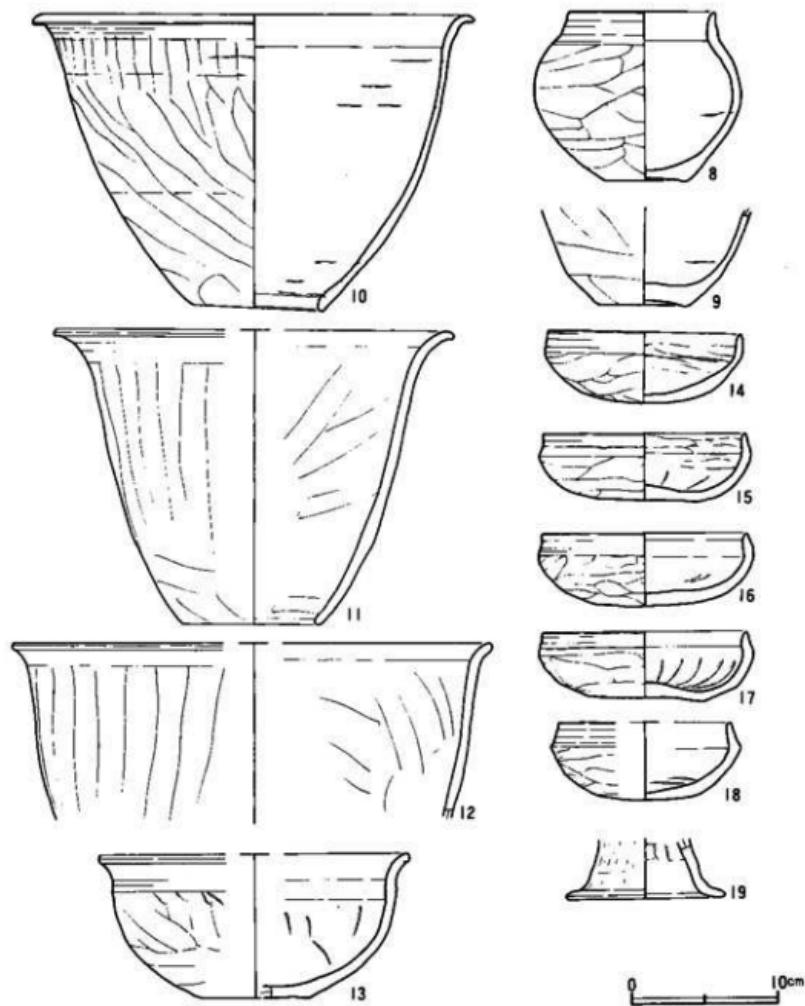
1～9は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は底部がやや厚く、胴部はやや縱長の玉子形である。口縁部は直立し、上部が小さく外反する。口唇は丸い。2も1と同様であるが、胴部が球形に近い。口縁部上部の外反は小さく、玉縁状になる。3は底部がやや厚く、胴部はやや扁平な球形である。口縁部は内傾して立ち上がり、外反しながら口唇に至る。口唇はややつまみ出された様になり丸い。4は胴部はほぼ球形で、口縁部が直立し、上部で外反する。口唇は丸い。胴部と口縁部との境が段状になる。5、6は広口の甕である。口縁部が外反して短く立ち上がる。7は球形の胴部をもつ甕の底部である。8、9は小型の甕である。8は胴部がやや扁平な球形で、口縁部がやや内傾して上がり、上部で外反してほぼ真上を向く。口唇は尖り気味である。9は底部である。やや厚く、胴部は玉子形になると思われる。

10～12は甕である。深鉢の底を取った形である。胴部は、砲弾形で底にむかってすぼまっている。口縁部は外反する。10、11は上部の反りが大きく、口唇が下方を向く。10、11は口唇が尖り気味で、12は丸い。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。



第91図 014号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)

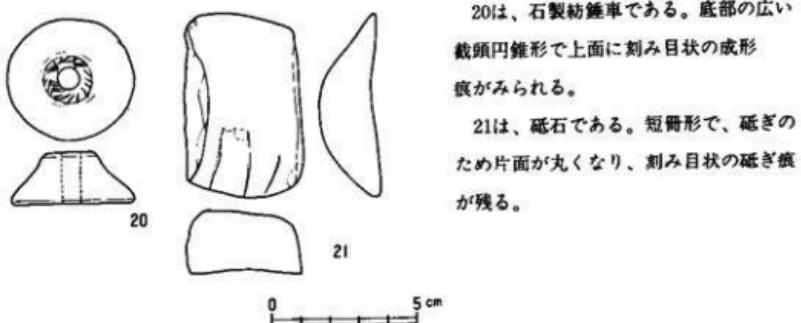
13~18は環である。13は大型の環である。平底で、体部はやや扁平な半球形である。体部と口縁部との境に綾をもち、口縁部が外反する。口唇は丸い。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。14~18は丸底で体部は扁平な半球形である。体部と口縁部との境に綾をもつ。口縁部にヨコナデ、体部にやや粗いヘラケズリが施される。ケズリ痕は明瞭である。14、15には口縁部内面にケズリ状の明瞭なナデが施される。14は口縁部が直立し、口唇は尖り気味である。15~17は口縁部が内傾して立ち上がる。口唇は小さく外反し、丸い。内面に刻



第92図 014号住居跡出土遺物実測図(2)(1/4)

み状の調整痕がみられる。16、17は内面のナデがミガキ状に光沢をもつ。18は体部が14~17と比べてやや丸味をもち、口縁部は外傾して立ち上がり口唇に至る。口唇は丸い。

19は、高坏の脚部である。ラッパ状に開き、裾部が強く外反する。外面はヘラケズリの後にナデ、内面にはナデが施される。



第93図 014号住居跡出土遺物実測図(3) (1/2)

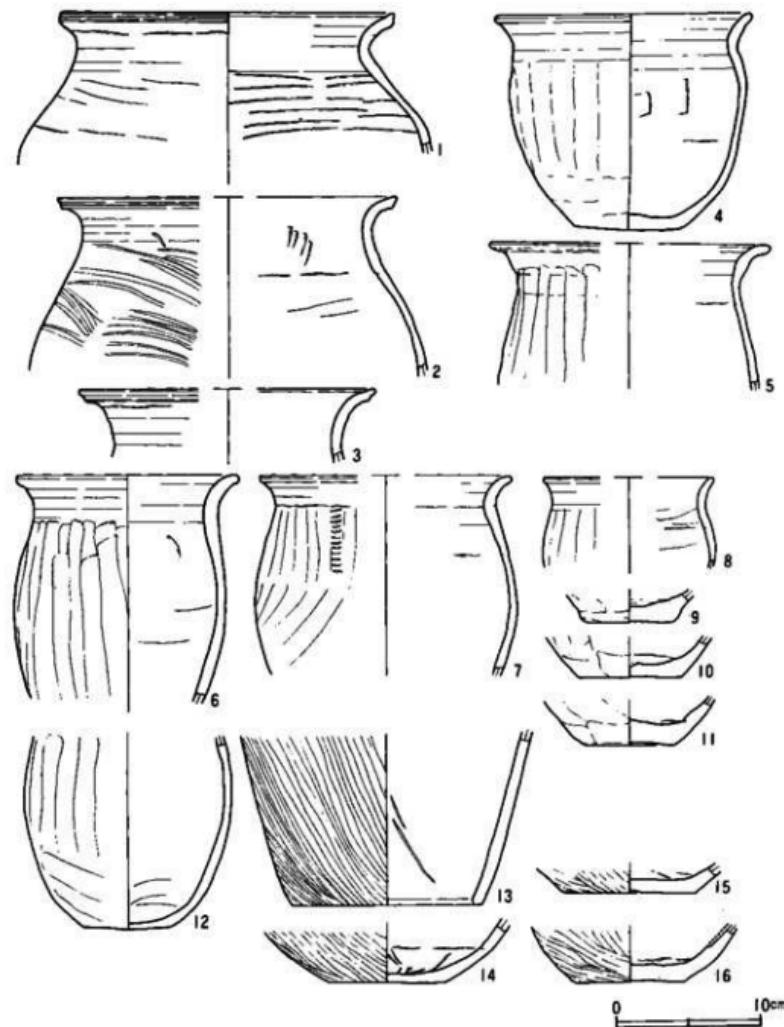
017号住居跡 (第94~97図 表26・図版46、47)

住居跡は後世の溝により、一部搅乱をうけているが、全体に遺存は良い。遺物の出土量は多く、甕片が多い。

1~12、14~16は、甕である。1~8は口縁部~胴部である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。2は胴部に部分的にヘラナデが施される。1~3は玉子形と思われる胴部から口縁部が強く外反する。口唇は帯状で、上端がつまみ出されて、受け口状になる。4~8は広口の甕である。4は胴部がやや扁平な玉子形を示し、口縁部は外反する。口唇は丸く、やや玉縁状になる。5~8はやや長胴と思われる。口縁部は短く外反する。5は口唇が尖り気味で口縁部中央が厚くなる。6~8は口唇が丸く、6は玉縁状になる。9~11は底部である。5~7の形の甕のものと考えられる。12は長胴の甕である。底部に木葉痕がみられる。14~16は胴部がかなり張ると思われる甕の底部である。ヘラナデが施され、14、15には木葉痕がみられる。胴部の立ち上がりから、1~3の形の甕の底部と思われる。

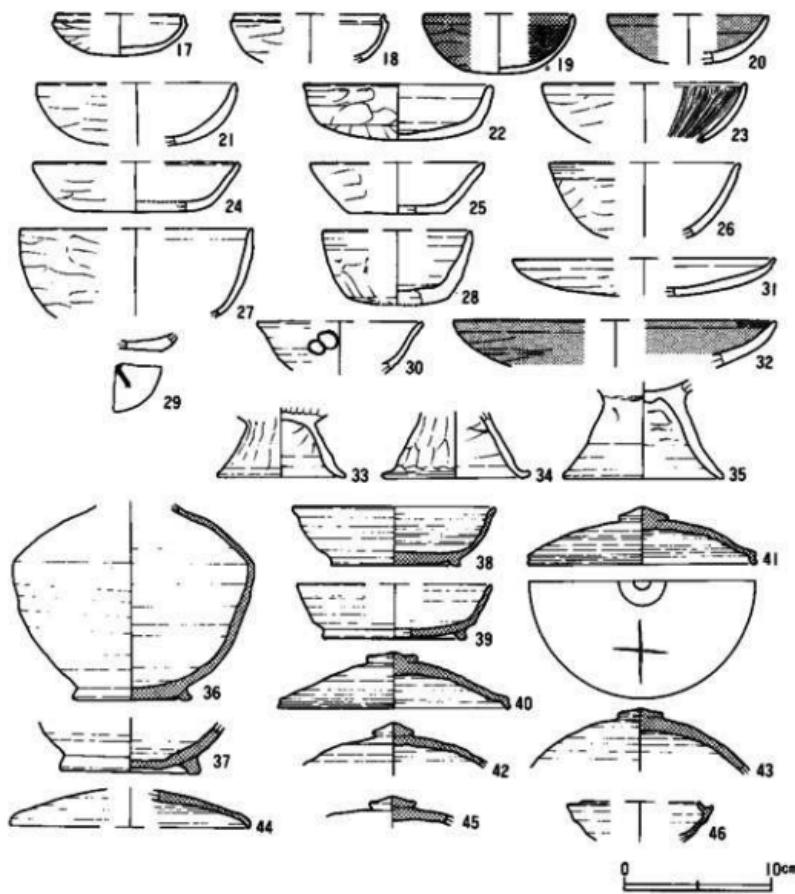
13は、瓶である。14~15と同様にヘラナデが施される。

17~30は、环である。17、18は丸底で体部は扁平な半球形である。受部をもち、口縁部は内傾して立ち上がる。口唇は丸い。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施される。19は丸底の环である。半球形の体部から口縁部が直立する。口唇は丸い。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施される。20は丸底の环である。体部のケズリ痕はナデによって消されている。21は丸底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。口唇は尖り気味である。22は平底に近い丸味である。底部にヘラケズリ、口縁部はヨコナデと一部にヘラケズリが施される。23は内面に放射状のヘラミガキが施される。24、25は平底である。体部が外傾して立ち上がり、直接的に口縁部へと至る。口縁部と体部との明瞭な区



第94図 017号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)

別はない。24は口縁部内側が沈線状にくぼむ。内面にヘラミガキが施される。26、27はやや深い目の坏である。半球形の体部をもつ。26は口縁部がゆるやかに外反する。27は口縁部が直立し、上部で小さく外反する。28はやや厚手である。底部はほぼ平底で、体部は外傾して立ち上がり



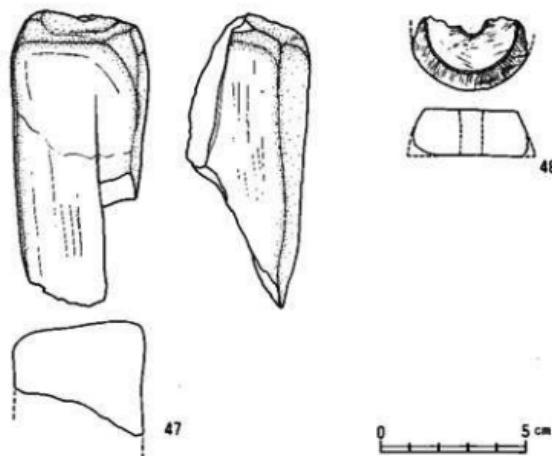
第95図 017号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4)

ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口唇は尖り気味である。29、30は墨書きが施される。29は底部、30は体部である。両者ともロクロを使用している。

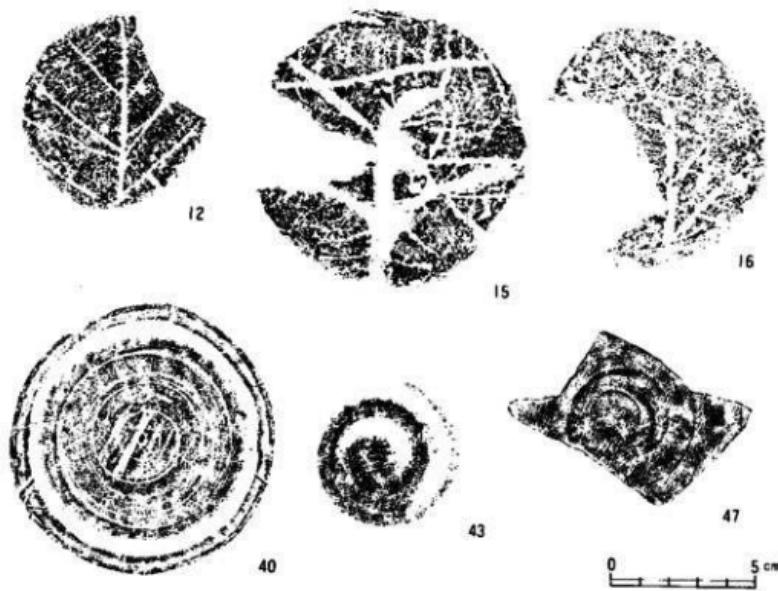
31、32は盤である。扁平な体部から、口縁部が外傾して立ち上がる。31は口縁部がつまみ出された様になる。

33~35は、高環の脚部である。ヘラミガキとヨコナデが施される。ラッパ状に大きく開き、高さはやや低い。

36~46は、須恵器である。すべてロクロを使用している。36は長頸瓶と思われる。頸部より上を欠く。高台をもち、胴部上部に稜をもち、「く」字状になる。37は36と同形の底部である。



第96図 017号住居跡出土遺物実測図(3) (1/2)



第97図 017号住居跡出土遺物拓影図 (1/2)

38、39は高台付坏である。高台は断面四角形である。38は体部が外傾して立ち上がり、ゆるやかに内彎しながら口縁部に至る。口縁部は外反し、口唇は丸い。底部がやや厚い。39は体部が外傾して立ち上がり、直接的に口縁部に至る。40~45は坏蓋である。扁平な宝珠形のつまみをもち、天井部に回転ヘラケズリが施される。端部にかえりをもち、40、41はかえりがつまみ出された様に開く。44は直下し、尖り気味である。41、42はつまみの頂部がもり上がっている。41はヘラ記号で「×」が施される。46は受部をもつ环である。丸底で半球形の体部から、口縁部が内傾して低く立ち上がる。他の須恵器と時期に差があるので外からの混入と考えられる。47は、砾石である。方柱形で、三面が使用されて磨耗している。48は、石製紡錘車である。扁平な截頭円錐形で、表面に細かな擦痕をもつ。

018号住居跡（第98~100図・表27・図版47、48）

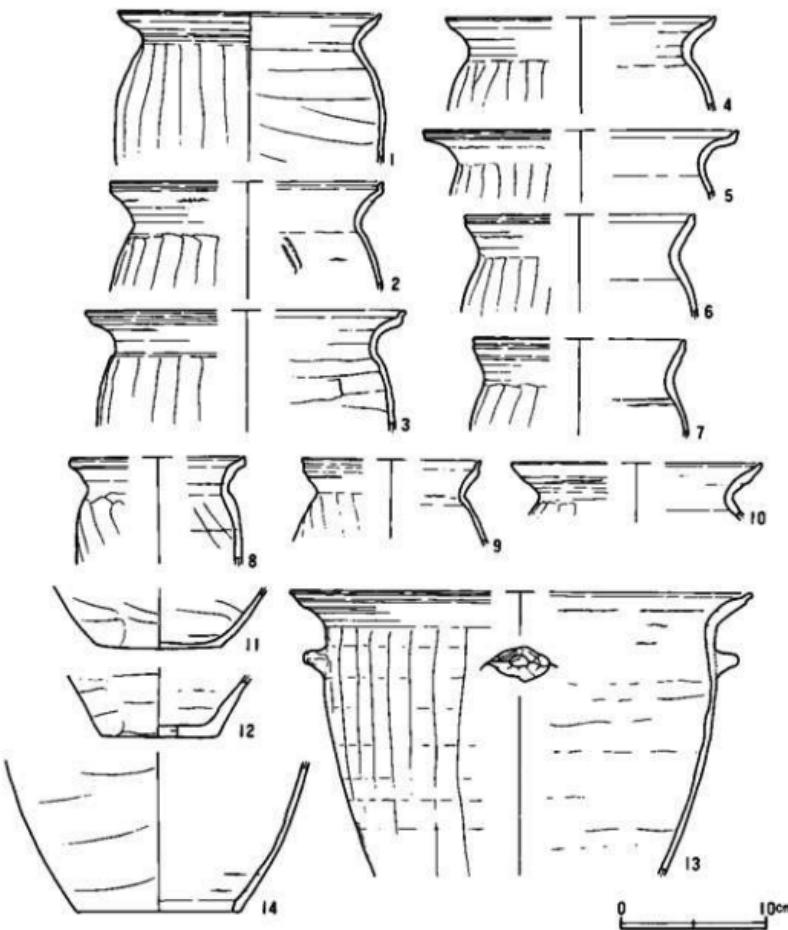
住居跡の遺存は良く、拡張の跡がみられる。遺物は、出土量に比べて、実測可能な破片が多い。

1~12は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1~10は口縁部である。「く」字状を示し、口唇がつまみ出されたように小さく立ち上がり受け口状になる。3、5は口縁部が強く外反する。6~9は口縁部の外反が小さい。8は口唇の立ち上がりが小さく、断面が三角形を示す。11、12は底部である。全体に器壁が薄い。

13、14は、瓶である。13は広口の深鉢形を示す。口縁部は強く外反する。口唇がつまみ出されたように小さく外反し、受け口状になる。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施され、胴部上部に把手が付く。全体に器壁が薄い。

15~24は、坏である。ロクロを使用してつくられている。平底の底部から体部がゆるやかに彎曲して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は小さく外反する。15~18は体部下部にヘラケズリが施される。19~22、24は体部下部に回転ヘラケズリが施されている。23は器壁がやや厚い。17は底部に墨書が施されている。墨書は「宮之里家……」と思われる。24は内面にヘラミガキが施される。第100図は坏の底部拓影図である。ヘラケズリが施され、17、22、24は回転糸切痕がみられる。

25~27は、須恵器である。25は甕である。口縁部と胴部は接合しないが、同一個体と考えられる。胴部はほぼ球形で、縦位の叩き目が施される。口縁はラッパ状に大きく開き、上縁部が折り返されて帯状になり、厚くなる。口唇は小さく立ち上がり、やや受け口状である。26は瓶と考えられる。やや丸味のない胴部から口縁部が小さく外反する。口縁部は折り返されて帯状になり、11唇は内彎して受け口状である。胴部上部に四角の把手が付く。27は長頸瓶の胴



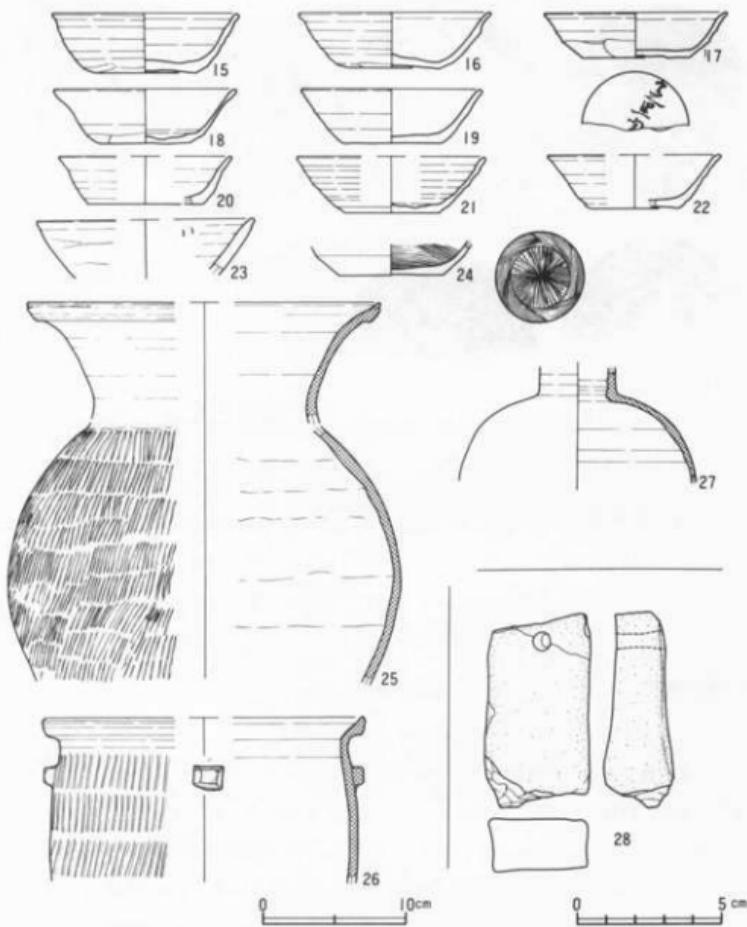
第98図 018号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)

部上部である。球形の胴部から頸部がほぼ垂直に立ち上がる。胎土は精製され、焼成も堅緻である。

28は、磁石である。短骨形で、一端に孔をもつ。

019号住居跡（第101図 表28・図版48）

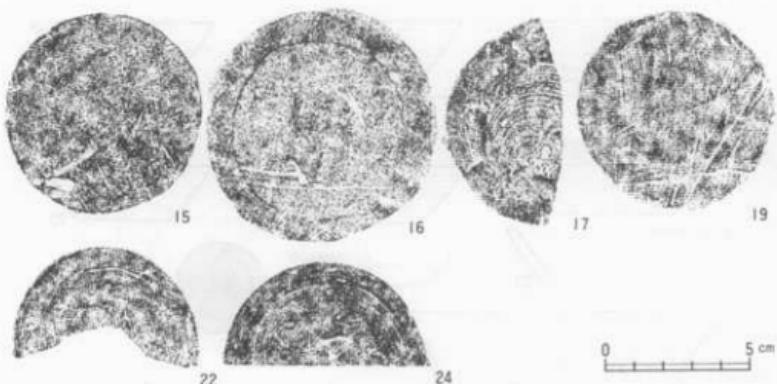
住居跡は、後世の溝により搅乱されている。遺存は悪く、遺物も少量である。



第99図 018号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4・1/2)

1~8は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。口縁部は「く」字状を示し、口唇がつまみ出されたように立ち上がり、受け口状になる。1はやや長胴である。口唇の立ち上がりが大きい。4はほぼ球形の胴部をもつ。8はやや小型の甕の底部である。

9、10は、環である。口クロ成形である。9はゆるやかに内脣した体部から、口縁部が小さく外反し、口唇は丸い。10は、高台付環の底部である。底部には回転糸切痕がのこる。また、墨書が施されている。墨書は「子和水」である。内面には、ヘラミカキと黒色処理が施されて



第100図 018号住居跡出土遺物拓影図（1/2）

いる。

11～13は、須恵器である。11、12は甕である。広口で、胴部の丸味はあまりなく、口縁部が小さく外反する。口縁部は折り返されて帯状になり、口唇が内脣して受け口状になる。13は高台付環の底部である。やや高いしっかりとした高台をもち、体部下部に稜をもつ。

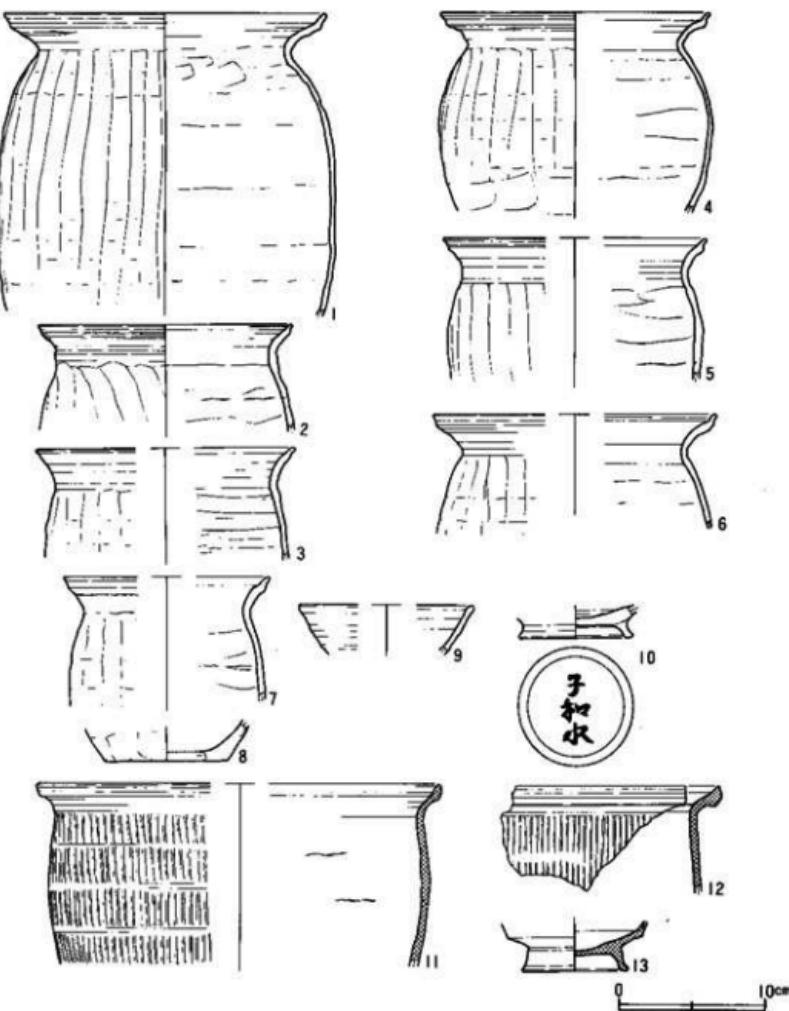
020号住居跡（第102図 表29・図版48、49）

住居跡の遺存は良く、遺物の出土量も多い。

1～8は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1は「く」字状の口縁部をもつ。口唇がつまみ出されたように小さく立ち上がり、受け口状になる。2は丸味のある胴部から口縁部が短く、強く外反する。口唇はつまみ出されたように外反し、受け口状になる。3は口縁部の外反が大きく、口唇は丸い。4は口縁部が大きく外反する。口唇は小さく立ち上がり、断面は三角形を示す。5～7は底部である。5、6は胴部が玉子形、7は球形を示すと考えられる。8は小型の甕である。やや扁平で、すんぐりとした形である。胴部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部が直立し、口唇は外反して丸い。

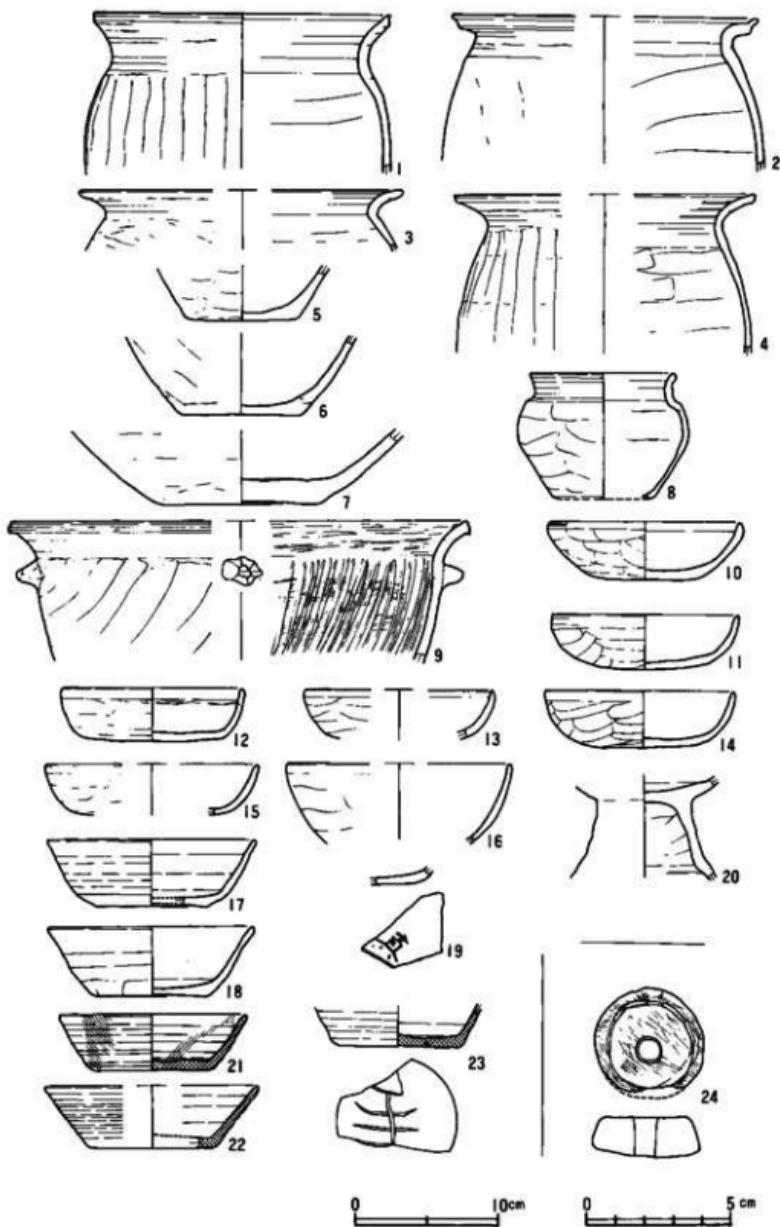
9は、底部を欠くが、瓶と思われる。深鉢形を示し、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。口縁部は外反し、口唇が面取りされたようになり、断面は四角形を示す。口唇のナデは沈線状を示す。胴部上端に把手をもつ。内面にヘラケズリが施される。

10～19は、环である。10～16はロクロ未使用の环である。丸底に近い平底で、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。内面には、ヘラミガキが施される。体部はゆるやかに内脣して立ち上がり、口縁部はほぼ垂直で、口唇は真上を向き丸い。16はやや底の深い环である。



第101図 019号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

12は内面にススが付着し、底部に木葉痕がみられる。17~19はロクロを使用している（右回転）。17は体部下位に回転ヘラケズリ、18にはヘラケズリが施される。底部にはヘラケズリが施されている。平底の底部から体部が棱をもって外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反し、口唇は丸い。19は底部で、墨書「真」が書かれている。



第102図 020号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

20は、高坏である。外面は磨耗のため、調整は不明である。坏部内面にヘラミガキ、脚部内面にナデが施される。

21~23は、須恵器の坏である。平底の底部から体部が外傾して直線的に立ち上がり、口縁部に至る。21は内外面に火ダスキーがみられる。23は底部に焼成前のヘラ描きで「+」が施されている。

24は、石製紡錘車である。扁平の截頭円錐形を示す。表面に成形時の擦痕がみられる。

021号住居跡（第103、104図 表30・図版49、50）

住居跡の遺存は良いが、遺物は小量である。

1~8は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。5、6は胴部にヘラナデが施されている。1はほぼ球形の胴部から口縁部が大きく外反し、口唇は丸い。2~4は外反した口縁部から口唇がつまみ出されたように小さく立ち上がり、受け口状になる。7、8は小型の甕の底部である。8は底部外面に一文字のヘラ描きが施されている。9は丸底で、胴部は球形である。培に近い器形と考えられる。

10、11は、瓶である。深鉢形で、10は胴部中位にやや丸味をもつ。口縁部はゆるやかに外反し、口唇は丸い。10は口縁部にヨコナデ、胴部上位に横方向のヘラナデ、下位に縱方向のヘラナデが施される。11は口縁部にヘラナデ、胴部にヘラケズリが施される。また、口縁部内面にもヘラナデが施されている。

12~16は、环である。12~15は丸底で、体部は扁平な半球形である。12、13はほぼ同形で受部をもち、口縁部が小さく直立する。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施され、内面にヘラミガキが施されている。14は口縁部が外反し、口唇は尖り氣味である。15は口縁部が小さく直立する。16は平底で、体部がゆるやかに内彎して立ち上がり、口縁部は小さく外反する。体部下位にナデが施される。

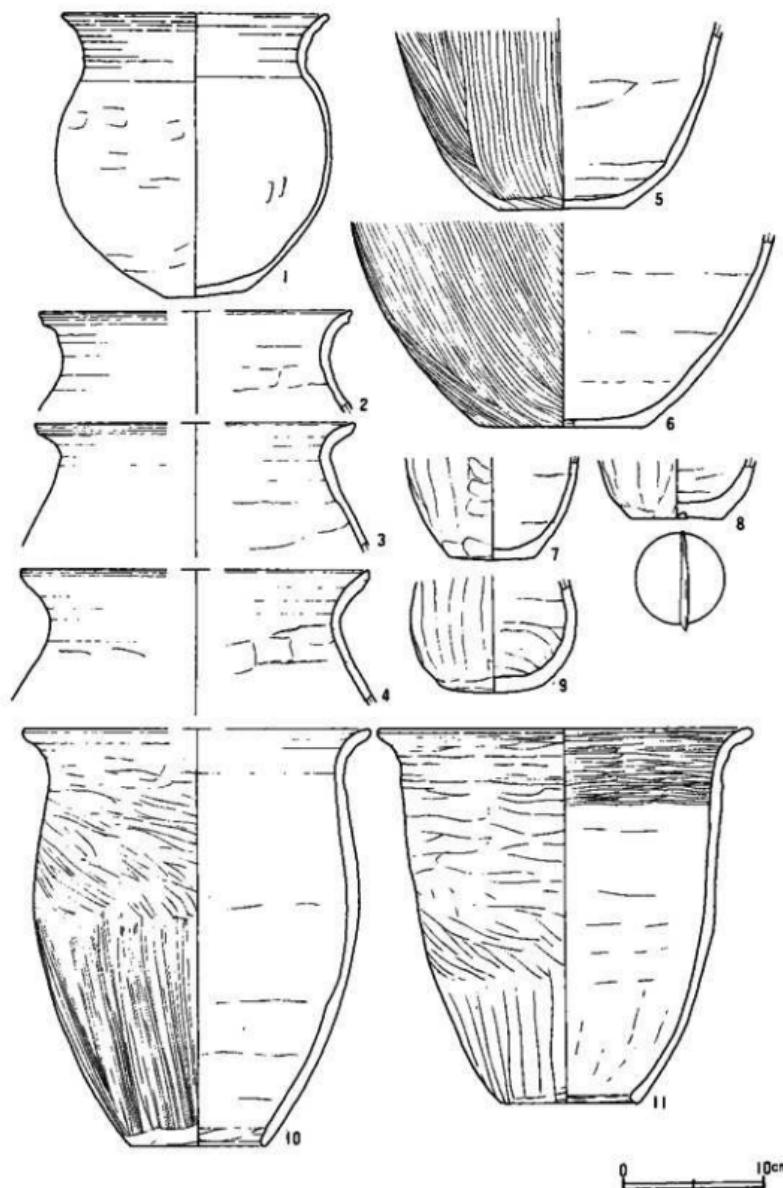
18は、土製支脚である。すんぐりとした円錐形を示す。19は、砥石である。方柱状を示す。

022号住居跡（第105図 表31・図版50）

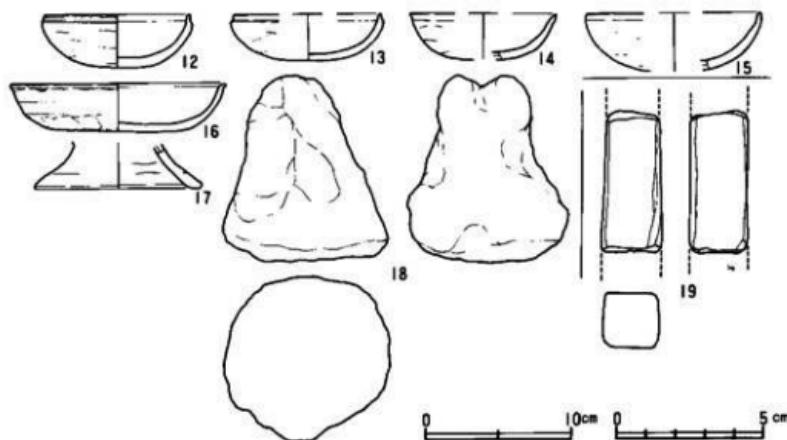
住居跡の遺存は悪く、遺物の出土量も少ない。

1~3は、甕である。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。1、2はやや長胴の甕である。口縁部がゆるやかに外反する。3はやや小型の甕である。平底で、ほぼ半球形の胴部から口縁部が外傾して短く立ち上がり、口唇は丸い。

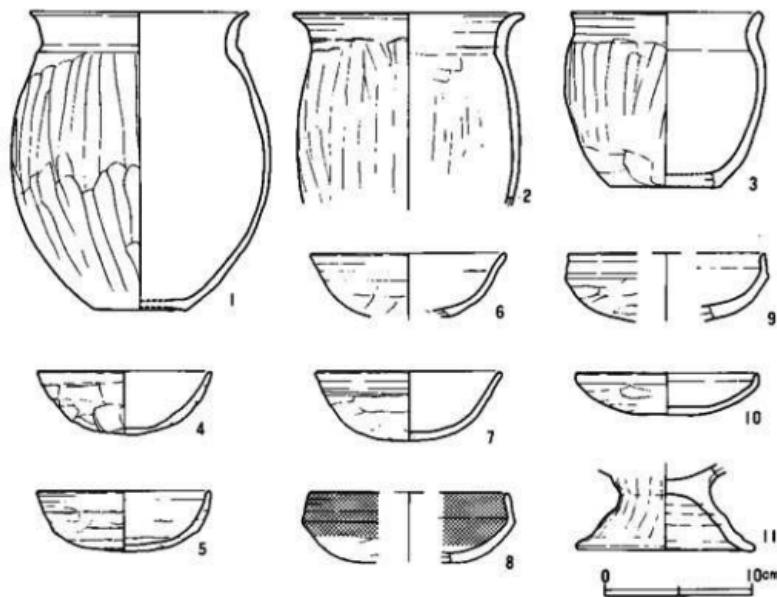
4~10は、环である。丸底で、体部は扁平な半球形である。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。4~7はほぼ同形である。4、5は口縁部がごくわずかに内彎する。6、



第103図 021号住居跡出土遺物実測図(1) (1/2)



第104図 021号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4・1/2)



第105図 022号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

7は口縁部が上半部でわずかに外反する。4はヘラケズリ跡が明瞭である。8、9はほぼ同形で、体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾して立ち上がり、9はわずかに内凹する。8は赤彩が施される。10は体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部が短く直立する。内面にヘラミガキと黒色処理が施される。

11は、高坏の脚部である。外面にヘラケズリが施される。高さは低く、裾が大きく広がっている。

023号住居跡（第106図・表32）

住居跡の約半分は調査区域外であるが、遺存は良い。遺物は少量である。

1は、甕である。口縁部にヨコナデ、胸部にヘラナズリが施される。やや丸味のない胸部から口縁部が短く外反し、口唇は丸い。

2、3は、坏である。2はやや大型で、体部にヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施される。平底で、体部は、扁平な半球形である。体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部が外傾して立ち上がる。口唇は丸い。3は平底で体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。



第106図 023号住居跡出土遺物実測図（1/4）

鉄器（第107図・図版53）

鉄鎌（1～4）

1は、鎌身が膳抉三角形式の両丸造りで、刺状突起を有する。茎の下部を欠失している。現存長98mm、刃長24mm、刃幅23mm、莖被幅6mm、厚さ3.5mmを測る。2は、正三角形式を呈する両丸造りで、棘状突起を有する。現存長106mm、刃長25.5mm、莖被幅7mm、厚さ3mmを測る。3は、莖被の大部分を欠く。鎌身は、長三角形式を呈する。鎌のため、造りは不明である。現存長41mm、刃長24mm、刃幅13.5mmを測る。4は、莖被だけである。現存長54mm、幅4mm、厚さ3.5mmを測る。

刀子（7～10）

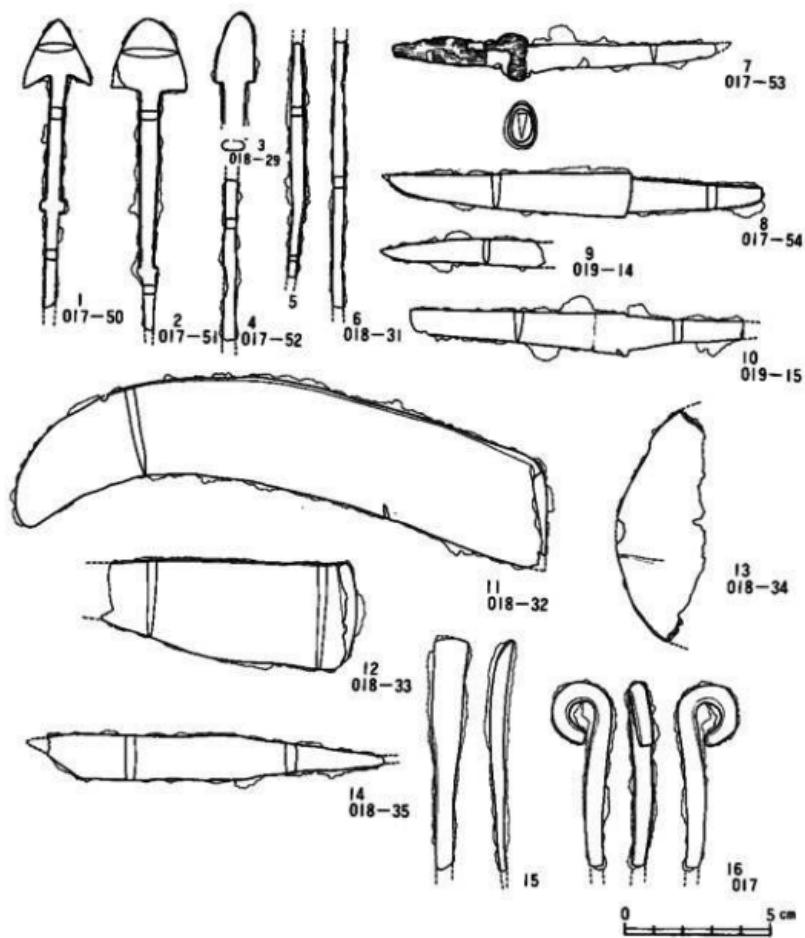
7は、刀身先端を欠失しており、刀身は全体に鎌ぶくれが生じている。締金具から茎部には、木質が付着している。現存長111mm、身長49mm、身幅9.5mm、棟幅2.5mm、締金具長径14.5mmを測る。8は、刀身先端をわずかに欠失する。茎部端は、鎌ぶくれが著しい。現存長128mm、身長82mm、身幅16mm、棟幅3mm、莖長46mmを測る。9は、刀身のみが現存する。鎌のため、遺存は良くない。現存長57mm、棟幅2mmを測る。10は、莖先端を欠失し、刀身の先端は丸くなっている。これも、鎌化が著しい。現存長115mm、身長76mm、身幅13mm、棟幅3mmを測る。

鎌（11・12）

11は、ほぼ完形の鎌で、全長182mm、幅38mm、厚さ4～3mmを測る。12は、先端を欠失している。現存長87mm、幅36～20mm、厚さ3mmを測る。

用途不明鉄製品（5・6・13～17）

5・6は、棒状の鉄製品で、両端を欠失しているため、その用途は不明である。5は、若干ねじれが生じている。形状から推定すると、鉄鎌の莖被の可能性が考えられる。5は、現存長80mm、幅5mm、厚さ3mm、6は、現存長91mm、幅4mm、厚さ4mmを測る。13は、半円形を呈する板状の製品で、両端がわずかに折れ曲がっている。左端側の断面は丸くなっているが、全体の形状は推定し難い。現存長77.5mm、幅30mm、厚さ2mmを測る。14は、一見刀子状を呈する製品であるが、刃部が造り出されておらず、厚さが一定していることから、用途不明とした。先端部の斜めになる部分は、折れた形跡は認められない。現存長116mm、幅15～3mm、厚さ4～3mmを測る。15は、一方が幅広となり、全体に反った形状を呈する製品である。下端は欠失している。幅の広くなっている部分は、刃部を造り出しているようであるが、鎌が付着しているため判然としない。現存長73mm、厚さ5.3～2.1mmを測る。本品は、グリッド表土中より出土している。16は、一方がワラビ状に曲げられた製品で、下端を欠失している。現存長63mm、幅7mm、厚さ7mmを測る。



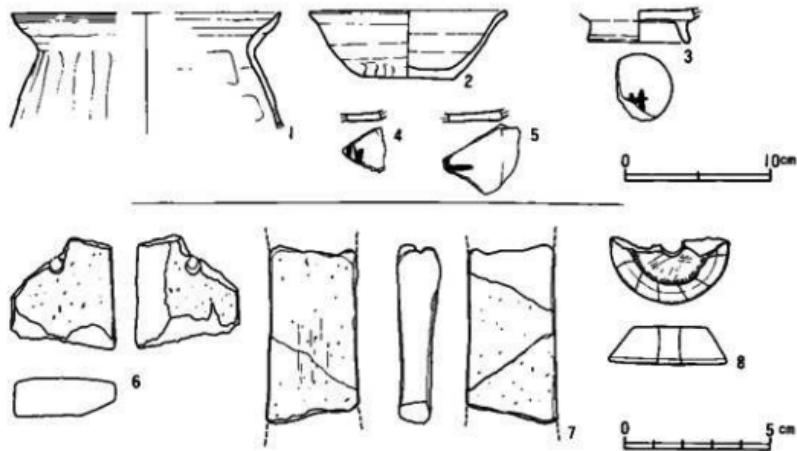
第107図 鉄器実測図 (1/2)

(2) グリッド出土の遺物

土師器・砥石・石製紡錘車（第108図 表33・図版51）

1は、甕である。「く」字形の口縁部をもち、口唇がつまみ出されたように外反し、受け口状になる。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。2は、壺である。ロクロを使用している。体部は底部から外傾して立ち上がり、わずかに内脣しながら口縁部に至る。口縁部は小さく外反する。体部下位にヘラケズリが施される。3～5は、墨書き土器である。3は高台付壺、4、5は壺の底部である。破片のため字体は不明である。

6、7は、砥石である。破片であるが、短冊形を示すと考えられる。8は、石製紡錘車である。扁平な截頭円錐形である。側面に線刻でタスキ状に文様が施されている。



第108図 グリッド出土遺物実測図 (1/4・1/2)

縄文式土器

本遺跡の縄文式土器は、調査区の表土中および古墳時代以降の住居跡内覆土中から出土したものであり、当該期の遺構に伴うものは皆無である。出土範囲は、A1区からA10区までの調査区全体でまんべんなく出土している。時期は、縄文時代中期から晩期に及んでおり、以下、從来の縄年に基づいて大別し、説明を加えていくことにする。

第I群土器（第109図・1～5 図版54）

本群は、中期中葉の阿玉台式土器に比定される土器を一括した。

1は、口縁部の山形突起である。条線内に、細かい刺突文が施される。表の頂部下に円形の押捺が、この裏面には小突起を有する。小突起の周囲にも、刺突が施される。2は、平縁の口縁部。口縁端に、横齒状工具による刺突文が並列し、その下に角押文が横方向に施される。角押文の下はやや間隔をおいて、縦方向に条線が施文される。3は、内彎する口縁部。口唇部下から波状の隆線、斜方向に連続する沈線、平行沈線を施文する。4は、口縁に付される突起で全体に連続する刻みを施す。上部に鋭角の深い刻みを有する。5は、繩文と地文とする胴部破片で、隆帯によって区画されている。隆帯上にも繩文が施文される。繩文はR Lである。

以上のうち、2、3は胎土中に雲母片、石英粒が多く含まれている。

第II群（第109図 6、7、第112図、4 図版54）

本群は、中期後葉の加曾利E式に比定される土器を一括した。

6は、繩文を地文として、沈線を枠状に施した土器片である。7は繩文を地文として、断面が三角形状の微隆起線を枠状に施した土器片である。繩文は、6がR L、7がL Rである。112図4は、口縁部に付される突起である。突起を貫通して、表面から1孔、裏面から3孔、側面に1孔の孔があけられている。突起の文様は、S字文を意識しているようである。表面下端には、繩文が施文される。原体はR Lである。

第III群土器（第109図・8～13、15、18 図版54）

本群は、後期前葉の堀之内式土器に比定される土器を一括した。

8、11、12、13、18は、繩文を地文として数条の沈線が施される土器である。すべて深鉢形土器胴部破片である。繩文はすべてL Rである。9、10は、沈線だけが施文される土器である。9は太い沈線によって主文様を描き、それに細い平行沈線を付随させている。10は横と縦へ平行沈線を施している。15は、平縁の口縁部で、口縁上的一条の沈線の間に、2点の刺突文を施している。器面は表、裏ともに平滑に仕上げられている。

第IV群土器（第109・110図・14、16、17、19～34、36～39、

40～44・第112図・1、2・図版54・55）

本群は、後期中葉の加曾利B式土器および曾谷式に含まれる土器を一括した。

16は、平縁の口縁部。繩文を地文として、沈線を横方向に施し、それを縦の沈線で区画している。全体に軽い磨消が施されている。原体の燃りは不明確である。17は、小突起をもつ平縁の口縁部。地文の繩文を沈線でこまかく区画している。口唇部は、磨消しが施される。また、

小突起は中央の沈線によって二分されている。縄文はLRである。22、23、26は、沈線によって縄文帯を沈線で区画し、沈線間は磨消縄文が施される土器である。磨消された部分と裏面は平滑に仕上げられている。原体は22、23がLR、26がRLである。14、19、20、21、39、112図・1は、沈線文を主とする土器である。全体に、器壁が薄く表、裏面を丁寧に整形している。14は太い沈線で区画された中に、細い沈線を施している。20は底い隆線が一条めぐっている。39、112図・1は深鉢形土器の口縁部で、太い沈線が横方向に施されている。

25、27~34は、いわゆる粗製土器である。

25は、縄文を地文として口唇部やや下の低い隆線上に間隔をあけて押捺を加えている。裏面に一条の細い沈線が施される。縄文の原体はRLである。27、28、30、33、34は縄文を地文として沈線あるいは条線文を施す。27は間隔をあけて平行沈線を施している。30は浅い斜方向の条線文である。28は口縁に平行して押捺のある紐線文を加えている。縄文の原体は、27、30、33、34がLR、28がRLである。29、31、32は、条線文を施している。29は口唇部に部厚い紐線を加え、紐線上に指頭による深い押捺が施される。条線は切り込みが深く、交差している。31は浅い条線が縱、斜めに施される。24、37は、磨消縄文と沈線に円形の瘤が磨消部を挟んで上下に付される。器壁が薄い。小型の土器の一部である。37は沈線が入組文となる。瘤状突起は、痕跡のみである。縄文の原体は24がLR、37はRLである。36は、平行沈線によって隆線を造り出し、隆線上によって隆線上に連続する爪形文を施している。器面は平滑に調整されている。

38、40、41、42は、横走する沈線で区画された縄文帯と磨消縄文に連続刻目文が加わる土器である。38は深鉢形土器の胴部である。幅のせまい縄文帯と磨消部、各線文を沈線によって区画し、平行する縄文带上に瘤状突起を貼付している。瘤は磨消部にまたがっていない。破片の上端には、三角状の刻目を施文する。胎土は密で、堅い。40、41は肥厚してやや内傾する口縁部で口縁部の縄文体の下に連続刻目文を施している。40の下端は、沈線が弧状になるようである。42は二列の連続刻目文と最下端に斜方向の浅い各線を施している。縄文はすべてRLである。43は、山形を呈する肥厚した口縁部で、口唇部直下に連続刻目文を施している。沈線下に縄文帯が存在するようである。44は、外反する平縁の口縁部で、口唇部と沈線で区画された隆線上に連続刻目文を施し、下端に斜方向の浅い条線を加えている。

以上、第IV群土器は、16、18が加曾利BⅠ式、14、15、19~23、25~34、39、112図・1は加曾利BⅡ式、24、36、37は加曾利BⅢ式、38、40~44は曾谷式にそれぞれ区分される。なお、24は、他の土器の色調が茶褐色、黄褐色を呈するのに対して、表面が乳白色、裏面が灰褐色を呈している点で異なっている。

なお、これらの他に112図・2の小型鉢形土器がある。肩部から上を欠失している。胴部は、全体に縄文が施文されており、肩部の沈線で区画される。底部周縁と、肩部は全体によく研磨

され、光沢がある。胎土には、砂粒、長石を含み、長石を含み、色調は黒褐色を呈する。縄文の原体はLRである。加曾利B式に含めてよいと思われる。

第V群土器（第110、111図・45~48、69~73、75・82、図版55・56）

本群は、後期後葉の安行I式に相当する土器を一括した。

45~48は、深鉢形土器の口縁部である。縄文帯と沈線を横方向に施す。沈線間はよく研磨されている。口縁は内側に厚くなっている、ゆるやかな波状を呈するようである。48は、瘤状突起が加えられる。縄文の原体は、RLである。

69、70、71、73、76、79、82は、粗製の深鉢形土器である。口縁および胴部に紐線文を付している。口縁部紐線文は、71のように連続して間隔のつまっている土器と、73のように間隔の開く土器がある。胴部は、69のように斜方向にごく浅い条線を施す土器と、73のようにはっきりとした条線を施す土器がある。82は口縁が内傾する。口縁に連続して刻目を施し、条線文との境に沈線を有する。

第VI群土器（第110、111図49~68、74、76~78、80~90、第112図3）

本群は、安行II式以降の縄文時代後期末から晩期に相当する土器を一括して扱った。これらはさらに安行II式、安行IIIa式、姥山II式、安行IIIc式、前浦式の各型式に区分されるようである。

49~52は、深鉢形土器の波状を呈する口縁部である。沈線によって縄文帯を区画し、刻目のある瘤状突起といわゆる豚鼻状の小突起を加えている。縄文帯は、わずかに隆帯となり、文様を区画する隆線上に連続刻目文を施している。沈線間の無文部と口唇上はよく研磨されている。縄文の原体は、51がRL、他はLRである。53は、深鉢形土器の波状を呈する口縁部である。波頂部が羽子板状に突出し、大形の突起が二段連なり、突起上に押捺を加える縄文帯を沈線で区画し、文様交差部には豚鼻状の押捺を施している。縄文の原体は、LRである。

54は、深鉢形土器の波状を呈する口縁部である。口縁に沿って、縄文帯を沈線で区画し、さらに波頂部方向から縁に沈線と列点文を施している。沈線はやや太めである。55は、鉢形土器の口縁部で、やや外方に開く。沈線によって縄文部を区画し、沈線交差部に中央に刺突のある円文を擬二列に施している。56、57、58は、口唇上に瘤状の小突起をもつ平縁の口縁部である。弧状の沈線によって縄文部を区画する。57は三叉文を沈線間に施している。58は入組状の沈線を施している。以上のうち、57は原体RL、他は原体LRの縄文を施している。59~60は、平縁を呈する土器で、幅の広い口縁部縄文带上に瘤状突起を貼付け、以下、太い沈線で枠状文を施している。沈線の向かい合う幅のせまい部分は縄文を充填している。縄文の原体は、いずれもRLである。

61は、平縁の口縁部であるが、全体の器形は不明である。口唇部は、内側に厚くなり、口唇上に太い沈線を中央に施した半円状の粘土紐を貼付している。口縁部は、弧状の太い平行沈線で、縄文部を区画する。丁度、円を折り込んだ状態の文様である。縄文の原体はLRである。62、63、64は、口唇部が丸く厚みを増す平縁の口縁部で、口唇直下の縄文部を太い沈線で区画している。沈線以下は無文でよく研磨されている。63も同様構成となるが、縄文部は幅が広くなり、口唇部の厚みも少ない。縄文の原体はいずれもLRである。65は、鉢形土器の口縁部から肩部破片である。口縁部は頸部で屈折して、緩やかに開く器形である。口唇部と頸部に縄文を施し、太い沈線によって区画している。沈線の下は、幅広の無文部となり、入組状の沈線内側に縄文を充填している。入組状の沈線は、いわゆる「の」字文の逆向きとなるようである。縄文の原体はLRである。

66は、浅鉢形土器の口縁部から肩部破片である。平縁の口縁で、肩部で屈曲する。肩部に深い刻みのある突帯を有し、口縁部と胴部を区画している。口縁部は瘤状突起を有し、この突起内も含めて、沈線を入組状、三叉状に施す。沈線内側は口唇部下より縄文を施している。胴部は横方向の沈線の縄文を施している。縄文の原体はRLである。無文部および裏面はよく研磨されて光沢がある。

67は、浅鉢形土器の胴部で、中位で屈折する細い沈線を入組状に施している。縄文は無く、無文部はよく研磨される。

68は、胴部の破片で、器形は不明確である。上端でわずかに括れている。横走する沈線間に列点文を施している。

69、72、74、75、77、78、80~90は、いわゆる粗製土器である。このうち、69、72、74、75、77、78、80は紐線文系の土器であり、81、83~86、88~90は紐線文を付きない土器である。

72、75は肥厚した口唇部に爪形状の刻目を施し、以下条線文となっている。69、78は浅い条線文が施され、78には縦方向に二列の紐線を加えている。77は条線間を縦方向の沈線で区画し、沈線間を磨消している。80は条線をもたず、太い沈線で、相対する弧状、菱形状の文様を施している。

81は、口唇部に横長の刻目を有し、以下条線文を施している。83、84、90は、やや内傾する口縁部をもつ深鉢形土器で、横あるいは斜方向に条線文を施している。条線の間隔は、紐線文をもつ土器より広めである。85、86、88、89も本類と同様の特徴をもつ土器である。87は、肥厚してやや内傾する口縁の深鉢形土器で、口縁部に横断面B状の突起を貼している。口縁は、波状を呈するようである。文様は沈線により柱状文を施文するが、浅い沈線によって微隆起線状に浮き上がっているのが特徴である。

第112図3は、深鉢形土器の胴部下半である。表面は無文で、ヘラ状工具により軽くナデ整形が施されている。内面も同様の整形である。胎土に砂粒、長石粒を含み、色調は黄褐色を呈す

る。器面から受ける印象は90に近い感じがある。本群に伴うものとしておきたい。

91は、底面に網代痕のある底部である。

以上、第VI群土器は從来の編年により、次のように区分できよう。

安行II式土器に相当する土器 49~53、69、72、75、78、80。

安行IIIa式土器に相当する土器 66、77。

姥山II式に相当する土器 54~60、81、83~90。

安行IIIc式土器に相当する土器 68。

前浦式土器に相当する土器 61~65。

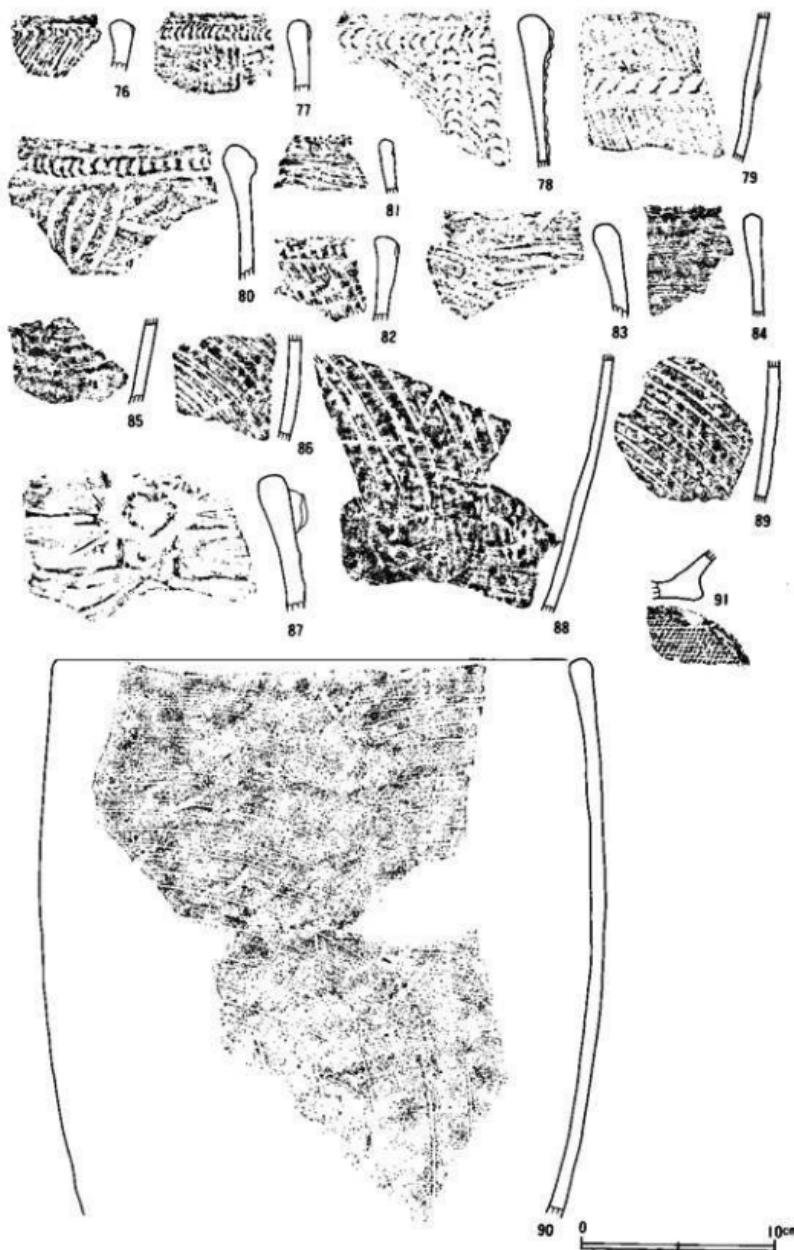
なお、67、87は遺物が断片的であるためその帰属型式に苦慮するところであり、晚期前半に含まれるということだけにしておきたい。



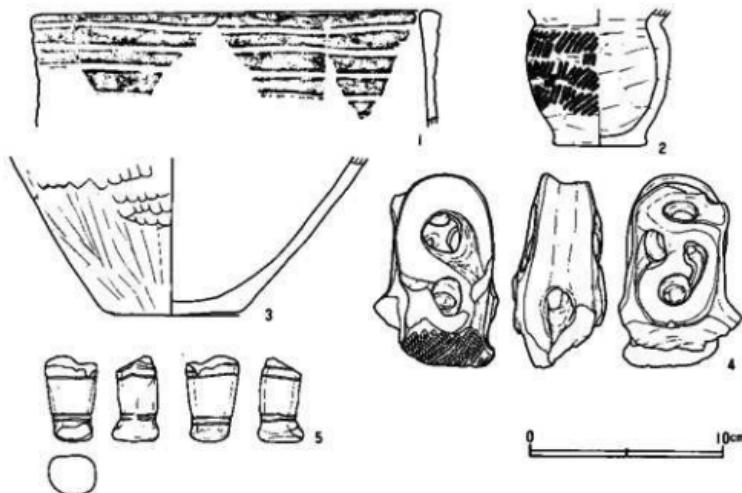
第109図 土器拓影図(1) (1/3)



第110図 土器拓影図(2) (1/3)



第111図 土器拓影図(3) (1/3)



第112図 土器・土製品実測図 (1/3)

土製品（第112図・5）

土偶一点が出土している。脚部片で、上下に、平行沈線がまわっている。胎土に砂粒、長石を含む。晩期に相当するものであろう。

石 器（113～116図・表34・図版51・52）

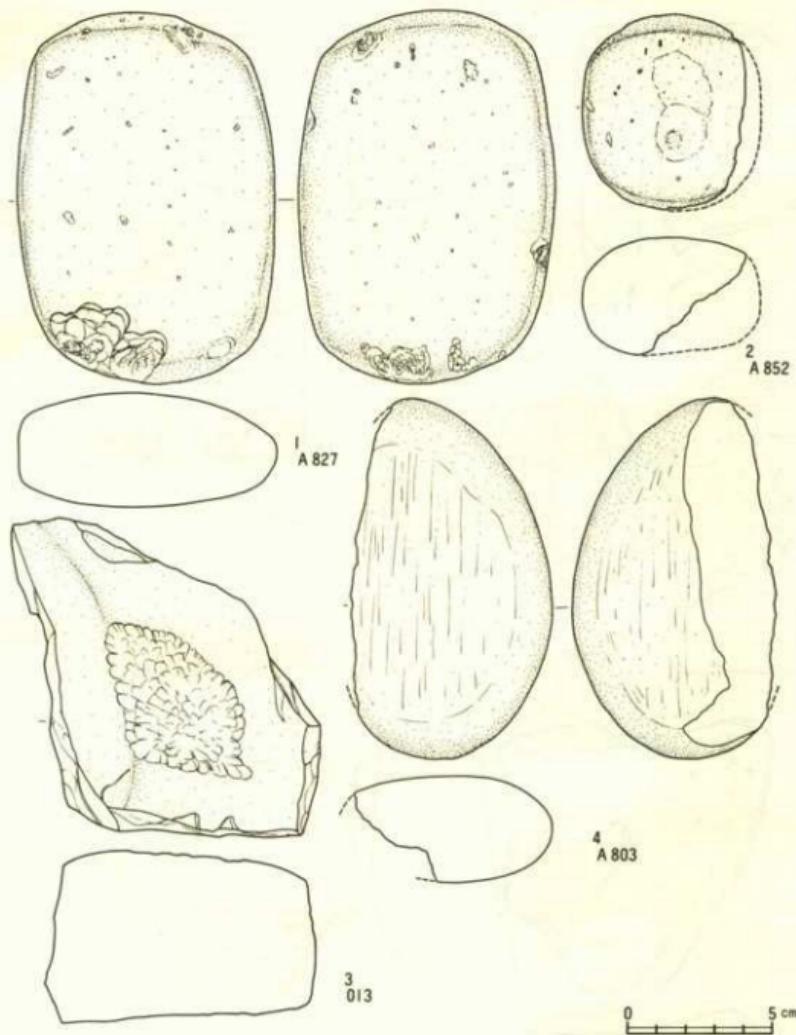
ここに述べる石器は、グリッド出土と住居跡との帰属関係のないと考えられる石器について一括して説明する。

1、2、4、5は、磨石である。1は輝石安山岩で表裏ともに大変滑らかである。側面は、若干、擦り面がみられるが自然面も残る。上下は、叩きの痕跡を残す。2は円形の河原石を使用した磨石であるが、上下の擦痕は叩き石とも考えられる。4は玉子形の河原石を使用し全面が磨られている。上下は火を受けている。5は楕円形の薄い河原石を使用している。 $\frac{1}{3}$ が欠損し、高温の火をうけている。

3は、砂岩の砥石である。火をうけた上面が黒色に変色している。上面中央部は、叩きの痕跡が残る。

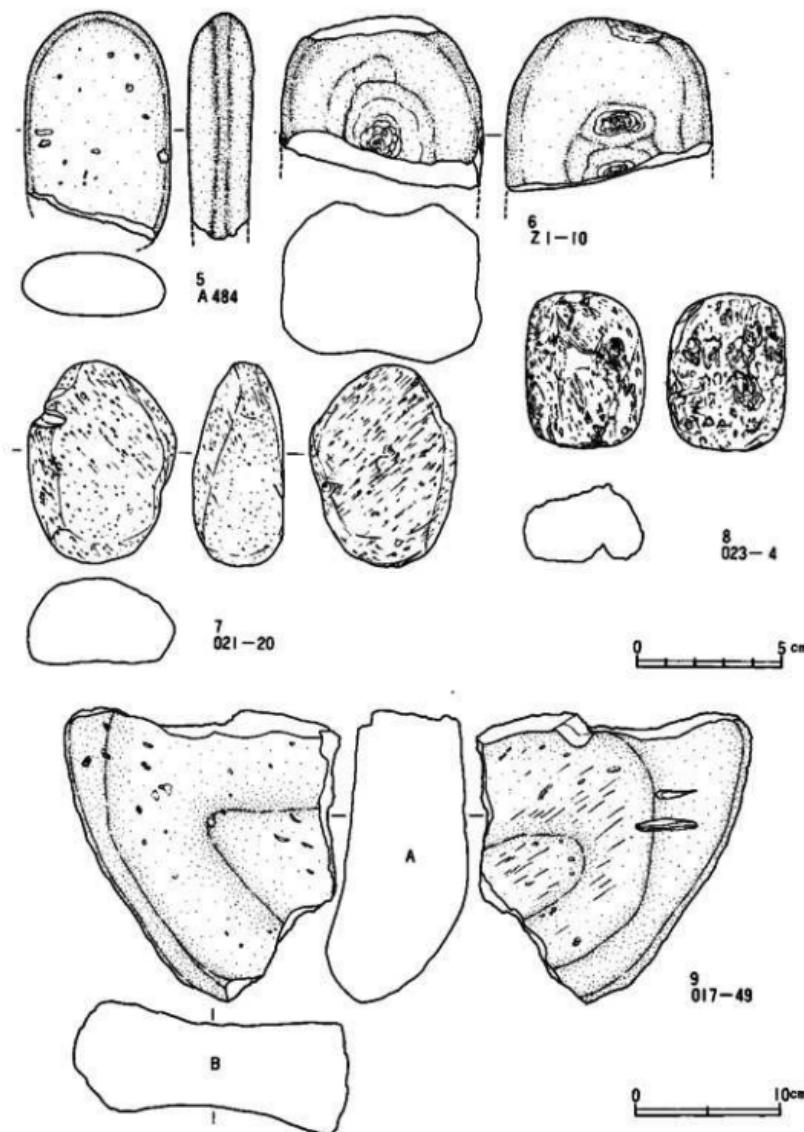
6は、凹石である。石英質砂岩で固結度が弱い。表面に2ヶ所、裏面と側面に1ヶ所の凹がある。上面は、叩きのため欠損したものと思われる。火をうけている。

7、8は軽石である。7は1面、8は何面かの擦り面をもつ。

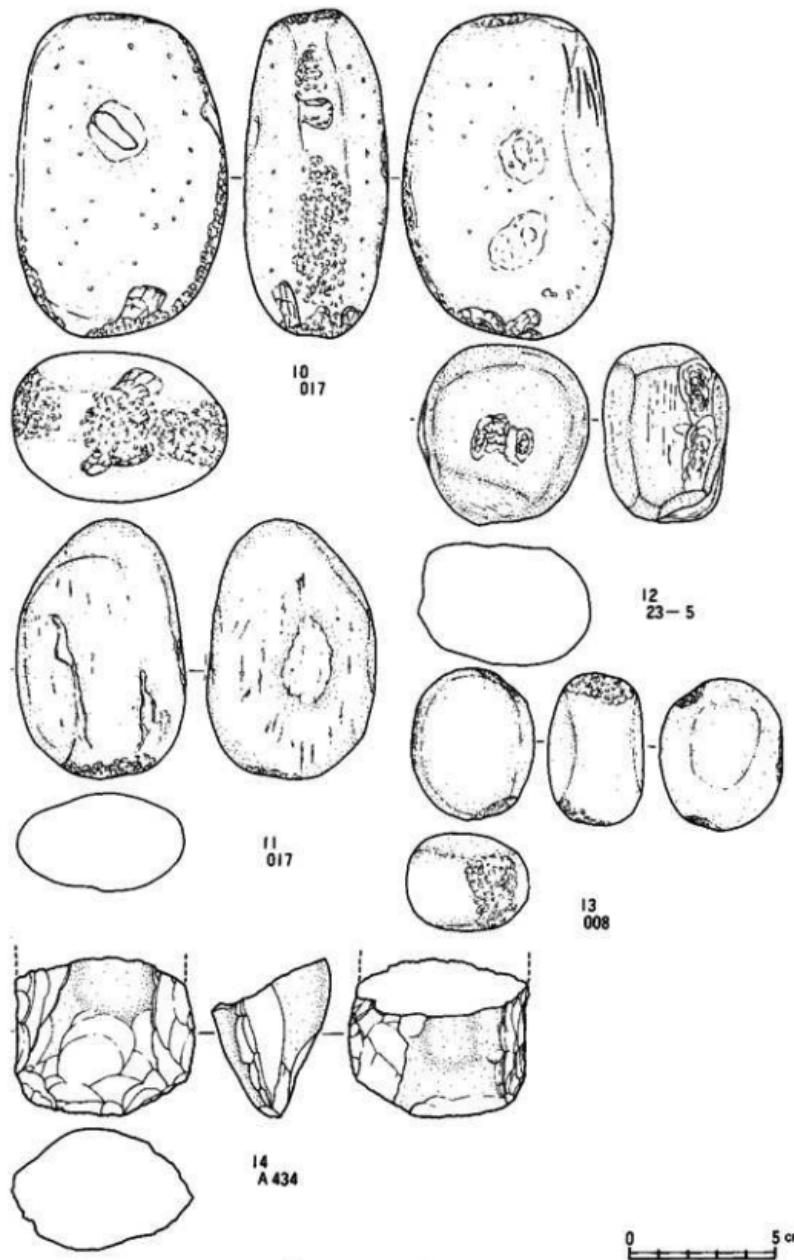


第113図 石器実測図(1) (1/2)

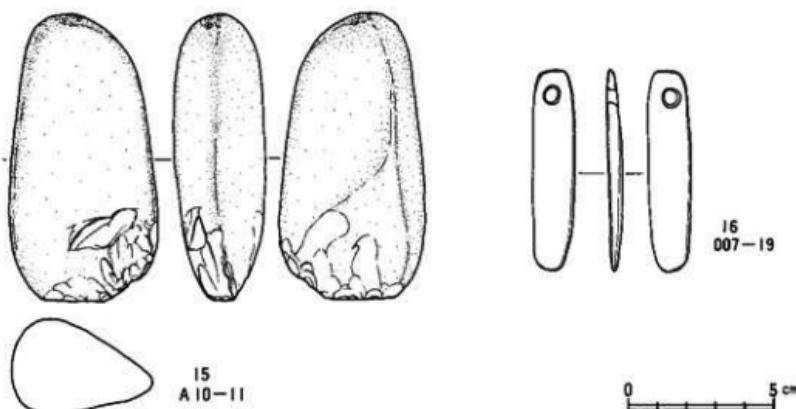
9は石皿である。多孔質の安山岩で表裏ともに使用したものである。側面の断面を観察すると凹部の両端で、一方は割れたまま、一方は磨滅して丸みをもっていることから、本来は丸く整形した外周に沿った大形の石皿であったものを再利用したものと考えられる。Aは本来の、Bは再利用の断面である。



第114図 石器実測図(2) (1/2・1/4)



第115図 石器実測図(3) (1/2)



第116図 石器実測図(4) (1/2)

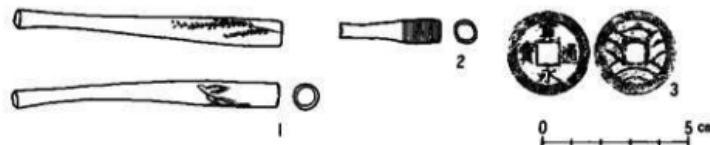
10、12、13は、磨石である。10～13の擦痕は磨石とも叩き石とも考えられる石器である。10は、安山岩の石基のみの河原石で、上下片側面に叩き痕を右上には擦痕を残す。表裏面に凹痕を3ヶ所残す。11は、叩き石で下面に叩き痕を、側面に擦痕を残す。12は、輝石安山岩の磨石で表面、側面を使用する。中央に凹がある。13は、表裏が滑らかで、側面に叩き痕とも擦痕ともとられえられる跡を残す。14、15は、打製石斧である。14は刃部のみ残存する。両面中央に帯状に自然面を残し、刃を調整している。15は、河原石を利用している。側面は滑らかで、先端部に両面から刃をつくりだす。上面には叩き痕を残す。

キセル (第117図 1・2、図版51)

吸い口2点が出土している。1は、羅字側に藤と鳥が刻まれている。2は、螺旋が刻まれている。両方ともに銅製である。

古銭 (117図 3)

「寛永通寶」1枚が出土している。銅銭で、裏面に11の青海波文をもつ



第117図 グリッド出土遺物実測・拓影図 (1/2)

第4章 小 結

小池新林、小池地蔵遺跡は、前回の報告書で報告した小池麻生遺跡に隣接した遺跡である。3遺跡とも、木戸川に向ってのびる舌状台地上に位置し、北から、小池麻生、小池地蔵、小池新林の順になっている。前回と同様に、道路幅内の調査ではあるが、調査面積に比べてかなりの数の遺構（主に住居跡）が検出されている。遺構数は、小池新林が住居跡11軒、小池地蔵が住居跡23軒、溝1条である。時期は、古墳時代後期から奈良、平安時代であり、ほぼ連続して住居が営まれている。遺構の遺存状態により、遺物の量の多少はあるけれども、今回も前報告書と同様な土器の分類を試みることにより、3遺跡の比較対照の一助としたい。

土器の型式は、鬼高式、真間式、国分式である。真間式、国分式は、出土住居跡の数が少なく、大半が鬼高式である。

鬼高式土器については、前回と同様に、日本考古学研究所集報IVの「房総における鬼高期の研究（研究編）」を参考にした。また、小池新林、小池地蔵の両遺跡を同じ図中に掲載した。これは、両遺跡とも時代的には並行していると思われるからである。図中では、小池新林をS小池地蔵をJとし、数字は出土住居跡の番号である。

調査における鬼高期の住居跡は、小池新林が、001~011、小池地蔵が、001~004、007~009、012~014、021、002である。

各住居跡出土土器を集報の分類に照し合せると次のようになる。

I期 なし

II期 小池新林 001、002、004、005、006、008、011

小池地蔵 004、007、008

III期 小池新林 010

小池地蔵 003、014

IV期 小池新林 003

小池地蔵002

V期 小池地蔵 009、012

VI期 小池地蔵 021

それぞれの土器を上の順にならべると第118~120図のようになる。ただし、小池地蔵の001、002は、遺物が少ないための分類を行わなかった。

また、真間期、国分期の住居跡は、小池新林には検出されず、小池地蔵に検出されている。各時期の住居跡は次のとおりである。

真間期 005、017、020

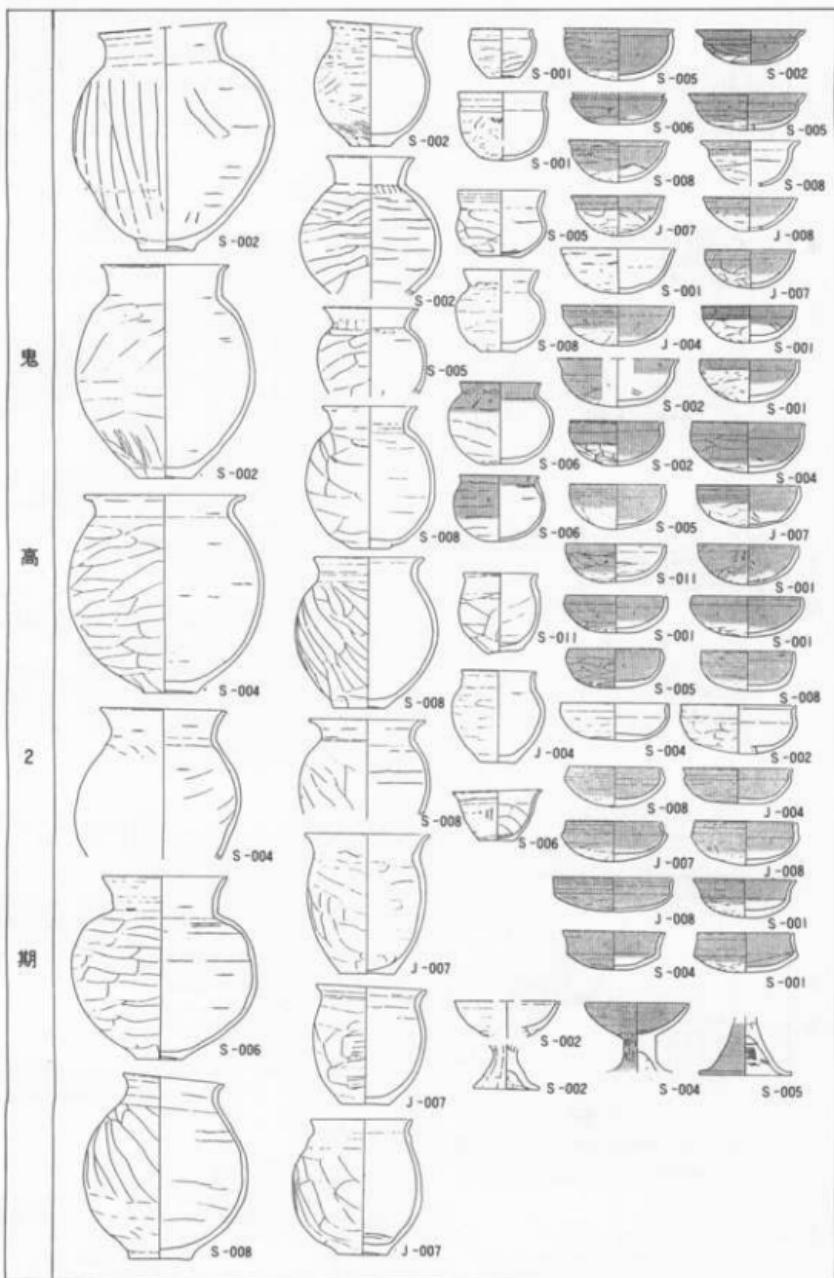
国分期 018、019

以上の分類から、小池新林の調査区域からは、ほぼ同時期（鬼高II期）の住居跡が集中していることが確認された。また、小池地蔵では、調査区域の南部に鬼高期、中央部から北部にかけて真間、国分期の住居跡が集中していることが確認された。よって鬼高期（とくにII期）には、小池新林、小池地蔵の両遺跡が、1つの集落として営まれていた可能性があると思われる。

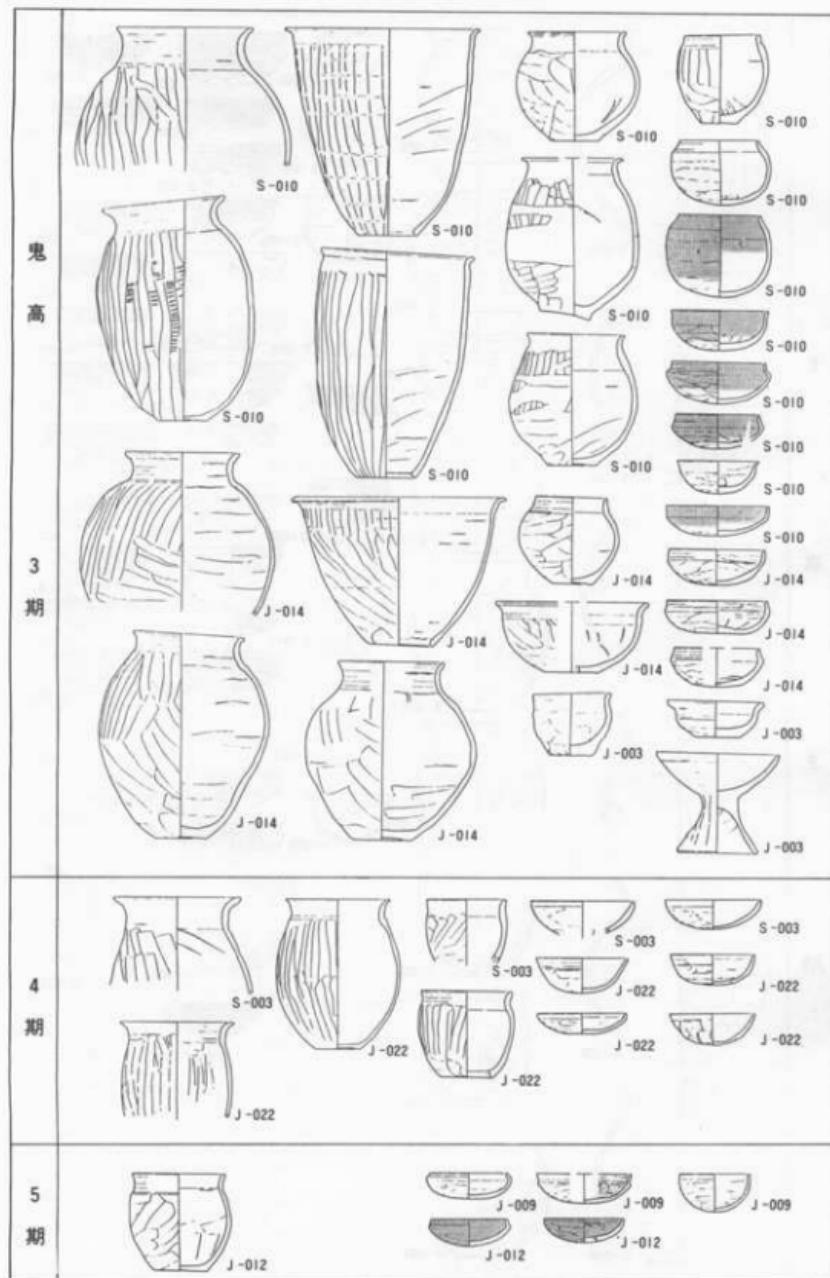
また、両遺跡の鬼高期の住居跡からは多くの赤彩坏が出土している。赤彩の仕方は、全面（A、a）、体部上半～口縁部（B、b）、口縁部（C、c）、そして無赤彩（D、d）である。第121図では、坏の平面形を示し、赤彩を模式化したものである。大文字が外面、小文字が内面を示し、両者の組合せで赤彩の仕方が表現できる。赤彩の仕方には、時期的な差は明確に認められないと考えられるが、傾向としては、古い時期ほどA a型が多いと考えられ、新しくなるにつれて、B b型、B a型になり、C b型、C c型へ移っていくと考えられる。ただし赤彩は鬼高I～III期に集中し、IV期以降は、黒彩が多くなる。

e、f、gは、やや特殊な赤彩の仕方である。いずれも、坏の内面である。また、eは、小池新林の006-10、および小池地蔵の004-9、008-12に思われる。fは、小池新林の002-24、40、004-10、005-17、006-5および、小池地蔵の007-17に見られ、gはfの一文字の太いものとも考えられる。また、以上の住居跡はどれも鬼高II期に属していると考えられる。このことからも、鬼高期には、小池新林、小池地蔵の両遺跡は、1つの集落として営まれていたと考えることができる。

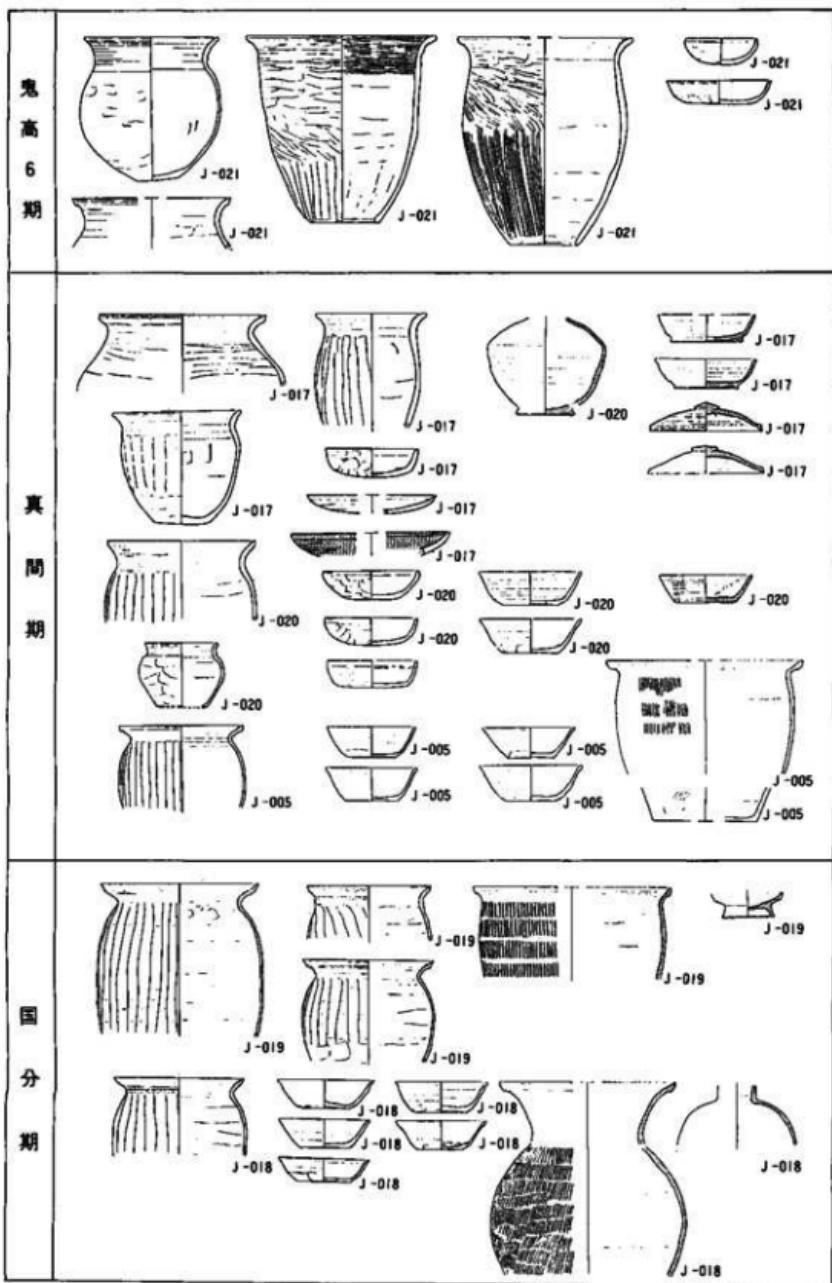
- (1) 「主要地方道成田松尾線Ⅰ 小池麻生遺跡 小池向台遺跡」(財)千葉県文化財センター
1983
- (2) 鬼高研究グループ「房総における鬼高期の研究(研究編)」『日本考古学研究所集報
IV』 1982



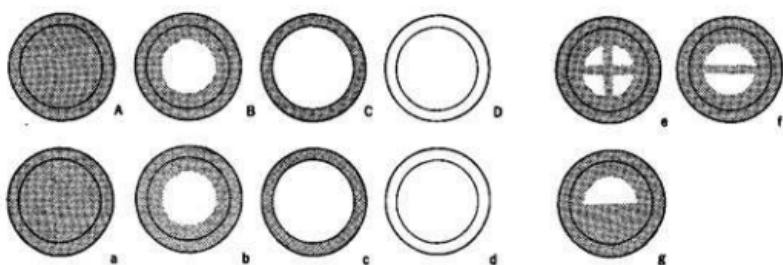
第118図 出土土器集成図(1)



第119図 出土土器集成図(2)



第120図 出土土器集成図(3)



第121図 土師器環赤彩模式図

表2 001号住居跡出土土器表

擇団 番号	器 種	遺存度	法 量(cm)			色 調		胎 土	焼成	そ の 他	図版
			口 径	底 径	高	外	内				
1	土 師 器 甕	口縁~ 胴部 1/2	(15.8)	—	—	褐色 下位に 黒斑	褐色	密 細砂粒やや多	良		
2	土 師 器 甕	口縁 1/6	(14.4)	—	—	褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良		
3	土 師 器 甕	口縁 1/6	(18.0)	—	—	明褐色	灰黑色	密 細砂粒やや多	良		
4	土 師 器 甕	口縁 1/4	13.4	—	—	赤褐色	黑褐色	密 細砂粒やや多	良		
5	土 師 器 甕	口縁 1/4	18.8	—	—	明褐色	褐色	密 細砂粒多	良		
6	土 師 器 甕	完 形	12.4	—	9.3	赤褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	二次焼成をうけたら しく半透明感ある つやと色彩はいって もらくなっている。	13
7	土 師 器 甕	完 形	8.7	4.4	6.7	灰褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		13
8	土 師 器 甕	胴部 1/4	—	—	—	暗褐色	黑色	密 細砂粒少	良	小型の甕とも いえる。 赤 彩	
9	土 師 器 甕	底部 1/2	—	5.6	—	赤褐色 黑色まだら状	明褐色	密 細砂粒少	良		
10	土 師 器 甕	完 形	15.7	—	5.9	赤褐色	茶褐色	密 細砂粒やや多	良	体部中位に横 方向帶状に黒 斑	13
11	土 師 器 甕	完 形	14.3	—	4.8	褐色	淡赤褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	13
12	土 師 器 甕	完 形	14.7	—	5.0	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	13
13	土 師 器 甕	完 形	14.1	—	5.0	灰褐色	赤褐色	密 細砂粒少 (やや大きな粒 子も含まれる)	良	赤 彩 底部に火ダス キ状の黒斑有	13
14	土 師 器 甕	完 形	13.2	—	4.9	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	13
15	土 師 器 甕	完 形	13.6	—	5.7	赤褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	13
16	土 師 器 甕	完 形	15.6	—	2.4	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	13
17	土 師 器 甕	1/6 (13.2)	—	矮 高 5.2	黑色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩		
18	土 師 器 甕	完 形	13.9	—	5.3	褐色 体部下 半に黒 斑	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	13
19	土 師 器 甕	完 形	13.4	—	5.6	暗褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	13
20	土 師 器 甕	完 形	14.3	—	4.9	黑色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩 ややもろい。ヌヌ の付着と開拓があ ると思われる。	13
21	土 師 器 甕	1/6 (14.6)	—	3.7	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	14	

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
22	土師器 环	ほぼ完形	13.4	—	5.2	黒褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 全体にややもろ くなっている	14
23	土製支脚	残	—	—	—	黒褐色	黒褐色	やや密 砂粒多	良	もうくなっている 土器の助土である り蓋がない。やや 細砂が多い。	
24	土製支脚	不明	—	—	—	明褐色	赤褐色 (断)	密 細砂粒やや多	やや 良	土器の助土との 差はあまりない が焼がある。	

表3 002号住居跡出土土器表

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 環	% (17.8)	—	—	26.0	暗褐色 口縁部 褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	火をうけたらしく 内面が荒れもろくなっている。	14
2	土師器 環	口縁～ 胴部	12.2	—	—	赤褐色 口縁部 一部褐色 スス付着	黒褐色 一部褐色 斯は赤褐色 スス付着	密 細砂粒やや多	良		14
3	土師器 環	口縁～ 胴部	(12.2)	—	—	褐色	灰黑色	密 細砂粒少	良		
4	土師器 環	完形	13.3	5.7	17.0	褐色 一部 灰褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良		14
5	土師器 環	口縁 % (14.6)	—	—	—	赤褐色	褐色 部分的に 黒褐色	密 細砂粒多	良	火をうけたらしく やや荒れている。 調整板が不明瞭	14
6	土師器 環	口縁部	17.2	—	—	黒褐色 一部 黒褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良		
7	土師器 環	口縁 % (15.2)	—	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	一部暗褐色 スス付着の為か	
8	土師器 環	口縁 % (14.2)	—	—	—	赤褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		
9	土師器 環	口縁 % (14.0)	—	—	—	褐色	明褐色	密 細砂粒多	良		
10	土師器 環	胴部 % —	—	—	—	褐色 並土付着	褐色 一部黑色	密 細砂粒多	良	火をうけた為 から無い	
11	土師器 環	底部	—	6.0	—	赤褐色 黒斑	褐色 黒褐色	密 細砂粒やや多	良	二次的に火を うけた為か	14
12	土師器 環	底部 中央 穴	—	(8.8)	—	赤褐色	褐色	密 細砂粒少	良		
13	土師器 環	底部	—	8.0	—	赤褐色	灰褐色	密 細砂粒やや多	良		
14	土師器 環	底部 % —	—	7.2	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	一部黒褐色	
15	土師器 環	底部	—	8.0	—	暗褐色	黒褐色	密 細砂粒少	良		

神國 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
16	土師器 甕	底部%	—	8.0	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	二次焼成の為 褐色が変色し たと思われる	
17	土師器 甕	底部%	—	4.8	—	褐色	赤褐色	やや密 細砂粒多	良	二次焼成の為 もうい	
18	土師器 甕	底部欠% (27.4)	—	—	褐色 黒斑有	赤褐色	密 砂粒やや多	良			14
19	土師器 甕	%	15.2	—	4.7	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤褐色、二次焼成をう けたと思われる。土の 色は褐色で、火事の 跡が見られない。	
20	土師器 甕	口縁%	(13.4)	—	—	黒褐色 口縁は褐色	黒褐色 口縁は褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
21	土師器 甕	%	(15.4)	—	—	黒褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	
22	土師器 甕	口縁%	(15.0)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
23	土師器 甕	%	(14.4)	—	—	赤褐色 一部黒斑 (体部)	暗褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
24	土師器 甕	%	(16.6)	—	6.4	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒多	良	赤 彩	
25	土師器 甕	口縁%	(15.8)	—	—	暗赤褐色	暗赤褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩 二次焼成に内をうけた らしく黒褐色をして いる。ややもい。	
26	土師器 甕	%	(13.2)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少 かなり精製され ている	良	赤 彩 二次焼成をうけたらしくヒビ が入った赤褐色が部分的にハグている	
27	土師器 甕	%	(15.2)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
28	土師器 甕	口縁%	(14.0)	—	—	赤 彩	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	
29	土師器 甕	%	(14.4)	—	—	褐色	暗褐色	密 砂粒やや多	良	赤 彩	
30	土師器 甕	口縁%	(12.2)	—	—	褐色 一部黒色	灰褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
31	土師器 甕	%	(13.2)	—	—	灰褐色 黒斑有	灰褐色 黒斑有	密 細砂粒少	良	赤 彩 二次焼成のため 黒変と思われる	
32	土師器 甕	口縁%	(17.2)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	
33	土師器 甕	口縁%	(16.0)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	
34	土師器 甕	%	17.8	—	6.5	明褐色 一部黒 斑	黑色 (黒褐色) (黒斑)	密 細砂粒少	良		15
35	土師器 甕	完形	13.1	—	6.0	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	15
36	土師器 甕	%	(18.0)	—	—	褐色 一部黒 斑	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩 (窓坏?)	

辨団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他の	図版
			口径	底径	高	外	内				
37	土師器 环	%	(13.0)	—	—	明褐色 (素地)	明褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
38	土師器 环	口縁 %	(19.8)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒や多	良	赤彩	
39	土師器 环	%	11.2	—	—	黒褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
40	土師器 环	口縁 %	(13.8)	—	—	赤褐色 黒斑有	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
41	土師器 环	%	(13.7)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤褐色をうけたらしく黒くなっている。 に黒斑點がもろくなっている。	
42	土師器 环	口縁 %	(14.2)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒や多	良	二次焼成をうけたらしく表面が荒れてもろくなっている。	
43	土師器 高环	环部 %	(14.6)	—	—	暗赤褐色	暗赤褐色	密 細砂粒少	良	二次焼成をうけた為かもろくなっている。	
44	土師器 高环	脚部	—	9.2	—	暗赤褐色	黑色	密 細砂粒少	良		15
45	土師器 高环	接続部	—	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒や多	良	赤彩	
46	土師器 高环	接続部	—	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
47	土師器 高环	接続部	—	—	—	暗赤褐色	暗赤褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	

表4 003号住居跡出土土器表

辨団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他の	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁~ 胴部	17.8	—	—	明褐色 調部 暗褐色	明褐色 部 灰褐色	密 細砂粒や多	良		15
2	土師器 甕	口縁~ 胴部 %	(12.2)	—	—	褐色 部 灰褐色	淡褐色 口 灰褐色	密 細砂粒や多	良		
3	土師器 甕	口縁~ 胴部 %	11.6	—	—	褐色 部 灰褐色	灰褐色	密 細砂粒多	良		
4	土師器 甕	口縁~ 胴部 %	(33.0)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良		
5	土師器 甕	底部	—	4.6	—	黑色	灰褐色	密 細砂粒や多	良		
6	土師器 环	口縁 %	(14.0)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒や多	良		
7	土師器 环	%	14.4	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒や多	良		
8	土師器 环	%	13.3	—	3.8	灰黑色	黑色	密 細砂粒や多	良		15

種別 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
9	土師器 环	%	(12.4)	—	—	暗赤褐色	灰黒褐色	密 細砂粒やや多	良		
10	土師器 环	%	(15.4)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩 スス付着	
11	土師器 环	口縁 %	(14.4)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		
12	手捏土器	%	—	8.8	1.9	暗赤褐色	暗赤褐色	密 細砂粒少	良		
15	土玉	完 形	—	—	直径1.4 高 1.3	黑褐色		密 細砂粒少	良	火をうけたら しくもろい	

表5 004号住居跡出土土器表

種別 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	ほぼ完成	22.6	7.4	21.3	褐色 黒斑	褐色	密 細砂粒やや多	良	脚下半にスス 付着。 粒子が大きい。	15
2	土師器 甕	口縁～ 胸部	27.5	—	—	暗赤褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	二次的に火をう けたらしく表面 が黒れゆがみが はげしい。	15
3	土師器 甕	口縁 %	(14.0)	—	—	褐色 黒斑有	暗褐色	密 細砂粒やや多	良		
4	土師器 甕	口縁 %	(13.6)	—	—	黒褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良		
5	土師器 甕	口縁 %	(14.6)	—	—	赤褐色	灰黑色	やや密 細砂粒多	良		
6	土師器 甕	口縁 %	(21.8)	—	—	灰褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		
7	土師器 甕	底 部	—	7.4	—	明褐色	灰黑色	密 細砂粒少	良		
8	土師器 甕	口縁 %	(13.6)	—	—	暗褐色	黒褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
9	土師器 甕	口縁 %	(12.0)	—	—	黒褐色	黒褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
10	土師器 环	完 形	14.0	—	6.5	明褐色 黒斑有	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	16
11	土師器 环	ほぼ完成	15.4	—	6.6	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	16
12	土師器 环	完 形	13.0	—	6.4	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	16
13	土師器 环	完 形	13.6	—	5.1	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	黑色炭化物 (スス付着?) 赤彩	16
14	土師器 环	完 形	14.0	—	5.1	赤褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	16

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	回版
			口径	底径	高	外	内				
15	土師器 环	口縁 完	(16.0)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	
16	土師器 环	完 形	14.8	—	5.0	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	16
17	土師器 环	口縁 完	(15.0)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
18	土師器 环	%	(17.8)	—	—	黒褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
19	土師器 鉢	%	14.8	5.4	8.2	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒多	良		16
20	土師器 高 环	ほぼ完形	14.3	—	9.4	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	かなり精製さ れている。	16
21	土製支脚		—	—	長14.0 巾6.5 厚6.3	灰褐色		密 細砂粒やや多	良	焼成程度の差かや り早くもろいが土 器と他のものかい はないと想われる。	16

表6 005号住居跡出土土器表

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	回版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 要	%	17.8	7.4	28.4	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	一部スス付着	17
2	土師器 要	口縁～ 胴部	13.2	—	—	褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	口縁にスス状 炭化物付着	17
3	土師器 要	口縁 %	(20.2)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良		
4	土師器 要	口縁 %	(14.2)	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良		
5	土師器 要	口縁 %	(16.0)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		
6	土師器 要	口縁 %	(18.2)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	一部黒褐色	
7	土師器 要	底 部	—	7.0	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良		17
8	土師器 要	底 部	—	7.6	—	暗褐色	黑色	やや密 細砂粒やや多	良	二次的に火をう けたらしく もろい	
9	土師器 鉢	%	12.2	—	9.0	褐色～ 暗褐色	褐色～ 暗褐色	密 細砂粒やや多	良		
10	土師器 短頭壺	口縁 %	(11.8)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	スス付着	
11	土師器 短頭壺	口縁 %	(9.2)	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良		
12	土師器 鉢	口縁 %	(11.8)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒多	良	二次的に火をう けたらしく 器面 が荒れている。	

標図 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の	図版
			口径	底径	高	外	内				
13	土師器 环	%	(13.2)	—	—	浅褐色	淡褐色	密 細砂粒や少	良	二次的に火をうけたらしくかなり変 化している。胎土は 精製されたと思われる。	
14	土師器 环	口縁 %	(16.4)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒極少	良		
15	土師器 环	%	15.0	—	7.1	明褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	17
16	土師器 环	%	(15.8)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	
17	土師器 环	%	16.4	—	5.0	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	17
18	土師器 环	口縁 %	(15.6)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	
19	土師器 环	%	(16.0)	—	—	明褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
20	土師器 环	口縁 %	(14.0)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	かなり精製 調製具板有 赤	
21	土師器 环	口縁 %	13.4	—	—	暗褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良		
22	土師器 环	%	(15.6)	—	—	褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	
23	土師器 环	%	13.2	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
24	土師器 环	%	14.6	—	—	赤褐色	暗褐色 口縁 黒褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	17
25	土師器 环	%	(15.4)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒極少	良	赤 彩	
26	土師器 环	%	12.6	—	5.1	褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	胎土はかなり精 製されるため らかさが感じら れる。赤 彩	17
27	土師器 环	%	(14.6)	—	5.1	褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	18
28	土師器 环	口縁 %	(14.0)	—	5.9	赤褐色 黒斑	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	17
29	土師器 环	%	(15.8)	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	二次的に火をうけた らしくろくな っている。赤 彩	
30	土師器 环	口縁 %	(14.4)	—	—	褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	黒 彩	
31	土師器 环	%	(16.8)	—	—	褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
32	土師器 环	%	(17.8)	—	—	黑色	黑褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	
33	土師器 环	口縁 %	(10.6)	—	—	黑褐色	黑褐色	密 細砂粒極少	良	黒 彩	

神田 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
34	土師器環	脚部	—	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	18
35	土製支脚	不明	—	5.2	長9.7	赤褐色	—	密 細砂粒少	良	土器の胎土はとんど變 わらない。	
36	手提器	—	長径4.8 短径3.9	—	1.6	灰褐色 底部 黒褐色	灰褐色 底部 黒褐色	密 細砂粒少	良	(質环形) (船形に なる)	
37	土製 粘釜	—	径4.4 高1.5	—	—	暗褐色	—	密 細砂粒少	良		

表7 006号住居跡出土土器表

神田 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	—	16.4	6.4	24.5	褐色 黒褐色	褐色	密 細砂粒や多	良	二次的に大きさをうけ たらしくやもろくなっている。	18
2	土師器 短頸甕	ほぼ完形	11.4	—	10.8	口輪 青褐色 底 暗褐色	暗褐色 底 暗褐色	密 細砂粒多	良	赤彩	18
3	土師器 短頸甕	ほぼ完形	11.2	—	8.8	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩 二次焼成のためか もろい、外面スス付着・内部剥離	18
4	土師器 小型体	—	12.5	5.2	11.9	明褐色	明褐色	密 細砂粒多	良	内面剥離 二次焼成	18
5	土師器 環	—	(13.2)	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	
6	土師器 環	口縁	(12.8)	—	—	黒褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	
7	土師器 環	口縁	(14.8)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩 二次焼成 もろい	
8	土師器 環	口縁	(14.0)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
9	土師器 環	—	(14.2)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩 二次的に火をうけたらしく内面 が剥離している	
10	土師器 環	—	(17.8)	—	—	褐色	黑色	密 細砂粒少	良	赤彩 外面黒度スス 付着 内面剥離あり	
11	土師器 環	—	(8.2)	—	—	淡明褐色	淡明褐色	密 細砂粒極少	良	赤彩 胎土はかなり 精製されている	

表8 007-A, B号住居跡出土土器表

辨別番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁 % (17.6)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良			18
2	土師器 甕	口縁 % (24.0)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒多	良			
3	土師器 甕	口縁 % (11.0)	—	—	暗褐色	口縁黑色 並明褐色	密 細砂粒やや多	良			
4	土師器 甕	底部 %	—	5.8	—	淡褐色	灰褐色	密 細砂粒やや多	良		
5	土師器 甕	底部 %	—	6.6	—	灰褐色	黃褐色	密 細砂粒多	良		
6	土師器 甕	口縁 % (27.4)	—	—	明赤褐色	暗褐色 下部 黑色	密 細砂粒少	良			
7	土師器 甕	底部 %	—	7.8	—	明褐色	明褐色	密 砂粒やや多	良		
8	土師器 环	口縁 % (12.8)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	素地は精製		
9	土師器 环	口縁 % (11.0)	—	—	淡褐色 口縁部分 黑色	淡褐色 口縁部分 黑色	密 細砂粒やや多	良	黒彩 表面はかなり 精製されている		
10	土師器 环	% (13.6)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩		
11	土師器 环	口縁 % (14.4)	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	黒彩 口縁スス付着		

表9 008号住居跡出土土器表

辨別番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	ほぼ完形	13.4	5.4	24.9	暗褐色	黑色	密 砂粒多	良	表面スス付着 (油煙) ややもろい	
2	土師器 甕	口縁一部欠 %	15.5	7.0	20.2	暗赤褐色 黒斑有	褐色	密 細砂粒やや多	良		19
3	土師器 甕	%	14.1	8.8	24.7	暗褐色	褐色	密 砂粒多	良		19
4	土師器 甕	口縁～ 腹部	16.2	—	—	褐色 暗褐色	黑褐色	密 砂粒やや多	良	二次的に大きうけた らしく器皿がまだら に黒色している	19
5	土師器 甕	口縁 % (19.6)	—	—	暗褐色	黑色	密 細砂粒やや多	良	表面 スス状物付着		
6	土師器 甕	口縁 %	16.2	—	—	赤褐色	黑色	密 細砂粒やや多	良	削りは不明瞭	
7	土師器 甕	口縁 % (16.2)	—	—	赤褐色	口縁一部 暗褐色 暗褐色	密 細砂粒少	良			
8	土師器 甕	底 部	—	8.0	—	赤褐色	暗褐色	密 細砂粒多	良		

博団 番号	器種	造存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の	回版
			口径	底径	高	外	内				
9	土師器 甕	底部	—	6.0	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		
10	土師器 鉢	口縁～ 胴部	(23.0)	—	—	明褐色 黒斑有	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		
11	土師器 甕	底部	冷	—	7.6	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	
12	土師器 壺			10.4	—	11.0	赤褐色 下暗褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	二次焼成で器面 が荒れている 口縁スヌ付着
13	土師器 壺			—	—	—	赤褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩
14	土師器 短頸壺	口縁	%	(15.2)	—	—	赤褐色	黑色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩 口縁スヌ付着
15	土師器 (盞)	口縁	%	(14.2)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	内面剥離 荒れている。
16	土師器 环		%	14.0	—	5.7	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	器面、内面と 外面とも荒 れている
17	土師器 环	底部欠%	13.9	—	—	褐色 黒斑有	褐色	密 細砂粒多	良	赤 彩	
18	土師器 环	口縁	冷	(15.0)	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩
19	土師器 环	口縁	冷	(14.6)	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩 器面が荒れて いる。
20	土師器 环	ほぼ完形	12.8	—	5.3	黑褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩	19
21	土師器 环	完 形	13.6	—	4.8	褐色 暗褐色	褐色 暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤 彩 内面がやや荒 れている	19
22	土師器 环	完 形	12.7	—	5.2	褐色	赤褐色	密 細砂粒多	良	赤 彩	19
23	土製支脚		%		長514.5 最狭8.0 対径7.7	明褐色		密 細砂粒多	良	二次焼成のた めもろい燒土 付着	20
26	土製円板	不 明			厚 0.6			密 細砂粒少	良		
27	土製円板	不 明			厚 0.4			密 細砂粒多	良		

表10 009号住居跡出土土器表

博団 番号	器種	造存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の	回版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁 冷	(12.6)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良		
2	土師器 甕	口縁 冷	(12.0)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良		

標団番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	団版
			口径	底径	高	外	内				
3	土師器 甕	底部	—	6.6	—	明褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		
4	土師器 甕	%	15.5	—	5.2	明褐色 ～褐色	明褐色 ～黒褐色	密 細砂粒やや多	良	表面が焼かれている と見られるが、一太火 に火をうけた為不規 則な状態	20
5	土師器 甕	口縁 %	(15.0)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		

表11 010号住居跡出土土器表

標団番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	団版	
			口径	底径	高	外	内					
1	土師器 甕	口縁～ 腹部上半	19.0	—	—	赤褐色	黒斑有	灰褐色	密 細砂粒やや多	良	器面が荒れて 脆くなっている	20
2	土師器 甕	口縁 %	(15.4)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良			
3	土師器 甕	底部 %	中央欠	—	—	黒褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良			
4	土師器 甕	完形	17.0	6.8	30.4	暗褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		20	
5	土師器 甕	口縁 %	14.2	—	—	暗褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良			
6	土師器 甕	%	(14.0)	7.0	22.3	赤褐色	褐色	密 細砂粒少	良		20	
7	土師器 甕	ほぼ完形	13.7	6.6 6.6	13.9	赤褐色	明褐色 口黒色	密 細砂粒少	良	二次焼成の為 口縁部が一部 久けている。	20	
8	土師器 甕	%	10.2	5.1	12.1	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		21	
9	土師器 甕	%	13.8	6.8	17.8	赤褐色	黒色 口緑褐色	密 細砂粒少	良	スス付着	21	
10	土師器 甕	口縁 %	(10.2)	—	—	黑色	褐色	密 細砂粒やや多	良			
11	土師器 甕	ほぼ完形	10.6	7.0	12.8	暗褐色 黒褐色 一部明褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良		21	
12	土師器 甕	%	27.6	—	28.8	明褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	一部火をうけた らしく器面が荒 くなっている	22	
13	土師器 甕	完形	21.7	—	30.8	褐色 黒斑有	褐色	密 細砂粒やや多	良		22	
14	土師器 甕	%	(12.6)	—	—	灰褐色 一部 黒褐色	暗褐色	密 細砂粒多	良	火をうけたら しく脆い		
15	土師器 甕	%	11.2	—	11.2	赤褐色 一部 暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	火をうけたらし く器面が荒れて 脆くなっている	21	
16	土師器 甕	%	11.8	—	8.8	赤褐色 黒斑	褐色	密 細砂粒少	良		20	

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版	
			口径	底径	高	外	内					
17	土師器 环	ほぼ完形	13.0	—	5.6	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	火をうけたら しくやや焼く なっている	21	
18	土師器 环	%	14.2	—	—	褐色	明褐色	密 細砂粒や多	良	火をうけたら しく器面が荒 れて無い赤彩	21	
19	土師器 环	ほぼ完形	11.4	—	4.6	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	21	
20	土師器 环	ほぼ完形	13.4	—	5.3	褐色	黑色	密 細砂粒少	良	赤彩	21	
21	土師器 环	完 形	11.4	—	4.3	黑色 つやがある 口縁部	黒褐色	密 細砂粒少	良		21	
22	土師器 环	ほぼ完形	14.4	—	3.9	褐色 (素地)	褐色	密 細砂粒少	良		21	
23	土師器 环	口縁 細 (16.6)	—	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒や多	良	赤彩		
24	土師器 环	底部欠%	12.6	—	—	暗褐色	黒褐色	密 細砂粒少	良	火をうけたら しく器面が荒 れても多い	22	
25	頃 息 器 盤	口縁 細 (15.0)	—	—	—	灰色	赤灰色	緻密 砂粒少小石含	良好	右回転 ロクロ成形		
26	土製支脚	完 形	—	—	—	長さ14.5 直径 4.4 短径 4.2	褐色		密 細砂粒多	良		22
27	土 玉			—	—	長径 2.6 短径 2.4	赤褐色		密 細砂粒少	良		22

表12 011号住居跡出土土器表

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 小型 瓦	完 形	10.4	4.8	10.8	褐色 黒斑有 口縁 褐色 明褐色		密 細砂粒少	良		22
2	土師器 环	完 形	13.7	—	5.2	褐色 底部 黒斑有	褐色	密 細砂粒少	良		22
3	土師器 高 环	脚 部	—	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒や多	良		

表13 小池新林遺跡石器一覧表

擇図番号	出土遺構又はグリッド	分類	遺存度	寸法 cm	重量 g	特徴	色調	石質	図版番号
48	002	砥 石	不 明	12.5×7.2×4.7	600+	3面を使用	暗灰色	凝灰質砂岩	15
49	002	砥 石	完 形	2.7×2.9×2.5	14.5		灰 色	凝灰質砂岩	
13	003	砥 石	不 明	4.8×3.7×2.0	50+	バチ形 穿孔	灰白色	泥質凝灰色	15
14	003	砥 石	完 形	9.4×3.3×1.3	88	短舌形 穿孔	灰白色	細粒砂岩	15
22	004	砥 石	完 形	13.4×3.9×3.2	154		灰綠色	綠泥片岩	17
38	005	管 玉	完 形	2.4×0.9	4	一方より穿孔	淡綠色	碧 玉	18
24	006	不 明	不 明	3.7×1.4×0.3	2.3+		青灰色	滑石片岩	
25	006	不 明	不 明	4.7×2.4×1.0	16+		青灰色	滑石片岩	25
1	A4-52	双孔円板	完 形	3.8×3.6×0.6	16		青灰色	滑石質	22
1	008	叩 石	%	9.7×5.3×4.3	264+	先端部、両面を使用 不行している	灰褐色	流紋岩	
2	006	磨製石斧	完 形	4.6×3.7×1.2	30	片 刀	暗灰色	砂 岩	25
3	001	叩 石	完 形	6.7×6.4×3.7	270	磨石の可能性あり	淡灰褐色	石英砂岩	25
4	008	叩 石	完 形	8.2×6.1×4.1	312	磨石の可能性あり	青灰色	安山岩	25
5	001	磨 石	完 形	5.7×4.0×2.0	54	かなり軟質ではろぼろ	灰 色	軟質砂岩	25
6	004	石 皿	%	15.8×13.3×4.7	1,225+	凹みが11ヶ所 多孔質	淡灰褐色	安山岩	25

表14 小池新林遺跡遺構一覧表

遺構番号	平面形	規模 m	主軸方位	主柱穴	周溝	カマド	時期	備考
001	方 形	5.70×5.70	N-15°-E	4	無	北壁中央	鬼高	貯藏穴有
002	方 形	6.90×6.60	N-24°-W	4	無	北壁中央	〃	003と重複
003	方 形	4.54×4.46	N-1°-E	4	有	北壁中央	〃	002と重複
004	方 形	5.20×不明	N-14°-W	4	有	北壁中央	〃	
005	方 形	7.10×7.00	N-69°-E	4	有	無	〃	貯藏穴有
006	方 形	5.50×不明	不 明	(1)	有	不 明	〃	
007 A	方 形	不明	不 明	不 明	有	不 明	〃	007 Bと重複
B	方 形	不明	不 明	不 明	有	不 明	〃	007 Aと重複
008	方 形	5.64×5.36	N-76°-E	4	無	東壁中央	〃	貯藏穴有
009	方 形	5.48×不明	不 明	(2)	無	不 明	〃	
010	方 形	5.82×5.54	N-5°-E	4	有	北壁中央	〃	貯藏穴有
011	(方 形)	不明	不 明	不 明	有	不 明	〃	

表15 001号住居跡出土土器

辨認番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁 級	(25.4)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	一部暗褐色	
2	土師器 甕	口縁 級	21.8	—	—	灰褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		
3	土師器 甕	脚部 級	—	—	—	褐色	灰褐色	やや密 大粒子多	良	一部灰褐色	
4	土師器 环	— 級 (9.8)	—	—	—	淡明褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	生地特製され ている 内面 黒色処理	
5	土師器 环	口縁 級	(12.9)	—	—	褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	一部暗褐色	
6	土師器 高坏	坏部	15.2	—	—	褐色	黑色	密 細砂粒少	良	黑彩	41
7	土師器 高坏	坏部 級	(16.4)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		
8	土師器 高坏	脚部	—	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	全面に燒土が 付着	
9	土師器 高坏	接合部	—	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良		
10	須恵器 环 蓋	— 級	9.3	—	—	青灰色	青灰色	緻密 砂粒ごく少	良好		41

表16 002号住居跡出土土器表

辨認番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁 級	(21.4)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良		
2	土師器 甕	口縁 級	(15.4)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良		
3	土師器 甕	口縁 級	(22.8)	—	—	褐色	茶褐色	密 細砂粒やや多	良		
4	土師器 高坏	脚部	—	—	—	灰褐色	—	密 細砂粒やや多	良		

表17 003号住居跡出土土器表

辨認番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版	
			口径	底径	高	外	内					
1	土師器 甕	口縁 級	(14.6)	—	—	灰褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良			
2	土師器 甕	— 級	—	11.1	5.8	8.3	暗褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	火をうけたらし くもろい 表面がかなり磨 耗している	41

埠固 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の	図版
			口径	底径	高	外	内				
3	土師器 甕	底部%	—	(8.4)	—	褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		
4	土師器 环	%	13.8	6.4	4.8	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	二次的に大きさうけたらめの器面が見れている	41
5	土師器 高环	ほぼ完形	16.2	11.2	8.4	明褐色	明褐色	密 細砂粒多	良	砂粒はかなり細かい やや砂質	41
6	土製支脚	ほぼ完形	—	—	長13.6 巾6.0 厚6.0	褐色	—	やや密 細砂粒多	良	二次焼成のため器面が見れている	41
7	土製紡錘車	ほぼ完形	—	—	長5.2 厚2.9	黒褐色	—	密 細砂粒やや多	良		

表18 004号住居跡出土土器表

埠固 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁部%	13.6	—	—	褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良		
2	土師器 甕	口縁%	(13.4)	—	—	赤褐色	黑色	密 細砂粒小	良		
3	土師器 甕	%	10.3	4.9	12.2	赤褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良		41
4	土師器 甕	胴部～ 底部%	—	8.5	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	黒斑有	41
5	土師器 甕	胴部～ 底部%	—	6.8	—	暗褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良	下部黒褐色	
6	土師器 环	ほぼ完形	15.5	—	5.5	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	黒斑有	42
7	土師器 环	ほぼ完形	15.1	—	4.8	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	素地は黒色	42
8	土師器 环	口縁%	(9.4)	—	—	灰褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良		
9	土師器 环	%	—	—	—	暗褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
10	土師器 环	%	(13.6)	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良	所黒がまだら 素地はかなり 粗製	
11	土師器 高环	縁部%	—	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	8と胎土が似る (同1個体?)	
12	土製支脚	残欠	—	—	—	褐色	—	密 細砂粒多	良	燒土付着	

表19 005号住居跡出土土器表

神田 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の 記載	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁～ 胴中央部	17.3	—	—	赤褐色 赤褐色 灰褐色	赤褐色 赤褐色 灰褐色	密 細砂粒少	良	二次焼成のた め器面が荒れ ている	42
2	土師器 甕	口縁 %	(18.3)	—	—	赤褐色	赤褐色 一部暗褐色	密 細砂粒少	良		
3	土師器 甕	口縁 %	(20.4)	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒や多	良		
4	土師器 壺	%	(12.6)	—	—	赤褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良	二次焼成のた め器面がや や荒れている	
5	土師器 壺	%	12.4	6.8	4.1	淡明褐色	淡明褐色	密 細砂粒少	良	ロクロ成形右 回転	
6	土師器 壺	%	12.8	7.2	4.5	淡褐色	褐色	密 細砂粒少	良	ロクロ成形右 回転	42
7	土師器 壺	%	13.0	6.2	4.1	淡褐色 底部 暗褐色	淡褐色 一部 暗褐色	密 細砂粒や多	良	ロクロ成形右 回転	42
8	土師器 壺	%	14.2	6.4	4.8	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	ロクロ成形右 回転	42
9	土師器 壺	%	(12.6)	7.6	4.3	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	ロクロ成形右 回転	
10	土師器 壺	口縁 %	(13.8)	7.0	4.5	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	火をうけたら しく内部が一 部剥離	
11	土師器 壺	口縁 %	(14.0)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	ロクロ成形右 回転	
12	土師器 壺	口縁 %	(14.0)	—	—	黑色 底部 灰褐色	黑色	密 細砂粒ごく少	良	ロクロ成形右 回転	
13	土師器 壺	底部	—	7.0	—	褐色	暗褐色	密 細砂粒小	良	内面に燒土付着 火をうけたらしく 器面が荒れている ロクロ成形右回転	
14	須恵器 甕	口縁～ 胴部 %	(27.2)	—	—	暗褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良	表面に燒土付着	
15	須恵器 甕	底部 %	—	14.4	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒多	良		
16	須恵器 甕	胴部	—	—	—	明褐色	灰褐色	密 砂粒少	良	須恵としては燒 きがあまい 表面に燒土付着	

表20 007号住居跡出土土器表

神田 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の 記載	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	%	17.4	7.8	—	暗褐色	赤褐色	密 細砂粒や多	良		42
2	土師器 甕	口縁～ 胴部	15.1	—	—	褐色	暗褐色	密 細砂粒や多	良		42
3	土師器 甕	%	15.4	6.4	16.0	褐色	灰褐色 藍色	密 細砂粒や多	良	外部スヌ状 付着	42

特固 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
4	土師器 壺	完形	14.1	6.8	18.2	赤褐色	黑色	密 細砂粒やや多	良		43
5	土師器 壺	口縁 只 (17.0)	—	—	—	明褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		
6	土師器 壺	口縁 只 (18.4)	—	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		
7	土師器 壺	底部	7.6	—	—	赤褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良		
8	土師器 壺	ほぼ完形	13.2	—	5.5	口縁 赤褐色 全体黒	暗褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	43
9	土師器 壺	ほぼ完形	12.6	—	5.5	暗褐色 底部黒	暗褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	43
10	土師器 壺	完形	12.6	—	5.0	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	43
11	土師器 壺	% (14.0)	—	—	5.1	灰褐色	明褐色	密 砂粒少	良	赤彩	
12	土師器 壺	口縁 %	13.2	—	—	明褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
13	土師器 壺	完形	14.4	—	5.6	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	赤彩 内面がやや荒 れていても 二次的焼成?	43
14	土師器 壺	口縁 % (12.6)	—	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
15	土師器 壺	%	15.0	3.8	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
16	土師器 壺	% (17.8)	—	—	—	素地 灰褐色	素地 灰褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	
17	土師器 壺	ほぼ完形	13.2	—	5.3	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	43

表21 008号住居跡出土土器表

特固 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 壺	口縁~ 胴上部	15.7	—	—	赤褐色 一部 褐色	黃褐色 一部 赤褐色	密 細砂粒やや多	良		43
2	土師器 壺	口縁 % (23.8)	—	—	—	明褐色	明褐色	密 砂粒やや多	良		
3	土師器 壺	口縁 % (15.6)	—	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良		
4	土師器 壺	底部 %	—	9.8	—	暗褐色	赤褐色	密 細砂粒多	良		
5	土師器 壺	底部	—	6.4	—	赤褐色	赤褐色	密 砂粒やや多	良		
6	土師器 壺	%	21.0	—	—	暗褐色	口縁 明褐色 胴部 暗褐色	密 細砂粒少	良		

神國 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
7	土師器環	底部欠片	13.0	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒や多	良	赤 彩	43
8	土師器環	% (13.2)	—	—	—	素地 明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
9	土師器環	% (14.0)	—	4.5	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
10	土師器環	完形	13.8	—	5.7	黒褐色	明褐色	密 細砂粒多	良	赤 彩	43
11	土師器環	% (13.6)	—	—	—	暗褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
12	土師器環	% (16.6)	—	4.4	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	43

表22 009号住居跡出土土器表

神國 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底部	高	外	内				
1	土師器環	% (10.8)	—	—	3.5	明褐色 口縁 黒色	暗褐色	密 細砂粒少	良	黒 彩	43
2	土師器環	% (10.2)	—	—	3.7	淡褐色 口縁 黒色	黑色	密 細砂粒少	良		
3	土師器環	% (13.2)	—	—	0.4	黒灰色	黑色	密 細砂粒や多	良	黒 彩	
4	土師器環	% (10.0)	—	—	5.1	灰褐色	黒灰色	密 細砂粒や多	良		43

表23 012号住居跡出土土器表

神國 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版	
			口径	底径	高	外	内					
1	甕	口縁～ 腹部 % (12.8)	—	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒多	良	二次焼成のた めかもろい		
2	土師器甕	口縁 % (13.0)	—	—	13.1	暗褐色	上半 暗褐色 下半 明褐色	密 細砂粒少	良		44	
3	土師器甕	口縁 % (13.6)	—	—	—	褐色 黒斑	黒褐色	密 細砂粒や多	良	二次焼成のた めかもろい		
4	土師器甕	底 部	—	—	5.2	—	黒褐色	褐色	密 細砂粒や多	良		
5	土師器環	% (11.0)	—	—	(3.2)	暗褐色 黒褐色	黒褐色	密 細砂粒少	良	黒 彩	44	
6	土師器環	完 形	10.6	—	3.6	黑色 暗褐色	黑色	密 細砂粒少	良	磨きなし ナデ 黒 彩	44	
7	土師器環	完 形	10.4	—	3.2	茶褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	黒 彩	44	
8	土師器環	% (10.6)	—	—	4.0	淡黑褐色	淡黑褐色	密 細砂粒少	良	黒 彩	44	

表24 013号住居跡出土土器表

埠固番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	団版
			口徑	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁 5%	(22.2)	—	—	口縁 暗赤褐色	黒色	密 細砂粒少	良		
2	土師器 甕	口縁 5%	13.6	—	—	褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良		
3	土師器 甕	底部 5%	—	5.4	—	茶褐色	黒色	密 細砂粒やや多	良		
4	土師器 甕	5%	(13.2)	—	5.4	褐色 黒斑有	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩	44

表25 014号住居跡出土土器表

埠固番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	団版
			口徑	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	5%	15.5	3.8	27.6	褐色 脇部 黒斑有	褐色	密 細砂粒やや多	良		44
2	土師器 甕	5%	15.4	7.0	25.2	褐色 黒斑有	褐色	密 細砂粒やや多	良		45
3	土師器 甕	ほぼ完形	15.0	8.0	23.8	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒多	良		45
4	土師器 甕	口縁～ 胴部	15.8	—	—	褐色 黒斑有	褐色	密 細砂粒やや多	良		44
5	土師器 甕	口縁 5%	(21.2)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		
6	土師器 甕	口縁 5%	(22.2)	—	—	暗赤褐色	褐色	密 細砂粒多	良		
7	土師器 甕	底部	—	8.0	—	茶褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良		
8	土師器 短頭壺形	5%	10.0	5.6	11.5	灰黑色	灰黑色	密 細砂粒やや多	良		44
9	土師器 甕	底部	6.0	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒やや多	良		
10	土師器 甕	5%	30.3	—	—	茶褐色 脇部 黒斑有	褐色	密 細砂粒やや多	良		45
11	土師器 甕	5%	(27.4)	9.6	19.6	茶褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良	二次燒成のため もろくなっている。 器面に又々付着	45
12	土師器 甕	(瓶) 口縁 5%	(33.0)	—	—	褐色 脇部 赤褐色	灰褐色	密 細砂粒多	良		
13	土師器 甕	5%	(21.4)	7.4	9.5	褐色 黒斑有	明褐色	密 細砂粒やや多	良		45
14	土師器 甕	完 形	13.2	—	4.8	黑褐色	茶褐色	密 細砂粒やや多	良		45

神社番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
15	土師器 环	ほぼ完形	13.8	6.5	4.5	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		45
16	土師器 环	%	14.0	—	4.9	褐色 底部 黒斑有	黒褐色	密 細砂粒やや多	良		45
17	土師器 环	ほぼ完形	14.0	8.0	4.6	赤褐色 底部 黒斑有	赤褐色	密 細砂粒やや多	良		45
18	土師器 环	% (11.6)	—	—	5.2	黑色	灰褐色	密 細砂粒やや多	良		45
19	土師器 环	脚部 %	—	(11.0)	—	褐色	明褐色	密 細砂粒少	良		

表26 017号住居跡出土土器表

神社番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 要	口縁～ 胸部 %	23.3	—	—	明褐色	灰褐色	やや密(1mm程度) 砂粒多	良	二次焼成のためか もうろい。 内面、炭化物着	46
2	土師器 要	口縁～ 胸部 %	(43.6)	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒やや多	良		
3	土師器 要	口縁 % (20.6)	—	—	—	赤褐色	暗褐色 黒灰色	密 細砂粒多	良		
4	土師器 要	% (18.0)	7.6	20.1	—	明褐色	黑色	密 細砂粒やや多	良	二次焼成のた めか、もうろ くなっている。	46
5	土師器 要	口縁～ 胸部 %	19.4	—	—	明褐色 黒斑有	明褐色 黒斑有	密 細砂粒少	良		
6	土師器 要	口縁～ 胸部	15.4	—	—	淡褐色 黒斑有	明褐色	密 細砂粒やや多	良		46
7	土師器 要	口縁～ 胸部 %	(17.6)	—	—	明褐色 黒斑有	褐色	密 細砂粒少	良		
8	土師器 要	口縁 %	11.8	—	—	暗褐色	黑褐色	密 細砂粒少	良		
9	土師器 要	底部	—	6.0	—	黑色	淡褐色	密 細砂粒やや多	良		
10	土師器 要	底部 %	—	7.0	—	黑色	黑色	密 細砂粒やや多	良		
11	土師器 要	底部	—	6.0	—	赤褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		
12	土師器 要	胴～ 底部	—	6.0	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良		
13	土師器 瓶	底部 %	—	13.2	—	淡褐色 黒斑	黒褐色	密 細砂粒やや多	良		
14	土師器 要	底部 %	—	8.0	—	明褐色	淡褐色	密 砂粒	良		
15	土師器 要	底部	—	9.0	—	褐色	暗褐色	密 砂粒	良		

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の	図版
			口径	底径	高	外	内				
16	土師器 環	底部		7.5		黑色	灰褐色	密 砂粒(大粒1mm 前後)やや多	良		
17	土師器 環	%	(8.6)	—	3.8	淡明褐色	淡明褐色	密 砂粒少	良		46
18	土師器 環	口縁～ 頸部 %	(10.2)	—	—	淡灰褐色	淡灰褐色	密 細砂粒ほとん どなし	良		
19	土師器 環	%	(10.4)	—	4.0	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	黒彩	
20	土師器 環	%	(11.0)	—	—	明褐色 (素地)	明褐色	密 細砂粒少	良	赤彩	
21	土師器 環	%	(13.6)	—	—	暗褐色	暗赤褐色	密 細砂粒やや多	良		
22	土師器 環	%	13.0	0.5	3.8	明褐色 黑色	暗褐色	密 細砂粒少	良		46
23	土師器 環	%	(14.0)	—	—	黑色	褐色 一 黑	密 細砂粒少	良		
24	土師器 環	%	(14.2)	(18.0)	3.4	黑色	明褐色 輪状に 黒斑	密 細砂粒少	良		46
25	土師器 環	底部中央 欠 %	(12.0)	(6.4)	3.5	淡明褐色	淡明褐色	密 細砂粒やや多	良		
26	土師器 環	口縁 %	(13.0)	—	—	黑色	黑色	密 細砂粒やや多	良	黒彩	
27	土師器 環	口縁 %	(16.0)	—	—	黑色	黑色	密 細砂粒少	良		
28	土師器 環	手捏風で ある。 %	(10.4)	(7.0)	4.9	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒やや多	良		
29	土師器 環	底部片	—	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒極少	良	ロクロ成形 右回転	
30	土師器 環	%	11.4	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良	ロクロ右回転	
31	土師器 盤	%	(18.0)	—	3.4	明褐色	明褐色	密 砂粒ほとん どなし	良	精製されてい る。	46
32	土師器 盤	大形である (20cm以上)	(21.2)	—	—	明褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	赤彩 精製されている	
33	土師器 高环	脚部	—	8.8	—	明赤褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良		47
34	土師器 高环	脚部	—	(10.2)	—	淡褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良		
35	土師器 高环	脚部 %	—	(11.0)	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	精製されてい る。	
36	須恵器 長 頸壺	側	—	7.2	—	灰色	灰色	緻密 砂粒なし	良好	右回転 ロクロ成形	47

神田 番号	器 種	遺存度	法 量(cm)			色 調		胎 土	燒成	その 他	図版
			口 徑	底 径	高	外	内				
37	須恵器 瓶	底部	—	9.6	—	灰色	灰色	緻密 砂粒なし	良好		
38	須恵器 壺	%	14.0	8.9	3.9	暗灰色	暗灰色	緻密 砂粒なし	良好		46
39	須恵器 壺	高台付% (13.4)	9.8	3.6	灰白色	灰白色	緻密 砂粒極少	良好	右回転 ロクロ成形		
40	須恵器 壺	%	—	—	3.6	灰色	灰色	緻密 細砂粒はんど なし	良好	右回転 ロクロ成形	46
41	須恵器 壺	%	—	—	3.8	灰色	灰色	緻密 砂粒なし	良好	右回転 ロクロ成形	46
42	須恵器 壺	周縁部欠	—	—	—	灰色	灰色	緻密 砂粒少	良好	右回転 ロクロ成形	
43	須恵器 壺	盤部	—	—	—	灰色	灰色	緻密 細砂粒少	良好	ややあまい 須恵質の焼	
44	須恵器 壺	蓋	—	—	—	灰色	灰色	緻密 細砂粒極少	良		
45	須恵器 壺	%	—	—	—	暗灰色	暗灰色	緻密 細砂粒はんど なし	良好		
46	須恵器 壺	% (8.0)	—	—	—	暗灰色	暗灰色	緻密 砂粒はんど なし	良好		

表27 018号住居跡出土土器表

神田 番号	器 種	遺存度	法 量(cm)			色 調		胎 土	燒成	その 他	図版
			口 徑	底 径	高	外	内				
1	土 師 器 甕	口縁	18.0	—	—	明褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良		47
2	土 師 器 甕	口縁 % (18.8)	—	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒や多	良		
3	土 師 器 甕	口縁 %	(22.0)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒や多	良		
4	土 師 器 甕	口縁 %	(18.6)	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒や多	良		
5	土 師 器 甕	口縁 %	(21.6)	—	—	褐色	黑褐色	密 細砂粒や多	良		
6	土 師 器 甕	口縁 %	(15.8)	—	—	黑褐色	暗褐色	密 細砂粒や多	良		
7	土 師 器 甕	口縁 %	(14.6)	—	—	黑色	黑褐色	密 細砂粒少	良		
8	土 師 器 甕	口縁 — 胴部 % (12.0)	—	—	—	黑褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良		
9	土 師 器 甕	口縁 %	(12.4)	—	—	赤褐色 黒斑	赤褐色	密 細砂粒や多	良		

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他の	図版
			口徑	底径	高	外	内				
10	土師器 甕	口縁 %	17.2	—	—	暗褐色	黒褐色	密 細砂粒やや多	良		
11	土師器 甕	底部	8.4	—	—	暗褐色	明褐色 — 暗褐色	密 細砂粒少	良		
12	土師器 甕	底部 %	—	7.6	—	褐色	黑色	密 砂粒少	良		
13	土師器 甕	口縁～ 胴部 %	(31.8)	—	—	明褐色 黑色 斑	灰黑色 褐色	密 細砂粒少	良		47
14	土師器 甕	底部	—	11.0	—	褐色	褐色	密 砂粒少	良		
15	土師器 甕	ほぼ完形	12.6	6.8	4.1	明褐色 体部下部 黑色	灰褐色	密 細砂粒多	良	右回転 ロクロ成形 一大塊成のためかもろい	47
16	土師器 甕	完形	13.5	6.0	3.9	褐色	褐色	密 細砂粒やや多	良		47
17	土師器 甕	%	12.6	7.4	3.1	灰褐色	灰褐色	密 砂粒少	良	底部墨書き (官之里家…?)	47
18	土師器 甕	%	12.6	—	3.7	暗灰褐色	暗灰褐色	密 細砂粒多	良好	右回転 ロクロ成形	47
19	土師器 甕	%	12.6	6.8	3.7	灰褐色	淡褐色 — 灰色	密 細砂粒ごく少	良	右回転 ロクロ成形	47
20	土師器 甕	底部 中央欠 %	(12.0)	—	3.3	灰白色	灰白色	緻密 砂粒なし	良好	須恵器とし てあまい	
21	土師器 甕	%	(13.2)	6.6	3.9	黑色	黑色	密 細砂粒少	良	黒彩 ロクロ 右回転	47
22	土師器 甕	%	(12.0)	(0.6)	3.7	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良		
23	土師器 甕	口縁 %	(15.0)	—	—	灰褐色 黑色	淡褐色	密 細砂粒少	良		
24	土師器 甕	%	—	7.2	—	淡褐色	淡褐色	密 細砂粒はとんど なし	良		48
25	須恵器 甕	口縁～ 胴部 %	(24.4)	—	—	明褐色 — 黑色	明褐色 — 黑色	密 精製されている	良	須恵器の器形で はあるが焼成は 土師	
26	須恵器 甕	口縁 %	(22.4)	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	焼はあまい	
27	須恵器 甕 長頭甕	頭部～ 肩部	—	—	—	淡褐色 灰褐色	暗灰色	緻密 砂粒少	良好		

表28 019号住居跡出土土器表

辨認番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁～ 胴部 $\frac{1}{2}$	22.0	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良		48
2	土師器 甕	口縁	17.2	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良		48
3	土師器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (17.6)	—	—	—	淡褐色	淡褐色	密 細砂粒少	良	甕としてはかなり精製されている。	
4	土師器 甕	口縁～ 胴部 $\frac{1}{2}$	18.2	—	—	褐色 黒斑	灰褐色	密 細砂粒やや多	良	胴部に焼土付着	
5	土師器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (18.0)	—	—	—	淡褐色	淡灰褐色	密 細砂粒少	良	甕としてはかなり精製されている。	
6	土師器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (19.4)	—	—	—	赤褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良		
7	土師器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (14.0)	—	—	—	淡褐色	明褐色	密 細砂粒ほとんどなし	良	甕としては精製されている(年の歴史にちかい)	
8	土師器 甕	底部 中央欠	—	8.2	—	赤褐色	褐色	密 細砂粒少	良		
9	土師器 环	口縁 $\frac{1}{4}$ (12.0)	—	—	—	淡灰褐色		密 砂粒少	良		
10	土師器 高台付环	底部	7.8	—	—	淡褐色	黑色	密 細砂粒極少	良	墨書「子和水」	48
11	須恵器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (27.6)	—	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒やや多	良	須恵の胎土だが焼は土師質	
12	須恵器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (30.8)	—	—	—	灰色	灰色	密 砂粒やや多	良好	断面中央褐色	
13	須恵器 高台付环	底部	7.2	—	—	暗灰色	暗灰色	緻密 砂粒多	良	ロクロ右回転	

表29 020号住居跡出土土器表

辨認番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼土	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$	20.4	—	—	明褐色	灰褐色	密 細砂粒多	良		
2	土師器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (21.0)	—	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒多	良		
3	土師器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (22.2)	—	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良		
4	土師器 甕	口縁 $\frac{1}{4}$ (20.6)	—	—	—	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒やや多	良	二次的に火をうけたらしく 表面が荒れている	
5	土師器 甕	底部 $\frac{1}{4}$	—	7.6	—	暗灰褐色	暗灰褐色	密 細砂粒少	良		

辨別 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		粘土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
6	土師器 甕	底部	—	8.0	—	黒褐色	黒褐色	密 細砂粒や多	良		
7	土師器 甕	底部	—	10.0	—	明褐色	褐色	密 細砂粒少	良	精製されてい る	
8	土師器 甕	%	10.0	7.0	8.5	淡褐色	灰褐色	密 細砂粒多	良		48
9	土師器 甕	口縁 %	31.8	—	—	灰褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良		
10	土師器 甕	%	13.0	6.2	3.9	明褐色	明褐色	密 細緻	良		48
11	土師器 甕	%	12.8	—	3.7	褐色	暗褐色	密 細砂粒少	良	外面帯状にス ヌ付有 内面器面剥離	48
12	土師器 甕	%	12.4	9.2	3.6	淡褐色	淡褐色	密 細砂粒極少	良		48
13	土師器 甕	% (13.0)	—	—	—	明褐色	明褐色	密 赤色粒多 砂粒ほとんど無	良		
14	土師器 甕	%	13.6	6.4	3.8	赤褐色	赤褐色	密 細砂粒少	良	赤褐色の生地 に白色土粒 が含まれる	48
15	土師器 甕	% (14.6)	—	—	—	明褐色	淡褐色	密 砂粒無	良	精製されてい る	
16	土師器 甕	口縁 %	15.6	—	—	灰褐色 一部 黒斑有		密 細砂粒極少	良		
17	土師器 甕	底部 % 中央欠	14.2	7.4	4.5	明褐色	灰褐色	密 細砂粒や多	良	二次的に大き さを取ったと考 えられる右回転 クロコ形	48
18	土師器 甕	%	14.2	7.6	4.6	褐色 一部 暗褐色	明褐色	密 細砂粒多	良	二次焼成のた めもろい器面 磨耗	49
19	土師器 甕	蓋部	—	—	—	暗褐色	暗褐色	密 細砂粒極少	良		
20	土師器 高甕	脚部 %	—	—	—	淡明褐色	淡明褐色	密 砂粒無	良	精製されてい る	
21	須恵器 甕	ほぼ完形	12.8	8.0	3.8	暗褐色	暗褐色	緻密 細砂粒少	良好	墨書き「真」	49
22	須恵器 甕	% (14.6)	8.0	8.0	—	灰白色	灰白色	緻密 砂粒無	良	須恵としては あまり	
23	須恵器 甕	底部 %	0.7	8.0	8.0	灰色	灰色	緻密 砂粒少	良	須恵としては あまり	

表30 021号住居跡出土土器表

井戸 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	回数
			口徑	底部	高	外	内				
1	土師器 甕	%	18.6	5.5	19.8	淡褐色 黒斑	口縁 明褐色 灰黑色	密 細粒やや多	良	口縁に煮こ ぼれの跡あり	49
2	土師器 甕	口縁 %	(22.4)	—	—	淡灰褐色	明褐色	密 細砂粒やや多	良		
3	土師器 甕	口縁 %	(22.4)	—	—	明褐色	明褐色	密 細粒やや多	良		
4	土師器 甕	口縁 %	(24.4)	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細粒やや多	良		
5	土師器 甕	底部 %	—	8.6	—	灰黑色 下部 灰褐色	灰褐色	密 細粒やや多	良		
6	土師器 甕	底部 %	—	11.0	—	灰褐色	灰褐色	密 細粒やや多	良		
7	土師器 甕	底部	—	6.0	—	灰褐色	黑褐色	密 細砂粒やや多	良		
8	土師器 甕	底部	—	3.4	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良		49
9	土師器 甕	胴部	—	—	—	灰褐色	褐色	密 細砂粒少	良	丸底で端に近 い形	
10	土師器 甕	%	24.4	(9.4)	—	褐色 (胴下部) 黒斑	黑色 口縁 灰褐色	密 細砂粒少	良		49
11	土師器 甕	ほぼ完形	26.4	9.6	25.5	明褐色 下部に 黒斑	明褐色 下部に 黒斑	密 細砂粒やや多	良		49
12	土師器 环	%	9.8	3.6	—	淡灰褐色 黒斑	淡灰褐色	密 かなり精製	良		50
13	土師器 环	%	10.0	—	3.2	淡明褐色	暗灰色	密 細砂粒少	良	器面磨耗 受部10.4	
14	土師器 环	口縁 %	(10.0)	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒多	良	内外とも器 面磨耗	
15	土師器 环	%	(11.8)	—	—			密 細砂粒ほとん どなし	良	内外とも器 面磨耗地明褐色 赤影	
16	土師器 环	%	14.6	8.5	3.2	明褐色	明褐色	密 精緻	良		49
17	土師器 高环	脚部	—	11.4	—	淡明褐色	淡明褐色	密 細砂粒多	良	内外とも器 面磨耗	
18	土製支脚	完形	—	—	—	褐色		砂質細砂粒多	良	二次焼成の ためもろい	50

表31 022号住居跡出土土器表

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	少	14.8	6.1	—	茶褐色	茶褐色	密 白っぽい砂粒 を含む	良		50
2	土師器 甕	口縁一 胴上半	15.8	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒や多	良		50
3	土師器 甕	底部欠	13.0	7.4	11.6	褐色 黒斑有	黒褐色	密 細砂粒や多	良		50
4	土師器 环	充 彩	11.8	—	4.2	明褐色 黒斑有	明褐色 黒斑有	密 細砂粒少	良		50
5	土師器 环	少	11.8	—	4.0	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良		50
6	土師器 环	底部中央 少	13.4	—	—	褐色 黒斑有	褐色 黒斑有	密 細砂粒や多	良		50
7	土師器 环	少	12.8	—	4.6	黒灰色 — 褐色	黒灰色 — 褐色	密 細砂粒や多	良		
8	土師器 环	少 (13.4)	—	—	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良	赤 彩	
9	土師器 环	少 (11.4)	—	—	—	褐色	褐色	密 砂粒少	良	外面スス付着	
10	土師器 环	少	12.4	—	2.7	黒褐色	黑色	密 細砂粒少	良		50
11	土師器 高 环	脚 部	—	12.2	—	褐色	褐色	密 細砂粒少	良		

表32 023号住居跡出土土器表

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口径	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	少 (17.0)	—	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒多	良		
2	土師器 环	少 (17.4)	7.6	7.1	—	—	—	密 細砂粒や多	良		
3	土師器 环	少 (12.0) (8.6)	—	3.0	—	黒褐色	黒褐色	密 細砂粒少	良		

表33 小池地蔵グリッド出土土器表

博団 番号	器種	遺存度	法量(cm)			色調		胎土	焼成	その他	図版
			口徑	底径	高	外	内				
1	土師器 甕	口縁	(18.4)	—	—	灰褐色 黒斑	灰褐色	密 細砂粒少	良		
2	土師器 环	%	(13.6)	6.4	4.6	淡褐色	黑色	密 細砂粒少	良	ロクロ右回転	51
3	土師器 高台付环	底部	—	3.5	—	明褐色	黑彩	密 砂粒ほとんど なし	良	墨 精 書 製	
4	土師器 环	底部	—	—	—	明褐色	明褐色	密 細砂粒少	良	墨 書	51
5	土師器 环	底部	—	—	—	灰褐色	灰褐色	密 細砂粒少	良	墨 書	

表34 小池地蔵遺跡石器一覧表

博団 番号	出土遺構又 はグリッド	分類	遺存度	寸法 cm	重量 g	特徴	色調	石質	図版 番号
20	014	筋鍛車	完形	4.2×1.8	36	上面に刻み目状の成形痕	青黒色	滑石質	46
21	014	砥石	完形	6.3×4.0×1.8	66	短骨形	灰白色	凝灰岩	46
47	017	砥石	不明	9.8×3.9×4.6	178+	3面使用	灰褐色	凝灰質砂岩	47
48	017	筋鍛車	%	4.2×1.55	18+	青黒色	滑石質	47	
28	018	砥石	不明	6.6×3.6×2.3	74+	短骨形穿孔	灰白色	凝灰岩	48
24	020	筋鍛車	%	3.45×1.22	27+	青灰色	滑石質	49	
19	021	砥石	不明	4.5×1.9×19	32+	4面使用	灰白色	凝灰質砂岩	50
6	A 7-32	砥石	不明	3.6×3.5×1.85	20+	穿孔	灰白色	凝灰岩	51
7	A 7-05	砥石	不明	5.8×2.95×1.4	38+	灰白色	凝灰質砂岩	51	
8	A 9-81	筋鍛車	%	4.0×1.3	14+	側面に放射状縦刻	綠灰色	滑石質	51
1	A 8-27	磨石	完形	12.6×8.8×4.0	760	表面共に滑らか	黒灰褐色	輝石安山岩	51
2	A 8-52	磨石	%	6.55×5.7×3.7	150+		青灰色	安山岩	51
3	013	砥石	完形	10.5×9.4×5.9			淡灰褐色	砂岩	51
4	A 8-03	磨石	%	12.0×7.0×3.6	370+		淡灰色	流紋岩	
5	A 4-84	磨石	%	7.6×5.0×2.1	120+		淡灰褐色	砂岩	51
6	Z 1-10	磨石	%	5.7×7.0×5.1	299+		淡灰色	石英質砂岩	
7	021	軽石	完形	6.6×5.0×3.0	22		淡灰色	浮岩	51
8	023	軽石	完形	5.15×4.1×2.8	15		淡灰色	浮岩	51
9	017	石墨	%	15.4×12.3×6.0	1,270+	多孔質	青灰色	安山岩	51
10	007	磨石	完形	11.0×7.2×5.1			青灰色	安山岩	
11	007	叩石	完形	8.7×5.7×3.2	225		灰褐色	輝石安山岩	
12	023	磨石	完形	6.1×5.7×4.1	220		青灰色	輝石安山岩	
13	008	磨石	完形	5.0×4.2×3.3	102		灰褐色	石英砂岩	
14	A 4-34	打製石斧	刃部のみ	5.2×6.1×4.2	124+		青黑色	頁岩	
15	A 10-11	打製石斧	完形	9.7×5.1×3.0	209		青黑色	細粒砂岩	
16	007	大珠	完形	6.8×1.45×0.46	8.2		綠灰色	硬玉	

表35 小池地蔵遺跡遺構一覧表

遺構番号	平面形	規模 m	主軸方位	主柱穴	周溝	カマド	時期	備考
001	方 形	6.70×不明	N-12.5°-W	(3)	有	北壁中央	鬼高	貯藏穴有 002と重複
002	方 形	3.52×3.30	不 明	無	一部有	無	不明	001・003と重複
003	方 形	4.12×4.20	N-15°-E	4	有	北壁中央	鬼高	002と重複
004	方 形	5.68×不明	N-5.5°-W	4	有	北壁中央	"	016と重複
005	方 形	3.00×2.70	N-11°-W	無	有	北壁中央	真間	006・007と重複
006	方 形	2.50×不明	N-30°-W	不 明	有	北壁中央	不明	005と重複
007	方 形	6.80×6.50	N-16.5°-E	4	有	北壁中央	鬼高	005と重複
008	方 形	5.85×不明	N-25.5°-W	4	有	北壁中央	"	009と重複
009	(方 形)	不 明	不 明	(1)	有	北壁中央	"	008と重複
012	方 形	4.82×不明	N-9.5°-E	(3)	有	北壁中央	"	013と重複
013	方 形	3.90×不明	N-11.2°-W	4	有	不 明	"	012と重複
014	方 形	5.12×4.80	N-7.5°-W	4	有	北壁中央		貯藏穴有
015	(方 形)	(1.50)×不明	不 明	不 明	有	不 明	不明	
016	(方 形)	不 明	不 明	不 明	有	不 明	不明	004と重複
017	方 形	6.20×6.12	N-4.5°-E	4	有	北壁中央	真間	018と重複
018	隅九方形	5.80×5.50	N-64.5°-E	4	(有)	北東壁中央	国分	017と重複
019	方 形	3.56×3.28	N-11°-W	4	無	北壁中央	"	
020	方 形	5.64×5.30	N-1°-W	4	有	北壁中央	真間	
021	方 形	5.06×4.42	N-17.5°-W	4	有	北壁中央	鬼高	
022	方 形	5.00×4.90	N-55°-W	4	有	北西壁中央	"	貯藏穴有
023	方 形	5.30×不明	N-2.5°-E	(2)	有	北壁中央	不明	

注 010-011は欠番である。

CONTENTS

Preface

Acknowledgments

Introduction

Chapter I Location and Surroundings of Sites

 Section 1 Landscape and Historical Surroundings

Chapter II Koike-shinbayashi Site

 Section 2 Way and Outline of Research

 (1) Way of Research

 (2) Process of Research

 (3) Outline of Research

 Section 2 Found Remains

 Section 3 Found Artifacts

 (1) Artifacts found in dwellings

 (2) Artifacts found in grids

Chapter III Koike-jizo Site

 Section 1 Way and Outline of Research

 (1) Way of Research

 (2) Section of Site

 (3) Way of Process

 (4) Outline of Research

 Section 2 Found Remains

 Section 3 Found Artifacts

 (1) Artifacts found in dwellings

 (2) Artifacts found in grids

Chapter IV A Conclusion

SUMMARY

This is a report of archaeology about two sites. One of Koike-shinbayashi and the other Koike-jizo. Both sites are found at Shibayama Town in Chiba prefecture. They are situated on a plateau between the Kido River and the Taka ya River.

Koike-shinbayashi Site

Found remains in the site are all dwelling pits. They are twelve. They are situated on the narrow plateau between inlets. They are all Onitaka period in Late Kofun age.

Koike-jizo Site

Found remains in the site are twenty-three dwelling pits and one ditch, of which eighteen dwelling pits are Onitaka period in Late Kofun age and five Historical age.

The ditch is Historical age.

写 真 図 版

図版1 小池新林遺跡



1. 小池新林遺跡（航空撮影）

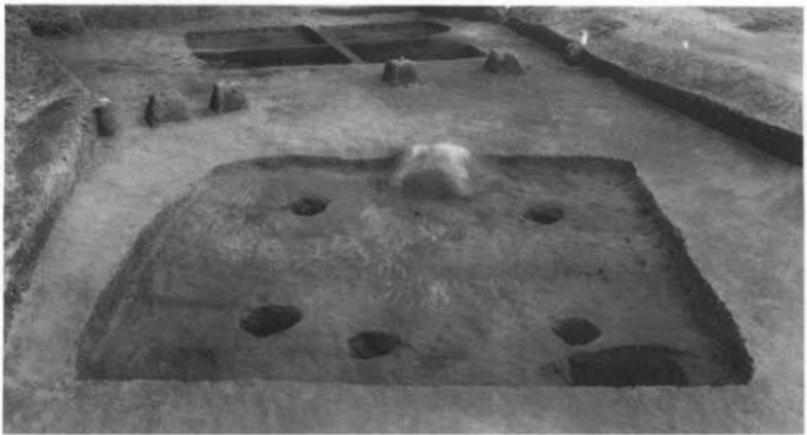
北より



2. 同、遺跡近景

北より

図版2 小池新林遺跡



1. 001号住居跡全景

北より



2. 同、南東側遺物出土状況

北西より



3. 同、北西侧遺物出土状況

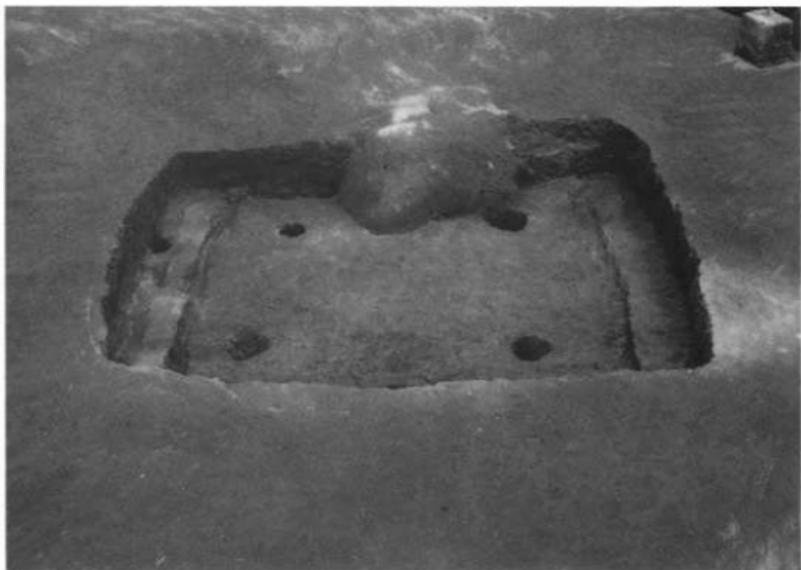
南より

図版3 小池新林遺跡



1. 002号住居跡全景

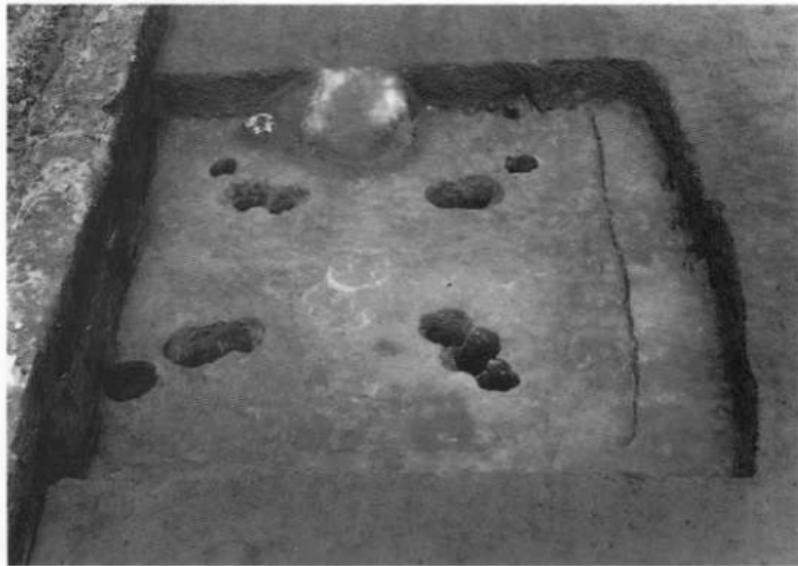
南より



3. 003号住居跡全景

南より

図版4 小池新林遺跡



1. 004号住居跡全景

南より



2. 同、遺物出土状況

図版5 小池新林遺跡

1. 004号住居跡

遺物出土状況



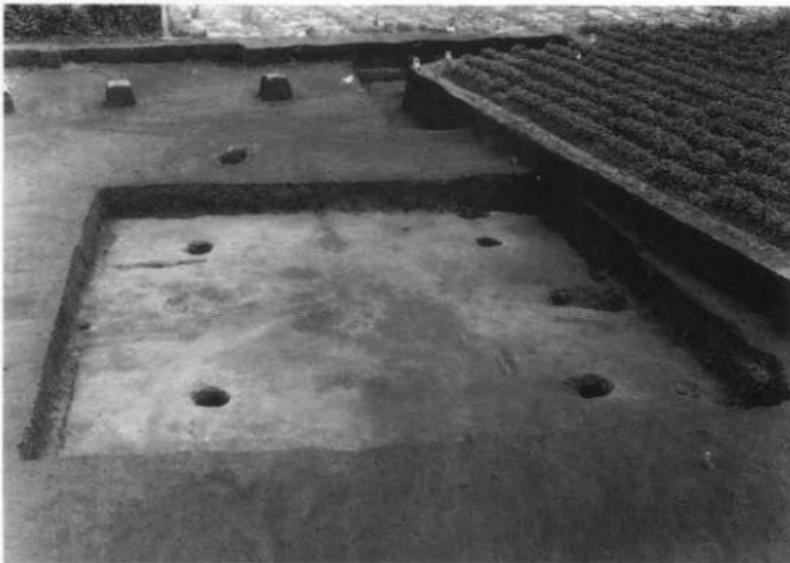
2. 同



3. 同



図版6 小池新林遺跡



1. 005号住居跡全景

北より



2. 006号住居跡全景

東より

図版7 小池新林遺跡

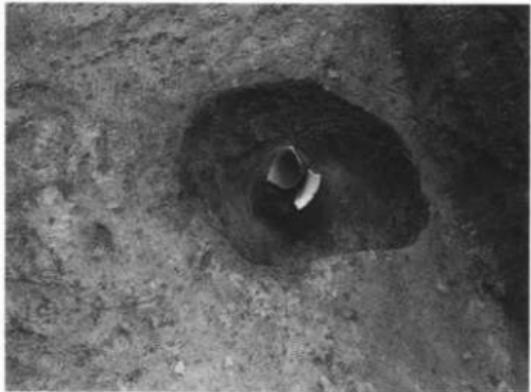
1. 006号住居跡
遺物出土状況



2. 同



3. 同



図版8 小池新林遺跡



1. 007-A・B号住居跡全景

西より



2. 008号住居跡全景

南より

図版9 小池新林遺跡

1. 008号住居跡
遺物出土状況



2. 同



3. 同



図版10 小池新林遺跡



1. 009号住居跡全景



2. 010号住居跡全景

図版11 小池新林遺跡

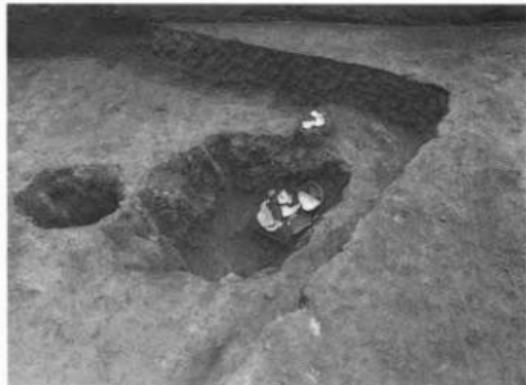
1. 010号住居跡
遺物出土状況



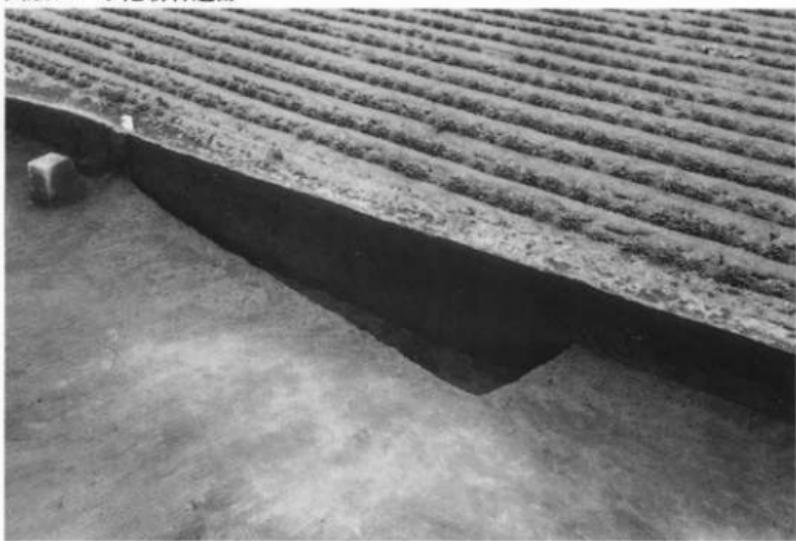
2. 同. 部分



3. 同



図版12 小池新林遺跡



1. 011号住居跡全景

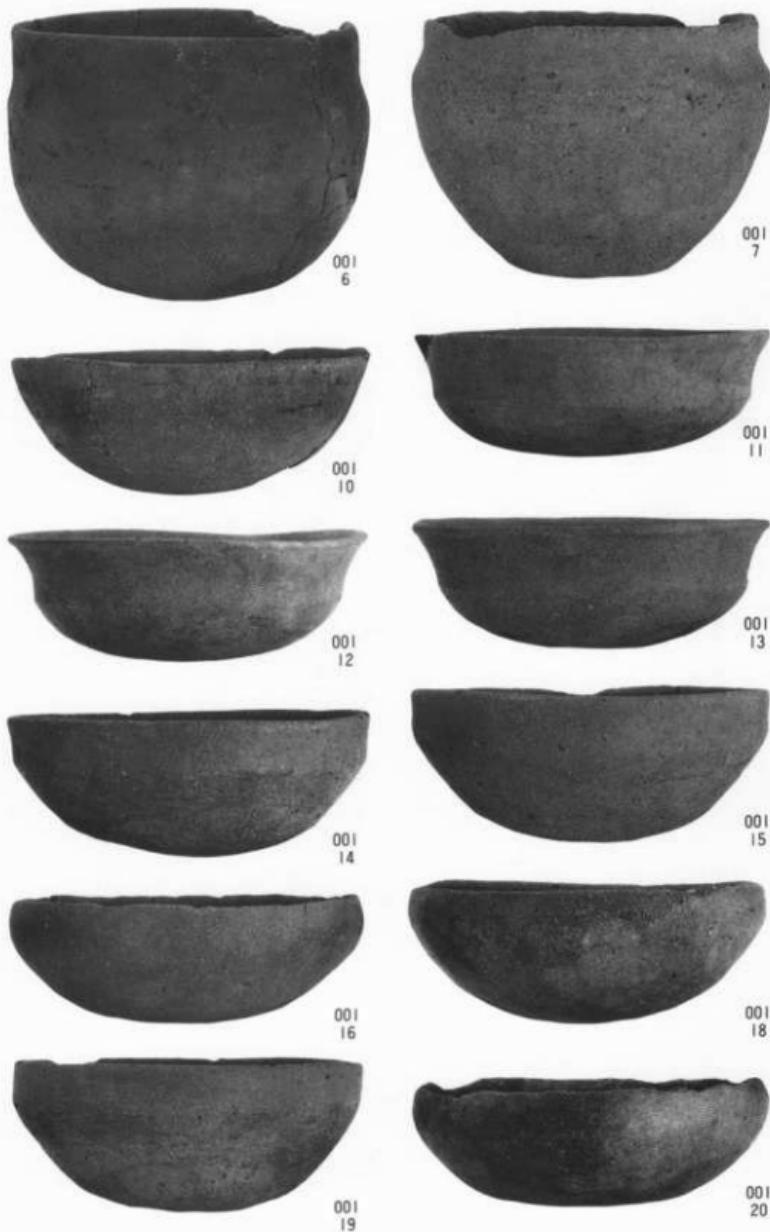
南より

2. 同、遺物
出土状況



北より

図版13 小池新林遺跡



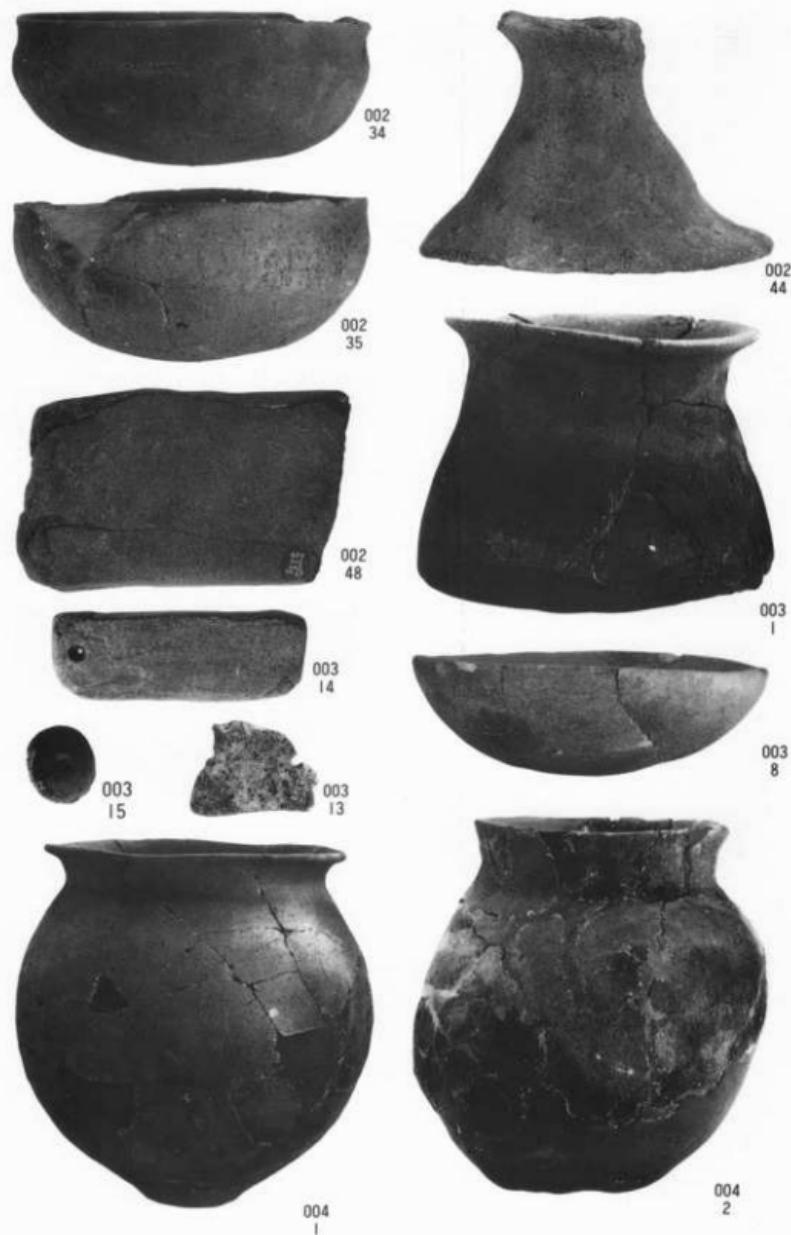
001号住居跡出土遺物

図版14 小池新林遺跡



001・002号住居跡出土遺物

図版15 小池新林遺跡



002・003・004号住居跡出土遺物

图版16 小池新林遗迹



004号住居跡出土遺物

図版17 小池新林遺跡



図版18 小池新林遺跡

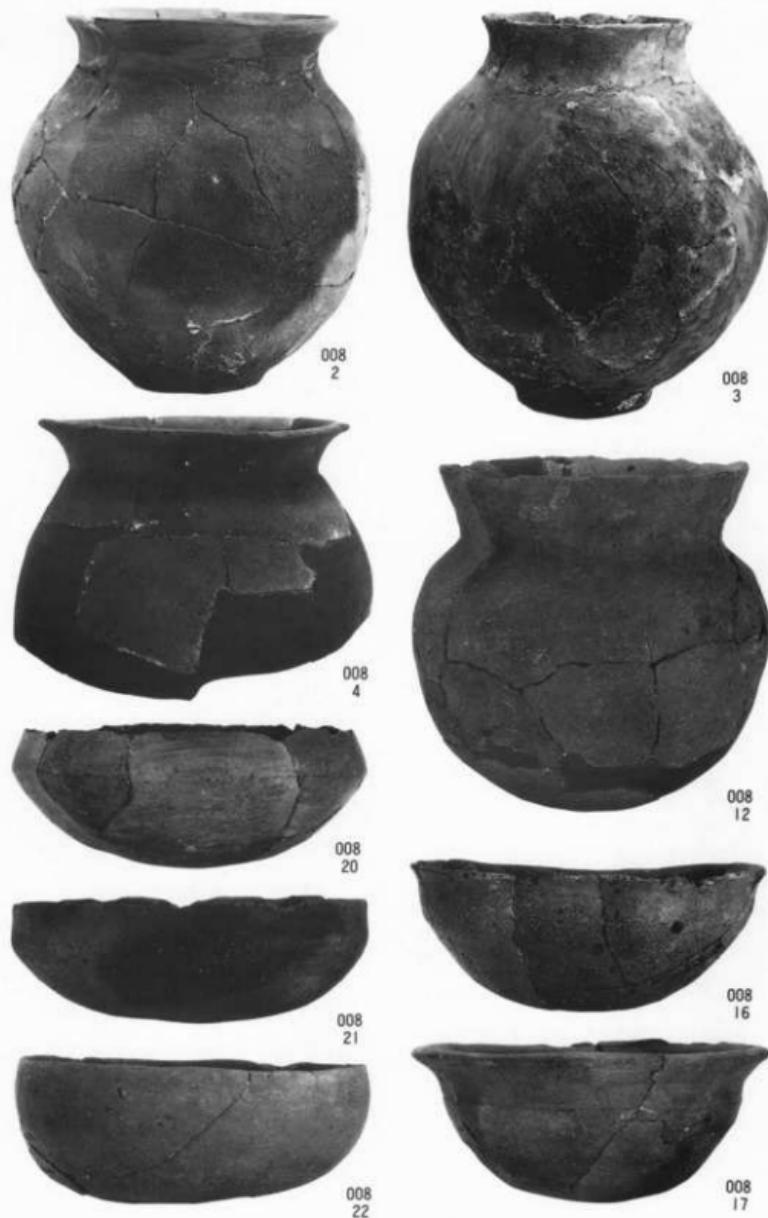


005
38



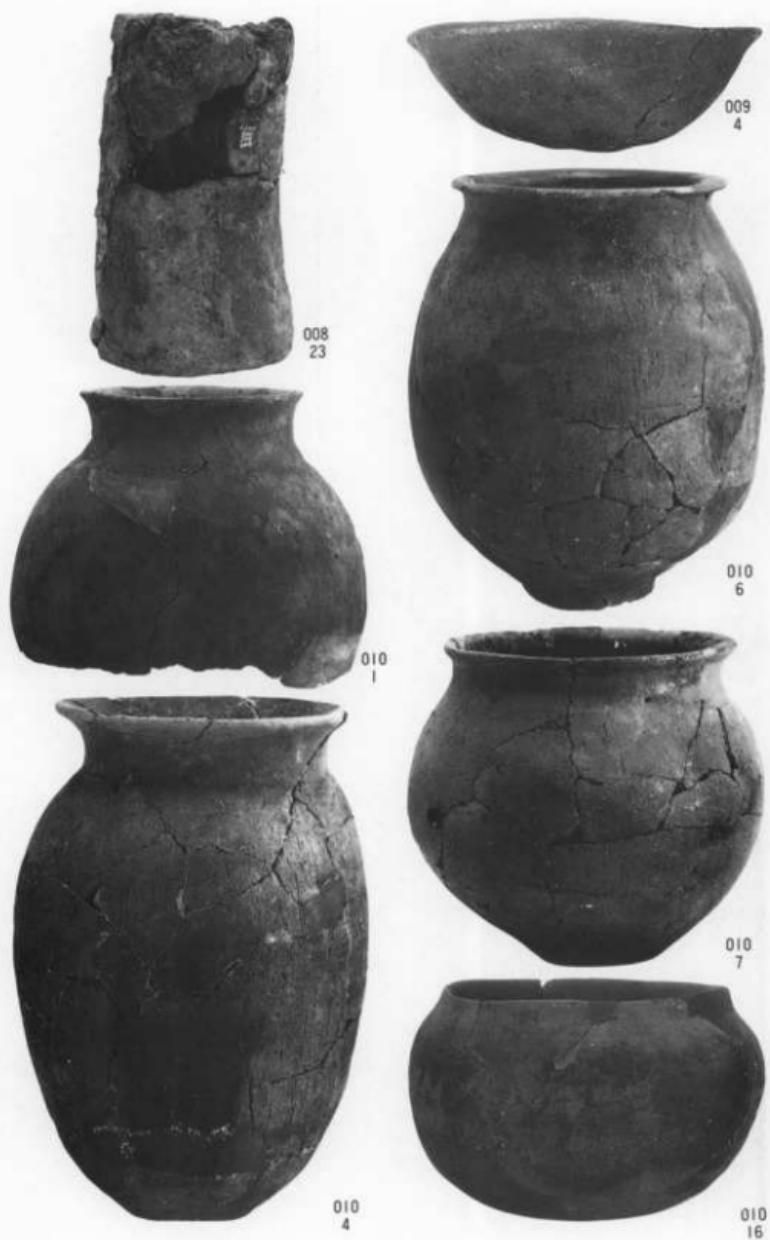
005・006・008号住居跡出土遺物

図版19 小池新林遺跡



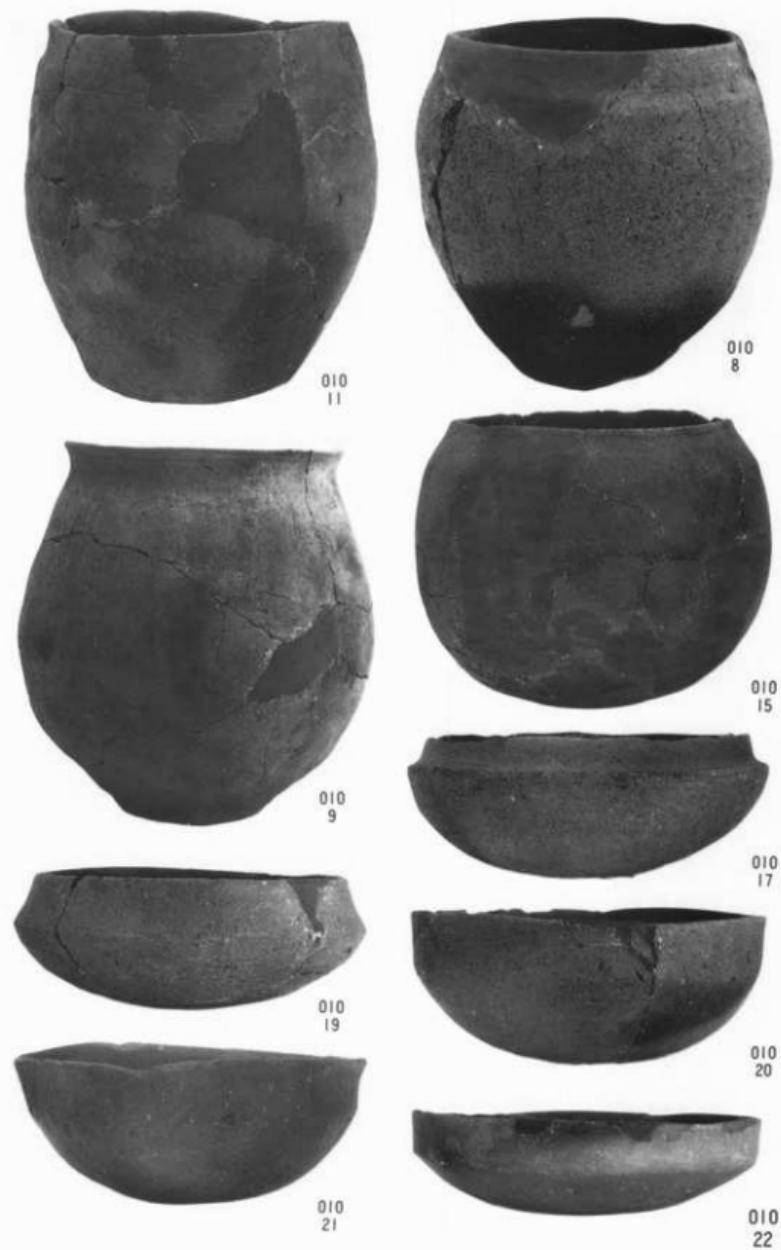
008号住居跡出土遺物

図版20 小池新林遺跡



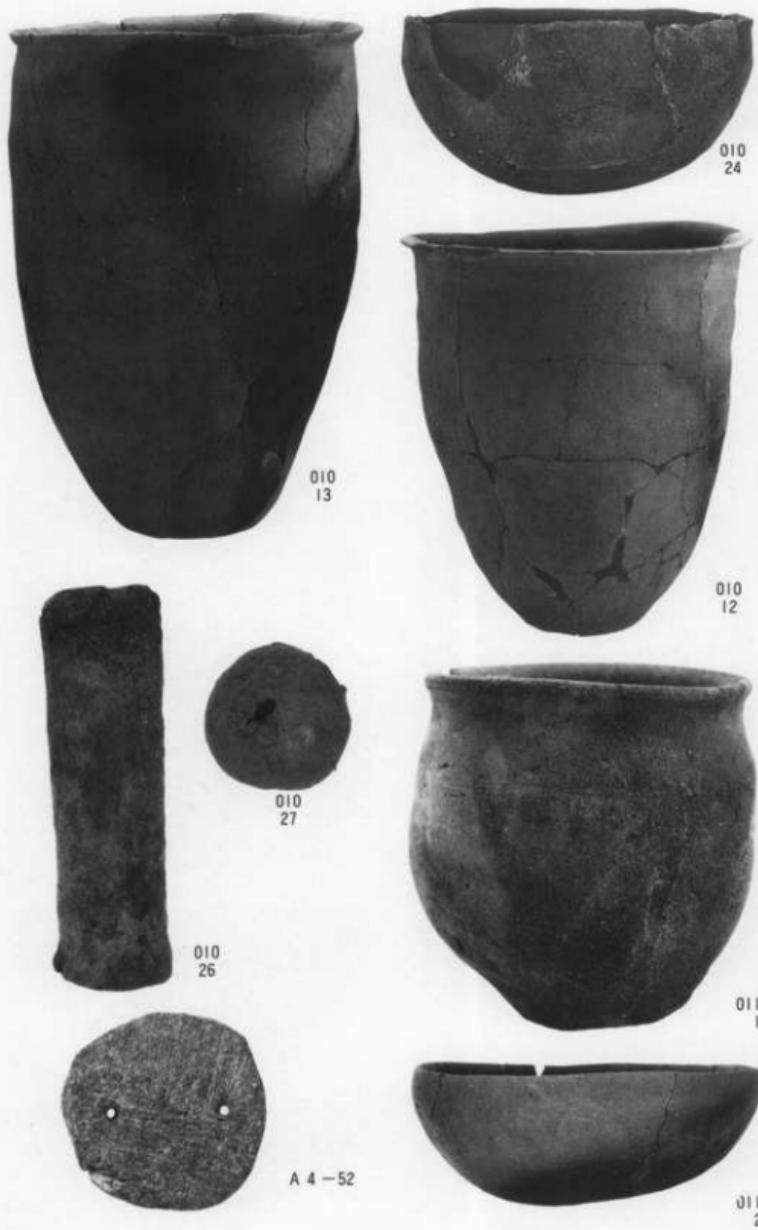
008・009・010号住居跡出土遺物

図版21 小池新林遺跡



010号住居跡出土遺物

図版22 小池新林遺跡



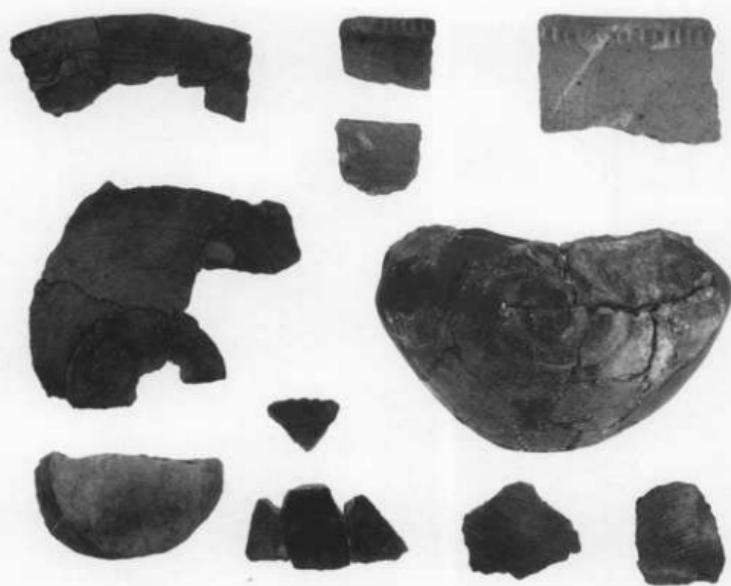
010・011号住居跡・グリッド出土遺物

図版23 小池新林遺跡



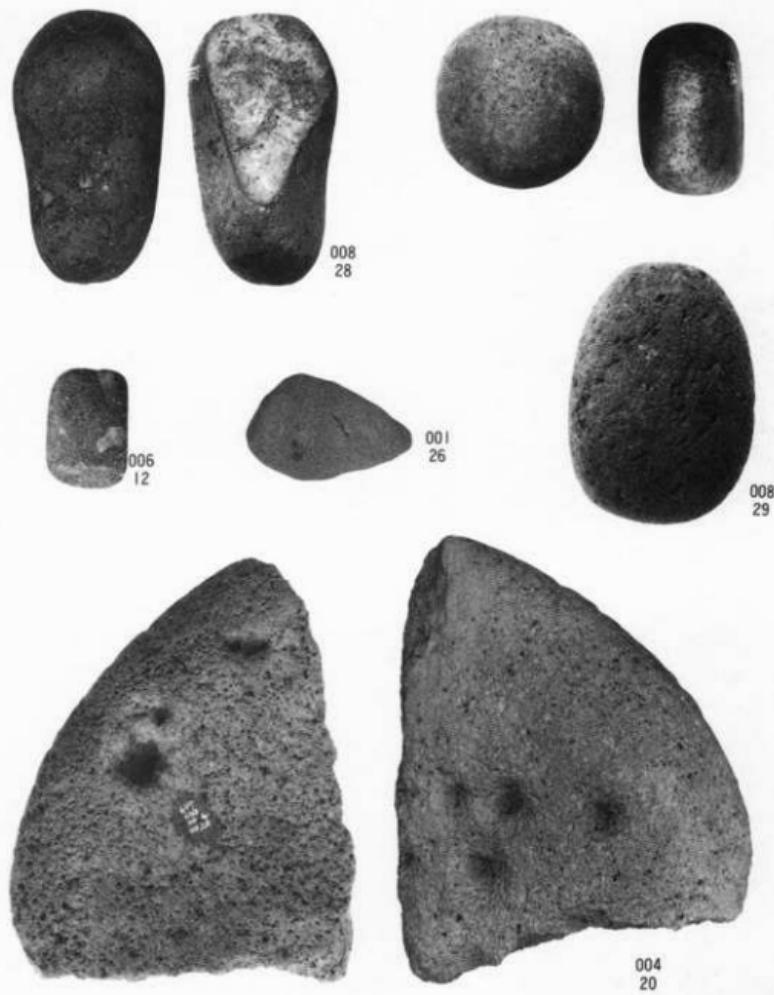
グリッド出土縄文式土器(1)

図版24 小池新林遺跡



グリッド出土縄文式土器(2)

図版25 小池新林遺跡



石器

図版26 小池地蔵遺跡



1. 小池地蔵遺跡全景（航空撮影）

西上空より



2. 同、遺跡近景

北上空より

図版27 小池地蔵遺跡



1. 001号住居跡全景

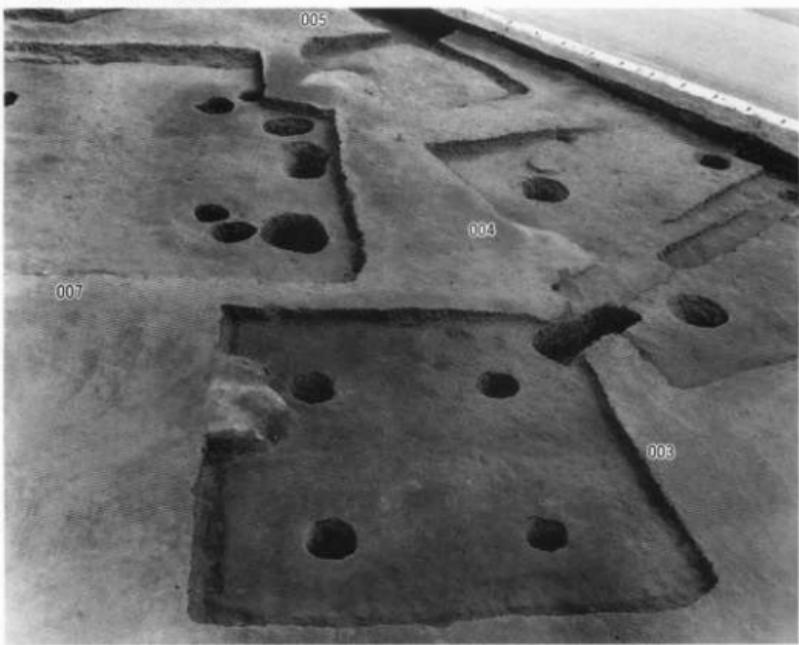
北より



2. 002号住居跡全景

北東より

図版28 小池地蔵遺跡



1. 003号住居跡全景

西より



2. 同、遺物出土状況

図版29 小池地蔵遺跡



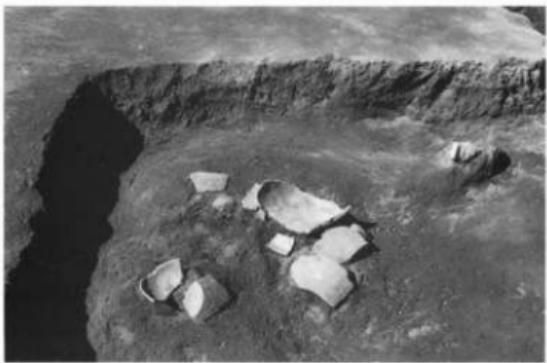
1. 004、016号住居跡全景

北西より

2. 004号住居跡
遺物出土状況



3. 同



図版30 小池地蔵遺跡



1. 005号、006号住居跡全景

北より

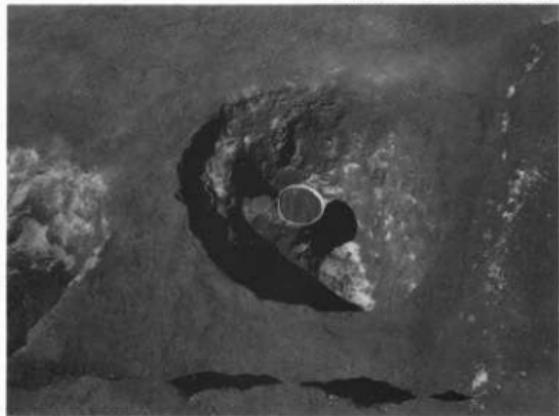


2. 007号住居跡全景

北より

図版31 小池地蔵遺跡

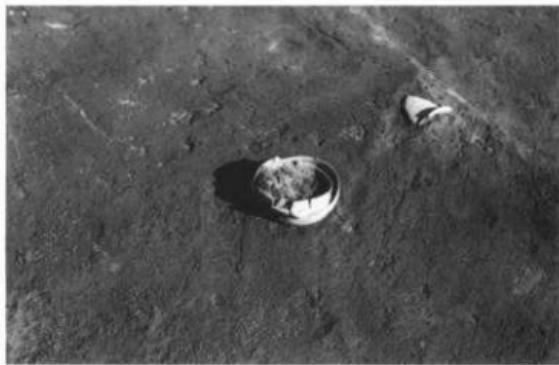
1. 007号住居跡カマド



2. 同遺物出土状況



3. 同



図版32 小池地蔵遺跡



1. 008、015号住居跡全景

南東より



2. 008号住居跡遺物出土状況

図版33 小池地蔵遺跡



1. 009号住居跡全景

北より



2. 012、013、014号住居跡全景

南西より

図版34 小池地蔵遺跡

1. 012号住居跡
遺物出土状況



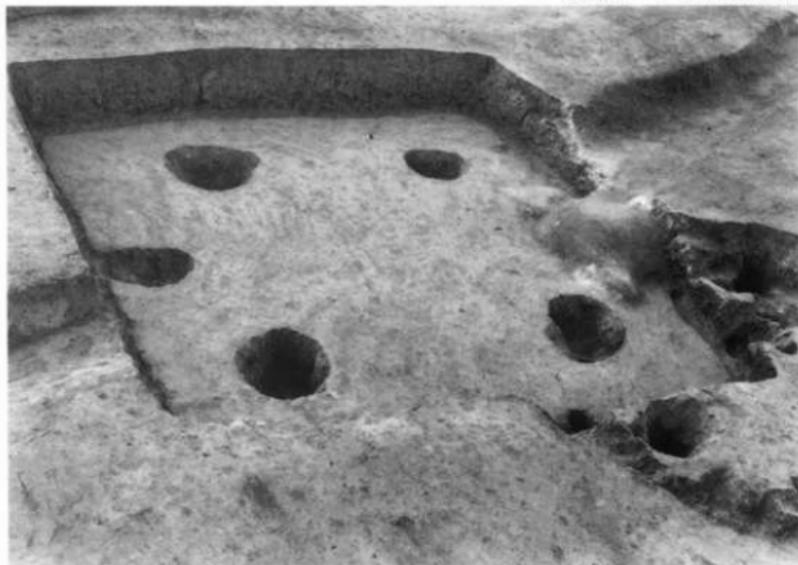
2. 014号住居跡
遺物出土状況



3. 同



図版35 小池地蔵遺跡



1. 017号住居跡全景

東より



2. 018号住居跡全景

南東より

図版36 小池地蔵遺跡

1. 017号住居跡カマド



2. 018号住居跡炭化材、
遺物出土状況



3. 同、鎌出土状況



図版37 小池地蔵遺跡



1. 019号住居跡全景

南より



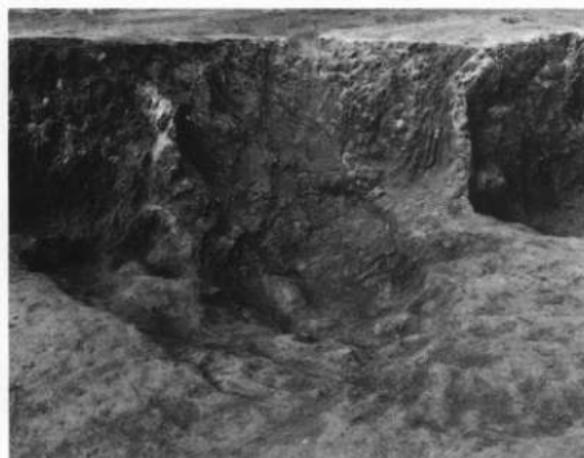
2. 同、鉄器出土状況

図版38 小池地蔵遺跡



1. 020号住居跡全景

南より



2. 同、カマド掘込状況

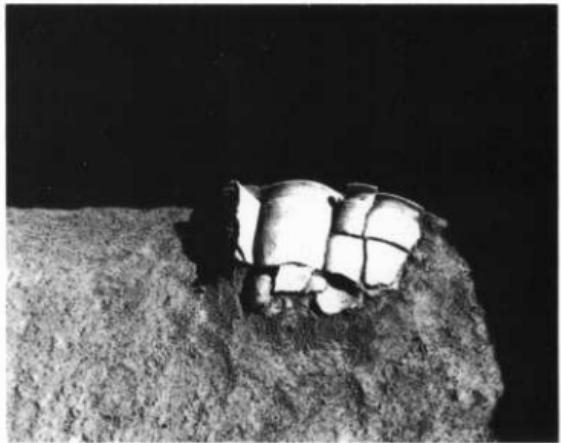
南より

図版39 小池地蔵遺跡



1. 021号住居跡全景

南より



2. 同、遺物出土状況

図版40 小池地蔵遺跡



1. 022号住居跡全景

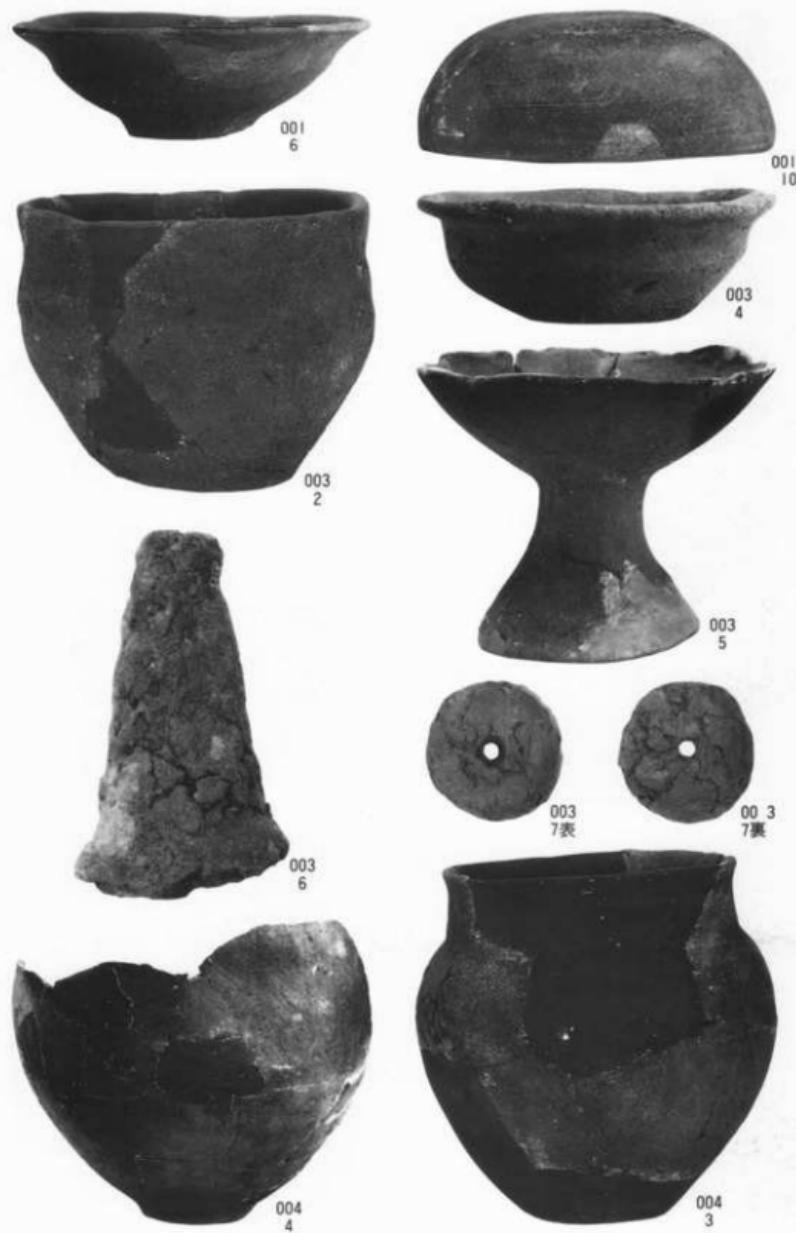
南東より



2. 023号住居跡全景

東より

図版41 小池地蔵跡



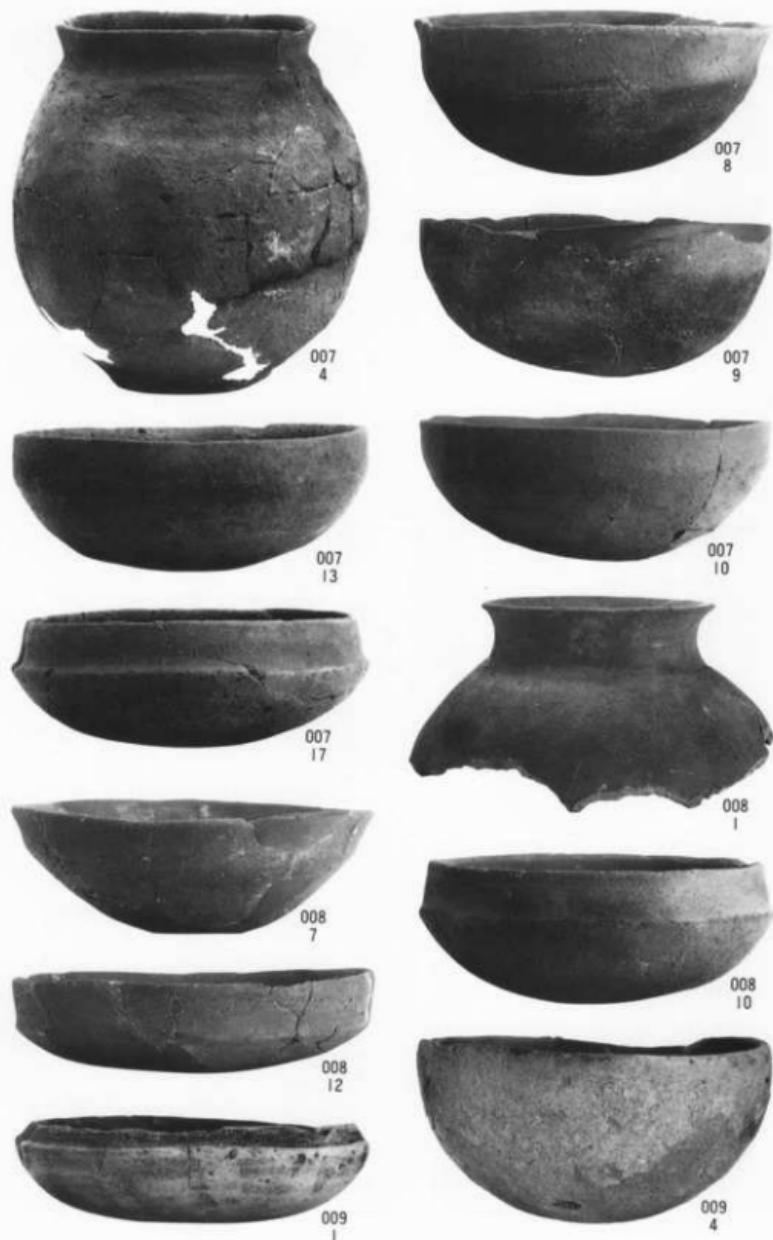
001・003・004号住居跡出土遺物

图版42 小池地藏遗迹



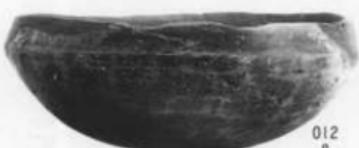
004·005·007号住居跡出土遺物

図版43 小池地蔵遺跡



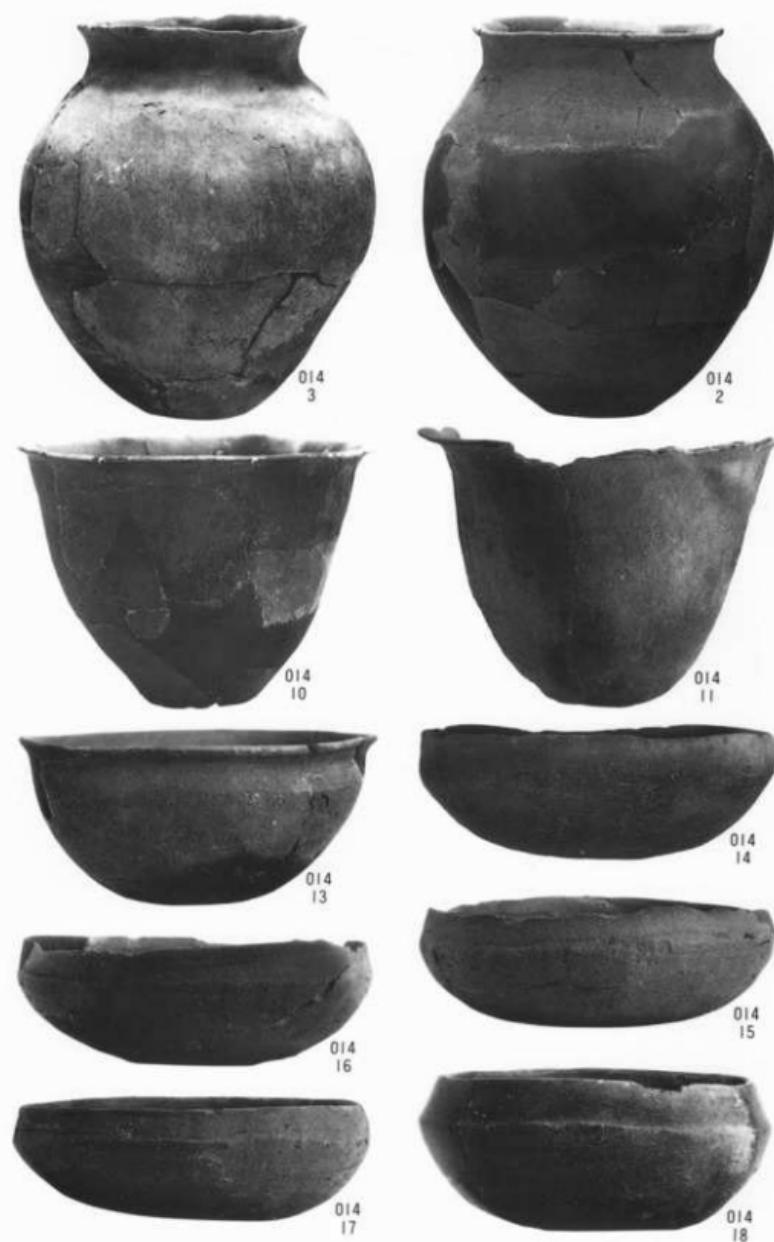
007・008・009号住居跡出土遺物

図版44 小池地蔵遺跡



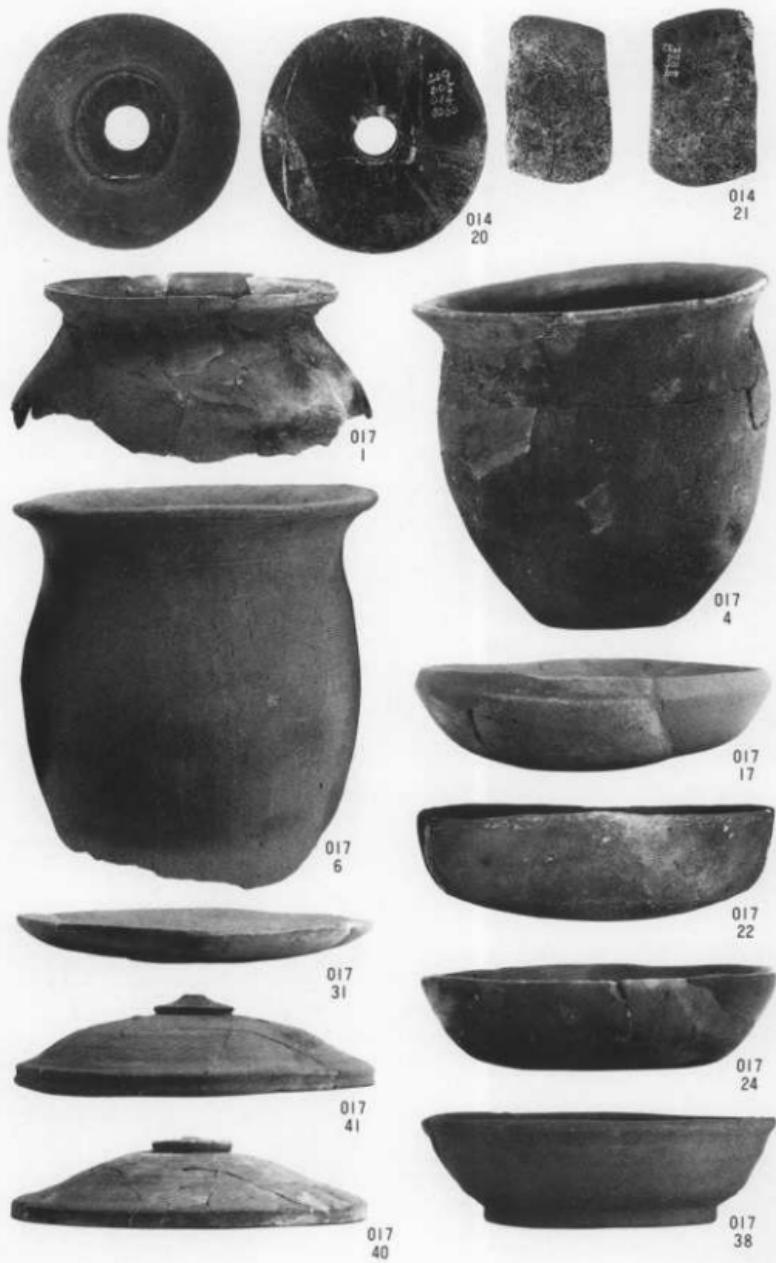
012・013・014号住居跡出土遺物

图版45 小池地藏遗迹



014号住居跡出土遺物

图版46 小池地藏遗迹



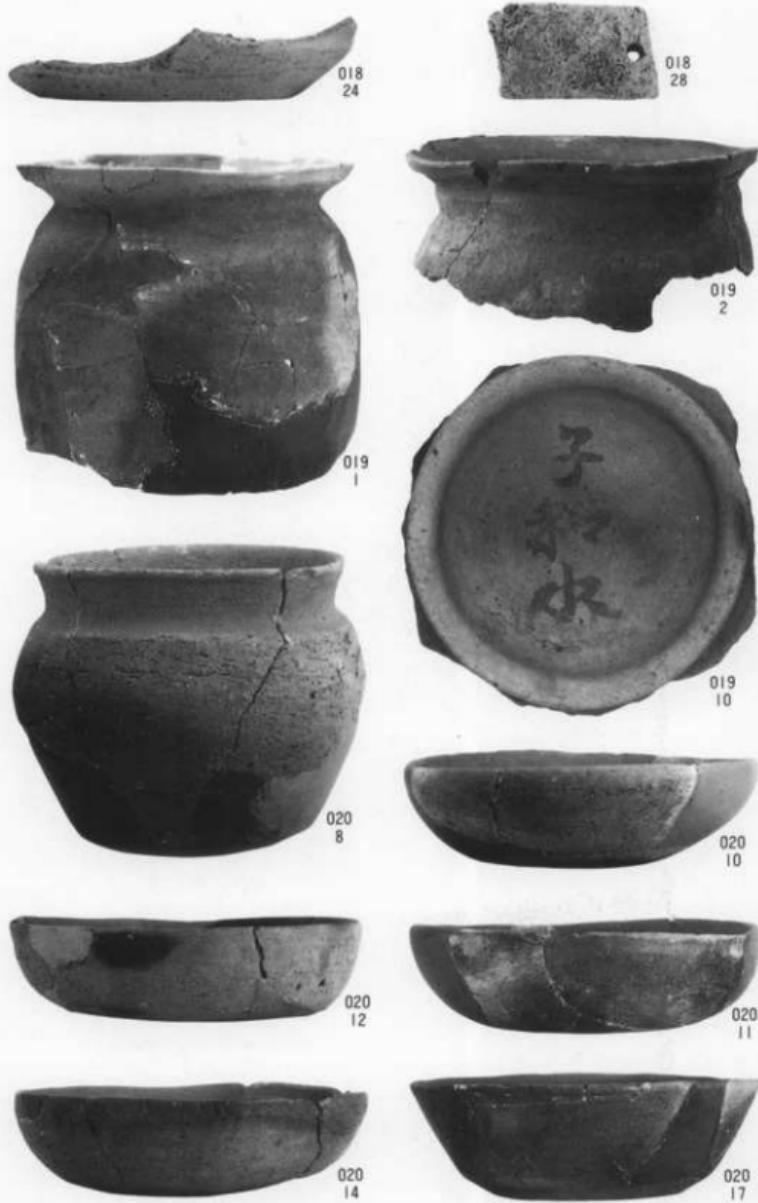
014·017号住居跡出土遺物

図版47 小池地蔵遺跡



017・018号住居跡出土遺物

図版48 小池地蔵遺跡



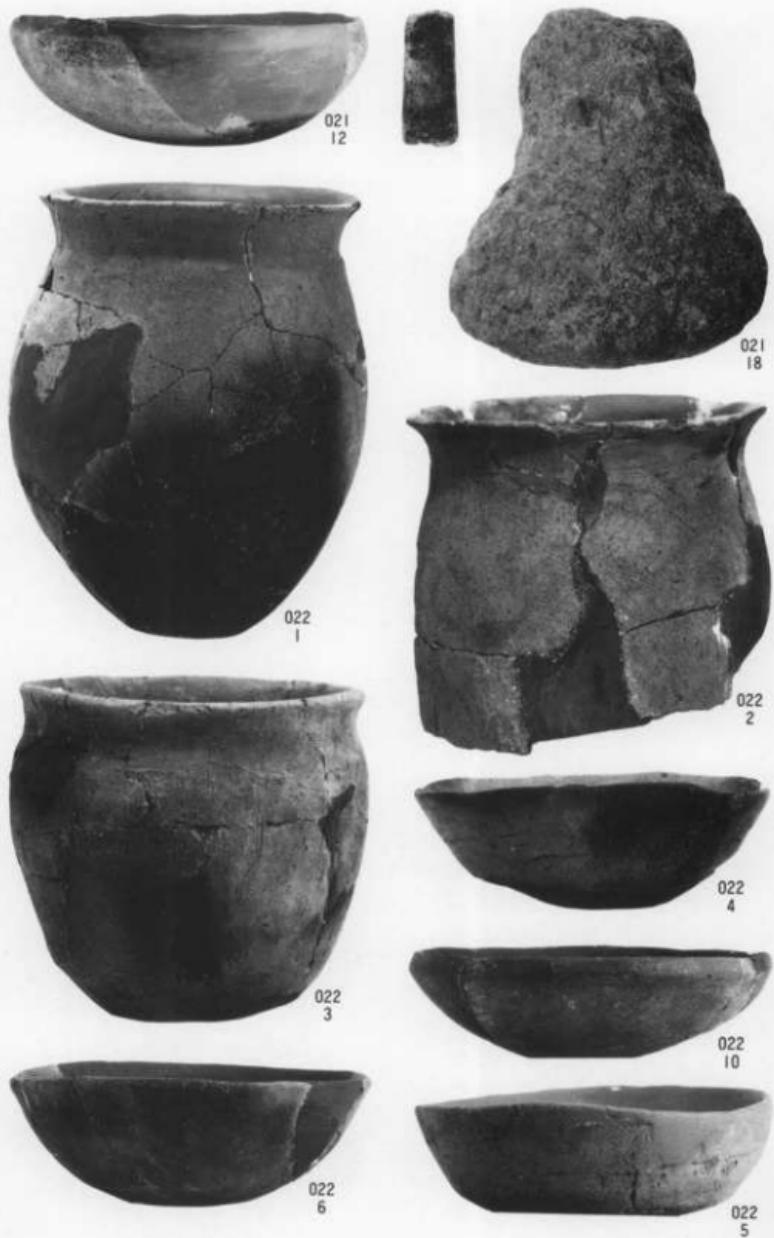
018・019・020号住居跡出土遺跡

図版49 小池地蔵遺跡



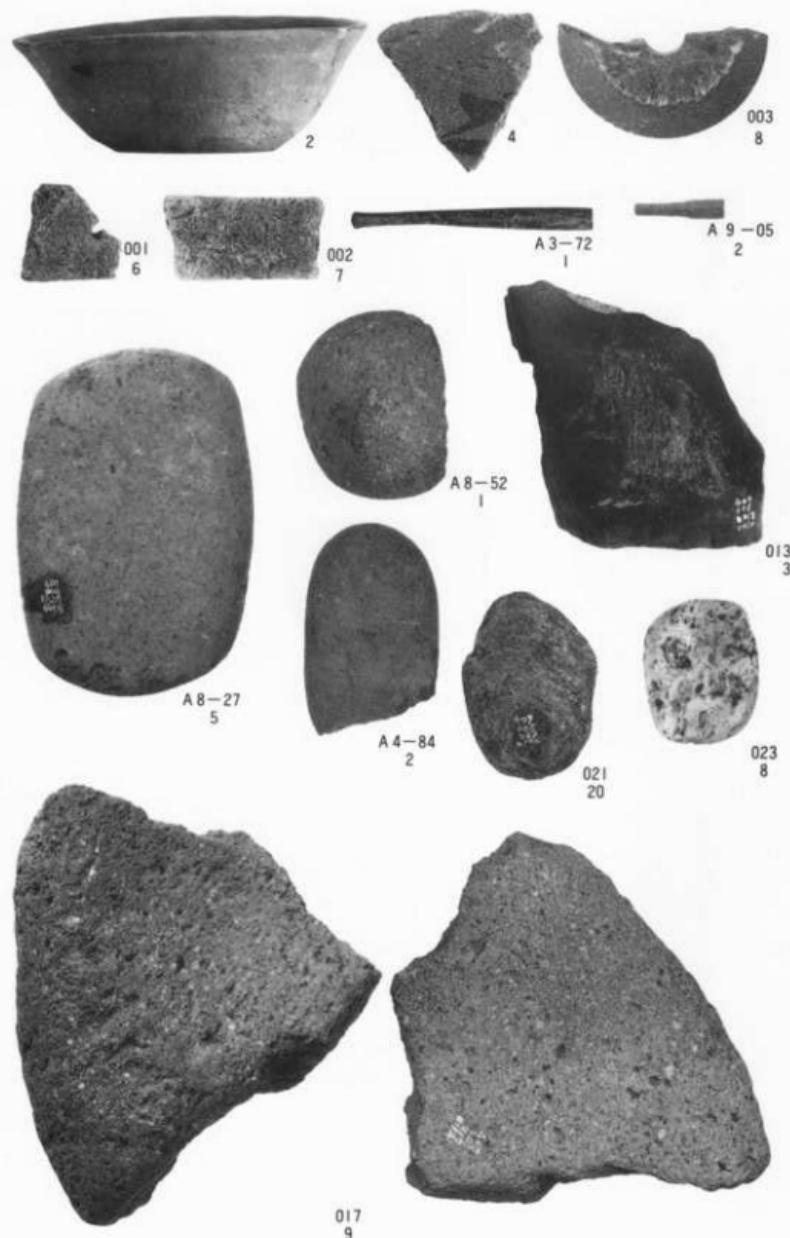
020・021号住居跡出土遺物

図版50 小池地蔵遺物



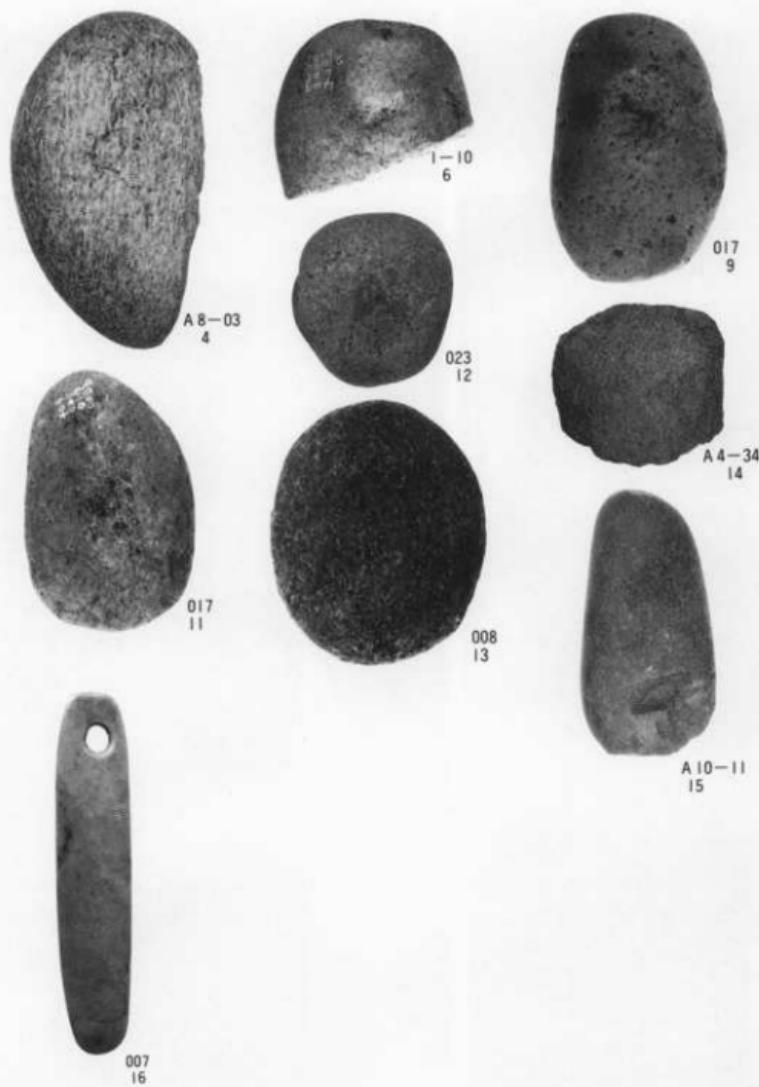
021・022号住居跡出土遺物

図版51 小池地蔵遺跡



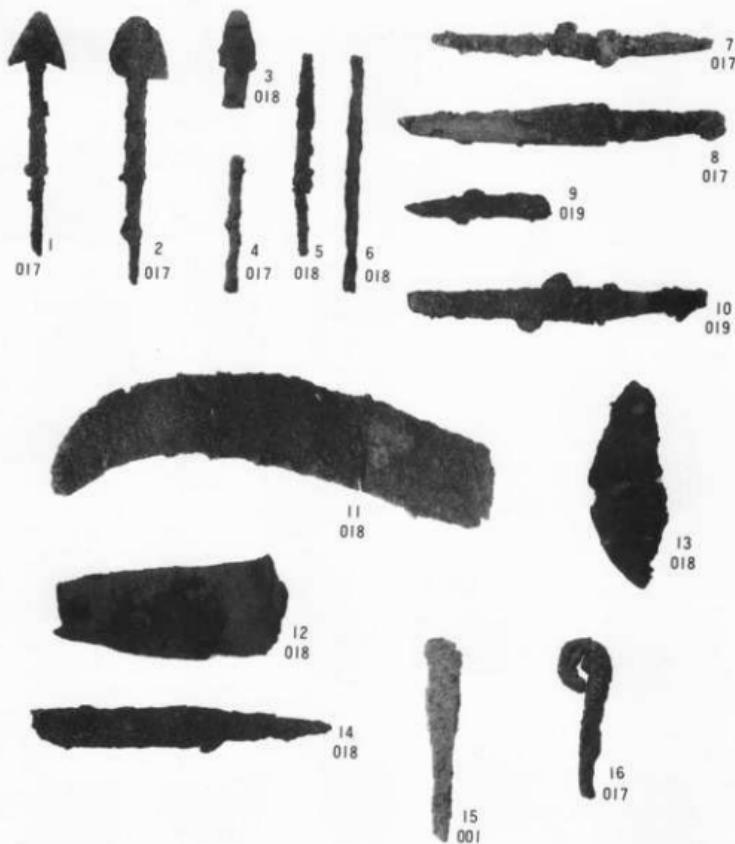
グリッド出土遺物・石器（1）

図版52 小池地蔵遺跡



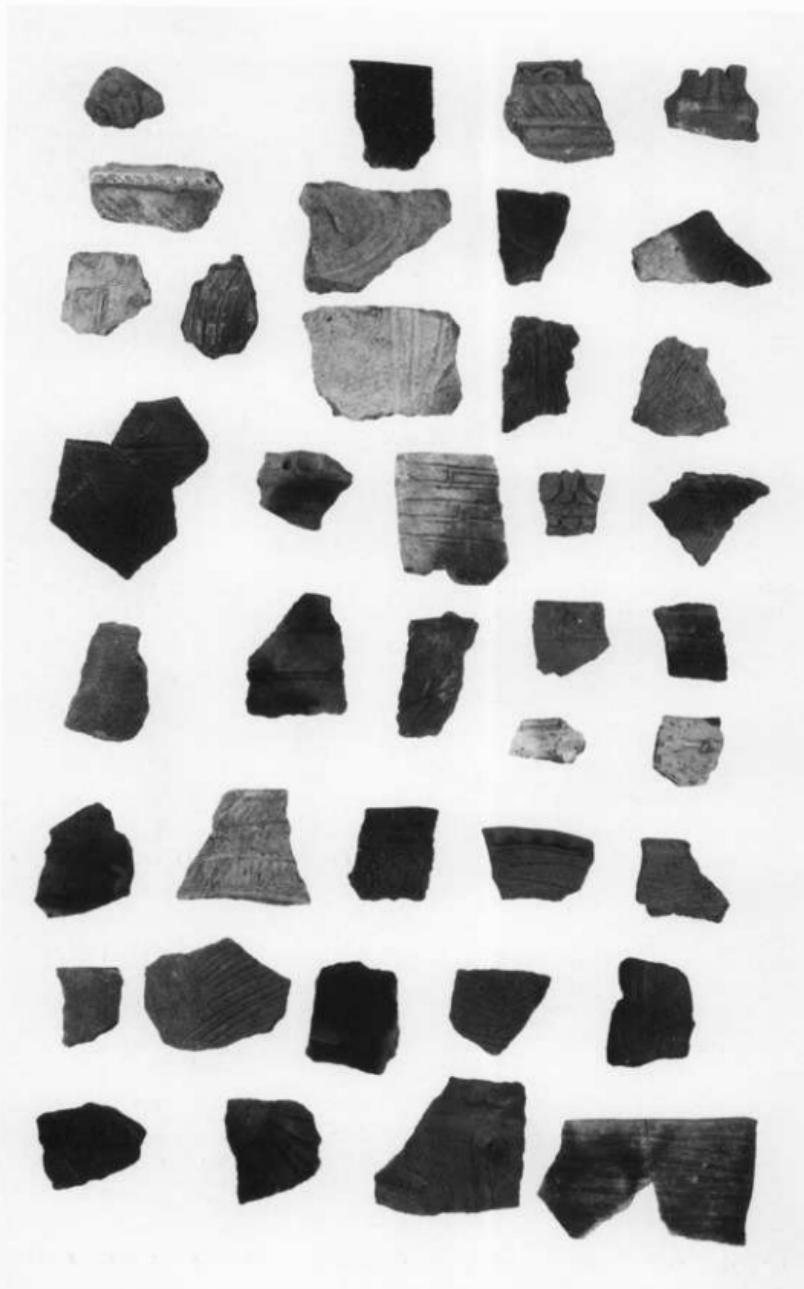
石 器 (2)

図版53 小池地蔵跡



鉄 器

図版54 小池地蔵遺跡



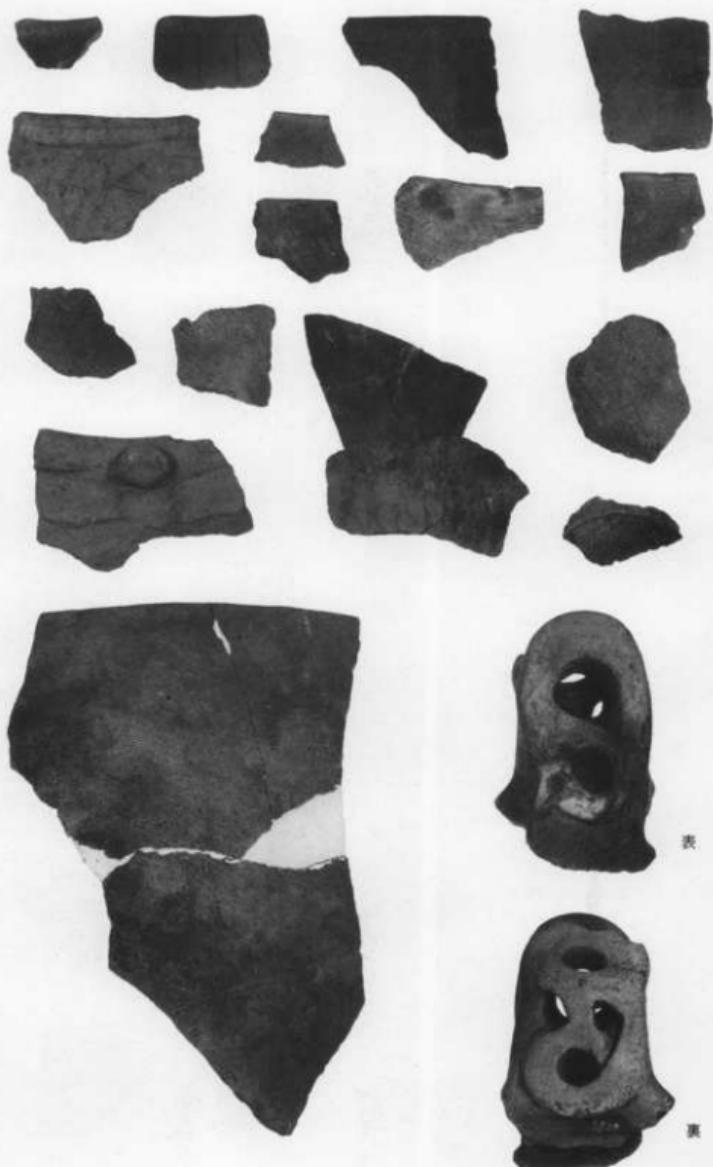
グリッド出土縄文式土器(1)

図版55 小池地藏遺跡



グリッド出土縄文式土器(2)

図版56 小池地蔵遺跡



グリッド出土縄文式土器(3)

昭和60年3月20日 印刷
昭和60年3月30日 発行

主要地方道成田松尾線II 小池新林遺跡 小池地蔵遺跡

発行 千葉県土木部
千葉県千葉市市場1-1
財団法人千葉県文化財センター
千葉県千葉市萬城2-10-1
印刷 株式会社 弘報社 印刷
電話 0472(68)2371(代)

主要地方道成田松尾線II 正誤表

箇 所	誤	正
凡例 4. 遺構縮尺	柱穴群%	削除
P 7 11行目	耕土と	表土除去と
P10 第5図 平面図	記入もれ	□26
P10 第5図エレベーション図	a - b	a - a'
P11 第6図 平面図	記入もれ	□47 - 43
P15 第9図 カマド土層説明	7. 灰白色土砂質・粘土層	7. 灰白色砂質粘土
"	8. 灰白色粘土	8. 灰白色粘土
P19 第11図 平面図	記入もれ	P4
"	a - a	a - a'
P24 第12図 平面図ピット番号	記入もれ	左からP1, P6, P5, P4, P2, P3
P36 5行目	10、11は短頭	削除
P41 7行目	やや下張れ	やや下張れ
P44 19行目	甌である 12、-13は	甌である。12、13は
P47 7行目	口唇は小さく外反する	口唇は小さく外反する
P49 3行目	縄文を施文として	縄文を地文として
P64 26行目	壁緻である	堅緻である
P67 12行目	指適できる	指摘できる
P97 5行目	脣部との	脣部と
P100 13行目	坏でかる	坏である
P104 7行目	口縁部 短く	口縁部が短く
P117 8行目	遺物は少量	遺物は少量
P137 27行目	少ないための分類	少ないため分類
P170 表34 図版番号	記入もれ	すべて52
P171 表35遺構時期002	木 明	鬼 高
" 014	記入もれ	鬼 高

P39 小池新林遺跡

006号住居跡

第27図-6-

